

命を燃やす勇者達

nao gran

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突如現れた裂け目によって、神世紀300年の四国に迷い込んでしまった男・天空寺タケルは、勇者部と共に皆の為になる事を勇む。

一度死んで蘇り、仮面ライダーゴーストとして戦った男・天空寺タケル。

勇者に選ばれた讃州中学2年生の少女・結城友奈。

これはヒーローと勇者が、命を燃やす物語である。

時系列・平成ジェネレーションズFINAL後

# 目次

- ## 結城友奈の章##
- 1 第一話「結城！乙女の真心！」
- 37 第二話「東郷！ろうたけたる思い！」
- 76 第三話「夏凜！風格ある振る舞い！」
- 109 第四話「理由！輝く心！」——
- 147 第五話「決戦！困難に打ち勝つ！」
- 187 第六話「終戦！明日に期待して！」
- 220 第七話「合宿！牧歌的な喜び！」
- 260 第八話「散華！神の祝福！」——
- 289 第九話「姉妹！心の痛みを判る人！」
- 316 第十話「部活！愛情の絆！」——
- 344 第十一話「情熱！無限罪化！」
- 384 第十二話「友奈！貴方に微笑む！」
- ## 鷺尾須美の章##
- 426 第十三話「覚醒！鷺尾須美！」

	第十四話 「友達！連携を深める！」	469		
	第十五話 「日常！楽しい休み！」	512		
	第十六話 「激闘！燃える魂！」	545		
	第十七話 「娯楽！夏祭り！」	592		
	第十八話 「約束！燃え尽きる記憶！」	617		
	# # 勇者の章 # #			
	第十九話 「始動！華やか日々！」	664		
	第二十話 「救出！大切な思い出！」			
	第二十一話 「焼印！あなたを思うと胸が痛む！」	699		
	第二十二話 「日記！秘めた意志！」	733		
	第二十三話 「結婚！清廉な心！」	764		
	最終話 「勇者！君ありて幸福！」	786		
		809		

# ##結城友奈の章##

## 第一話「結城！乙女の真心！」

ここは神世紀300年の四国。神樹様に守られている人間達がここで平和に暮らしていた。

市立讃州中学校・勇者部。

カノン「昨日の人形劇面白かったね。」

マコト「友奈がやらかしちやっただけだな。」

タケル「あ、噂をすれば来たよ。」

部室に友奈と東郷が来た。

友奈「こんにちはー！友奈、東郷、入りまーす！」

東郷「こんにちは。」

樹「お疲れ様です。」

風「お、来たわね。」

友奈「昨日の人形劇、大成功でしたね！」

風「ええ? って言うか、何もかもギリギリだったわよ。」

アカリ「そうよ。友奈ちゃんが舞台を倒しちゃったから。」

友奈「結果オーライで。」

樹「皆喜んでましたね。」

御成「園児の皆さんとても大喜びでございました。」

東郷「友奈ちゃんのアドリブ良かった。」

風「受ける私は、激腹ドキドキ丸よ。」

友奈「勇者はくよくよしても仕方が無い!」

タケル「友奈は本当ポジティブだね。」

風「はいはい、じゃあ今日のミーティング始めるわよ。」

友奈・東郷・樹「はい!」

ミーティング。

アカリ「今日の依頼はこれよ。」

黒板に子猫の写真を貼った。

友奈「うわあ〜! 可愛い〜!」

タケル「子猫探し？」

風「そう。こんなにも未解決の依頼が残っているのよ。」

樹「た、沢山来たね・・・」

風「なので、今日から強化月間！学校を巻き込んだキャンペーンとして、この子達の飼い主を探すわ。」

友奈「おおお〜！」

東郷「学校を巻き込む政治的発想は、流石1年先輩です！」

風「あ、ありがとう・・・」

マコト「東郷、それは褒めているのか？」

風「学校への対応は私がやるとして、まずはホームページの強化準備ね。東郷任せた  
！」

東郷「はい！携帯からのアクセスも出来るように、モバイルも作ります。」

友奈「流石！詳しいね！」

パソコンでホームページを作成する。

樹「私達は？」

カノン「何かお手伝いはないかな？」

風「えっと・・・まずは今まで通りだけど、今まで以上に頑張れ！」

タケル「随分アバウトだね・・・」

友奈「それだったら、海岸の掃除行くでしょ？」

樹「はい。」

友奈「そこでも、人に当たってみようよ。」

樹「あ、それ良いです！」

東郷「ホームページ強化任務、完了です！」

全員「え、早！」

ホームページの強化が即完了した。

友奈「しかもよく出来てる・・・」

風「凄・・・」



放課後、全員がかめやでうどんを食べに行つた。

店員「はい、おまち。」

風「はあゝい。」

友奈「3杯目・・・」

今風は3杯目を食べている。

アカリ「風ちゃん、お腹いっぱいにならないの？」

風「うどんは女子力を上げるのよ？」

御成「女子力を上げる為にうどんを3杯とは・・・」

タケル「やっぱりうどんは美味しいなあ。」

樹「でも、ホームページの強化凄かったです！」

風「あんな短時間で仕上げるとか。」

友奈「プロだ〜！」

東郷「ありがとうございます。先輩、天ぷらどうぞ。」

風「おお！気が効くね〜！君、次期部長は遠くないよ？」

東郷「いえ、先輩見てるだけでお腹いっぱい・・・」

友奈「そう言えば先輩、話って？」

マコト「何かあったのか？」

風「ああそうだ。文化祭の出し物の相談。」

樹「まだ4月なのにな?」

友奈「もう食べた・・・!?!」

樹「夏休みに入っちゃう前にさ、色々決めておきたいんだよね。」

東郷「確かに、先手で有事に備える事は大切ですね。」

友奈「今年こそ!ですね。」

カノン「去年は準備出来なくて何も無かったんだよね。」

風「今年猫の手も入ったし。」

樹「私!?!」

友奈「んゝ・・・折角だから一生の思い出になる事が良いよね・・・」

東郷「尚且つ、娯楽性の高い大衆が靡くものでないと。」

タケル「皆が楽しめるものとかでも良いかもね。」

樹「でも何したら・・・」

風「それを皆で考えるのよ。はい、これ宿題。それぞれ考える事。」

マコト「俺達も考えるのか?」

風「そう。何かアイデアがあつたら相談してね。」

友奈・樹「はゝい!」

風「すみませーん！おかわりー！」

タケル・友奈「え、4杯目!？」

夕方、友奈と東郷が車椅子移動車に乗って帰宅。タケルとマコトとカノンがCRF250Lとマシンフーディーに乗って移動車に付いて行く。タケルは結城家に居候、マコトとカノンは東郷家に居候している。

移動車内では、友奈と東郷が風にメールしている。

そしてアカリと御成と風と樹も帰宅途中。アカリと御成は犬吠埼家で居候している。

風「さてと、夕飯は何を作ろうか。」

樹「ええ？まだ食べるの？」

風「樹は小食ねえ。」

樹「お姉ちゃんが食べ過ぎなの。」

アカリ「お腹壊すかもよ？」

風「大丈夫。女子力があれば。」

御成「風殿がおっしやっている女子力と言うのは興味深いものですね!」

アカリ「憧れてどうするのよ。」

すると風のスマホにメールが受信された。

風「っ?」

それは、大赦からのメールだった。

風「・・・」

樹「お姉ちゃんどうしたの?」

風「ううん、何でも無い。」

アカリ「どうかしたの?」

風「何でも無いって。・・・ねえ樹。」

樹「何?」

風「お姉ちゃんに隠し事があつたらどうする?」

樹「えっと、よく分からないけど・・・」

風「例えばね、広州勝沼で、援軍が来ないので戦え! って言わなきやいけなかったと  
して・・・」

樹「えつと・・・」

アカリ「それって近藤勇?」

風「そう。流石アカリさんね。」

樹「いきなりどうしたの？」

御成「風殿、何処か具合でも悪いのですか？」

風「何でも無い。」

樹「んゝ……付いて行くよ。何があっても。」

風「え？」

樹「お姉ちゃんは、唯一の家族だもん。」

風「……ありがと。」

アカリ「さあ、早く帰ってご飯作りましょ？」

風「そうだね。」

2人の両親は、幼い頃に亡くなってしまっている。

翌日、讚州中学校の駐輪場にCRF250Lとマシンフーデーが停車した。

廊下。

マコト「そう言えばタケル、あの子は今どうしているんだ?」

タケル「リハビリを頑張ってるってメールが来たよ。」

マコト「そうか。俺達が居なかったら、あの子はどうなっていたか。」

カノン「ん?」

マコト「カノン、どうした?」

カノン「・・・来る。」

するとその時、自分達以外の周りの時間が止まった。

タケル「これは・・・!」

マコト「まさか、来たのか!」

タケル「マコト兄ちゃん!」

マコト「分かってる。行くぞタケル!」

タケル「うん!」

3人は走って、皆を探す。

同じ頃風は、教室から飛び出した。

風「まさか・・・まさかそんな！」

タケル「風!!」

風「タケルさん！マコトさん！カノンさん！」

そこでタケル達と合流した。

マコト「周囲の時が止まった事は、まさか・・・」

風「ああ、そのまさか・・・」

アカリ「皆！」

タケル「アカリ！御成！」

御成「み、皆さんが止まってしまいましたぞ！」

タケル「分かっている！行こう！」

その頃樹は、怯えながら教室から出た。

樹「お姉ちゃん！タケルさん！」

風「樹！」

タケル「樹ちゃん！」

樹「良かった、皆無事だった・・・あのね、皆様子が変で、それで・・・」

風「樹!」

樹「え?」

風「樹、よく聞いて?」

樹「え、何?」

風「私達が・・・当たりだった!」

突如、外の青空に裂け目が生じ、謎の空間が広がった。

タケル「皆!外を見て!」

外を見ると、虹色に輝く空間が海を飲み込んだ。

樹「お姉ちゃん・・・お姉ちゃん・・・!」

マコト「来たか・・・」

タケル「うん・・・」



同じ頃友奈と東郷は。

友奈「何？」

東郷「地震？」

そして空間が、彼らを飲み込んだ。

友奈「・・・っ!？」

東郷「っ？」

彼女達の目に映ったのは・・・

無数の大木が生い茂る謎の世界だった。

友奈「これは・・・」

東郷「何が、起きたの・・・?」

この日、彼女達の日常は一旦終わってしまった。

突然謎の世界に飛ばされた友奈と東郷は困惑している。

東郷「教室に居たのに・・・」

友奈「何これ・・・?」

東郷「ここは・・・」

友奈「私、また居眠りしてる・・・？」

自分の頬を引っ張るが。

友奈「夢じゃないみたい・・・東郷さん。」

東郷「え？」

友奈「大丈夫だよ！私が付いている！」

右手を握るが、震えている。

東郷「・・・うん。」

すると多色の花びらが舞い散った。

友奈「・・・あ、携帯！」

急いでスマホを取り出すと。

東郷「画面が、変わってるね・・・」

すると誰かが来た。

樹「あ！」

風「友奈！東郷！」

タケル「大丈夫？」

友奈「風先輩・・・樹ちゃん・・・タケルさん・・・皆・・・」

樹「良かったです。」

マコト「無事で良かった・・・」

友奈「わああああああん!風先輩!樹ちゃん!な、何で皆がここに!?!」

風「不幸中の幸いかな?2人共、スマホを手放していたら見付からなかった。」

友奈「え?」

スマホのアプリを操作すると、友奈と東郷と風と樹の居場所を示すマップが表示された。

東郷「これ?」

友奈「このアプリに、こんな機能があつたんですね。」

東郷「隠し機能?」

風「その隠し機能は、この自体に陥った時に自動的に機能するようになったの。」

友奈「へえ、便利。」

東郷「このアプリ、部に入った時に風先輩がダウンロードしろって言われたものです

よね?」

風「・・・ええ。」

東郷「風先輩、何か知っているんですか?」

風「東郷……」

東郷「ここ、何処なんですか……？」

タケル（東郷さん、あの時の事を……）

風「……皆、落ち着いて聞いて？ 私は、大赦から派遣された人間なの。」

樹「え、大赦って……」

友奈「神樹様を奉っている所ですよね……？」

タケル「そう。」

東郷「何か、特別なお役目なんですか……？」

風「……うん。」

樹「ずっと一緒だったのに……そんなの初めて聞いたよ……」

風「当たらなければ、ずっと黙っているつもりだったからね……」

友奈「風先輩……」

樹「アカリさんや、御成さんは知っていたんですか……？」

アカリ「いえ、私も初めて聞いたわ。」

御成「拙僧も同じく。」

樹「タケルさんとマコトさんは……？」

タケル「黙っていてごめん。俺は知っていた。」

マコト「俺もだ。すまない。」

風「私の班が、讃州中学勇者部が当たりだった・・・」

東郷「当たり・・・?」

風「今見えているこの世界は、神樹様が作った結果なの。」

東郷「神樹様の・・・?」

友奈「じ、じゃあ、悪い所じゃないんですね?」

タケル「けど、神樹様選ばれた風達は、この中で敵と戦う使命を与えられているんだ。」

東郷「敵?」

樹「戦うって・・・?」

友奈「あの、そう言えば・・・この点って何です?」

スマホの画面に、乙女型が此方に迫っている。

タケル「ちよつと見せて?」

友奈「うん。」

画面を見る。

タケル「・・・風、マコト兄ちゃん。」

風「ええ、来たわね。」

マコト「奴が。」  
結界の向こうから、その姿が現れた。

巨大な怪物が。

友奈「え．．．？」

樹「え．．．？」

風「あれね。遅い奴で助かった。」

カノン「お兄ちゃん．．．」

マコトの後ろに隠れるカノン。

東郷「浮いている．．．？」

タケル「バーテックス。この世界を殺す為に現れる存在。」

友奈「世界を殺すって．．．？」

風「バーテックスの目的は、この世界の恵みである、神樹様に辿り着く事。」

マコト「奴が到達したら、この世界が死ぬ。」

友奈「この世界に、私達しか居ない・・・」

東郷「どうして、私達が・・・?」

風「大赦の調査で、最も適正があると判断されたの。」

東郷「そんな、あんなのと戦える訳がない!」

風「方法はあるわ。」

東郷「え?」

風「戦う意思を示せば、このアプリの機能がアンロックされて、神樹様の勇者となるの。」

スマホの画面に種が表示された。

タケル「その種が満開になれば、勇者となってバーテックスと戦える。」

友奈「勇者・・・」

東郷「皆・・・あれ・・・」

遠くから一筋の光が輝いた。

風「っ!危ない!!」

タケル「伏せて!!」



“ドゴーン”

何かが爆発したが、全員無傷だった。

友奈「何？ 私達の事狙ってるの・・・？」

バーテックスの腹が膨らんでいる。

風「こつちに気が付いている・・・！」

友奈「そんな・・・っ！」

怯えている東郷を慰める。

友奈「東郷さん！」

東郷「駄目・・・こんなの、戦うなんて・・・！出来る訳無い・・・」

友奈「東郷さん・・・」

タケル「風。」

風「うん。友奈、東郷を連れて逃げて。」

友奈「でも先輩・・・」

風「早く!」

友奈「は、はい!」

タケル「アカリ、御成、カノンちゃんも逃げて。」

マコト「ここは俺達が食い止める。」

アカリ「分かったわ。」

御成「ご武運を!」

カノン「気を付けてね。」

3人も友奈と東郷と一緒に逃げる。

樹「お姉ちゃん・・・」

風「樹も行って!」

樹「駄目だよ!お姉ちゃんを残して行けないよ!」

風「樹・・・」

樹「付いて行くよ。何があっても!」

風「・・・」

マコト「風、樹は覚悟を決めたんだ。」

タケル「だから、一緒に行こう。」

風「・・・よし、樹続いて!」

樹「うん！」

風が画面に咲いてる花をタッチすると、勇者システムが作動し、神樹との霊的回路が接続され、勇者へと変身した。

樹も咲いてる花をタッチすると、神樹との霊的回路が接続され、勇者へと変身した。

マコト「行くぞタケル！」

タケル「うん！」

2人は腰にゴーストドライバーを出現させ、タケルがオレゴースト眼魂、マコトがスペクターゴースト眼魂を押し、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じると、パーカーゴーストが出現した。

『アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！』

『アーイー！バッチリミロー！バッチリミロー！』

タケル・マコト「変身!!」

ゴーストドライバーのレバーを引いて押した。

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ!ゴースト!』

『カイガン!スペクター!レディゴー!覚悟!ド・キ・ド・キ・ゴースト!』

2人はパーカーゴーストを纏い、仮面ライダーゴースト・オレ魂と仮面ライダースペクターに変身してパーカーを脱いだ。

パーテックスが尻尾から弾丸を放ったが、4人が大ジャンプして避けた。

樹「うわああああああああ!!これが!!!」

風「そうよ!樹!着地!」

樹「うわっ!ぶへっ!」

着地失敗で転んだ。

タケル「樹ちゃん、大丈夫?」

着地したゴーストが樹を起こす。

樹「だ、大丈夫です・・・」

風「これが、神樹様選ばれた力よ!」

すると樹の前に精霊が現れた。

樹「何!? 可愛い・・・」

風「この世界を守って来た精霊よ。神樹様の導きで、私達に力を貸してくれる。」

マコト「避ける!」

バーテックスの弾丸を間一髪避けた。

樹「うわああああ! ジェットコースターーーーーー!!」

風「手を翳して、戦う意思を示して!!」

巨大な大剣を握った。

風「えいっ!」

大剣を振ってバーテックスの弾丸を破壊した。

樹「こ、こう!」

右手を後ろに持って行くと武器が出現し、前に振ると鞭が伸びて、バーテックスの弾丸を破壊した。

樹「うわああああああああ!!」

そして無事に着地した。

樹「な、何か武器出た・・・」

タケル「ハアツ!!」

ガンガンセイバーを振って弾丸を破壊した。

マコト「喰らえ!!」

ガンガンハンド・ロッドモードで弾丸達を叩き壊した。

その頃友奈達は、安全な場所に避難した。

アカリ「ここまで来れば大丈夫。」

カノン「お兄ちゃん、タケルさん。」

御成「心配いりませんぞ。カノン殿。」

すると友奈のスマホに着信音が鳴った。

友奈「ま、待って!・・・風先輩!」

風『よし繋がった!』

友奈「風先輩、大丈夫ですか!?!今戦ってるんですか!?!」

風「こつちの心配より、そつちこそ大丈夫?」

友奈『はい!』

樹「うわわわわわ!」

タケル「樹ちゃん!」

マコト「樹!」

樹に迫る弾丸を破壊した。

風『…友奈、東郷、アカリさん、御成さん、カノンさん、黙っていてごめん…』

友奈「風先輩は、皆の為に黙っていたんですよね? ずっと1人で打ち明ける事も出  
来ずに、それって…それって、勇者部の活動目的通りじゃないですか!」

風『…』

東郷「っ…!」

友奈「風先輩は…悪くない!」

風「…」

樹「お姉ちゃん!!」

タケル「風!避ける!!」

風「っ!?!」

真横にバーテックスが迫っていた。

風「やっっちゃった!!」

大剣で防ごうとしたが。

“ドゴーーーン”

直撃されてしまった。

タケル「風!!」

樹「お姉ちゃん・・・!!」

マコト「樹!後ろだ!」

樹「え!?!」

“ドゴーーーン”

樹「きゃあああああ!!!」

バーテックスの弾丸が樹に直撃した。

タケル「樹ちゃん!!」



友奈「先輩！樹ちゃん!!」

タケル「マコト兄ちゃん!」

マコト「一気に行くぞ!タケル!」

タケル「分かった!」

ビリー・ザ・キッドゴースト眼魂とノブナガゴースト眼魂を押し、ゴーストドライバーに装填してレバーを押し引いた。

『カイガン!ビリー・ザ・キッド!百発百中!ズキューン!バキューン!』

『カイガン!ノブナガ!私の生き様!桶狭間!』

ゴーストがビリー・ザ・キッド魂に、スペクターがノブナガ魂を纏った。バットクロックがゴーストの手元に渡って、ガンガンセイバーをガンモードに変形し、ガンガンハンドをライフルモードに変形した。

タケル「フツ!」

マコト「フツ!」

射撃でパーテックスにダメージを与える。

友奈・東郷・アカリ・御成・カノン「っ!」

5人が驚いた。バーテックスがゴーストとスペクターを無視してこっちに向いていた。

友奈「こつち見てる・・・!」

風「くっ・・・!友奈・・・!」

樹「っ・・・!」

ゴーストとスペクターが、ガンガンセイバーとガンガンハンドをゴーストドライバーにアイコンタクトさせた。

『ダイカイガン!』

『ダイカイガン!』

ガンガンセイバーとバットクロックを構え、ガンガンハンドが分身して構える。

『オメガシユート!』

『オメガスパーク!』

一斉に発射するが、バーテックスはお構い無しに弾丸を放とうとした。  
タケル「このままじゃマズい!!」

マコト「くそっ!」

アカリ「皆!逃げるわよ!」

3人が逃げるが。

御成「友奈殿!東郷殿も早く!」

カノン「友奈ちゃん!東郷さん!」

友奈「・・・!」

東郷「友奈ちゃん!」

友奈「っ!」

東郷「私を置いて、今すぐ逃げて!」

友奈「何言ってるの!?!友達を!・・・っ!」

彼女は涙を拭いた。

友奈「そうだよ・・・友達を置いてなんて、そんな事絶対しない!」

東郷 「駄目!逃げて!友奈ちゃんが死んじゃう!」

友奈 「嫌だ・・・!」

東郷 「っ!」

友奈 「ここで、友達を見捨てるような奴は!」

彼女はバーテックスに向かって走り出した。

東郷 「友奈ちゃん!!」

友奈 「勇者じゃない!!」

アカリ 「友奈ちゃん!!」

御成 「友奈殿!!」

カノン 「友奈ちゃん!!」

そしてバーテックスの弾丸が友奈に直撃して爆発した。

タケル 「友奈!!」

マコト 「友奈!!」

東郷「ああっ！友奈ちゃん!!」

しかし友奈は無事だった。

東郷「・・・っ！」

アカリ「あれは・・・！」

何と友奈の左腕が変わっていた。スマホの花が満開になっており、左のパンチで弾丸を破壊したのだった。そして隣には友奈の精霊が浮遊している。

友奈「嫌なんだ。誰かが傷付く事、辛い思いをする事を！」

再び迫る弾丸を、右足のハイキックで破壊した。それと同時に右足が変わった。

友奈「皆が、そんな思いをするくらいなら!!」

そして左足のハイキックで弾丸を破壊したと同時に変わった。大ジャンプして弾丸を避けた。

友奈「私が・・・頑張る!!」

そして友奈が勇者に変身した。

風「友奈・・・!」

樹「友奈さん・・・!」

アカリ「友奈ちゃん!」

御成「友奈殿!」

カノン「友奈ちゃん!」

東郷「友奈ちゃん!」

友奈「うおおおおお!!!勇者パーーーーンチ!!!」  
勇者パンチで、バーテックスの身体の一部を破壊した。

風「凄い……!」

樹「これが……!」

東郷「友奈ちゃん……」

タケル「友奈!」

マコト「友奈!」

彼女の隣にゴーストとスペクターが着地した。

友奈「タケルさん、マコトさん、お待たせ。」

タケル「まさか友奈が、勇者になれたなんて。」

マコト「お前の強い気持ちだが、勇者になれる力を得たんだな。」

友奈「……勇者部の活動は、皆の為になる事を勇んでやる。私は、讃州中学勇者部、

結城友奈! 私は・・・勇者になる!

結城友奈は勇者である。

「END」



## 第二話 「東郷！ろうたけたる思い！」

バーテックスの攻撃を避け続ける。

タケル「ハッ！」

マコト「フッ！」

ガンガンセイバーとバットクロック、ガンガンハンドで弾丸を破壊しながら走る。

友奈（封印をする為の手順1、まず敵を囲む！）

大ジャンプして、バーテックスの傍に着地した。

友奈「位置に着きました！」

樹「こ、こつちも着いたよ！お姉ちゃん！」

風「よし、封印の儀行くわよ！教えた通りに！」

友奈「了解！」

樹「了解！」

右手を高く掲げる。するとバーテックスが触手のような布で攻撃しようとしたが。

風「ハッ!!」

大剣で弾かれてしまった。

タケル「ベンケイさん!」

マコト「っ!」

ベンケイゴースト眼魂、ツタンカーメンゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填してカバーを閉じて、レバーを引いて押した。

『カイガン!ベンケイ!兄貴!ムキムキ!仁王立ち!』

『カイガン!ツタンカーメン!ピラミッドは三角!王家の資格!』

それぞれベンケイ魂とツタンカーメン魂を纏った。クモランタンがガンガンセイバーと合体してハンマーモードになり、スペクターのガンガンハンドに変形したコブラケータイが合体し、鎌モードになった。

タケル「ハアツ!!」

マコト「ヤアツ!!」

ガンガンセイバー・ハンマーモードと、ガンガンハンドでバーテックスを牽制する。

風「ほら!今の内!」

友奈「えつと・・・手順2、敵を抑え込む為の祝詞を唱えるんだよね?・・・え!?!」

スマホにその祝詞があるが。

友奈「これ全部唱えるの!?!」

祝詞が多い。

樹「え、えつと・・・幽世大神憐給恵給。」

友奈「幸魂奇魂守給幸給・・・」

風「大人しくしろー！！！！」

詠唱中に風が大剣で地面を叩き付けた。

友奈・樹「ええええ!?それで良いの!?」

風「要は魂で込めれば、言葉は問わないのよ!」

樹「早く言つてよおおお!!」

するとバーテックスの口から、菱形の黒い塊が吐き出た。

友奈「な、何かベロンと出たー!?」

タケル「よし、バーテックスの御霊が出た!」

マコト「後はあれを壊せば戦いが終わる!」

友奈「それなら、私が行きます!!」

大ジャンプして、御霊に接近し。

友奈「うりゃあああああ!!!」

勇者パンチで破壊しようとしたが。

友奈「いったーい!こりや硬過ぎるよーい!!!」

マコト「友奈!大丈夫か!」

樹「ねえお姉ちゃん、何か数字減ってるんだけど・・・これ何?」

バーテックスの真下に数字があり、その数字が1秒ずつ減っている。

風「ああ、それ私達のパワー残量!零になると、此奴を押しえ付けられなくなつて、倒す事が出来なくなるの!」

樹「えええ!?!と言う事は・・・」

風「此奴が神樹様に辿り着き、全てが終わる!」

タケル「それまでに破壊するんだ!」

2人が大ジャンプした。

風「友奈変わって!!」

タケル「俺達がやる!」

友奈「は、はい!」

ゴーストがガンガンセイバーをゴーストドライブにアイコンタクトした。

『ダイカイガン!ガンガンミナー!ガンガンミナー!オメガボンバー!』

タケル「うおおおおお!!」

オメガボンバーと大剣で御霊を破壊しようとするが、予想以上に硬かった。

タケル「風!これ硬いぞ!どうするんだ!?!」

風「ならば私の女子力を込めた渾身の一撃を!!!」

後ろにジャンプして、バーテックスをジャンプして、勢いを付けて大剣を振り下ろすと、御霊に罅が入った。

友奈「風先輩!」

タケル「よし!」

マコト「一気に行くぞ!」

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

『カイガン!スペクター!レディゴー!覚悟!ド・キ・ド・キ!ゴースト!』

オレ魂とスペクターに戻した。

友奈「っ!?!」

周囲を見ると、樹海が枯れ始めていた。

樹「枯れている!?!」

風「始まった!急がないと!長い時間封印していると、樹海が枯れて現実世界に悪い影響が出るの!」

アカリ「樹海が枯れてる・・・」

御成「このままでは!」

東郷「神樹様、どうか皆をお守り下さい・・・!」

友奈「時間が無い・・・」

マコト「友奈!一気に仕留めるぞ!」

タケル「行くよ!」

友奈「うん!」

『ダイカイガン!オレ!オメガドライブ!』

『ダイカイガン!スペクター!オメガドライブ!』

3人が同時にジャンプし、ゴーストとスペクターがオメガドライブを発動した。

友奈「うおおおおお!!(痛い・・・怖い・・・でも!)大丈夫!!」

すると友奈の右腕の花びらが。

タケル「はあああああ!!!」

マコト「だあああああ!!!」

友奈「うおおおおお!!!」

2つのオメガドライブと勇者パンチが、バーテックスの御霊を撃破した。

友奈「どうだ!」

御霊が破壊されたバーテックスが、砂のように溶けて消滅した。

友奈「砂になってる・・・?」

風「友奈!」

駆け寄った風が友奈の右手を握った。

風「やったね! ナイス友奈!」

友奈「いたたたたたた!」

風「ごめんごめん・・・」

タケル「やつと倒せた。」

マコト「ふう・・・」

樹「お姉ちゃん! 友奈さん! タケルさん! マコトさん!」

風「樹! 友奈がやったよ!」

タケル「やったね友奈!」

友奈「うん!」

カノン「倒せたようだね・・・」

東郷「良かった・・・良かった・・・」

アカリ「やった!」

御成「やりましたぞ!」

すると樹海の花弁が全員を包んだ。

現実世界。

友奈「あれ?ここ、学校の屋上?」

風「神樹様が戻して下さったのよ。」

タケルとマコトが、オレゴースト眼魂とスペクターゴースト眼魂をゴーストドライバーから外してカバーを閉じて変身解除した。

『オヤスマミー』

アカリ「タケル!マコト!」



御成「タケル殿オオ！」

カノン「お兄ちゃん！」

タケル「皆。」

友奈「あ！東郷さん！無事だった？怪我は無い？」

東郷「友奈ちゃん・・・友奈ちゃんこそ、大丈夫？」

友奈「うん！もう安全、ですよね？」

風「そうね。ほら見て。」

街を見渡す。

樹「皆、今回の出来事気付いてないんだね・・・」

タケル「そうだよ。他の人達からすれば、普通の木曜日になっている。」

風「私達で守ったんだよ。皆の日常を。」

友奈「良かった・・・」

マコト「だが、世界の時間が止まったままだから、お前達は今授業中だ。」

友奈・樹「え・・・ええ!？」

風「まあ、後で大赦からフォロー入れて貰うわ。怪我は無いわね？樹。」

樹「うん。お姉ちゃんは何とも無い？」

風「平気平気！」

すると樹が風に抱き付いた。

樹「怖かったよーお姉ちゃん!!もう訳分かんないよおお!!」

風「よしよし、よくやったわね。冷蔵庫のプリン半分食べて良いから。」

樹「あれ元々私のだよおおおお!!」

アカリ「風ちゃんって、冗談言うの上手ね。」

風「そうかしら?」

翌日の讃州中学校。

マコト「生徒達は普段のままだな。」

タケル「うん。何も知らなければ良いんだけど。」

勇者部。

樹「その子懐いてるんですね!」

友奈「えへへ、名前は牛鬼って言うんだよ?」

精霊の牛鬼は、友奈の頭の上に乗ってる。

樹「可愛いですねぇ。」

アカリ「へえ、可愛いね。」

カノン「とても可愛い！」

友奈「ビーフジャーキーが好きなのよね。」

樹・アカリ・カノン「牛なのに!？」

御成「ビーフジャーキーを食す牛・・・興味深いですなあ〜！」

タケル「それってある意味共食いじゃないのかな・・・」

風「さてと、皆元気で良かった。早速だけど、昨日の事を色々説明していくわ。」

友奈「宜しくお願いします！」

風「戦い方はアプリに説明テキストがあるから、今は何故戦うのかって話をしていくね。此奴バーテックス。」

黒板にバーテックスの絵が描かれてる。

マコト「絵心無いな・・・」

風「人間の敵が、あっち側から壁を越えて12体攻めて来る事が神樹様のお告げで分かった訳でね。」

樹「あ、それこの前の敵だったんだ。」

友奈「き、奇抜なデザインをよく表した訳だね!」

タケル「それって褒めてるの?」

風「目的は神樹様の破壊。以前にも襲って来たらしんだけど、その時は頑張って追いつくのが精一杯。そこで大赦が作ったのが、神樹様の力を借りて、勇者と呼ばれる姿に変身するシステム。人智を超えた力に対抗するには、此方も人智を超えた力って訳ね。」

樹「その絵、私達だったんだ・・・」

友奈「げ、現代アートの奴だよ。」

風「注意事項として、樹海が何かしらの形でダメージを受けると、その分日常が戻った時に何かの災いとなって現れると言われてるわ。」

友奈「はっ!」

数時間前。

クラスメイト『隣町で交通事故があったじゃない?』

風「派手に破壊されて大惨事。なんてならないように、私達勇者部が頑張らないと。」

タケル「俺達も仮面ライダーとして、勇者達と協力してバーテックスと戦う。」

東郷「その勇者部も、先輩が意図的に集めた面子だったと言う訳ですよね？」

風「うん、そうだよ。適正値が高い人は分かっていたから。私は、神樹様を祀りしている大赦から指名を受けているの。この地域の担当として。」

樹「知らなかった・・・」

風「そして私は、タケルさんやマコトさんと出会ってそれぞれ話し合ったの。黙っていてごめんね・・・」

友奈「次は敵、何時来るんですか？」

マコト「奴らが現れる時間は不定期だ。」

風「明日かも知れないし、明後日かも知れない。そう遠くは無いはずよ。」

アカリ「油断は禁物って訳ね。」

東郷「・・・何でもつと早く、勇者部の本当の意味を教えてくださいませんか？」

友奈「ちゃんも樹ちゃんもタケルさんもマコトさんも、死ぬかも知れなかったんですよ？」

風「・・・ごめん。でも、勇者の適正が高くて、どのチームが神樹様を選ばれるか、敵が来るまで分からないんだよ。寧ろ、変身しないで済む確率の方が余程高くて・・・」

友奈「そっか、各地で同じ勇者候補生が居るんですね？」

風「うん。人類存亡の一大事だからね。」

東郷「こんな大事な事・・・ずっと黙っていたんですか・・・」

彼女は部室から出て行った。

風「東郷・・・」

アカリ「東郷ちゃん・・・」

友奈「あ、私行きます!」

タケル「俺も行く!」

2人は東郷を追う。

廊下で、東郷が項垂れている。すると後ろからお茶が。

東郷「ん?友奈ちゃん、タケルさん。」

タケル「元気出して。」

友奈「はい東郷さん。私の奢り。」

東郷「え、でも、そんな理由なんて・・・」

友奈「あるよ!だってさっき東郷さん、私の為に怒ってくれたから!」

東郷「っ。」

友奈「ありがとね！東郷さん。」

東郷「・・・ああ、何だか友奈ちゃんが眩しい・・・」

両手で自分の顔を隠した。

友奈「え？どうして？」

タケル「友奈が眩しいの？」

東郷「・・・えっとね。」

友奈「うん。」

東郷「私、昨日ずっとモヤモヤしていたんだ・・・このまま変身出来なかったら、私は勇者部の足手纏いになるんじゃないかなって・・・」

友奈「そんな事無いよ？東郷さん。」

タケル「そうだよ。誰も足手纏いなんて思っていないから。」

東郷「だからさつき怒ったのも、そのモヤモヤを先輩にぶつけていた事もあって・・・私、悪い事言っちゃった・・・」

友奈「東郷さん・・・」

タケル「東郷・・・」

東郷「友奈ちゃんは皆の危機に変身したのに・・・国が大変な時なのに・・・」

タケル「ど、どうしたの?」

東郷「私は・・・私は勇者所か・・・敵前逃亡・・・」

友奈「と、東郷さくん・・・?」

タケル「ど、どうしたの・・・?何所か具合でも悪いの・・・?」

東郷「風先輩の仲間集めだつて・・・国や大赦の命令でやっていた事だろうに・・・はあ、

私は何と・・・」

友奈「わあああああ!そんなに暗くなつては駄目!!」

タケル「そうだよ!元氣出してよ!」

友奈「じゃ、私のお気に入りを見せてあげるね!」

東郷「え?」

友奈「これ見たら凄く楽しくなるよ!」

メモ帳から、きのこの押し花を見せた。

友奈「ジャジャーン!きのこの押し花!凄いでしょ?トウモロコシの奴もあるよ?」

タケル「それ見せても・・・」

東郷「・・・うん、綺麗だね・・・」

友奈「気を遣わせてしまった!え、えつと・・・い、一番結城友奈!一発ギャグ行き

まーす!」



後ろに向いて、牛鬼を制服の中に押し込んだ。

友奈「ねえ見て！私のバスト、丸でホルスタイン！」

タケル「牛鬼が苦しそう……」

東郷「……私の為に、こんなネタを……」

友奈「うわあああ！逆効果ああああ!!」

タケル「駄目だこりゃ……」

牛鬼が制服から抜け出した。

東郷「ねえ、友奈ちゃんは大事な事を隠されて怒ってないの？」

友奈「……そりゃ、驚きはしたけど、でも嬉しいよ！だって適正のお陰で、風先輩

や樹ちゃんやタケルさんやマコトさんに会えたんだから。」

東郷「この適正のお陰……？」

友奈「うん！」

東郷「……私は……中学に入る前に、事故で全く足が動かなくなつて……記憶も少し飛んじやつて……学校生活送るのが怖かつたけど、友奈ちゃんが居たから不安が消えて、勇者部に誘われてから、学校生活がもつと楽しくなつて……そう考えると適正に感謝だね。」

タケル「……」

さっきの言葉で、タケルがあの子を思い出す。

友奈「これからが楽しいよ?ちよつと大変なミッションが増えただけで。」

東郷「・・・そつか。そうだね!」

2人は微笑み合う。

タケル「友奈は優しいね。」

友奈「そうかな?そう言うタケルさんも優しいよ?」

タケル「そうかな?じゃあ部屋に戻ろうか。」

友奈「うん!」

その頃部室では、樹がタロットカード占いをしている。

樹「如何にしてお姉ちゃんど東郷先輩が仲直りするか・・・」

風「えつと：説明足りなくてごめんねえ!あ、借り過ぎてもつと怒つちやうかな：  
本当にごめんなさい!訂正過ぎるなあ・・・」

マコト「精霊を使って謝罪の練習とは・・・」

アカリ「シユールな光景ね・・・」

風「困った！どうやって仲直りしよう・・・ねえ、マコトさんやアカリさんも何か仲直り出来る方法は無いの？」

マコト「自分で謝罪しろ。」

アカリ「そうよ。自分で謝らなきゃ相手は許してくれないよ？」

風「そんなあ・・・樹、どうするべきか占えた？」

樹「今、結果出るよ！」

タロットカードを引いた。

風「お！何かモテそうな絵じゃない！他のは？」

樹「えっと・・・ん？」

カードをひっくり返したが、時が止まってしまい、音が響いた。

御成「こ、この音は！」

カノン「まさか・・・！」

そこに風の精霊の犬神がスマホを持って来た。樹海化警報が鳴っている。

風「まさかの連日・・・？」

マコト「行くぞ！」

再び世界が、樹海に包まれ、3体のバーテックスが出現した。

樹海。勇者に変身した風と樹、更に仮面ライダーゴーストと仮面ライダースペクターに変身したタケルとマコトがバーテックスを見ている。

風「3体同時に来たか・・・」

タケル「まさか、こんな事に・・・」

マコト「モテ過ぎるな・・・」

そして友奈も勇者に変身した。

友奈「東郷さん、待っててね!倒して来る!」

東郷「ま、待って!私も!」

しかし、昨日の出来事がトラウマになっている。

友奈「大丈夫だよ。東郷さん。」

東郷「友奈ちゃん……」

友奈「行って来るね！」

彼女は大ジャンプしてタケル達の元へ。

東郷「……」

御成「東郷殿、拙僧達と避難しますぞ！」

4人は安全な場所へ避難した。しかし東郷は、また項垂れた。

風「遠くの奴はタケルさんとマコトさんに任せて、まずはこの2匹纏めて封印の儀に行くわよ！」

タケル「マコト兄ちゃん、行こう！」

マコト「ああ！」

ゴーストとスペクターが遠くのパーテックスに向かった。

友奈「でも、彼奴だけ何で遠くに離れて・・・ん?」

すると遠くのバーテックスの口が開き、その口から巨大な槍が放たれた。

風「うわっ!!」

槍に直撃された風が飛ばされた。

樹「お姉ちゃん!」

大剣で防いだ為無事だった。

風「っ!?!」

すると今度は、下の口が開き、無数の槍が放たれた。

樹「何かいっばい来たー!ー!」

タケル「させるか!!」

レバーを3回操作した。

『ダイカイガン!オレ!オオメダマ!』

巨大なゴーストアイコン型のエネルギー体が生成された。

タケル「喰らえ!!」

そのゴーストアイコンを蹴り飛ばして、槍を粉碎した。

タケル「しまった！」

マコト「マズイぞ！」

残りの槍が、飛んで行った。

友奈「何とかしないと！」

バーテックスに挑む友奈。しかし。

風「マズイ！」

樹「友奈さん！危ない！後ろです！」

1体のバーテックスが槍を反射して友奈に向けた。

友奈「っ?!うわわわわわわ!!」

しかし高速打撃で全て防いだ。

友奈「ふう・・・うわっ！」

着地したが、真下からもう1体のバーテックスの触手が飛び出して友奈を串刺した。

樹「友奈さん!!」

しかし牛鬼が触手を防いでくれた。触手が止まり、友奈が落ちる。

友奈「きゃあああああ!!」

触手が友奈を叩き飛ばした。

樹「っ!」

風「くっ!」

マコト「タケル!このままじゃ!」

タケル「分かっている!ベーターベンさん!」

ベーターベンゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『バッチリミナー!バッチリミナー!カイガン!ベーターベン!曲名!運命!ジャジャ

ジャジャー!』

タケル「フッ!」

指を振ると、音楽に乗って特殊な振動波が発生して、バーテックスの槍を全て防ぐ。

遠くから東郷達が見守っている。

東郷「こつちに・・・」



友奈「がはっ!!」

触手で友奈が飛ばされてしまった。

東郷「友奈ちゃん！」

御成「友奈殿!!」

バーテックスが触手で友奈を串刺そうとしたが、牛鬼が防いでくれた。

マコト「友奈!!」

フリーディーニゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『バッチリミロー! バッチリミロー! カイガン! フリーディーニ! マジイイジャン! すげえマジシヤン!』

マシンフリーディーニが変形し、スペクターに纏った。

マコト「うおおおおお!!」

高速で友奈の方へ飛ぶが、到着と同時に触手に友奈諸共潰された。

アカリ「マコト!!」

御成「マコト殿!!」

カノン「お兄ちゃん!!」

東郷「つ・・・!!」

潰された友奈とスペクターを見て、東郷がシヨックした。

初めて友奈と出会ったあの日。

友奈『新しいお隣さんだ!歳が同じなら、同じ中学になるよね?私は結城友奈!宜しくね!』

東郷は、何も言わずに友奈に握手した。

友奈『そうだ!この辺よく分からないでしょ?何だったら案内するよ!任せて!』  
少し戸惑ったが、東郷が笑顔になった。

現在。

マコト「くっ……!!」

スペクターと牛鬼が懸命に友奈を守っている。2人はまだ生きている。

アカリ「マコト!!」

カノン「このままじゃお兄ちゃんとお兄ちゃんと友奈ちゃんが!」

東郷「止めろ……!!友奈ちゃんを……!!」

御成「東郷殿?」

東郷「いじめるなああああああああ!!!」

触手がこっちに向かって来た。

アカリ「っ!!」

カノン「っ!!」

御成「もうお終いだあああああ!!!」

しかし、何かが4人を守った。

アカリ「・・・い、生きてる?」

御成「あ、あれは!」

守っているのは、割れ目から目と手を覗かせた卵のような姿をした精霊だった。

カノン「精霊・・・?」

アカリ「まさか!」

東郷「私、何時も友奈ちゃんに守って貰ってた・・・」

精霊が触手を弾き返した。

マコト「東郷・・・？」

友奈「東郷さん・・・？」

マコト「友奈、大丈夫か？」

友奈「う、うん。」

東郷「だから・・・次は私が勇者になって・・・友奈ちゃんを守る!!」  
スマホをタッチすると勇者システムが起動した。

遂に東郷が、勇者に変身したのだった。

友奈「・・・！」

マコト「東郷・・・なのか？」

友奈「綺麗・・・」

右手に短銃を握った。

東郷（どうしてだろう・・・変身したら落ち着いた。武器を持っているから？）

触手が再び迫るが、東郷が発砲した短銃で怯んだ。

東郷「もう友奈ちゃんには手出しさせない!!」

両手を前に出すと、散弾銃が具現化し、バーテックスに向けて発砲する。

友奈「凄い、東郷さん・・・これなら!」

マコト「・・・」

同じ頃ゴーストはベーターベンクの振動波で防ぎ、風と樹が逃げ惑う。

タケル「物陰に隠れて!!」

2人が物陰に隠れるが、槍が隠れた2人に集中攻撃する。ゴーストが振動波で防ぎ続ける。

風「ああもう、しつこい男は嫌いなものよ!」

樹「モテる人っぽい事言っていないで、何とかしようよお姉ちゃん!このままじゃタケルさんが危ないよ!」

“ヒュルルルルル”

風「ん？」

タケル「何だ？」

槍を反射する鏡が、鎖で縛られたパーテックスによって潰れた。

風・樹「うわっ!？」

ジャンプして上に着地した。そこにスペクターと友奈も来た。

マコト「大丈夫か!？」

タケル「マコト兄ちゃん!!」

友奈「そのエビ運んで来たよー!ー!!」

風「サソリでしょ!？」

樹「どっちでもいいから・・・」

タケル「ん？2人共、あれって・・・」

風「え？」

樹「東郷先輩!」

勇者となった東郷も来た。

東郷「遠くの敵は、私が狙撃します!」

風「東郷・・・」

タケル「勇者になつたんだね!」

風「戦つてくれるの?」

彼女は無言で頷いた。風はホツとした。

東郷「援護は任せて下さい!」

マコト「俺も援護する!その隙にやれ!」

風「分かった!手前の2匹、纏めてやるわよ!散会!」

タケル「うん!」

友奈・樹「OK!」

東郷「部位の攻撃に気を付けて!」

タケル「分かった!」

友奈「うん!」

樹「はい!」

風「私のより、返事が良い・・・」

『バツチリミロー!バツチリミロー!カイガン!ノブナガ!我の生き様!桶狭間!』  
ノブナガ魂を纏ったスペクターがガンガンハンドを構える。



マコト「東郷、合図をしたら狙撃だ。」

東郷「はい。」

遠くのバーテックスが、口から槍を飛ばした。

マコト「今だ!!」

東郷「っ!」

ガンガンハンドと狙撃銃を同時発射すると、見事に命中した。

東郷（此奴が皆を苦しめた・・・大人しくしてて。）

別の場所では、友奈達が封印の儀を行っていた。2体のバーテックスが御霊を吐き出した。

友奈「出たー!!」

樹「こつちも!!」

友奈「私、行きます!」

御霊を破壊しようとしたが、御霊が高速で避けた。

友奈「あれ!?!」

何度も破壊しようとしても、御霊が避け続ける。

友奈「この御霊、絶妙に避けてくよおお!!」

タケル「友奈!俺に任せて!」

友奈「う、うん!!」

タケル「命、燃やすぜ!」

『ダイカイガン!ベートーベン!オメガドライブ!』

オメガドライブを発動させて、指揮者のように指を振って御霊を浮かせ、無数のエネルギー振動波を打ち込んだ。

タケル「風!今だ!!」

風「おりやあああああああ!!!」

大剣を振り下ろして御霊を破壊した。

風「ひとつ!!」

武器の花弁が1つ増えた。

風「さあ、次行くわよ!!」

するともう1体のバーテックスの御霊が分身を作った。

友奈「な、何か増えた!?!」

タケル「だったら!!」

今度はニュートンゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『バッチリリミナー！バッチリリミナー！カイガン！ニユートン！リンゴが落下！引き寄せ  
まっか！』

樹「数が多いなら・・・纏めて!!」

蔦で分身諸共絡ませた。

樹「えええええい!!!」

右腕を大きく振って、分身だけを引き裂いた。

『ダイカイガン！ニユートン！オメガドライブ!』

左手のグローブで破壊された御霊を分身諸共引き寄せた。

タケル「ハアツ!!」

右手のグローブで前に飛ばした。

タケル「樹ちゃん!!」

樹「えい!!」

右腕を上には振り上げて、本物の御霊を引き裂いて破壊した。2体のバーテックスが砂のように溶けて消滅した。すると樹の花弁も増えた。

風「ナイス樹！タケルさん！後ひとっ！」

同じ頃スペクターと東郷は。

マコト「これで仕上げるぞ。」

東郷「風先輩、部室では言い過ぎました。ごめんなさい。」

風『東郷・・・』

東郷「精一杯援護します!」

風『・・・心強いわ!東郷!私の方こそ・・・』

『オメガスパーク!』

謝ろうとしたが、オメガスパークと狙撃銃がバーテックスに全弾命中した。

風「えと・・・本当ごめんなさい・・・はい・・・」

友奈「よし、封印開始!」

封印の儀を開始。バーテックスの口から御霊が吐き出された。すると御霊が高速で

バーテックスの周りを移動する。

友奈「この御霊!」

樹「速い!!」

風「くっ!」

タケル「ならばもう1度!」

オメガドライブを発動しようとしたが。

『オメガスパーク!』

オメガスパークと狙撃銃が、高速移動する御霊を見事打ち抜いた。

樹「東郷先輩!」

タケル「マコト兄ちゃん!」

風「打ち抜いた!」

撃ち抜かれた御霊が破壊され、バーテックスが砂になって消滅した。

東郷「状況終了。皆、無事で良かった。」

樹海が晴れ、現実世界に戻った。

友奈「東郷さん格好良かったなあ〜!ドキツとしちやった!」

アカリ「凄かったわマコト!」

カノン「お兄ちゃん凄いい!」

御成「高速で動く御霊を見事に撃ち抜くとは流石ですぞ!」

マコト「いや、それ程でも無いな。タケル、大丈夫か?」

タケル「うん。ありがとうマコト兄ちゃん。」

風「でも本当に助かった。東郷、それで・・・」

東郷「覚悟は出来ました。私も勇者として頑張ります!」

風「東郷・・・ありがとう。一緒に国防に励もう!」

東郷「国防・・・はい!」

タケル「そう言えば友奈、課題はどうしたの?」

友奈「はっ!課題明日までだった!アプリの説明テキストばっかり読んで・・・」

東郷「そこは守らないから頑張つてね。」

友奈「そんなあ〜〜!!タケルさん助けて〜〜!!」

タケル「駄目だよ。勇者になっても勉強は必要だよ。」

友奈「ふえ〜〜ん!!」

こうして東郷も勇者となって、国防の為に励むのであった。

[  
E  
N  
D  
[

## 第三話「夏凜!風格ある振る舞い!」

後日の讃州中学校では。

先生「はい、良いですか? 今日から皆さんのクラスメイトになる三好夏凜さんです。」  
何と夏凜が友奈と東郷のクラスに転校したのだった。

友奈「はあ・・・」

先生「三好さんは、ご両親の都合で此方に引っ越して来たのよね?」

夏凜「はい。」

先生「編入試験もほぼ満点だったのですよ?」

夏凜「いえ。」

先生「さあ、三好さんから皆さんに挨拶を。」

夏凜「三好夏凜です。宜しくお願いします。」

友奈「はあ・・・」

東郷「成る程・・・」



勇者部。

タケル「まさかここに転校生として来るなんて・・・」

風「そう来たか・・・」

夏凜「転入生の振りなんて面倒臭い。でもまあ、私が来たからにはもう安心ね！完全勝利よ！」

東郷「何故今このタイミングで？」

マコト「お前も勇者なら、最初からここに来るはずだろ。」

夏凜「私だってすぐに出撃したかったのよ。でも大赦は、二重三重に万全を期しているの。最強の勇者を完成させる為にね！」

東郷「最強の勇者？」

アカリ「完成させる為？」

夏凜「そう！あなた達先見隊の戦闘データを得て、完璧に調整された完成型勇者。それが私。私の勇者システムは、対バーテックス用に改良を施されているわ。その上、あなた達藤四郎とは違って、戦闘の為の訓練を長年受けている！」

御成「ふむふむ。」

東郷「黒板に当たってますよ？」

風「躰甲斐のありそうな子ね。」

夏凜「何ですって!?!」

樹「まあまあ、喧嘩しないで!」

夏凜「フンっ、まあ良いわ。兎に角大船に乗ったつもりで居なさい。」

タケル「結構変わった子だね。」

マコト「ああ。先が思いやられそうだ。」

夏凜「あなた達2人の事も調べてあるわ。」

タケル・マコト「え?」

夏凜「天空寺タケルと深海マコト。あなた達は仮面ライダーゴーストと仮面ライダースペクターと言う幽霊の戦士。以前からあなた達の事を調べ尽くしてあるわ。あなた達はここじゃない別の世界から来た。そしてその3人も、2人と同じ世界からこっちに現れたと言う。」

マコト「俺達までも調べられているとはな。」

友奈「そっか。宜しくね?夏凜ちゃん。」

夏凜「い、いきなり下の名前!?!」

友奈「嫌だった?」

夏凜「フンっ、どうでも良い。名前なんて好きに呼べば良いわ。」

友奈「ようこそ！勇者部へ！」

夏凜「は？誰が？」

友奈「夏凜ちゃん。」

夏凜「部員になるなんて話、一言もしてないわよ！」

友奈「え？違うの？」

夏凜「違うわ。私達はあなた達を監視する為にここに來ただけよ。」

友奈「え？もう來ないの？」

夏凜「また來るわよ。お役目だからね。」

友奈「じゃあ、部員になっちゃった方が話が早いよね。」

東郷「確かに。」

夏凜「・・・まあ良いわ。そう言う事にしておきましょうか。その方があなた達を監

視し易そうだしね。」

風「監視監視つてあんたね、見張つてないと私達がサボるみたいな言い方止めてくれない？」

マコト「此奴らは懸命に勇者としてやってるんだぞ。」

夏凜「偶然選ばれただけの藤四郎が、大きな顔をするんじゃないわよ。」

風「・・・」

夏凜「大赦のお役目はね、お飯事じゃないわよ。」

タケル「牛鬼!？」

夏凜「ん? きゃああああああああ!!!」

牛鬼が夏凜の精霊を齧っていた。

夏凜「ななな何してんのよ!!」

牛鬼から精霊を離した。

夏凜「この腐れちくしょう!!」

精霊「外道め!」

友奈「外道じゃないよ。牛鬼だよ。ちよつと食いしん坊君だけどね。」

ビーフジャーキーを食べさせた。

夏凜「じ、自分の精霊も躰出来んようじゃ、やっぱり藤四郎よね!!」

東郷「牛鬼に齧られてしまうから、皆精霊を出しておけないよ。」

タケル「俺の指も齧るんだけどね。」

牛鬼がタケルの指をハミハミしている。

夏凜「じゃあ、そいつを引っ込めなさいよ!」

友奈「この子勝手に出て来ちゃうんだ。」

夏凜「はあ? あんたのシステム壊れてるんじゃないの!？」

精霊「外道め！」

タケル「君の精霊って喋れるんだな。」

夏凜「ええ。私の能力に相応しい強力な精霊よ。」

タケル「だけど、東郷には精霊が3匹付いているけどね。」

東郷「えつと・・・」

精霊3匹出した。

東郷「出ました。」

夏凜「・・・わ、私の精霊は1体で最強なのよ！言つてやんなさい！」

精霊「諸行無常！」

夏凜「・・・」

御成「達観しておりますなあ。」

夏凜「そ、そこが良いのよ。」

樹「ど、どうしよう・・・夏凜さん！」

夏凜「今度は何よ！」

樹「夏凜さん、死神のカード・・・」

カノン「不吉……」

夏凜「勝手に占って不吉なレッテル貼らないでくれる!？」

風「不吉だ……」

アカリ「不吉ね……」

東郷「不吉ですね……」

マコト「不吉だな……」

夏凜「不吉じゃない!!兎も角!これからのバーテックス討伐は、私の監視の下励むのよ!」

友奈「部長が居るのに?」

夏凜「ぶ、部長より偉いのよ!」

友奈「ややこしいな……」

夏凜「ややこしくない!」

タケル「風、どうする?」

風「ふむ。事情は分かったけど、学校に居る間は上級生の言葉を聞くものよ。事情を隠すのは任務にもあるでしょ?」

夏凜「……ふん、まあ良いわ。残りのバーテックスを消滅したら、お役目は終わりなんだし、それまでの我慢ね。」

友奈「うん！一緒に頑張ろうね！」

夏凜「が、頑張るのは当然！私の足を引っ張るんじゃないわよ！」

マコト「お前も俺達の足を引っ張るんじゃないぞ。」

夏凜「わ、分かってるわよ！」

友奈「ねえ、一緒にうどん屋さん行かない？」

夏凜「必要無い。行かないわよ。」

友奈「もう帰るの？」

彼女は部室から出て行った。

マコト「……」

かめや。

友奈「美味しいのに……」

東郷「頑なな感じの人ですね。」

アカリ「素直じゃないのかな？」

風「フッフッフ。」

樹「お姉ちゃんどうしたの？」

カノン「何かあったの?」

風「ああ言うお堅いタイプは張り合い甲斐があるわね。」

樹「張り合うの・・・?」

御成「夏凜殿と戦うのですか?」

風「んゝ・・・どうだろう?」

友奈「んゝ・・・どうやったら仲良くなれるのかな・・・」

マコト「・・・先に帰ってくれ。」

タケル「マコト兄ちゃん?」

友奈「マコトさん?」

マコトはかめやから出て、マシンフーデューに乗って何処かへ向かった。

その頃夏凜は、自転車に乗って何処かへ向かっていた。

浜辺で木刀を持って剣舞をしている。



夏凜（下らない・・・学校なんて別に期待してなかったけど、想像以下ね。ん？）  
彼女の目には、マシンフリーデーから降りるマコトが映った。

夏凜「深海、マコト・・・」

マコト「1人で頑張っているな。」

夏凜「何か用？」

マコト「いや、お前が訓練する場所はここだって分かっているからな。」

実はマコトは、1年前から夏凜の事を知っていた。

マコト「お前のその性格、去年に比べて変わらないな。彼奴らに馴染む気は無いのか？」

夏凜「無いわよ。あんな奴らなんか・・・」

マコト「素直じゃないな。少しでも良いから、彼奴らを信じてみたらどうだ？」

夏凜「・・・」

夜、夏凜が家に帰った。大赦にメールを送り、ルームランナーで走る。

夏凜「・・・馬鹿な連中・・・」

マコト『彼奴らに馴染む気は無いのか?』

夏凜「馴染むなんて・・・出来る訳無い・・・」

夕飯を食べる。

夏凜「頂きます。」

翌日の讃州中学校のプール。

先生「良いわよ。その調子。」

泳ぎの練習をする東郷。一方夏凜は素早くクロールで泳ぎ、クラスメイトがタイムを計った。

クラスメイト「凄い! 三好さん、これ水泳選手並みじゃない!」

夏凜「鍛えてるから。」

クラスメイト「ねえねえ三好さん、うちの水泳部に入らない?」

夏凜「興味無い。」

プールから上がる。

友奈「凄いよ夏凜ちゃん！皆びつくりしてるよ！凄いね〜って！」

夏凜「結城友奈・・・良い？勇者はね、凄くないと世界が救えないのよ！勇者の戦闘力は、本人の基礎運動能力に大きく左右されるのよ！あんたも勇者なら、自覚を持ちなさい！」

友奈「先月勇者になったばかりだから・・・エヘ〜。」

夏凜「あんた、よく馬鹿だつて言われてるでしょ？」

友奈「実はそうなんだよね〜。」

夏凜「・・・全く、そんなんでよく勇者に選ばれたわね。」

部室。

夏凜「仕方無いから情報交換と共有よ。」

煮干しを食べながら説明する。

夏凜「分かってる？あんた達があんまりにも呑気だから、今日も来てあげたのよ。」

タケル・風「煮干し?」

夏凜「何よ? ビタミン、ミネラル、カルシウム、タウリン、EPA、DHA! 煮干しは完全食よ!」

タケル「そう? なら良いけど。」

夏凜「あげないわよ。」

風「いらさないわよ。」

東郷「じゃあ、私のぼた餅と交換しましよ?」

夏凜「何それ・・・?」

東郷「さつき家庭科の授業で。」

カノン「東郷さんはお菓子が上手なの。このぼた餅とっても美味しいよ?」

東郷「いかがですか?」

夏凜「い、いらさないわよ!」

カノン「そう? 東郷さん、1つ頂戴?」

東郷「どうぞ。」

カノン「・・・ん、美味しい!」

説明に戻る。他の皆はぼた餅を食べながら説明を聞く。

夏凜「良い？パーテックスの出現は、周期的な物と考えられていたけど、相当に乱れている。これは異常事態よ。帳尻を合わせる為、今後は相当な混戦が予想されるわ。」

東郷「確かに、1ヶ月前も複数体出現していましたね。」

夏凜「私ならどんな事態でも対処出来るけど、あなた達は気を付けなさい。命を落とすわよ？」

タケル「うん。」

夏凜「他に、戦闘経験値を溜める事で、勇者はレベルが上がり、より強くなる。」

タケル（先生を思い出すなあ。）

夏凜「それを、満開と呼んでいるわ。」

友奈「そうだったんだあ。」

東郷「アプリの説明にも書いてあるよ？」

友奈「そうなんだ！」

夏凜「・・・ま、満開を繰り返す事で、より強力になる。これが大赦からの勇者システム。」

東郷「三好さんは、満開経験済みなんですか？」

夏凜「い、いや、まだ・・・」

風「なあんだ。あんたもレベル1なんじゃ、私達と変わり無いじゃん。」

夏凜「き、基礎戦闘力は桁違いに違い無いわよ!一緒にしないでもらえる!?!」

アカリ「じゃあそこは、皆の努力次第ね。」

友奈「じゃあじゃあ、これからは体を鍛える為に朝練しましょうか!運動部みたいに  
!」

樹「あ、良いですね!」

御成「それは明暗ですぞ友奈殿。」

風「樹、あんた絶対朝起きれないでしょ?」

アカリ「結構ぐっすり寝てるもんね。」

樹「あ……」

友奈「あははははは。」

タケル「でも友奈も朝苦手でしょ?」

友奈「あ……」

夏凜「はあ……何でこんな奴らが神樹様に……」

友奈「成せば大抵何とかなる!」

夏凜「何それ?」

タケル「勇者部の五箇条だよ。」

友奈「大丈夫だよ！皆で力を合わせれば、大抵何とかなるよ！」  
黒板の上に勇者部五箇条が貼つてある。

夏凜「なるべくとか何とかかかかか：：あんだ達らしい見通しの甘いフワツとしたスローガンね。」

タケル「そこが友奈達勇者部の良い所だよ。」

夏凜「全くもう、私の中で諦めが付いたわ・・・」

風「私らは、そう・・・あれだ！現場主義！」

夏凜「それ、今思い付いたでしょ・・・」

風「はいはい、考え過ぎるとハゲるハゲる。」

夏凜「ハゲる訳無いでしょ！その坊主と一緒にしないで！」

御成「せ、拙僧の事ですかー!？」

アカリ「確かに、ハゲると困るわ・・・」

御成「アカリ君までー!？」

風「はい、じゃあここから次の議題。樹。」

樹「はい！」

子ども会のお手伝いのしおり。

樹「と言う訳で、今週末は子ども会のレクリエーションのお手伝いをします!」

カノン「楽しそう〜!」

東郷「具体的には?」

樹「えっと、折り紙の折り方を教えてあげたり、一緒に絵を描いたり、やる事が沢山あります!」

友奈「わあ〜!楽しそう!」

タケル「今週末が楽しみなね。」

風「夏凜にはそうだね・・・暴れ足りない子のドッジボールの的になってもらおうかしら?」

夏凜「はあ!?って言うかちよつと待って!?私もの!」

風「昨日、入部したでしょ?」

入部届に夏凜の名前が書いてある。

夏凜「け、形式上・・・」

風「ここに居る以上、部の方針に従ってもらいますからね。」

夏凜「そ、それも形式上でしょ!?!それに私のスケジュールを勝手に決めないで!」

カノン「夏凜ちゃんって、日曜日予定あるの?」



夏凜「い、いや・・・」

友奈「じゃあ親睦会を兼ねてやった方が良いよ！楽しいよ？」

夏凜「な、何で私が子供なんかの相手を!？」

カノン「子供、嫌いな・・・？」

夏凜「え・・・わ、分かったわよ！日曜日ね。丁度その日だけ空いてるわ。」

友奈「良かった〜！」

カノン「友奈ちゃん、良かったね！」

友奈「うん！カノンちゃん！」

夏凜「き、緊張感の無い奴ら・・・」

マコト「だがそこが彼奴らの良い所だ。少しは理解出来たか？」

夏凜「・・・まあ。」

夕方。夏凜が帰宅した。すぐに大赦にメールを送って、ルームランナーで走る。夏凜（この非常時にレクリエーションなんて・・・）

夕飯を食べる。

夏凜「頂きます。」

カレンダーには、6月12日の日曜日が丸で囲んである。

夕飯後に食器を洗う。テーブルの上には折り紙が置いてある。

日曜日の讃州中学校。夏凜が勇者部前まで来た。

夏凜「来てあげたわよ!・・・誰も居ないわね。」

部室には誰も居なかった。スマホで時間を確認すると、朝の9時45分。

夏凜「早過ぎたかしら?」

しばらく待って朝の10時。しかし誰も来ない。

夏凜「・・・だらしがない・・・」

30分後になっても誰も来ない。

夏凜「これ、ひよつとして・・・」

しりようを見ると、10時に現地集合と書かれてあった。

夏凜「現地・・・しまった、私が間違えた・・・えつと、電話・・・しておいた方が  
良いわよね？」

“ピロピロピロリン”

夏凜「うわっ！この番号、結城友奈!?!あつちから掛かって来た!えつと、えつと・・・」  
パニックになつて電話を切つてしまった。

夏凜「・・・切つちやつた・・・か、掛け直した方が良いわよね・・・?こう言う時  
は何と言つて・・・えつと・・・何をやっているの・・・私は・・・そうよ、関係無い。  
別に部活なんてハナから行きかけた訳じゃないし。そうだ、神樹様選ばれた勇者が  
何呑気に浮かれているのよ・・・私は、あんな連中とは違う。真に選ばれた勇者。」  
スマホの電源をオフにして部室を出て行った。

浜辺で剣舞をする。

夏凜（彼奴らは所詮試験勇者。私は違う。私は、世界の未来を背負わされている。期待されているのよ。だから・・・普通じゃなくて良いんだ。）

マコト『彼奴らに馴染む気はないのか?』

夏凜（馬鹿馬鹿しい。）

夕方になって帰り、何時ものようにルームランナーで走る。

夏凜「滞りなし・・・」

“ピンポン”

インターホンが鳴った。

夏凜「え？」

ルームランナーを止めると。

“ピンポーン” “ピンポーン” “ピンポーン”

夏凜「うわっ!？」

木刀を持ってドアを開けた。

夏凜「誰よ!!」

全員「うわああああ!？」

夏凜「あれ? あんた達・・・?」

風「あ、あんたね! 何度も電話したのに、何で電源オフにしてるのよ!」

夏凜「え?・・・そ、そんな事より何!？」

タケル「心配になったから来たんだよ。」

夏凜「心配? あ・・・」

顔を逸らした。

友奈「良かった・・・寝込んでたりしたんじゃないんだね。」

夏凜「え、ええ・・・」

風「じゃあ、上がらせて貰うわよ。」

夏凜「え!? あ、ちよつと!」

部屋に上がった。

夏凜「何勝手に上がってるのよ! 意味分かんない!!」

風「殺風景な部屋・・・」

夏凜「どうだって良いでしょ!!」

風「まあ良いわ。ほら座って座って?」

夏凜「な、何言ってるのよ!」

樹「これ凄い! プロのスポーツ選手みたい!」

カノン「ルームランナーだ!」

ルームランナーを触る。

夏凜「勝手に触らないでよ!!」

友奈「わああああ!! 水しか無い・・・」

冷蔵庫を漁る。

夏凜「勝手に開けないで!!」

アカリ「もうすぐ準備出来るわよ。」

お菓子やジュースなど色々出した。

風「ね？買って来ておいて良かったでしょ？」

夏凜「何なのよ・・・いきなり来て何なのよ!!」

友奈「あのね？」

夏凜「ん？」

友奈「ハッピーバースデー！夏凜ちゃん！」

誕生日ケーキを開けた。

夏凜「え・・・？」

友奈「夏凜ちゃん、お誕生日おめでとう！」

東郷「おめでとう！」

御成「おめでとうございます！夏凜殿！」

夏凜「え・・・どうして？」

風「あんた今日誕生日でしょ?」

入部届に夏凜の生年月日に286年6月12日と書いてある。

東郷「友奈ちゃんが見付けたんだよね?」

友奈「エヘヘ。あつて思っちゃった。だから誕生日会しないとね。」

タケル「でなかつたら、ここに来ないよ。」

樹「歓迎会も一緒に出来るよね?」

友奈「うん!」

東郷「本当は、子供達と一緒に児童館でやろうと思つてたの。」

タケル「今日が誕生日だからサプライズしようと思つていたんだけどね。」

夏凜「……」

風「でも当のあんたが来ないんだもの……急るじゃない。」

アカリ「家に迎えに行こうと思つてただけど、子供達が凄く盛り上がりつつやつてね。」

風「結局この時間まで開放されなかったのよ……ごめんね?」

夏凜「……」

風「ん?どうした?」

友奈「夏凜ちゃん?」



風「あれえ？ひよつとして自分の誕生日も忘れてた？」

夏凜「アホ・・・馬鹿・・・ボケ・・・おたんこなす！」

友奈「え？」

風「何よそれ!？」

夏凜「・・・誕生日なんてやった事無いから！何て言ったら良いか、分からないのよ・・・」  
マコト「夏凜、素直に喜べよ。何て言ったら良いか分からないとかじゃなく、素直に心から喜べば楽しめる。俺達はお前の誕生日を祝福している。」

夏凜「マコト・・・」

友奈「お誕生日おめでとう。夏凜ちゃん。」

夏凜「・・・」

誕生日が始まった。

全員「かんぱーい!」

風「ほらく、飲め飲めく!」

夏凜「コーラで酔っ払ってるんじゃないわよ!」

風「こう言うのは気分よ気分!楽しんでやうのが女子力じゃない!」

樹「あ!折り紙!練習してたんですか!?!」

テレビの下に折り紙があつた。

東郷「凄い上手!」

夏凜「わあああああ!!みみ、みみみみみ、見るなあああ!!」

風・樹「うふふふふふ。」

カノン「夏凜ちゃん可愛い。」

友奈「勇者部の予定と、私達の遊びの予定。」

タケル「友奈、勝手に書いたら怒られるよ?」

カレンダーに予定を書いている。

夏凜「勝手に書き込まないで!!」

友奈「勇者部は土日に色々活動があるんだよ?」

風「忙しくなるわよ?」

夏凜「勝手に忙しくするなあああ!!」

友奈「そうだよ忙しいよ！文化祭でやる、演劇の練習とかもあるし！」

樹「え？」

友奈「え？」

東郷「演劇？」

マコト「それ何時決まったんだ？」

友奈「あ、あれれ!?もしかしたら私の中の勝手なアイデアが口走っちゃっただけかも・・・」

夏凜「馬鹿なの・・・？」

タケル「あははは・・・」

風「良いね。演劇。」

全員「え？」

風「決まり！今年の文化祭の出し物は演劇で行きましょう！」

夏凜「つて言うか、私を話で巻き込まないでよ!!」

風「良いじゃん、暇だったんでしょ？」

夏凜「い、忙しいわよ！トレーニングとか！」

マコト「浜辺で剣舞もな。」

夏凜「うっ！」

風「1人で!?暗っ!」

夏凜「う、五月蠅い!!」

東郷「良かったね。友奈ちゃん。」

タケル「出し物が決まったね。」

東郷「うん!」

誕生会は長く続いた。

そして終わった。

風「じゃあ私ら帰るね。」

夏凜「帰れ帰れ!!」

友奈「また来るね〜!」

それぞれが帰って行った。

夏凜「彼奴ら・・・ゴミを大量に増やして・・・全く。どれだけ食べるのよ・・・」  
しかし密かに笑みを浮かべた。

部屋に戻ると。

夏凜「ん？」

スマホにメッセージが受信されていた。

夏凜「あれ？」

それは風からの招待だった。

夜、ベッドに入ってスマホでメッセージを見る。

風『あんたも登録しておいてね。今日みたいに連絡の行き違いが無いように。』

樹『これから仲良くしてくださいね。よろしくお願いします。』

東郷『次こそはぼた餅食べてくださいね。有無は言わせない。』

夏凜「ぼた餅って・・・」

友奈『ハッピーバースデー夏凜ちゃん！学校のことや部活のことでわからないことがあつたらなんでも聞いてね。』

夏凜「はあ、了解つと・・・」

了解と打ってメッセージを送った。すぐに返信が来た。

夏凜 「うわっ!?!」

友奈 『わー返事が返ってきた』

風 『ふふふ、レスポンスいいじゃない』

友奈 『わーわーい』

樹 『わーわーい』

東郷 『ぼた餅』

夏凜 「え、えっと・・・うつさい!!」

うつさい!!とメッセージを送った。

風 『ぶははははははは』

東郷 『ぼた餅』

夏凜 「何なのよ、もう・・・ん?」

友奈 『これから全部が楽しくなるよ!』

『写真が送られてきました』

送られた写真は、夏凜の誕生会で撮った集合写真だった。

夏凜 「・・・全部が楽しくなるつか・・・世界を救う勇者だって言ってるのに・・・馬鹿ね。」

そう言いながら微笑んで眠った。

犬吠埼家。

アカリ「夏凜ちゃん、怒ってたね。」

風「良い度胸じゃない。」

御成「これから忙しくなりそうですぞ。」

樹「はい。」

東郷家・東郷の部屋。

カノン「夏凜ちゃん、喜んでくれたかな？」

東郷「そうだと良いですね。」

マコト「心配するな。夏凜の事だ。すぐに仲良くなれるさ。」

結城家・友奈の部屋。

タケル「夏凜と仲良くなれたら良いね。」

友奈「きつとなれるよ!だって同じ仲間だもん!」

タケル「友奈らしい言葉だね。じゃあ俺寝るから。」

友奈「うん、おやすみタケルさん。」

タケルは自分の部屋へ戻って行った。

「END」



## 第四話 「理由！輝く心！」

勇者部。

友奈「んっ……この写真は、ここで!!」

春の勇者部活動の右下に、写真を貼った。

友奈「うっん！バツチりだー！」

タケル「結構迷ってたね。」

友奈「だつて、何処にするか決まらなかったんだもん。」

タケル「まあでも、良い新聞が出来たね。」

今日の勇者部は忙しかった。

東郷はホームページの確認をしている。アクセス数が予想以上に高かった。

友奈「わぁっお！今日も閲覧者数凄〜い！」

アカリ「今日もこの数なんて凄いわね……」

東郷「後は、子猫の写真と学校の連絡先を載せて……」

学校の連絡先と、小さな子猫の画像を載せた。

東郷「こんな所かな？」

友奈「完璧！」

アカリ「子猫可愛いわね。」

風「ああもう・・・」

マコト「風、調子はどうだ？」

風「ストリーが思い付かん・・・」

カノン「流石の風ちゃんでも、思い付かない事つてあるんだね。」

風「んくまあね・・・ん？何食べてるの？」

夏凜「ん？煮干し。」

御成「この学校で煮干しを食べる女子生徒は夏凜殿しか居りませぬな。」

夏凜「健康に良いのよ。」

風「じゃあ、これから夏凜の事、にぼっしーと呼ぶ！」

夏凜「ゆるキャラに居そうなあだ名付けんな!!」

友奈「そう言えば、にぼっしーちゃん。」

夏凜「待つて！その名前定着させる気!？」

東郷「それより、飼い主探しのポスターは？」

夏凜「え？そんなのもう作つてあるわ。」

タケル「え、もう？」

既に作つたポスターを見せた。

友奈「わあ！ありがとう！」

夏凜「ふふくん！」

しかし絵心が無く、猫の絵が雑だった。

東郷「えつと・・・妖怪？」

夏凜「猫よ！」

するとグリムゴースト眼魂が光り、グリムゴーストが実体化した。

タケル「グリムさん？」

グリム「全く、この絵は酷い！私が描き直してあげよう！」

ポスターの絵を新しく描き直す。

グリム「出来たぞ！」

子猫の絵が完成した。

友奈「わああ！凄くいい！」

東郷「素晴らしいわ!」

タケル「ありがとうグリムさん。」

グリム「良いって事だ。では。」

光ってグリムゴースト眼魂に戻った。

樹「はあ・・・」

風「ん? 樹?」

樹「え? な、何?」

風「どうしたの? 溜め息なんか付いて。」

タケル「何処か具合でも悪いの?」

樹「あ、いえ・・・もうすぐ音楽の歌のテストで、上手く歌えるか占ってただけど・・・  
タロットカードで占った結果、DEATHのカードが当たってしまった。

樹「死神の正位置・・・意味は、破滅・・・終局・・・ううう・・・」

風「ん・・・当たるのも八卦、当たらぬのも八卦って言うし、気にする事無いでしょ。」

友奈「そうだよ！こう言うのつて、もう一度占ったら全く別の結果が出るもんだよ！」  
タケル「もう一度占ってみたら？」

樹「はい・・・」

しかし、死神カードが3回連続出てしまった。

御成「ここ、これは不吉ですぞ・・・」

友奈「だ、大丈夫！4カードだからこれは良い役だよ！」

タケル「ポーカー？」

樹「死神の4カード・・・」

友奈「い、いや！悪い意味じゃなくて・・・」

早速今日の勇者部活動を計画した。

アカリ「今日の活動はこれよ！」

樹の歌のテストを合格させる。

風「私達勇者部は、困ってる人を助ける! 勿論それは部員だつて同じよ?」

友奈「歌が上手くなる方法かあ・・・」

東郷「まず歌でα波号を出せるようになれば、勝つたも同然ね。」

樹「α波?」

東郷「良い音楽や歌と言うものは、大抵α波で説明が付くの。」

樹「そうなんですか!?!」

友奈「んな訳無いでしょ!」

風「樹!人で歌うと上手いんだよね・・・人前で歌うのが緊張するっただけじゃな

いのかな?」

夏凜「へえ〜。」

タケル「人前で歌うと緊張するのは俺も分かるよ。樹ちゃん。」

友奈「あ、そっか!それなら!習うより慣れる!だね!」

と言う訳で、一行はカラオケ店へ向かった。

風が楽しく歌い、友奈と東郷とカノンが合いの手をする。

歌が終わって拍手する。

友奈「イエーイ！」

風「聴いてくれてありがとう！」

樹「お姉ちゃん上手！」

風「えへへ、ありがとう！」

友奈「ねえねえ夏凜ちゃん、この歌知ってる？」

夏凜「ん？一応知ってるけど？」

友奈「じゃあ一緒に歌おう？」

夏凜「え!? な、何で私が!? 馴れ合う為にここに居る訳じゃないわ！」

風「そうだよね。私の後じゃ、ご・め・ん・ね。」

風の得点は、92点。

タケル「風、凄いね・・・」

夏凜「・・・友奈、マイク寄越しなさい。」

友奈「え?」

夏凜「早く!!」

友奈「は、はい!!」

夏凜と友奈のデュエットで歌う。

曲が終わって、2人が疲れる。

友奈「夏凜ちゃん上手じゃん!」

夏凜「フンっ、これくらい当然よ。」

点数は92点。風と同点。

アカリ「凄い!同点よ!」

御成「流石ですぞ!友奈殿!夏凜殿!」



マコト「流石だな。夏凜。」

友奈「次は樹ちゃんだね。」

タケル「頑張つて。」

樹「うん……」

今度は樹が歌うが、かなりの音痴だった。

樹「はあ……」

風「やつぱり硬いかな？」

樹「誰かに見られてると思うとそれだけで……」

夏凜「重症ね。」

樹「はあ……」

風「まあ今はただのカラオケなんだし、上手かろうと下手だろうと、好きな歌を好きに歌えば良いのよ！」

友奈「そうそう！気にしない気にしない！さあ、お菓子でも食べて？」

タケル「もう無くなってるけど・・・」

牛鬼がお菓子全部食い倒してしまっていた。

友奈「残ってない!?!」

樹「あはは、牛鬼は本当よく食べますね。」

友奈「食べ過ぎだよ・・・」

すると渋い曲が流れた。

東郷「あ、私が入れた曲。」

友奈「っ!」

樹「っ!」

風「っ!」

タケル「っ!」

アカリ「っ!」

マコト「っ!」

御成「っ！」

カノン「っ！」

すると夏凜と東郷を除いた全員が立ち上がってピシッと敬礼した。

夏凜「え、何？」

東郷が歌ってる間は敬礼する。夏凜は混乱している。

歌い終わった後。

東郷「ふう……」

敬礼を終えた全員が座った。

夏凜「さっきのっけて一体……？」

友奈「東郷さんが歌う時は、何時もあんな感じだよ？」

夏凜「そ、そうなの？」

マコト「俺は最初断ったが、カノンと一緒にやろうって言ってな。」

カノン「結構面白いよ。お兄ちゃん。」

マコト「そうだな。」

すると風のスマホに着信が来た。

風「っ?」

女子トイレで手を洗う。そこに夏凜が来た。

夏凜「大赦から連絡?」

風「・・・ええ。」

夏凜「そつ、私には何も言つて来ないのに・・・内容は想像付くわよ。バーテックスの出現には周期がある。今の奴らの現れ方は、当初の予測と全く違つてたわ。」

風「最悪の事態を想定しろつてさ・・・」

夏凜「怖いのか?」

すると風が、右手を強く握り締めた。

夏凜「あなたは統率役には向いていない。私ならもつと上手くやれるわ。」

水を止める風が、夏凜に言い返した。

風「これは私の役目で、私の理由なのよ。後輩は黙つて、先輩の背中を見てなさい。」

そう夏凜に言つて女子トイレから出た。

夏凜「フンっ。」

夕方、皆が帰る道。

友奈「あゝ楽しかった〜！」

東郷「歩いて帰るの久し振り。」

友奈「うん！」

タケル「歌い疲れた・・・」

カノン「またカラオケ行こうね？お兄ちゃん！」

マコト「ああ。」

友奈「けど、カラオケはあんまり樹ちゃんの練習にはならなかったのかな？」

樹「でも楽しかったですよ？皆が歌うのを聴けて。」

風「・・・」

樹「お姉ちゃん？」

風「え、何？」

夏凜「樹の歌の話よ。」

友奈「風先輩、何かあったんですか？」

風「う、ううん? 何も? 樹は、もう少し練習と対策が必要かな?」

東郷「α波出せるように!」

夏凜「α波から離れなさいよ・・・」

タケル「だったら樹ちゃん、これ貸してあげる。」

ベートーベンゴースト眼魂を樹に貸した。

樹「これは?」

タケル「ベートーベンゴースト眼魂。それに入ってるベートーベンさんと一緒に練習すれば歌がよくなれるかもだよ。」

樹「ありがとうございます。」

タケル「ベートーベンさん、お願い出来ますか?」

ベートーベン『勿論だ。私で良ければ。犬吠埼樹、宜しく頼むぞ。』

樹「はい、宜しくお願いします。」

翌日の勇者部。全員が啞然とした。何故なら、夏凜が栄養に効く物を持って来たの

だった。

友奈「何か沢山ある・・・」

タケル「蜂蜜にリンゴ酢にオリーブオイル・・・これ全部家から持って来たの？」

夏凜「そう。喉に良い食べ物とサプリよ。マグネシウムやリンゴ酢は肺に良いから声が出易くなる。ビタミンは喉の血行良くして喉の荒れを防ぐ。コエンザイムは喉の筋肉の活動を助け、オリーブオイルと蜂蜜も喉に良い！」

東郷「詳しい・・・」

樹「流石です・・・」

友奈「夏凜ちゃんは健康食品の女王だね！」

風「夏凜なら健康の為なら死んでも良いって言ってるようなタイプね。」

夏凜「言わないわよ！そんな事！さあ樹、これを全種類飲んでみて？グイッと！」

樹「え!?全種類!？」

風「多過ぎでしょ、それは・・・」

アカリ「一気に飲むのは無理があるね。」

マコト「夏凜、お前でも無理がありそうだな。」

夏凜「っ!?無理ですって・・・!?!良いわよ！お手本を見せてあげるわ！」

※以下、危険性を考慮した上でギャグとして行っています。

夏凜がお手本を見せる為全部飲む。

※薬は用法、用量を守って正しくお飲み下さい。

夏凜「オリーブオイルで・・・」

オリーブオイルを飲む。

※特殊な訓練を受けた者が行っております。絶対に真似をしないでください。

全てを飲み食い尽くした。

夏凜「ど、ど・・・どう・・・? うっ!」

顔が真っ青になった。

夏凜「~~~~~!!!」

両手で口を塞いで吐きに行った。

友奈「か、夏凜ちゃん!大丈夫!」



アカリ「さっきの絶対危険ね……」

御成「想像したくないですぞ……」

タケル「無理しなくても良いのに……」

マコト「相変わらずの夏凜だな……」

トイレから夏凜が戻って来た。

夏凜「樹はまだビギナーだし、サプリは1つか2つかで充分よ。」

樹「はあ。」

タケル「何事も無かったのように話した。」

※あくまで個人の感想であり、効能を保証するものではありません。

早速発声練習をする。ベートーベンゴーストが指揮を取る。

ベートーベン「では行くぞ。1、2、3。」

樹「あ~~~~~♪」

しかしまだ上手くなってない。

タケル「まだ駄目か・・・」

風「やっぱり、緊張するのがいけないから、喉よりもリラックスの問題じゃない?」

夏凜「それもそうね。次は緊張を和らげるサプリメントを持って来るわ。」

樹「やっぱりサプリなんですね・・・」

夜の犬吠埼家。樹が風呂に入ってる。

樹「はぁ・・・」

精霊の木霊が心配している。

樹「大丈夫だよ、木霊。」

彼女が見ているのは、ビニールに入ったカラオケの時に撮った写真。

樹「春は名のみので〜♪風の寒さやく〜♪」

すると誰かがドアを開けた。

風「やっぱり樹、1人で歌うと上手いじゃん!」

アカリ「綺麗な歌声だったよ!」

樹「お、お姉ちゃん!?アカリさん!?聴いてたの!?酷い・・・」

風「全く、樹はもつと自信を持ってても良いのに。」

アカリ「そうよ。自信を持てば緊張を克服出来るわよ。」

風「そうそう。ちゃんと出来る子だから。」

2人はドアを閉めた。

これは、風と樹の過去。犬吠埼家に見知らぬ人達が来た。樹は風の背中に隠れてばかり。そして風から、両親が亡くなったと教えられた。その日から風は姉として母として、樹の面倒を何時も見てくれた。だが風は、勇者部の事をずっと一人で抱え込んでいた。もし樹が、風の後ろに隠れているじゃなく、隣を一緒に歩いて行けるようになれば……

風「樹〜？樹〜？樹起きなさい？」

樹「……ん？ん〜……」

朝の犬吠埼家。樹が眠そうに起きる。風がクローゼットから樹の制服を出してあげ

る。

風「樹?着替えて顔洗って来なさいよ?」

部屋から出る。樹が起きる。

台所では、風とアカリが朝食を作っていた。御成が食器を出してる。すると精霊の犬神は風のエプロンを引っ張る。

風「ん?はいはい、餌ね。」

フードボウルにドッグフードを盛る。犬神がドッグフードを食べる。風が犬神を撫でる。

御成「犬神殿も食いしん坊ですな。」

アカリ「微笑ましいわね。」

スープの味見をする。

アカリ「うん。風ちゃん、バッチリよ。」

風「ありがとう。アカリさん。」

樹「おはようお姉ちゃん・・・アカリさん・・・御成さん・・・」

風「おはよう。」

アカリ「樹ちゃんおはよう。」

御成「おはようございます。樹殿。」

風「もうスープも出来てるから、先にトースト食べてね。」

樹「ん・・・」

御成「樹殿、どうぞ。」

椅子に座ってトーストを食べる。

アカリ「お待たせ。」

出来たスープをテーブルに置いた。

風「ん？」

樹「・・・」

風「ちよつと動かないでね？」

樹「・・・？」

ヘアブラシで樹の髪を整える。

風「よし！今日も可愛いぞ。」

樹「・・・」

風「元気無いね。どうした？」

御成「まさか、恐ろしい夢でも見てしまったと・・・？」

アカリ「それは違うと思うけど……」

樹「あのね……」

風「ん?」

樹「あのね、お姉ちゃん……」

風「うん?」

樹「……ありがとう……」

風「つ?何?急に。」

樹「何となく、言いたくなつたの……この家の事とか勇者部の事とか、お姉ちゃんにばつかり大変な事させて……」

風「そんな、私なりに理由があるからね。」

樹「理由って?」

風「え?ま、まあ簡単に言えば、世界の平和を守る為!かな?」

アカリ「その理由で良いの?」

風「いや、だって勇者だしね。」

樹「でも……」

風「何だつて良いよ!どんな理由でも、それを頑張れるならさ。」

樹「どんな、理由でも?」

風「は〜い！シリアスはここまで〜！冷めない内に食べて？学校行くよ？」

御成「では、頂きます！」

樹「・・・・・・」

アカリ「？」

讃州中学校・1年。

樹（どんな理由でも頑張れるなら、だったら……私は、勇者になったのも部員になったのも、お姉ちゃんの後ろに付いて行っただけ……私……理由なんて何も無い……）

“キーンコーンカーンコーン”

先生「今日はここまで。」

クラスメイト「起立！」

樹「っ！」

クラスメイト「礼！……神樹様に拝。」

樹「はあ……」

するとスマホが振動した。

樹「ん？」

それは、風からのメッセージだった。

風『こちらは部長。本日のミッションは二手に別れて決行する。飼い主探しの依頼が来てた子猫のうち、二匹の貰い手が見ついた。各依頼主の家へ行き、子猫を引き取ってくるべし。』

友奈『ラジャー!』

東郷『了解です。』

放課後。アカリ、御成、カノン、友奈、東郷、夏凜が依頼主の元へ向かう。

夏凜「えつと・・・」

アカリ「どうかしたの?」

夏凜「ここ何処!?!」

東郷「この住所なら、あっち。」

夏凜「え?・・・わ、分かってたわよ!ちよつとまだこの地理に慣れてないだけよ!」

御成「まあまあ、素直になって下さいな。」

カノン「そうだよ。人は素直じゃないとね。」

夏凜「・・・そ、そうね・・・」



友奈「あ、そうだ！東郷さん、夏凜ちゃん、アカリさん、御成さん、カノンさん。ちよつと協力して欲しい事があるんだ。」

カバンからノートとペンを取り出した。

同じ頃、タケルとマコトと風と樹は、CRF250Lとマシンフーデューに乗つてもう1人の飼主主へ向かっている。風はタケルの後ろ、樹はマコトの後ろに乗ってる。

タケル「風、目的地は？」

風「・・・あ、彼処よ。」

目的地に到着して、バイクから降りた。

風「ここね。」

依頼主の家のインターホンを押した。

風「すみませーん！讚州中勇者部でーす！子猫を引き取りに来ましたー！」  
玄関を開けると。

少女「絶対やだー!この子をあげるなんてー!私が飼うから!!」  
母親「でもね、うちでは飼えないのよ。」

樹「もしかして、子猫を連れて行くが嫌だったのかな?」

風「あっちゃく、もうちよつと確認しておけば良かった・・・」

樹「どうしよう・・・この家の子、泣いてるみたい・・・」

マコト「ここは諦めるか?」

風「大丈夫、何とかする。」

樹「え?何とかって?」

風「タケルさん、手伝ってくれる?」

タケル「う、うん。」

玄関を開けて、2人が入った。

タケル「お邪魔します。」

風「失礼しまーす!讃州中勇者部の者ですけどー!」

夕方。4人が帰る。タケルとマコトはバイクを押してる。

樹「あの家のお母さん、子猫の事を考え直してくれて良かったね。」

風「・・・うん。」

樹「喧嘩にもならなかったし、お姉ちゃんとタケルさんのお陰！」

タケル「まさか、あの家で飼ってあげるなんてね。」

マコト「あの子猫、幸せになれば良いな。」

タケル「だね。」

風「ごめんね、樹・・・」

樹「え？」

タケル・マコト「？」

風「ごめん・・・」

樹「何で、謝るの？」

風「樹を、勇者なんて大変な事に巻き込んだから・・・」

樹「え・・・？」

風「さっきの家の子、お母さんに泣いて反対していたでしょ？それでさ、思ったん

だ：：樹を勇者にしろって大赦に命令された時、私：：止めてって言えば良かった：：さっきの子みたいに、泣いてでも．．．そしたら、もしかしたら、樹は勇者にならないで、普通に．．．」

タケル「風．．．」

マコト「．．．」

しかし樹が声を出した。

樹「何言ってるの!お姉ちゃん!」

風「え．．．?樹．．．?」

樹「お姉ちゃんは、間違ってるよ。」

風「でも．．．」

樹「それに私、嬉しいんだ。守られるだけじゃなくて、お姉ちゃんと、皆と一緒に戦える事が!」

風「．．．．．ありがとう。」

樹「どう致しまして!」

風「樹つたら何か偉そう。」

風・樹「あはははははは!」

タケル「2人共、俺達も皆と協力して戦っているんだ。だから、俺達にも頼っても良

いんだよ？」

マコト「ああ。俺達は別の世界の人間だが、この世界では勇者部の顧問と協力者。元の世界に帰れるまで、共に戦おうな。」

風「ありがとう。タケルさん、マコトさん。」

樹「ありがとうございます。」

ベートーベン『さあ！部屋に戻ったら歌の練習を始めよう！』

樹「あ、そ、そうでした・・・が、頑張ります!!」

後日、音楽で歌のテストの日。

樹（大丈夫、昨日だってちゃんと練習したんだし・・・）

先生「次は、犬吠埼さん。」

樹「は、はい！」

人前に立つが、また緊張してしまった。

樹（やっぱり無理・・・）

先生をピアノを弾く。

樹「っ!」

教科書を開くと、挟んでた手紙が落ちた。

クラスメイト達「ん?」

樹「あ、す、すみません・・・」

手紙を開けると。

樹「っ!」

勇者部の皆からの激励のメッセーヅが書かれてあった。

樹（友奈さん・・・東郷さん・・・お姉ちゃん・・・夏凜さん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・アカリさん・・・御成さん・・・カノンさん・・・）

先生「大丈夫ですか?」

樹「は、はい!」

手紙を見た樹は笑顔を見せた。

樹（私は皆と一緒に居る!勇者としてだって、この歌とだって!）  
そして。

樹樹「春は名のみのも〜♪風の寒さや〜♪」

この前とは違い、綺麗な歌声が音楽室に響き、クラスメイト達が静かに驚いた。

放課後の勇者部。

友奈「樹ちゃん、テスト上手く行ったのかな・・・？」

風「大丈夫よ。だってあの子は、私の妹なんだから！」

アカリ「それに樹ちゃんは頑張り屋さんだからね！」

タケル「でも少し不安だなあ・・・」

丁度そこに樹が来た。

友奈「樹ちゃん！」

東郷「歌のテストは？」

樹「バツチリでした!!」

歌のテストは無事に成功を収めた。

友奈「やったやった!」

樹「はい!」

友奈とハイタツチ。

東郷「きつと、皆カボチャだと思っただのが良かったのね!」

樹「あははは。ありがとうございます!」

東郷とハイタツチ。

樹「夏凜さんも、ありがとうございます!」

夏凜「あ、う、うん・・・」

照れながらハイタツチ。

アカリ「樹ちゃん、おめでどう!」

御成「よくぞここまで成長しました〜!」

カノン「樹ちゃん、やったね!」

樹「ありがとうございます!」



3人とハイタッチ。

タケル「練習の成果だね！」

マコト「流石風の妹だ。」

樹「はい！」

2人とハイタッチ。

風・樹「やったー！！」

樹「タケルさん、これお返しします。」

ベートーベンゴースト眼魂を返した。

タケル「ベートーベンさん、樹ちゃんどうでした？」

ベートーベン『うむ、見事だ。彼女の歌声は今までに無い美しい歌声だったぞ。』

タケル「そうですか。だってさ樹ちゃん。」

樹「えへへ、照れますね。」

夕方。風と樹とアカリと御成が帰る途中。

樹「あのねお姉ちゃん、私ね、やりたい事が出来たよ。」

風「ん? やりたい事?」

樹「うん。」

歌のテストが終わった後。

クラスメイトA『樹ちゃん歌上手いく!』

樹『そ、そうかな・・・?』

クラスメイトB『歌手目指したら?』

クラスメイトC『私ファン1号!』

樹『か、歌手なんて・・・でも、歌うのは嫌いじゃないかも・・・』  
クラスメイト達から歌手を勧められたのだった。

風「何何？将来の夢でも出来たの？だったらお姉ちゃんに教えてよ。」

アカリ「私も聞きたい。樹ちゃんの将来の夢。」

御成「樹殿の将来の夢、拙僧も聞きたいですぞ。」

樹「うん．．．秘密。」

風「え？酷い。誰にも言わないから。」

アカリ「私達だけの秘密と言う前提で話してみて？」

御成「お願いします。樹殿。」

樹「駄目、恥ずかしいもん．．．」

風「ちええ、残念．．．」

樹「でも、何時か教えるね。」

風「じゃあ、その何時かが来るまで気長に待つよ。」

アカリ「楽しみにしているよ。」

御成「お待ちしておりますぞ。」

樹「うん！」

将来の夢は歌手と言う事を秘密にした樹であった。

後日のカラオケ店。樹が歌の練習をしていた。ノートパソコンを使って自分の声を録音する。

樹(まだこれは、夢なんて言えない。やってみたい事が出来た。ただそれだけ。けど、どんな理由でも良いんだ。頑張る理由があれば、私はお姉ちゃんの後ろじゃなくて、一緒に並んで歩いて行ける。)

マウスを動かすと、置いていたカバンが落ちた。

樹「あ、．．．先にこっち。」

カバンからタロットカードの1枚が落ちた。そのカードは、死神のカードだった。

その頃風は、大赦にメールを送っていた。

風「私の理由は、バーテックスのせいで死んだ親の仇。凄く個人的な事だしね．．．」  
机の上で俯せになる。するとその時。

樹海化警報が鳴り響いた。

アカリ「え!?!」

御成「こ、この音は!?!」

3人が外に出ると、樹海化が始まっていた。

風「始まったの・・・? 最悪の事態・・・」

犬神が風のスマホを持って来た。

そして樹海に飲み込まれてしまった。更にバーテックスが5体出現した。

友奈「行くよ、牛鬼!」

タケル「マコト兄ちゃん、行こう!」

マコト「ああ!」

「END」  
戦いが再び訪れた。

## 第五話 「決戦！ 困難に打ち勝つ！」

義輝「出陣〜！」

精霊の義輝が法螺貝を吹いた。

夏凜「よし、殲滅!!」

風「私達も!!」

友奈・樹「はい！」

4人が武器を持ってバーテックスに立ち向かう。

タケル「命、燃やすぜ！」

マコト「俺の生き様、見せてやる！」

マシンゴーストライカーとマシンフーディーに乗ってバーテックスに立ち向かう。

そして東郷はその場で狙撃銃を構える。スマホでバーテックスの動きを確認する。

東郷「バーテックスの進行性にバラ付きがある。あの巨大な奴、明らかに別格の奴か。でもまずは……」

先行しているアリエス・バーテックスを先に殲滅開始。

夏凜「一番やりーなー!!!」

先に夏凜が剣でアリエス・バーテックスの頭部を斬る。それに続いて東郷が狙撃銃で、アリエス・バーテックスの頭部を打ち抜いた。

夏凜「まずは1匹目!封印するわよ!!」

アリエス・バーテックスの封印開始。

友奈「凄いよ!夏凜ちゃん!」

風「他の敵が来る前に、此奴を倒そう!!」

アリエス・バーテックスの尻尾から御霊が出現した。

夏凜「出た!!」

すると御霊が高速回転を始めた。

夏凜「何回ってんのよ!!」

剣を投げるが、高速回転で掻き消されてしまった。

夏凜「チッ!」



そこにマシンゴーストライカーに乗ったゴーストと、マシンフーディーに乗ったスペクターが来た。

マコト「行くぞ！」

タケル「ああ！」

サンングラスラッシャーとデープスラッシャーを握って、ブラスタモードにして御霊に連射する。すると御霊の回転が徐々に遅くなった。

タケル「行ける!!」

友奈「よーし!!東郷さーん!!」

大ジャンプした友奈が、御霊に勇者パンチを繰り出して停止させ、東郷が狙撃銃で御霊を貫いた。御霊が破壊され、アリエス・バーテックスが消滅した。

風「ヒューッ!ナイス連携!!」

友奈「ありがとうタケルさん!マコトさん!」

タケル「やったね友奈!」

マコト「よくやった!」

友奈「ありがとう東郷さーん!!!」

遠くから援護役の東郷に手を振った。東郷は笑みを浮かべ、すぐに真顔になった。東郷「でも、今の敵の動き、丸で讚えてくれと言わんばかりの闘志・・・はっ!!畏!!」

“ゴーン” “ゴーン”

タウラス・バーテックスがベルで巨大な音を鳴らした。友奈達が苦しみ始めた。

夏凜「な、何よこの音・・・!!気持ち悪い・・・!!!」

友奈「こ、これぐらい勇者なら・・・!!」

タケル「くっ・・・!!耳が・・・!!」

マコト「くそ・・・!!」

東郷「皆!!」

トリガーを引こうとした瞬間。

すぐ傍にピスケス・バーテックスが地面から出現した。

御成「何ですと!?!」

アカリ「バーテックス!?!」

カノン「嘘っ!?!」

東郷「狙撃が．．!!」

地面から現れた衝撃で砂煙りが蔓延してしまった。

同じ頃、友奈達は苦しんでいる。

タケル「このままじゃ．．!!」

マコト「ならば．．!!」

力を振り絞ってディープスラッシュャー・ブラスタモードでベルを破壊しようとしたが、音で掻き消されてしまった。

マコト「駄目か．．!!」

樹「音は．．音は皆を幸せにするもの．．!!こんな音は．．!!」  
すると樹の花が輝いた。

樹「こんな音はあああああああ!!!!!!」

右手を前に出してワイヤーを飛ばした。ワイヤーがベルを絡め、音を消した。

風「樹!!」

大ジャンプした風が大剣を握った。

風「まずは・・・お前からあああああああ!!!!!!」

大剣を強く振って、ライブラ・バーテックスとアクエリアス・バーテックスを一刀両断した。

樹「お姉ちゃん!!」

友奈「頼りになります!!」

風「よし、3体纏めて・・・」

樹「うわああああ!!何?」

タウラス・バーテックスが樹を引っ張り始めた。

友奈「樹ちゃん!!」

風「樹!ワイヤー解いて!」

急いでワイヤーを解いた。

友奈「この!!!」

タケル「っ!待って友奈!」

友奈「え!？」

タケル「彼奴ら、様子が可笑しい。」

3体のバーテックスが突然奇妙な動きを始めた。タウラス・バーテックスと、ライブラ・バーテックスとアクエリアス・バーテックスが同時に後退を始めた。

風「後退・・・?っ!」

3体のバーテックスは、後方に浮遊しているレオ・バーテックスに飲み込まれた。マコト「何が起こったんだ・・・?」

別の場所では、東郷がピスケス・バーテックスと交戦中。しかしピスケス・バーテックスが再び地面に潜った。

東郷「潜った!?!今の内に援護を!」

援護しようとしたが。

東郷「あれは・・・!?!」

御成「東郷殿、どうかしましたか?」

東郷「合体している!?!」

アカリ「え!?!」

何と4体のバーテックスが合体し、レオ・スタークラスターとなってしまうていた。

夏凜「ちよつと!こんなの聞いた事無いわよ!?!」

タケル「合体するバーテックス・・・」

友奈「でも3体纏めて倒せるよ!」

樹「えええ!?!」

風「友奈の言う通り!纏めて封印開始するわよ!」

マコト「っ!?!」

東郷「っ!?!」

レオ・スタークラスターが光弾を生成した。

友奈・風・樹・夏凜「っ!?!」

タケル「皆避けて!!」

光弾が友奈達に向かって飛んだ。全員が間一髪避けた。

夏凜「此奴、追尾するの!?!」

ジャンプしながら避ける。

風「くそっ!うわあああ!!」

大剣で防ぐが、圧倒された。

樹「きゃあああああ!!」

光弾に命中されてしまった。

友奈「追つて来るなら・・・ここで返す!!っ!?!」

跳ね返そうとしたが、レオ・スタークラスターが光弾を放った。

タケル「ハアッ!!」

大ジャンプしたゴーストが、サンングラスラッシャー・ソードモードで光弾を斬った。

友奈「タケルさん!」

タケル「友奈、無茶では駄目だ!」

するとレオ・スタークラスターが光弾をゴーストに向けて放った。

友奈「タケルさん!!きゃああああ!!」

ゴーストを庇って光弾を受けた。

タケル「友奈!!!」

マコト「うおおおおおおおお!!!」

ディープスラッシュャー・ソードモードで、レオ・スタークラスターを斬り裂こうとしたが、傷一つも付かなかった。

マコト「くっ!」

夏凜「おのれええええ!!!」

剣を持つて斬ろうとしたその時。

マコト「っ!!!夏凜!!後ろだ!!!」

夏凜「え!?!きやあああああ!!!」

後ろから迫る光弾を受けてしまった。

東郷「おのれ!」

狙撃銃を発砲。しかし無傷のまま。

東郷「え!?!」

レオ・スタークラスターが、光弾を東郷に向けて放った。

東郷「っ!?!」



カノン「東郷さん！逃げて！！」

しかし東郷は避ける事が出来ず、命中されてしまった。

アカリ「東郷ちゃん！！」

御成「東郷殿！！！！」

夏凜「そ、そんな・・・！！」

樹「・・・！！」

風「・・・」

友奈「くっ・・・！！」

東郷「神樹様が・・・！！」

レオ・スタークラスターは、神樹に向かって進む。

タケル「このままじゃ世界が終わってしまおう!」

マコト「俺達で食い止めるぞ!タケル!」

タケル「ああ!」

サン格拉斯ラツシヤーに闘魂ブーストゴースト眼魂とオレゴースト眼魂を装填、  
ディープスラツシヤーにディープスペクターゴースト眼魂とスペクターゴースト眼魂  
を装填した。

『メガマブシー!メガマブシー!』

『メガハゲシー!メガハゲシー!』

メガシエイドとギガシエイドを閉じた。

『闘魂ダイカイガン!メガオメガシヤイン!』

『キョクゲンダイカイガン!ギガオメガギリ!』

タケル・マコト「はあああああああ!!!」

メガオメガシヤインとギガオメガギリの同時攻撃でレオ・スタークラスターを斬り裂く。

タケル「どうだ!!」

しかしレオ・スタークラスターは無傷。

タケル「これも駄目なのか!？」

マコト「まだだ!」

リヨウマゴースト眼魂とツタンカーメンゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『アーイ!カイガン!リヨウマ!目覚めよ!日本!夜明けゼヨ!』

『アーイ!カイガン!ツタンカーメン!ピラミッドは三角!王家の資格!』

それぞれ闘魂リヨウマ魂とデーブスペクターツタンカーメン魂を纏って大ジャンプして、サン格拉斯ラッシュヤーとデーブスラッシュヤーでレオ・スタークラスターを攻撃し続ける。

風「じ、冗談じゃないわよ・・・!うわっ!」

力を振り絞って起き上がったが、レオ・スタークラスターが飛ばした水の球に閉じ込められてしまった。

タケル「風!!」

マコト「風!!」

水の球に閉じ込められた風は、大剣を振り続けるが、斬れない。

マコト「タケル!風を助けに行け!ここは俺が食い止める!」

タケル「マコト兄ちゃん・・・分かった!!」

レオ・スタークラスターをスペクターに任せて、風を助けに向かった。

タケル「風!!今助ける!!」

サングラスラッシャーで水の球を斬るが、すぐに修復された。

タケル「駄目か!いやまだだ!」

何度も斬るが、修復されるばかり。

マコト「くそっ!いい加減にしやがれ!!」

レオ・スタークラスターを何度も斬るが、効果は無い。

樹「お姉ちゃん……！」

風（駄目……駄目だ！樹を置いて……タケルさんとマコトさんだけを戦わせて……皆を巻き込んで……さっさとくたばるなんて……出来る訳が無いでしょ……）

すると風の花が眩い光を放射した。

タケル「っ!？」

地面から無数の光が現れ、風に集中した。

光を受けた風が、水の球を破壊して満開した。

タケル「風……!」

樹「お姉、ちゃん……?まさか……!?」

御成「あ、あれは……!」

アカリ「風ちゃん、なの?」

カノン「綺麗……」

タケル「風、その力はまさか……」

風「溜め込んだ力を解放する、勇者の切り札。」

タケル「満開したのか……」

夏凜「あれが、満開……?」

レオ・スタークラスターが光弾を放った。しかし風が避けて突進すると、レオ・スタークラスターが後ろに倒れた。

マコト「満開したのか・・・？っ!？」

何かを見たスペクターが、マシンフーデーに乗って見付けた何かを追った。

タケル「マコト兄ちゃん？」

風「行ける！」

そして東郷も満開を発動した。

東郷「もう、許さない！」

友奈「東郷さん・・・！あれって・・・！」

御成「と、東郷殿！」

東郷「我、敵軍ニ、総攻撃ヲ実施ス!」

ピスケス・バーテックスが地面から再び飛び出した。東郷が砲台を一斉発射し、ピスケス・バーテックスを破壊した。

東郷「この程度の敵なら、封印の必要も無いみたいね!」

再び砲台を一斉発射し、ピスケス・バーテックスの御霊を破壊した。

東郷「何時見ても妙な散り方。っ!何!?!」

マップを見ると、残党のバーテックスが急速に神樹に向かっていった。

東郷「っ!?!神樹様に近い!?!このバーテックス!?!何故気付かなかった!?!此奴・・・小さくて速い!?!ん?マコトさん?」

残党のジェミニ・バーテックスが神樹に向かって走っている。その後ろからスペクターが追跡している。

マコト「止まれ!!」

ディープスラッシュャー・プラスターモードで、ジェミニ・バーテックスに向けて連射するが、ジェミニ・バーテックスが軽々と避けながら走り続ける。



マコト「くそっ！このままじゃ！」

すると誰かが満開を発動した。

東郷「っ!？」

満開を発動したのは、樹だった。

樹「私達の日常を、壊させない!!」

東郷「樹ちゃん！」

アカリ・カノン「樹ちゃん！」

御成「樹殿!!」

風「樹!!」

樹「そっちに行くなああああああああ!!!」  
無数のワイヤーを飛ばした。

神樹に向かうジェミニ・バーテックスが、樹のワイヤーに束縛された。

マコト「あのワイヤーは、樹!?!」

ジェミニ・バーテックスを自分の元に引き寄せた。

樹「お仕置き!!」

右手を握って、ジェミニ・バーテックスを粉々にした。すると小さい御霊が出現した。

樹「ん?」

ワイヤーで串刺して御霊を破壊した。

御成「お見事ですぞ！樹殿！」

アカリ「やった！」

カノン「やったやった！」

友奈「樹ちゃん・・・やった！」

夏凜「全く・・・何時まで倒れてるの・・・私！」

風「樹ナイス！」

タケル「ありがとう！」

スペクターが戻って来た。

マコト「樹！助かったぞ！」

風「ん？」

後ろを見ると、レオ・スタークラスターの光弾が一つに集まって巨大な炎を作った。

風「何？このヤバそうな元気っぽい玉・・・？」

その巨大な炎は、地上に向かって落下を始めた。

東郷「いけない!!」

樹「お姉ちゃん!!」

風「勇者部一同!!封印開始!!」

大剣で巨大な炎を防ぐ

風「私が此奴の相手をしてる内に!!早く!!」

樹「う、うん!!」

友奈「分かりました!!」

東郷「了解!!」

夏凜「全く、私の良い所!残しておきなさいよね!!」  
風が炎を食い止めてる内に、封印の儀を開始する。

マコト「タケル！風を助けるぞ！」

タケル「分かった！」

サンダラスラツシヤーに闘魂ブーストゴースト眼魂とリョウマゴースト眼魂を装填、  
ディープスラツシヤーにスペクターゴースト眼魂とディープスペクターゴースト眼魂  
を装填した。

『メガマブシー！メガマブシー！』

『メガハゲシー！メガハゲシー！』

メガシエイドとギガシエイドを閉じた。

『メガオメガフラツシユ！』

『ギガオメガダマ！』

メガオメガフラツシユとギガオメガダマを同時に発射して、巨大な炎を押しつけて風の手  
助けをする。

風「タケルさん！マコトさん！」

タケル「風！俺達も此奴を足止めする！」

マコト「一緒に行くぞ！」

風「うん!!」

4人はその内に封印の儀を進める。

風「よし!流石勇者部!!」

しかし炎が爆発して暴風が吹き溢れた。

タケル・マコト「風!!!」

樹「きやあああ!!お姉ちゃん!!」

友奈「風先輩!!」

風「そいつを!!そいつを倒せええええええええええ!!  
満開が切れ、通常の姿に戻った。  
!!!!!!」

樹「……………うん!え!?!」

夏凜 「っ!？」

東郷 「っ!？」

友奈 「え．．．!？」

タケル 「そんな．．．!」

マコト 「まさか．．．!」

御成 「こ、これは．．．!」

アカリ 「嘘でしょ．．．!？」

カノン 「御霊が．．．!!」

友奈 「ええええええええええええ!？」  
全員が驚愕した。その理由は．．．

レオ・スタークラスターの御霊が、惑星規模の大きさになっていたからだった。

東郷「何から何まで、規格外過ぎるわ……!」

夏凜「しかもあの御霊、出てる場所が……宇宙!」

樹「大き……過ぎるよ……あんなもの、どうやって……?」

御成「で、デカ過ぎますー!!!」

カノン「あんなのに勝てないよ……!!!」

アカリ「デカいってレベルじゃないわよあれ……!!!」



タケル「惑星規模の大きさ・・・」

マコト「想像を遙かに超えたあのバーテックスの御霊・・・」

夏凜「最後の最後にまで、こんな・・・ちくしょう!!」

友奈「大丈夫！御霊なんだから、今までと同じようにすれば良いんだよ！どんなに敵が大きかったって、諦めるもんか!!勇者って、そう言うものだよね!!」

夏凜「友奈・・・」

樹「友奈さん・・・」

タケル「友奈・・・」

マコト「友奈・・・」

東郷「友奈ちゃん行こう！今の私なら、友奈ちゃんを運べると思う！」

友奈「うん！2人は封印をお願い！」

夏凜「早く殲滅して来なさいよ！」

樹「友奈さん！東郷先輩！」

砲台の上に友奈も乗った。

タケル「友奈!東郷!俺も一緒に行く!」

マコト「俺も行かせてくれ!」

友奈「タケルさん!マコトさん!」

東郷「はい!」

タケル「よし!」

ゴーストがアイコンドライバ―Gを取り出して、腰に装着して左のスイッチを押す。

『グレイトフル!ガッチリミナー!コッチニキナー!ガッチリミナー!コッチニキナー!』

タケル「変身!!」

再度左のスイッチを押した。

『ゼンカイガン!ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー!大変化!!』

15全ての偉人の力を纏ったグレイトフル魂に変身して、砲台の上に乗る。

『デッドゴー!激怒!ギ・リ・ギ・リ!ゴースト!闘争!暴走!怒りのソウル!』

ディープスペクターがゲキコウモードに強化して、砲台の上に乗る。

友奈「行こう!」

東郷「うん!」

4人は御霊に向かって飛び立った。

一方樹海では、少しずつ枯れ始めていた。

夏凜「くそっ！侵食が速い！」

精霊の木霊が、樹にスマホを見せた。

樹「っ？」

封印の時間が減っている。

樹「拘束力が、無くなっちゃう！」

アカリ「タケル・・・皆・・・！」

カノン「お兄ちゃん・・・皆・・・！」

御成「タケル殿・・・マコト殿・・・！」

同じ頃友奈達は、御霊へ向かっていた。すると御霊から何か放たれた。

友奈・東郷「っ!?!」

それは、御霊の欠片だった。

友奈「御霊が攻撃!?!」

東郷「迎撃するわ!地上には落とさない!」

砲台を一斉発射して御霊にダメージを与えた。

タケル「俺達も迎撃しよう!」

マコト「よし!」

ガンガンセイバーとサンングラスラッシュャー、ガンガンハンドとデープスラッシュャーで御霊に連射してダメージを与える。しかし御霊は攻撃を止めない。

友奈「東郷さん!」

東郷「大丈夫!友奈ちゃん見てて!」

友奈「うん!」

東郷「1個たりとも通さない!!」

タケル「落とさない!」

マコト「全て撃ち落とす!!」

砲台、ガンガンセイバー、サンングラスラッシュャー、ガンガンハンド、デープスラッ

シャーで欠片を全て撃ち落としながら進む。そして遂に、御霊の近くまで来た。

友奈「凄いよ東郷さん！ここまで来れたよ！」

すると東郷が態勢を崩した。

タケル「東郷！」

友奈「東郷さん！」

マコト「大丈夫か？」

東郷「友奈ちゃん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・ごめん・・・ちよつと疲れちゃつたみたい・・・」

友奈「ありがとう、東郷さん。見ててね？やつつけて来る。」

東郷「何時も見てる。」

友奈「うん。タケルさん、マコトさん、行こう！」

タケル・マコト「ああ！」

友奈「満開!!」

3人は御霊に向かってジャンプした。友奈が満開を発動した。

友奈「皆を守って、私は勇者になああああある!!!」  
御霊に向かって巨大なアームでパンチで叩き込む!!!

タケル「俺も行くぞ！」

『ゼンダイカイガン!グレイトフル!オメガドライブ!』

グレートアイを模した紋章が出現し、15全てのパーカーゴーストが融合し、金色のエネルギー球を右足に纏ってキックを放つ。

その後ろから、東郷が砲台を一斉発射して御霊に罅を入れた。

タケル・友奈「そこだあああああああああ!!!」  
オメガドライブと勇者パンチで御霊に穴を開けた。

東郷「友奈ちゃん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・」  
彼女は目を閉じて地上へ向かって落ちて行つた。

ゴーストとスペクターと友奈が御霊に何度も殴り込む。しかし。

友奈「硬い!!」

タケル「っ!?」

マコト「修復が!!」

御霊が修復され、3人が閉じ込められてしまった。

友奈「勇者部五箇条・・・ひとつ!!」

力を出して再び穴を開けた。

友奈「なるべく、諦めない!!更に!!五箇条もうひとつ!!」

何度も殴り込んで、遂に御霊の本体が見えた。

友奈「成せば、大抵何とかなあああああある!!!」

タケル「魂は永遠に不滅だ!!!」

ゴーストがアイコンドライバ―Gのレバーを操作して、15人の偉人を全て召喚して

スイッチを押した。

『レッツゴー!全員集合!メガオメガフォーメーション!』

マコト「俺は負けん!!友の為に!!」

『キョクゲンダイカイガン!ディープスペクター!ギガオメガドライブ!』

タケル・マコト「はあああああああ!!!」

メガオメガフォーメーションとギガオメガドライブを同時に発動し、友奈の勇者パン

子と同時に御霊の本体に叩き込んだ。

そして遂に、御霊が消滅を始めた。跡形も無く消滅し、友奈が通常の姿に戻り、デュープスペクターも元の姿に戻った。

友奈「やった・・・」

タケル「御霊が消えた・・・」

マコト「勝った・・・」

地上に向かってゆっくり落ちる。その途中、東郷の花の上に落ちた。

友奈「東郷さん・・・」

東郷「友奈ちゃん・・・お疲れ様・・・」

友奈「美味しい所だけ、取っちゃった・・・」

マコト「東郷。」

タケル「助けてくれてありがとう。」

東郷「お疲れ様・・・タケルさん、マコトさん・・・友奈ちゃんごめん、最後の力で



これだけ残したけど……保つかどうか分からない……」

友奈「大丈夫……神樹様を守って下さるよ……」

東郷「……そうね……」

花が4人を包んで、地上へ落下する。

東郷（もし万が一駄目でも、友奈ちゃんと一緒なら、恐くない……）

友奈（神樹様……4人を同時に帰らせて下さい……お願いします……）

大気圏を抜けて、樹海に落下した。樹がワイヤーで食い止めるが、花の勢いは止まらない。

夏凜「物凄い衝撃……！」

樹「絶対、助けてみせます!!」

何度もワイヤーで助けようとしても、切れてしまうばかり。何度もワイヤーで止めると、勢いが徐々に収まり、地面スレスレで止まった。

夏凜「ナイス根性！樹！見て！あんたが止めたのよ！ほら！」

樹「行つてあげて、下さい……」

夏凜「ええ！」

樹「お姉ちゃん、私頑張ったよ……」

満開が切れて、通常の姿に戻った。

樹「サプリ、決めておけば、良かったかな……?」

そう言いながら倒れた。

夏凜「友奈!!東郷!!タケル!!マコト!!」

タケル「う……ん?」

マコト「ここは……?」

ゴーストとスペクターが起きた。

夏凜「タケル!!マコト!!」

マコト「夏凜……?ここは、樹海なのか?」

タケル「助かったんだね。俺達。」

夏凜「友奈と東郷は?」

タケル「っ!友奈!」

マコト「東郷!」

夏凜「おい!2人共しっかりしろよ!!」

しかし2人は、目を覚まさない。

タケル「友奈!! 東郷!!」

マコト「しっかりしろ!!」

夏凜「くっ……」

目覚めない2人を見て、夏凜が涙を流した。

友奈「コホッ! コホッ!」

夏凜「つ!!」

タケル「友奈!!」

友奈「えへへ……大丈夫……」

東郷「つ……」

マコト「東郷!!」

風「はあくい……何とか……生きてます……」

樹「コホツ……コホツ……」

御成「やりました!!皆さんがやって下さいましたぞ!!!!」

アカリ「良かった……」

カノン「無事で良かった……」

夏凜「何だよもう……もうちよつと早く返事しろよ……」  
そして樹海が晴れた。

樹海が晴れ、讃州中学校の屋上に。

風「い、いやぁ・・・美人薄命だから私・・・危なかつたけど・・・」  
精霊の犬神が風の頬を舐める。

タケル「終わった・・・」

マコト「ああ・・・」

『オヤスミー』

2人が変身を解除した。

アカリ「タケル!!」

御成「タケル殿オオ!!」

カノン「お兄ちゃん!!」

タケル「アカリ、御成。」

マコト「カノン。」

すると夏凜のスマホが鳴った。

夏凜 「三好夏凜です。バーテックスと交戦、負傷者4名、至急靈的医療班の手配を願います。尚、今回の戦闘で、12体のバーテックスは、全て殲滅しました!私達、讃州中学勇者部一同と、仮面ライダーゴーストと、仮面ライダースペクターが!!」

全てのバーテックスが殲滅され、世界に平和が訪れた。

『END』

## 第六話 「終戦！明日に期待して！」

男性キャスター『昨日起こった、工事中の高架道路が落下した事故に関する続報です。』

共用スペースにタケル、マコト、夏凜、そして眼帯を着けた風が居る。

タケル「樹海が枯れたせいで、また事故が起こったみたい。」

風「お、友奈も診察終わったのね。」

友奈「はい！きつちりバツチリ血を抜かれ・・・って、風先輩その目は!?!」

風「フツフツフ、この目が気になるか？これは先の暗黒戦争で魔王と戦った際・・・」

夏凜「左目の視力が落ちてるんだって。」

風「ちよつと！ちよつと！折角魔王との戦いで名誉の傷を負ったニヒルな勇者って設定で語ってるのに！」

マコト「風、今のお前の言葉、中二病にしか思えないぞ。」

風「何で中二病なのよ！」

友奈「視力が、落ちてる・・・？」

風「ん？そうね。」

友奈「もしかして、バーテックスから何か・・・」

風「違う違う。戦いの疲労によるものだろうって。勇者になると、凄く体力を消耗するらしいから。この目も療養したら治るってさ。」

友奈「そうなんですか!」

風「何たって私達、一気に7体もバーテックス倒しちやったからね!体も疲れちゃうのよ。」

しかしタケルとマコトは、真面目な顔をしている。

タケル「満開を使ったお陰で・・・」

マコト「ああ、体の一部が抜かれた・・・」

友奈「ん?タケルさん、マコトさん、どうかしたの?」

タケル「いや、何でも無い。」

マコト「こっちの話だ。」

そこに東郷と樹が戻って来た。

友奈「ん?あ!東郷さん!樹ちゃん!」

東郷「私達も検査終わりました。」



風「樹く、注射されて泣かなかった〜?」

樹は何も言わずに首を横に振った。

風「ん? どうしたの?」

東郷「樹ちゃん、声が出ないみたいです。勇者システムの長時間使用の疲労が原因で、すぐに治るだろうとの事ですが・・・」

風「私の目と同じね・・・」

友奈「えつと・・・すぐ治るなら大丈夫だよね!? お医者さんもそう言ってるんだし!」  
風「ええ、そうね!」

タケル・マコト「・・・」

友奈「そうだ! 私達バーテックスを全部やつけたんだよ? お祝いしないと!」  
アカリ「お待たせ〜!」

カノン「買って来た〜!」

御成「大量ですぞ!」

お祝いとして、アカリ達がお菓子やジュースを買って来たのだった。

夏凜「随分沢山ね。」

御成「友奈殿に頼まれて来ましたもので。」

友奈「お祝いが豪勢にやらないと。はい皆!飲み物を持って下さ〜い!」  
全員がジュースを持つ。

友奈「では、勇者部部长から乾杯の一言!」

風「あ、私!?え、えつと・・・ほ、本日はお日柄も良く・・・」

夏凜「真面目か!!」

友奈「堅苦しいのは抜きで!」

風「それじゃあ、皆よくやった!勇者部大勝利を祝って、乾杯!」

全員「乾杯!」

乾杯してジュースを飲む。

夏凜「ふう〜、やっぱり目的を達成した後のジュースは格別ね!」

御成「仕事の後のジュースは美味ですな〜!」

アカリ「御成、あなた何もしてないじゃない。」

カノン「あははは。」

しかし友奈は何か違和感を感じたが、気にせずジュースを飲む。そんな友奈に対し、東郷とタケルとマコトが疑問を抱いた。

風「そうだ!皆に渡したい物があった!えつと・・・はい。それから・・・」

ダンボールからスマホを出して、友奈達に配る。

夏凜「それは？」

風「新しい携帯。前に使ってたのが回収されたでしょ？」

東郷「はい。この病院が来た時に。」

風「あつちの携帯は、メンテナンスとかで戻って来るのに時間が掛かるから、暫くその携帯を使って？」

友奈「わあ〜！新品だ〜！」

東郷「あれ？あのアプリをダウンロード出来ませんね。」

風「ああ、あのSNSアプリは使えなくなってるの。あれ勇者専用のだから。私達の戦い、終わったんだし。」

友奈「そつか、勇者になる必要無くなりましたもんね。」

風「でも、SNSなら他にもあるから、そっちに登録すればちゃんと連絡取れるし。」

友奈「あの、牛鬼は？」

風「ごめん、アプリが使えないからもう精霊は呼び出せないんだ・・・」

友奈「そうですか・・・ちゃんとお別れしたかったなあ・・・」

廊下。タケルとマコトと友奈と東郷が居る。

友奈「退院は明後日だって。早く学校に戻りたいな。病院に居るのって退屈。」

東郷「くすつ、私は検査にもう少し長い時間が掛かるみたい。」

タケル「そうなんだ。」

友奈「一緒に退院出来たら良いのに・・・」

そこで、マコトが口を出した。

マコト「友奈。」

友奈「ん?」

マコト「お前の体に、何か違和感を感じないか?」

友奈「え?」

マコト「お前が共用スペースでジュースを飲んでいた時に、様子が可笑しかったんだ。」

友奈「マコトさん鋭いな。」

マコト「俺だけじゃない。タケルと東郷もお前に疑問を抱いてる。」

友奈「え?」

タケル「友奈、何かあったのか?」

東郷「何処か具合悪いの?」

友奈「いや、大した事じゃないから・・・」

東郷「話して？」

友奈「味、感じなかったんだ・・・ジュース飲んでも、お菓子食べても・・・」

タケル「それって、味覚障害と一緒だよね？」

友奈「味覚障害？」

マコト「料理や飲み物の味を感じなくなる障害の一種だ。バーテックスとの戦いの疲労が原因だろう。」

友奈「うくん・・・多分大丈夫だよ！ほら、風先輩の目と同じじゃないのかな？すぐに治るって！でもお菓子の味が分からないなんて、人生の半分は損だ。」

夕方。タケル達がそれぞれ帰って行った。

夜の羽波病院の東郷の病室。東郷がノートパソコンから音楽を流した。右のイヤホンを外して左に付けると。

東郷「っ!」

何かを感じてイヤホンを置いた。

数日後の讃州中学校。東郷を除いた友奈達が復学した。

勇者部。

風「あ~~~~~」

扇風機の風に当たってる。

アカリ「風ちゃん子供みたい。って、まだ子供だったね。」

友奈「結城友奈、来ました〜！」

風「ああ、お疲れ〜。」

友奈「あれ？風先輩、眼帯が・・・」

風「ふふ〜ん。どうよ？これ。」

友奈「・・・超格好いです!!」

風「ウツフツフツフツ！ふ私もイケると思つてたんだ〜！」

マコト「調子に乗つてるな。」

タケル「だね。」

風「所で、夏凜は？」

友奈「あれ？来てないんですか？」

カノン「そうみたいなの。」

風「ムムム？サボりか？後でバツとして、腕立て1000回とかやらせよう。」

タケル「それって体罰か何か？」

友奈「夏凜ちゃんだったら出来ちゃいそう・・・」

樹がスケッチブックに何かを書く。

風「否定出来ない・・・サプリを決めながら、朝飯前よ！って言つて、・・・ん？」

樹『かりんさん、何か用事があつたんでしようか?』

風「そうかもね。」

友奈「そのスケッチブックは?」

御成「風殿が、樹殿にスケッチブックを渡して会話させようとの提案ですぞ。」

風「声が戻るまでの応急処置。その内治るから、少し我慢ね。」

樹は頷く。

風「さて、今日の活動だけど．．．部員が私達しか居ないのでね。衣装の事話しかつただけど。」

友奈「衣装?」

タケル「文化祭の演劇の衣装だつて。」

友奈「あ!そうでした!」

風「勇者の活動が一大事だったから、忘れてたでしょ?」

友奈「あ、あはははは．．．」

風「まあでも、2人も居ないんじや話し合いも出来ないし．．．他の事だと．．．」

樹『他の部活の手伝いは?』

風「そうそう!剣道部から練習に付き合つて欲しいって依頼メールが来てたのよね。つてそれ夏凜を指名しようか．．．夏凜居ないから今日は無理。えつと他には．．．」



そうだ！ホームページの更新は？」

アカリ「友奈ちゃん達が入院中に更新が止まっていたからね。」

友奈「あ！でも……」

風「どうしたの？」

友奈「東郷さんが居ないと更新のやり方が分からないです……」

風「ああ、そっか……猫の飼い主になってくれる人はまだ見付かってもないし……」

樹『できる仕事ないね。』

風「だね……仕方無い！ダラダラしよう！」

友奈「そうですね……」

タケル「じゃあ、今日の活動はお休みだね。」

ダラダラ過ごす事になったが、部室が暑くなり始めてる。

友奈「急に暑くなりましたね……」

風「もう夏休み前だしね……」

アカリ「タケル……涼しくなれる方法は無いの……？」

タケル「無理だよ……涼しく出来る眼魂も無いし……」

樹『とけてドロドロになりそう。』

風「全くねえ・・・」

御成「ooooooooooooo」。

マコト「御成、何やってるんだ？」

御成「涼しくなれるお呪いを唱えています。これで涼しくなれば・・・」

カノン「出来たら凄いな・・・」

風「足りない・・・何か足りない・・・そうだ!!東郷のお菓子が足りない!!」

樹『まず食べものなの!?!』

風「うっ・・・」

友奈（東郷さんのお菓子、今は味分からないんだ・・・早く治らないかな・・・?）

夕方の羽波病院・東郷の病室。

東郷「あ、友奈ちゃん!」

友奈「お見舞いに来たよ〜!」

タケル「東郷。」

マコト「来てやったぞ。」

カノン「東郷ちやくん。」

東郷「タケルさん、マコトさん、カノンさん。」

友奈「あれ？何してるの？」

東郷「ちよつと調べ物。」

友奈「何何？何を調べてたの？」

東郷「大した事じゃないから。」

友奈「良いじやくん。教えてよ。」

マコト「おい友奈、あんまり責めるな。」

東郷「・・・調べてたのは、私達が暮らすこの国の特殊性。及び正しいやり方を神世紀以前の国家に比較考察させて、現在の五穀思想の源流を大和神話の関連性に求める事の有意義。そして私達が今後担う時代のやり方を・・・」

友奈「ごめんなさい、私が悪かったです！頭が追い付かない・・・」

タケル「流石歴史に詳しいね。」

カノン「私も追い付かない・・・」

東郷「それより、来てくれてありがとう。」

友奈「私も東郷さんと話したかったし。って言うか、東郷さんが居ないと、学校の楽

しさがとおしやぎしやんあげんだよろ。」

東郷「随分減っちゃうんだね。」

数分後。

友奈「そつか、東郷さんは左耳が聞こえないんだね・・・」

東郷「うん。」

タケル「聴覚障害と一緒にだね。」

東郷「はい。」

友奈「大丈夫!すぐ治るよ!」

東郷「そうね。」

友奈「目一杯戦ったし。」

東郷「体がちよつと悲鳴上げてるのかな?」

友奈「そうだね。さてと、そろそろ帰らないと!明日もまた来るね。」

東郷「うん。待つてる。」

タケル「じゃあ俺も、友奈を連れて帰らないといけないし。」

友奈「それじゃあね。」

東郷「うん。」

カノン「東郷さん、お大事にね。」

タケルと友奈とマコトとカノンが病室から出た。

その後東郷がパソコンを開いて、5人の異常個所を調べた。すぐに何処かに電話する。

??? 『私だ。』

東郷「あの、伺いたい事があるのですが。」

風『スルーされた・・・んで何?』

電話相手は風だった。

東郷「満開の後遺症とか、そう言う事について風先輩は何か聞いていますか?」

風『満開の後遺症? 何それ?』

東郷「実は・・・」

犬吠埼家。

風「ちよつと待つて?アカリさん、晩御飯作つてくれる?」  
アカリ「分かったわ。」

料理をアカリに任せて外に出た。

風「友奈の味覚が無くなって、東郷は左耳が聴こえない・・・満開を起こした者全員?」

東郷『はい。』

風「友奈・・・言つてくれたら良かったのに・・・」

東郷『友奈ちゃんの性格です。皆に心配掛けないよう、言い出せなかったんだと思います。』

風「あの子らしいね・・・」

東郷『風先輩は、大赦から何か聞いてないですか?』

風「うん、何も・・・」

東郷『大赦の方々とか知らなかったんでしょうか?』

風「そうだろうね・・・ごめん、こんな事になつて。」

東郷『風先輩が悪いんじゃないやありません。それに体の調子だつて、きつとすぐに治りま

すよ。』

風「・・・そうだね。病院の先生もそう言ってたし。」

東郷『兎に角、大赦からの返答待ちですな。』

風「うん。」

東郷『ありがとうございます。それではまた。』

風「うん。またね。」

通話を切った後、風はスマホを強く握り締めた。

風「満開の後遺症って・・・何よそれ・・・」

同じ頃夏凜は、何時もの浜辺で剣舞をしていた。

夏凜「ふう・・・」

仰向けになって休憩する。

夏凜「戦い、終わっちゃった・・・私、これからどうすれば・・・」

“ピロリン” “ピロリン”

夏凜「ん？」

着信音が鳴った。風からのメッセージだった。

風『バーテックスとの戦いの後、体におかしなところない?』

夏凜『ないわよ、何かあったの?』

風『満開を起こした人は、身体はどこかおかしくなってる』

夏凜「それって、私以外の全員・・・?じゃあ、友奈や東郷も・・・私だけ・・・私だけ傷を負ってない・・・これじゃ、一番役に立ってないみたいじゃない!私は、戦う為にここに来たのに・・・」

後日の病室。

友奈「あ、そろそろ帰らないと。」

東郷「津の国の、難波の春は、夢なれや、葦の枯葉に、風渡るなり。」

友奈「それって?」

タケル「西行の歌だね。」

東郷「はい。春が来たと思ったら、もう枯葉ばかりになっている。楽しい時の流れは早いつて事。」



友奈「東郷さんと話していると、時間はあつと言う間だよ？明日もまた来るね。」  
東郷「うん。」

友奈「HTMLの本、貸してくれてありがとう。それじゃあね〜！」  
タケル「お大事に。」

東郷「また明日。」

2人が病室から出た後、東郷はパソコンに回復の兆し無しと入力した。

翌日の部室。

友奈「えつと・・・H、A、E、D・・・」

パソコンの入力に集中する友奈。風と樹は一学期の活動報告を纏めていた。

友奈「ふう・・・やっぱり調子出ませんね・・・」

樹『かりんさん、ずっと来てないですね。』

友奈「SNSにも返信が無くて、夏凜ちゃん、授業が終わるとすぐ帰っちゃおうし・・・」

風「そっか・・・」

友奈「私、夏凜ちゃんを探して来ます！タケルさん！マコトさん！」

タケル「うん!」

マコト「ああ!」

3人が夏凜を探しに向かった。

まずは夏凜が住んでるマンションへ向かった。インターホンを鳴らしても返事が来ない。

友奈「居ないのかなあ・・・?」

タケル「外かもね。」

マコト「何処に居るんだ?彼奴。」

その後、CRF250Lとマシンフリーデーに乗って夏凜を搜索する。

友奈「夏凜ちゃんって、普段何処に居るんだろう?」

タケル「特訓が欠かせないから、山とかじゃないかな?」

神社に着いて、夏凜を搜索する。

友奈「夏凜ちゃんが、行きそうな場所・・・」

マコト「だったら俺に着いて来い。夏凜が居そうな場所が思い付いた。」

友奈「本当？」

夕方の浜辺。夏凜が剣舞をしていた。

友奈「夏凜ちゃーん!!」

やっとな夏凜を見付けた。

夏凜「友奈？」

友奈「うわっ!？」

走ってる途中で転んだ。

夏凜「ちよ、何やってるのよあんた!？」

友奈「痛い・・・夏凜ちゃん、そこは駆け付けて受け止めてよお。」

タケル「無茶でしょそれ。」

転んだ友奈を起こす。

友奈「タケル、マコトまで。」

マコト「やはりここに居たか。」

夏凜「何しに来たの？」

友奈「部活へのお誘い!最近夏凜ちゃんが部活をサボりまくってるから。」

夏凜「……………」

友奈「このままじゃ、サボりのバツとして、腕立て1000回とスクワット3000回と腹筋10000回させられるようになるんだけど……………」

夏凜「け、桁可笑しくない!？」

マコト「明らかに拷問だな。」

友奈「でも、今日部活に来たら全部チャラになりまーす!さあ、部活に来たくなったよね?」

夏凜「ならない。」

友奈「部活、来ないの?」

夏凜「元々私、部員じゃないし……………」

友奈「そんな事……………」

夏凜「それに、もう行く理由が無いのよ!」

友奈「理由って?」

タケル「もしかして、戦う理由が無くなったのか？」

夏凜「そうよ。私は、戦う為にこの学校に来た。あの部に居たのは、戦う為に他の勇者達と連携を取った方が良かったよ。それ以上の理由なんて、無い……大体、風も何考えてるのよ！勇者は、バーテックスを殲滅する為の部なんですよ！?バーテックスが居なくなったら、そんな部、もう意味無い!!」

友奈「違うよ!!」

夏凜「え？」

友奈「勇者部には、風先輩が居て、樹ちゃんが居て、東郷さんが居て、夏凜ちゃんが居て、そしてタケルさん、マコトさん、アカリさん、御成さん、カノンちゃんが居て、皆で楽しみながら、人に喜んで貰う事をしていく部だよ！バーテックスなんて居なくても、勇者部は勇者部！」

夏凜「でも……」

友奈「戦う為とか関係無い！」

夏凜「でも、私……戦う為に来たから、もう戦いが終わったから、だからもう、私には価値が無くて……あの部に居場所ももう無いって思ってる……」

マコト「夏凜、何時までそれに熱心してるんだ？」

夏凜「え？」

マコト「戦う為に生まれたとか、戦いが終わったからもう自分に居場所が無いとか、そう言うのにまだ取り憑かれているのか?理由が無いなら、また新しい理由を作れば良いだろ?」

夏凜「新しい理由なんて・・・」

友奈「勇者部五箇条ひとつ!」

夏凜「えっ!?!」

友奈「悩んだら相談!」

夏凜「え?」

友奈「マコトさんの言う通り、戦いが無くなったら居場所が無くなるなんて、そんな事無いんだよ?夏凜ちゃんが居ないと部屋は寂しいし、私は夏凜ちゃんが居ると楽しいし、それに私、夏凜ちゃんの事が好きだから!!」

夏凜「な・・・!?!」

告白された夏凜が頬を赤くした。

夏凜「た、たく、しょうがないわね!!そこまで言うなら居てあげるわよ!勇者部。」

友奈「やったー!じゃあ早速行こう?」

夏凜「え?」

友奈「つとその前に。」

夏凜「な、何？」

友奈「ちよつと、買い物をね。」

マコト「夏凜。」

ヘルメットを夏凜に渡した。

マコト「行くぞ。」

タケル「行こう？」

その後の勇者部。

友奈「結城友奈！帰還しましたー！！」

風「おかえり友奈。」

アカリ「タケルおかえり。」

タケル「ただいま。」

カノン「おかえりお兄ちゃん。」

マコト「ただいま。カノン。」

風「お、夏凜も来たのね。」

夏凜「ゆ、友奈とタケルやマコトがどうしてもと言うから・・・」

マコト「素直じゃないな。」

樹『よかったです。』

友奈「うん!それと・・・これ、差し入れです!」

シユークリームを買って来たのだった。

アカリ「シユークリーム!」

樹『これ、駅前の有名なお店ですよね!』

友奈「樹ちゃん正解!」

風「あ、でも、お菓子は、友奈味が分からないんじゃない?」

友奈「あれ?気付いてたんですか?」

風「ごめん友奈・・・樹も・・・私が勇者部の活動に巻き込んだせいで・・・」

友奈「こんなのすぐに治りますよ!風先輩気にし過ぎです!」

樹『そうだよ!』

御成「友奈殿の言う通りですぞ。風殿のせいじゃありません。」

友奈「それに、私は自分から望んで勇者部になったんです!って訳で、結城友奈は今

後、風先輩からの御免は一切聞きません!」

樹『私も!』



タケル「俺も風の御免は聞かないよ。」

マコト「タケルと同じく。」

アカリ「風ちゃん、困ったら私達に相談だよ?」

御成「拙僧も風殿を信賴していませんぞ。」

カノン「風ちゃんが居ると楽しいしね。」

風「・・・ありがとう。」

友奈「それより早くシュークリーム食べましょ? 風先輩が飢えて倒れちゃうと思って買ってきたんですから〜!」

風「ちよつと! 私が24時間お腹を空かせてると思つてない!」

樹『ちがうの?』

風「ゲツ!? 妹にまで!」

マコト「うどん何杯も食つてるお前が言う事か?」

風「マコトさんにまで!」

夏凜「と言いつつ、真っ先にシュークリームに手を伸ばしてるし・・・」

風「あ、これはえつと・・・し、静まれ! 私の右手!! 私の中の獣が暴れ出す!!」

樹『獣(女子力)。』

風「そう! それ!」

夏凜「それで良いの……?」

タケル「それってただの中二病じゃ……」

アカリ「でも早く食べましょ?」

夜。夏凜が部屋で大赦にメールを送った。

夏凜（私は、戦う為に自分が存在するのだと思つてた……戦う為に勇者になって、戦う為にこの学校に来て……でも、戦いに関係無く、私がここに居て良いなら……）

マコト『戦う為に生まれたとか、戦いが終わったからもう自分に居場所が無いとか、そう言うのにまだ取り憑かれているのか?もう理由が無いなら、また新しい理由を作れば良いだろ?』

夏凜（マコトが言っていた、新しい理由……）

するとメールが来た。

東郷『私の退院日が決まりました。』

友奈『やった！』

樹『退院おめでとうございます。』

風『お勤めご苦労さん』

東郷『風先輩、言葉がおかしいですが・・・退院日は、急ですが、明日だそうです。』

翌日の羽波病院。

御成「遂に東郷殿が退院出来ますなう。」

アカリ「思ったよりあつと言う間だったね。」

友奈「あっ！」

そこに、看護婦と一緒に東郷が来た。

友奈「東郷さん！」

東郷「友奈ちゃん！」

友奈「あ、私が！」

看護婦「はい。」

友奈「ありがとうございます!」

東郷「ありがとう。友奈ちゃん。」

友奈「ううん、ここは私の定位置だよ?」

東郷「くすつ。東郷美森!勇者部に帰還しました!」

風「ご苦労である!東郷准尉!」

東郷「はい!」

タケル「何時から准尉になったの?」

風「ふふくん。」

夏凜「全く、変な奴らね。あんた達って。」

マコト「そこが勇者部の良い所だ。」

友奈「これで勇者部メンバー、全員復帰だね!」

夕方、全員が屋上へ出た。

友奈「風が気持ちいい!」

東郷「ええ。」

タケル「心地良い風。」

風「んんん!! 日が暮れたらやつと涼しくなつた。」

友奈「この街を、私達が守つたんだね。」

風「うん。」

夏凜「と言っても、普通の人達は私達の戦いなんて何も知らないんだけどね。」

風「そうね。でも、皆が居なかつたらこの世界は無くなっていた。ここに住む人達は死んでた。」

友奈「はい。」

タケル「そうだね。」

東郷「私、初めての戦いの時、凄く恐かった。恐くて逃げたくて、でも逃げなくて良かった。私、ちゃんと勇者出来たかな?」

友奈「出来てたよ。東郷さんは、凄く格好良い勇者だった。」

すると夏凜のスマホに着信音が。大赦からの返信だった。内容は、卒業まで讃州中学校居られるとの事。

夏凜「・・・」

東郷「夏凜ちゃん嬉しそう。」

夏凜「べ、別に喜んでないから!」

友奈「何のメールだったの?」

夏凜「・・・何でも良いでしょ!?!」

友奈「えく? 気になるく。」

カノン「夏凜ちゃん楽しそう。」

夏凜「な、何言ってるのよ!カノン!」

そして風は、大赦からのメールを見ていた。

『勇者の身体変調と満開の関連性については調査中です。しかし貴方達の肉体に異常は見つかっておらず、変調は一時的なものと思われまます。』

満開の後遺症なのか大赦も分からないと言う。

友奈「そう言えばさ、もうすぐ夏休みだよ? 何しよつか?」

夏凜「う、海に行くとか・・・」

風「え? 何て?」

夏凜「な、何でも無いわよ！」

友奈「だよね！夏と言えば海！」

樹『山でキャンプも。』

カノン「キャンプ、良いね〜！」

東郷「夏祭りも楽しみね！」

タケル（夏祭りがあ・・・）

風「花火もやつとく？やるからには、打ち上げ花火100連発ぐらい！」

友奈「全部やれば良いよ！全部やる？」

タケル「火傷しそうだね。」

全ての戦いが終わった後、彼らは日常に戻った。戦わなくても、勇者部は続く。時間は無限にある。夏休みが始まった。

「END」

## 第七話「合宿!牧歌的な喜び!」

友奈「夏休みになりました!私達勇者部が、人類の敵・バーテックス12体全部倒したご褒美として、大赦は何と、合宿先を用意してくれたのです!ヤッター!そんな訳で、私達は今、太陽がいつぱいの海に居ます!」

東郷「くすつ、友奈ちゃん誰に言ってるの?」

タケル「いや、俺が持つてるビデオカメラに向けて言ってるんだけど。」

友奈「食事も大赦が心配してくれるんだって!良いのかな?こんなに至れり尽くせりで。」

東郷「病院で寝てた分くらいは遊んでも良いんじゃないかしら?」

タケル「そうだよ。俺達はバーテックスを全て倒したんだから、貰った褒美を受け取って満喫しなきゃね。」

友奈「そうだよね!よくし、進行方向に人影無し!スピード上げるよー!!」

海水用の車椅子を押して走り出す。タケルも走り出す。

タケル「元氣だね。友奈。」



同じ頃、風達はかき氷を食べている。

風「はしやぎおるわ。後輩共め〜。」

アカリ「それにしても、海って久し振り〜。」

御成「日差しが強く、まさに南国気分ですぞ。」

風「ここで大赦が落ち込んでいたら部員の士気に関わるわ。エンジョイして行かないとね！」

樹『というか、ふつうに楽しんでるでしょ。』

風「ありや？バレた？」

マコト「部長が一番楽しんではもうお見通しだ。」

カノン「うんうん。樹ちゃんは楽しい？」

樹『私も楽しい??』

風「そっか。」

夏凜「風〜！こっちの体は出来上がってるわ！何時でも良いわよ！」

水を飲む。

夏凜「さあ、競泳よ競泳！」

風「しゃあない。瀬戸の人魚と言われた私が、格の違いを見せてあげるわ!」

夏凜「言われてるの?」

樹『自称です。』

アカリ「自称なの?」

マコト「俺も彼奴らと競うか。」

カノン「お兄ちゃん、頑張つて!」

風「でも水泳は得意よ?幼稚園の時、5年くらいやってたから。」

夏凜「幼稚園に5年も居ないでしょ。」

3人は海に向かって走る。すると樹が砂浜の上でバタバタし始めた。

風「ん?どうした?熱いの?」

夏凜「心頭滅却!」

樹が全速力で海に向かった。

風「ん、樹は家でも砂浜でも可愛いわね。」

マコト「お前、姉バカだな。」

海の上で樹が気持ち良くなる。

友奈「お!遂に風先輩と勝負するの?」

タケル「マコト兄ちゃんも?」

マコト「ああ。」

夏凜「優れた選手は水の中でも行けるって事を、またまた見せてあげるわ！」

友奈「うん！頑張って！夏凜ちゃん！」

夏凜「・・・頑張るのは当たり前よ！」

タケル「別に素直になっても良いのに。」

夏凜「五月蠅いわね・・・」

樹は屈伸運動をする。

東郷「樹ちゃん、泳げるんだっけ？」

指でこのくらいとジエスチャーする。

東郷「優秀だね。勇者部の未来は安泰。」

右手で『いやいや』とジエスチャーする。

風「・・・」

マコト「どうした？風。寒いのか？」

風「あんま女子力振り撒くとナンパとかされそうだから注意しないと・・・」

マコト「ナンパって・・・」

夏凜「何言ってるの。こ・・・」

風「隙あり!!」

夏凜「あ!!こら待てー!ー!!」

マコト「おい!風!!」

隙を突かれた2人が全速力で風を追って、競泳をする。

タケル「マコト兄ちゃん頑張れー!」

友奈「よおし!こっちも行こう!タケルさん!」

タケル「ああ!」

車椅子をタケルが押して海に入る。

タケル「うわ、海気持ち良いく。」

東郷「あははは。」

マコトと風と夏凜が競泳している。現在マコトが有利。

途中で東郷が赤い海藻を見付けた。

東郷「友奈ちゃん、これ押し花なんかに使えるんじゃない？」

友奈「あ、本当だ！深い所に生えてた奴かなあ？綺麗。ありがとう！東郷さん！」

タケル「それ赤トサカだね。」

友奈「赤トサカ？」

タケル「結構栄養が良い海藻だよ。」

友奈「へえ〜！」

“ブクブクブク”

タケル・友奈「ん？」

樹が顔を出した。頭の上に赤トサカが乗ってる。

タケル「樹ちゃん。」

友奈「それも使えそう！ありがとう樹ちゃん！よし！潜りっこしようか！東郷さんが喜びそうな物を拾って来た方が勝ち！」

樹はコクンと頷く。

友奈「姫、暫くお待ち下さい！せーのっ！」

2人が海に潜る。

タケル「気を付けてね。」

その後友奈は、夏凜と山崩しを始めた。先行は友奈。友奈ががつつり砂を崩したが、セーフ。

夏凜「ええええ!?!そんなにいつぱい!?!」

友奈「うふふふふ。」

アカリ「友奈ちゃん凄い!」

東郷「友奈ちゃんの棒倒しは、子供達との砂遊びで鍛えられてるから。マコト「そう言うお前は何処でこのスキルを鍛えられたんだ?」

風「そう言うあんたは何処でこのスキルを鍛えられたの?」

砂で立派なお城を作ってる東郷を見て、マコトと風がツツコんだ。

樹『すごー!高松城!』

御成「立派な高松城ですぞ!東郷殿!」

タケル「もうこれ、達人レベルだよね?」

カノン「凄くいい!」

東郷「まあ、色々。」

友奈「砂がね、どれくらいまで取って大丈夫か語り掛けて来るんだよ。」

夏凜「変則系!? ちょっと黙ってなさい! 集中するから……」  
集中して砂を取ろうとしたが。

夏凜「ああああ!!」

アカリ「あく、崩れちゃった。友奈ちゃん勝利!」

友奈「よっしゃ!」

風「友奈、あんまり夏凜をいじめちゃ駄目よ?」

樹『自分は泳ぎで負けたクセに……』

マコト「本当だな。」

風「っ?!……ゴホン、楽しみあまり、睡眠不足でね……」

タケル「睡眠不足だったら、途中で泳ぎ疲れて寝ていたのかもだよ?」

風「……」

夏凜「もう1回よ! 友奈!」

友奈「掛かって来んしゃい!」

山崩し2回戦。

樹『カリンさん、凄く楽しそう。』

東郷「そうね。初めて部に来た時が懐かしいくらい。」

スイカ割り。

東郷「敵影見ゆ!目標、二時の方向!」

友奈「樹ちゃんから見て右だよ!フアイトー!」

目隠しした樹がスイカ割りに挑戦。

タケル「もつと右だよ!」

友奈「そうそう!右右!」

風「海と言えば、これやっておかないとね。」

夏凜「噂に聞いたスイカ割り。やってみると何とも単調ね・・・って樹ー!そこよ!

振り下ろしなさい!!」

マコト「ノリノリだな・・・」

風「ノリノリじゃん・・・」

そして樹がスイカの前まで着いた。すると樹が、風の戦い振りを思い出して、木刀を振り上げる。



風「あはははははは！樹何その大袈裟な構えは〜！」

マコト「あれ、お前の真似だと思っぞ。」

風「え、私あんなん？」

マコト「あんなんだ。」

そして樹が木刀を振り下ろした。スイカが綺麗に割れた。

全員「おおお！」

友奈「一発で決めるなんてやるう〜！」

東郷「樹ちゃんは磨けば磨く程、立派な大和撫子になれるね！磨かなくちゃ！」

樹は照れてる。

タケル（やっぱり樹ちゃんの声を取り戻さないと。）

夕方。

友奈「はぁ・・・私、もうお腹ぺこぺこ・・・」

風「夏凜齧って我慢して?」

夏凜「食えないわよ。」

アカリ「カニバリズム?」

友奈「カプツ。」

夏凜「本当に食い付くな!」

一方東郷は、夕日を眺めていた。

樹『どうしました?』

東郷「ううん、何でも無いわ。」

風「ほら、旅館帰るわよ?」

東郷「はい先輩!」

旅館に着くと、豪華なご馳走が用意されたった。

友奈「凄いご馳走!!」

樹『カニです!カニがいます!』

友奈「しかもカニカマジじゃないよ!?!本物だよ!?!ご無沙汰しております!結城友奈です!」

タケル「カニに自己紹介してる・・・」

???'「此方こそ。私はカニでございます。」

友奈「うわっ!喋った!?!」

タケル「御成、何やってるの?」

御成「いやあく、カニの気持ちを代弁してみました。」

風「あのお、部屋間違ってますか?ちよつと私達には豪華過ぎるような・・・」

アカリ「私達にはちよつと荷が重く感じます・・・」

女将「とんでもございません。どうぞ、ごゆっくり。」

アカリ「は、はい。」

東郷「私達、高待遇みたい。」

夏凜「ここは大赦絡みの旅館だし、お役目を果たしたご褒美って事じゃない?」

風「つ、つまり食べちゃっても良いと!?!ゴクリ・・・ん?」

樹『でも友奈さんが・・・』

タケル「あ、そうか・・・ん?」

友奈「あくん。」

そんな友奈は刺身を食べていた。

友奈「ん!このお刺身のコリコリした歯応え、堪りませんね〜!」

次はシラスを食べる。

友奈「ん〜!このツルツルした喉越しも良いね〜!」

マコト「味の代わりに食感を楽しんでるのか。」

東郷「もう友奈ちゃん、頂きますが先でしょ?」

友奈「ああ、そうだった!ごめんごめん。」

夏凜「凡ゆる手段で味わおうとしては・・・」

風「色々適わないわね。友奈は。」

樹『尊敬してます!』

御成「では皆さん、頂きましょうか。」

東郷「それじゃあ改めて。」

友奈・東郷「頂きます!」

樹『いただきま〜す!』

タケル・マコト・アカリ・御成・カノン「頂きます。」

夏凜 「頂きます。」

風 「頂きます!!!」

一足先に風がガツガツ食べる。

友奈 「そうだ！折角だから撮っておこう！家族に自慢するんだ！」

風 「私も！思い出して味わえるように！」

タケル 「俺達も撮ろう？この世界でも思い出として。」

それぞれスマホで写真を撮って、思い出を残す。

東郷 「場所的に私がお母さんをするから、ご飯おかわりしたい人は言っただけ？」

カノン 「はあくい！」

夏凜 「東郷が母親かあ。厳しそう。」

東郷 「門限を破る子は柱に磔ます。」

夏凜 「ひいつ!？」

友奈 「まあまあお前、そこまでしなくても・・・」

東郷 「あなたが甘やかすから。」

夏凜 「おいおい夫婦か。」

風 「時々言ってるけどさ、何時かこう言うのを日常的に食べられる身分になりたいわ

ね。自分で稼ぐなり、良い男を見付けるなりで。」

タケル「中学生なのにもう大人の話?」

樹『後者は女子力が足りませぬ。』

タケル「樹ちゃん、結構辛辣だね。」

風「そうかな?この浴衣姿から匂い立って来ない?」

夏凜「あゝん。」

風「ちよつと夏凜!刺身は人数分なんだから同じの2つ取ったら駄目よ!!」

夏凜「ブツブツ言ってるのが悪いのよ。」

御成「風殿、女子力なら東郷殿を見習った方が宜しいですぞ?」

そんな東郷は、お吸い物を飲んでる。

友奈「わあゝ!ただ普通に食べてるだけなのに!」

樹『うつくしい!』

風「流石お嬢様。やるわね。」

東郷「そ、そんなに見られたら食べ辛いです・・・」

夏凜「まあ、私もそこそこマナーには五月蠅いけどね!」

刺し箸で山芋を刺した。

樹『それがすでにアウトです。』

夏凜「え!?!」

アカリ「夏凜ちゃん、刺し箸は行儀悪いよ?」

夏凜「嘘っ!?!」

友奈「ま、まあ、あんまり細かい事は気にしなくても・・・」

夏凜「そう! 食事は楽しみのが1番!」

風「最低限のマナーだけを守ってれば良いのよ!」

友奈「おー! そうだそうだー!」

樹『こう言う時は団結するんだ。』

タケル「確かにね。ご飯はしっかり食べないとね。」

マコト「だな。」

完食後。

タケル「あく、お腹いっぱい・・・」

カノン「美味しかったです・・・」

風「がああああ!!!」

タケル「ど、どうしたの?」

風「私の邪眼が更なる生贄を求めている!!!!」

樹『ごはん、おかわりだそうです。』

友奈「おお!通訳した!」

御成「流石姉妹ですな。」

マコト・夏凜「つつーか普通に言え。」

風「3杯目だから遠慮してるの。」

夏凜「居候か!」

東郷「はいはい。」

タケル「あはは。」

風「おかずも少なくなってきたわね。はっ!」

客室にある神棚の饅頭を発見した。

風「確かお供え物って、時間が経てば、自分で食べてしまっても良いのよね?」

タケル「まあ、お参り後にごくすぐにお下げて頂くのが本来の作法だけど・・・」

風「はあ・・・はあ・・・」

友奈「ああ!そうですけど止めましょうよ!」

タケル「タイミング悪かったらバチ当たるかもだよ!」

風「あははは!冗談よ冗談!」



マコト「お前の言葉、冗談には聞こえないぞ。」

友奈「先輩がお供え物に手を付ける前に、次行こう次！樹ちゃん、次は何するんだっけ？」

樹『このあとは、皆でお風呂です！』

男湯。

タケル「あく……露天風呂気持ち良い……」

御成「生き返りますな……」

マコト「ふう……」

タケル「俺達、この世界に来てからもう2年経つよね。」

マコト「そうだな。色々大変だったけど、友奈達と出会ってから楽しくなったな。」

御成「でも早く元の世界に帰りたいですぞ。」

タケル「まあまあ御成。元の世界に帰る前に、色々楽しんでおかないとね。」

マコト「タケルの言う通りだ。」

御成「確かにそうですね。」

一方女湯では。

風「あゝ・・・・・・・・」

東郷「はあゝ・・・・・・・・」

友奈「良いお湯々々・・・・・・・・」

アカリ「気持ち良い々々・・・・・・・・」

カノン「はいいい々々・・・・・・・・」

風「疲れが吹っ飛ばわ々々・・・・・・・・」

夏凜「確かに々々・・・・・・・・生き返るわね々々・・・・・・・・」

風「つてか何でそんな端の方に居るの?」

夏凜「っ!べ、別に!偶然よ偶然!」

風「ははくん?」

夏凜「な、何よ?」

風「女同士で何照れてんだか。」

その場で立ち上がった風。

夏凜「っ!?!べ、別に照れてないし!」

アカリ「風ちゃん、かなりだらしないわよ？」

友奈「こんだけ広いと泳ぎたくなるよね。」

東郷「駄目よ？友奈ちゃん。」

両手でお湯を飛ばした。

友奈「うわっ！はーい……」

風「ぐへへへへへ。」

東郷「ん？どうしました？」

カノン「風ちゃん、その顔何？」

風「普段何を食べたら、そこまでメガロポリスな感じになるのか、ちよつとだけでも

コツを教えて頂けると……」

東郷「ふ、普通に生活してるだけです……」

風「いやいや、そんなご謙遜……」

一方夏凜は、こっそり出た。

夏凜（今の内に……）

シャワーを浴びようとしたその時。

友奈「はーい！お背中流しまーす！」

夏凜「ぎゃあああああ!!!」

友奈「背中流すの上手いって、お母さんに褒められた事があるんだよ!任せろ!」  
夏凜「いや!ちよ!くすぐったいてば——!!」

夜の客室。

夏凜「私は端っこ。」

風「私は部長だから真ん中!」

友奈「お!すかさず樹ちゃん隣に着いた!じゃあ私は東郷さんの隣!」

東郷「うん!」

タケル「俺はアカリの隣。」

アカリ「ええ。」

御成「拙僧はタケル殿の隣ですぞ。」

マコト「カノン、こっちにしようか。」

カノン「うん。」

風「10人揃って旅の夜。どんな話をするか、分かるわね?夏凜。」

夏凜「え?えっと・・・辛かった修行の体験談とか?」

風「違う。」

東郷「正解は、日本と言う国の在り方を存分に語る！です！」

風「それも違う！」

タケル「東郷と夏凜は抜け目無いね・・・」

風「樹、正解は？」

樹『コイバナ・・・？』

風「そう！それよ！恋の話よ！」

東郷「もう一度お願いします。」

風「こ、恋の話よ。何度も言わせないで？」

タケル「恋の話って言ったって・・・」

友奈「で、では、誰かに恋をしてる人・・・」

マコト「俺は居るぞ。」

友奈「じゃあマコトさん！」

マコト「カノンだ。」

カノン「え？」

友奈「カノンちゃん？」

マコト「ああ。カノンは俺の大事な妹だ。だから一生愛してるぞ。」

カノン「お兄ちゃん……」

風「それってある意味シスコンじゃ?」

アカリ「風ちゃん、それあなたが言える事?」

友奈「じゃあ他に誰か。」

夏凜「……」

東郷「……」

樹『……』

タケル「……」

アカリ「……」

御成「……」

友奈「ま、まあ勇者とかで皆忙しかったし。」

夏凜「そう言うあんたは何かあるの?風。」

風「そうね、あれは2年の時だったわね。」

夏凜「っ!」

風「私がチア部の助っ人した時、そのチア姿に惚れた奴が居てさ、まあデートしないか?とか言われたりしたもんよ!もんよ!」

夏凜「な、成る程!ん?」

しかし他の皆は黙ってる。

夏凜「あんた達、落ち着いてるわね？」

樹『この話10回目ツス。』

夏凜「えええ．．．？」

このコイバナは10回目である。

風「何よ!？」

夏凜「それしか浮いた話無いのね．．．」

風「あるだけ良いでしょ。」

夏凜「つで、断ったの?」

風「だつてさ、同年代の男子つて何か子供に見えるもん．．．そいつの端末に嫌らしい画像を入れて、休み時間に男子達で見てるような奴だつて知つてたからさあく。ん

あー! 次の話題! 友奈! 何か際どいの!!」

友奈「ええ! そんな無茶振りを．．．」

東郷「際どいのなら任せて下さい!」

風「東郷は違う意味で際どいでしょ?」

夏凜「．．．．．」

全員「ん?」

途中で夏凜が眠りに入った。

友奈「夏凜ちゃん寝てる・・・」

風「はしゃいでたからね。」

樹『かわいい寝顔です。』

風「私達もそろそろ寝ようか・・・夜更かしは乙女の敵よ?」

アカリ「じゃあ寝ようか・・・」

東郷「フツ。」

友奈「東郷さん?」

東郷「何でも無いわよ?友奈ちゃん。」

御成「では、電気を消しますよ。」

風「は〜い。おやすみ〜。」

友奈「おやす〜。」

東郷「おやすみなさい。」

タケル「おやすみ。」

アカリ「おやすみ。」

マコト「カノン、おやすみ。」

カノン「おやすみ。お兄ちゃん。」



電気を消して、御成が布団に入った瞬間。

東郷「あの日も、こんな感じの暗いじつとりとした夜でした・・・」

友奈「東郷さん!？」

夏凜を除いた全員が目を開けた。

東郷「その男は、帰りを急いでいました・・・でも家への近道をしたのが間違いだったのです・・・」

友奈と風と樹は固まるが、タケル達5人は平然としてる。

東郷「お墓の所を通った辺りから自分を付けて来るような足音が聞こえてきて・・・」

友奈「わああああ!何でこのタイミングで怪談を!？」

風「ちよ!そう言うの私苦手なのよ!!」

東郷「男は、思い切って後ろに振り返る事にしたんです・・・すると・・・」

風「ぎやあああああああああ  
!!!!!!!」

突然風が絶叫した。

タケル「ど、どうしたんだ!? 風!」

風「何かモゾって来たのよ! この辺に!! . . . って何だ樹かあ。  
ただ樹が風にしがみついただけだった。」

風「え? もう怖くなつて潜り込んで来ちやつたの?」

夏凜「ああ〜五月蠅い〜 . . .」

友奈・東郷・風「すみません . . .」

マコト「怪談話は以上だな。」

皆が寝静まつてから数時間。

夏凜「ん．．．？」

真夜中に夏凜が目を覚まして、顔を下に向けると、風が夏凜の腹の上を枕にして寝ていた。

夏凜「寝相悪．．．自分の布団に戻れ。」

起きて風を横の布団に移した。

風「女子力．．．コンビニで売ってないかな．．．？」

夏凜「全く．．．」

しかし風が眠った夏凜に抱き着いた。

夏凜「ああもう！」

風「治ったんだね樹．．．良かった．．．」

彼女は樹の声が戻った夢を見ている。

夏凜「．．．仕方無いわね。」

このまま眠る事にした。

更に時間が過ぎて夜明け前。

友奈「・・・あれ?」

目を開けた友奈が起きた。

友奈「ん?・・・おお、仲良し。」

抱き合つて寝てる風と夏凜を発見。

???「あれ、友奈・・・?」

友奈「タケルさん。」

今度はタケルが起きた。

タケル「早いね、起きるの・・・」

友奈「さつき目が覚めちやつて・・・タケルさんは?」

タケル「偶々だよ。」

友奈「ん?」

窓の方を見ると、東郷が外を眺めてるのが見えた。

友奈「東郷さん、おはよう。」

東郷「ん?友奈ちゃん、おはよう。」

タケル「おはよう。もう起きたの?」

東郷「タケルさん、おはようございます。」

友奈「肌身離さずだねリボン。」

東郷「私が事故で記憶を失った時に、握り締めていた物だったって。」

タケル（あの子のリボンか・・・）

東郷「誰の物か分からないけど、とても大切な物、そんな気がして・・・」

友奈「そつか・・・海を見てたの？」

東郷「うん。」

友奈「起こしてくれれば良かったのに。」

東郷「考え事をしていたの。」

タケル「考え事？」

東郷「ねえ友奈ちゃん。」

友奈「ん？」

東郷「バーテックスって、12星座がモチーフなんだよね？」

友奈「そう聞いたね。」

タケル（12星座・・・弦太朗さんと戦ったゾディアーツと同じモチーフなのか。）

東郷「でも星座って、他にもいっぱいあるでしょ？」

友奈「ああ、夏の大三角形座とかね。」

タケル「冬の大三角形座とかもあるね。」

東郷「そんな星座は無いですよ?」

タケル「あれ?間違っちゃった?」

友奈「えへへ。」

東郷「ねえ。」

友奈「ん?」

東郷「本当に戦いは終わったのかしら?」

タケル「そう言われると・・・俺も分からない・・・」

友奈「・・・考えてもしょうがないよ。」

東郷「友奈ちゃん?」

友奈「何かあったら、その時はその時。大赦の人達が問題無いって言うからさ。何よ  
り、人類を死のウイルスから守ってくれた神樹様が付いてるんだし。」

へアブラシで東郷の髪の毛を整える。

東郷「神樹様・・・」

友奈「そう言えば、バーテックスって何で何時も私達の所に出て来たのかな?太平洋  
側から来たら危なかったよね?」

タケル「・・・」

東郷「それは、神樹様がわざと結界に弱い所を作って、敵を通してるから。」

友奈「東郷さん物知り〜。」

東郷「神樹様は恵の源でもあるから、防御の全て力を使うと私達が生活出来なくなるの。」

友奈「あれ？何処かでそれ習ったような・・・」

タケル「覚えてないの？友奈。」

東郷「アプリに書いてあったよ？」

友奈「コ、コホン。」

タケル「友奈は本当、忘れっぽいね。」

友奈「あはは。でも安心かも。」

東郷「どうして？」

友奈「神樹様に、はつきり意思があるって事だもん。私達の事だって、何とかして下さるよ。東郷さんが昨日言ってた通り、病院で寝てた分は遊ばないと。」

東郷「・・・そうよね。独りになるとつい色々悪い方を考えちゃって・・・皆と居るとそんな事が忘れられるんだけど・・・」

タケル「勇者部五箇条1つ。」

友奈「困ったら相談だよ？」

東郷「でも、こんな事相談されても困るでしょ？」

友奈「それでも無いよ? 独りで居るとつい暗い事考えちゃうんなら、今日はもーっと東郷さんに引っ付いて居よっと!」

東郷「ありがとう。友奈ちゃん。」

友奈「ねえねえ、この髪型どう?」

鏡で東郷の髪型を見せる。

東郷「わあゝゝゝ折角だから、今日はこれで行こうかしら?」

友奈「お! 気に入ってくれた!」

嬉しくなつて東郷を抱いた。

タケル「東郷、友奈達も居るけど俺達も居るよ。俺達は勇者じゃなくても、仮面ライダーとして君達と協力し続けるよ。」

東郷「タケルさん、ありがとうございます。・・・朝ご飯までまだ時間があるけど、友奈ちゃんどうする?」

友奈「起きてるよ。ここに私も居る。」

東郷「うん。」

タケル「俺も起きてるよ。でもちよつとトイレ・・・」  
トイレへ行ったタケル。



そして朝。

風「海が騒がしいわね。」

友奈「つで、どうしたんですか？先輩。改まって。」

東郷「つで、そのポーズは？」

夏凜「意味あるの？ねえ、そのポーズ意味あるの？」

マコト「また何時もの中二病か？」

風「ゴホン！帰る前に私達にはやるべき事があるでしょ!？」

夏凜「何かあったっけ？花火？」

樹『ナンパされてないとか言いそう。』

アカリ「そうなの？」

風「ちやうわ！まあ、それも少し引っ掛かってるけど・・・」

カノン「引っ掛かってるのね。」

風「今は勇者部の夏合宿なのよ？少しは内容のある話をしないと！文化祭とか、文化祭とか・・・後文化祭とか！」

タケル・樹『3回も言った。』

樹『でも確かに、お姉ちゃんの言う通り。』

友奈「劇をやるって予定になりましたよね? 中身を詰めていかないよ。」

東郷「これは、車の中で予定、配役の話し合いね。」

風「良い? バートックスを倒しても、私達の日常が被害受けて世話ないわ。しっかりと日常のスケジュールを守って、完全勝利と行きましょう!」

友奈「はい!」

御成「風殿の言う通りですぞ。」

夏凜「まあ、賛成してあげても良いわ。」

樹『帰るまでが合宿です。』

友奈「よーし! 文化祭、必ず成功させよう!」

全員「おー!」

こうして勇者部一同の合宿が楽しく終わった。

合宿後の犬吠埼家。4人がうどんを食べていた。

風「ご馳走も良いけど、それが続くよ。」

樹『うどんが恋しくなるね。』

風「そうそう！家に帰るまでが旅じゃないね！」

アカリ「そうだね。ここに来た時からうどんが欲しくて堪らなかったわ。」

御成「やはりうどんは美味ですな。」

風「うどん食べて初めて旅の締めになんか？」

突然スマホに着信音が鳴った。メールを見ると、風が顔を変えた。

アカリ「風ちゃん？」

風「あららごめん、ちよつと行って来なくちや。樹食べちゃってね。」

アカリ「私も行かなきゃ。御成も先に食べてね。」

御成「行ってらっしゃいませ。アカリ君。風殿。」

樹『いつてらっしゃい。』

外に出ると、タケルとマコトが待っていた。

タケル「アカリ、風、待ってたよ。」

アカリ「ごめんね。急に呼び出して。」

マコト「何かあったのか？」

風「ちょっと中学校へ行きたいんだけど。」

タケル「分かった。早く乗って。」

CRF250Lとマシンフーディーに乗って讃州中学校へ向かう。

讃州中学校に到着して、部室に向かう。

風「ん？」

部室の床に、1つのアタッシュケースが置かれてあった。

マコト「アタッシュケース？」

タケル「この紋章、大赦から？」

アタッシュケースを開ける風。中から。

風「うわっ!何何!？」

何かが風の顔にしがみついた。その正体は・・・

風「犬神!？」

何と風の精霊の犬神だった。

アカリ「犬神ちゃん!？」

タケル「風!これ見て。」

風「ん?」

アタツシユケースの中には、5つのスマホが入っていた。

風「戻って来てる・・・」

メールを見ると。

『敵の生き残り確認。次の新月より四十日の間で襲来。部室に端末を戻す。』

と大赦からのメールが来ていた。

タケル「バーテックスの生き残りが・・・?」

すると。

風「うわっ!」

アカリ「きゃあ!？」

タケル「うわっ!」

マコト「っ!？」

突然突風が起こった。

風「今度は何!?!」

突風が晴れると・・・

鼬の姿をした精霊が現れた。

風「え!?!」

アカリ「鼬!?!」

風「私、新しい精霊・・・?」

鼬の精霊は頷いた。

タケル「これってまさか・・・」

マコト「もしかしたら・・・」

風「戦いは、終わってない・・・何か、本当にこの目が疼いてきたりして・・・やれ

やれ・・・」

何とバーテックスの生き残りが存在していた。彼らに新たな運命が待ち構えていた。

「END」

## 第八話「散華!神の祝福!」

部室に到着。

友奈「結城友奈!入りまーす!」

東郷「こんにちは!」

風「ウイスス!」

友奈「すっかりそのキャラ定着しましたね。」

樹『ウイススです。』

タケル「やっと来たね。2人共。」

すると風の新しい精霊の鎌鼬東郷の目の前に。

風「ああ!ごめん、そいつ好奇心旺盛で・・・犬神と違ってあんまり言う事聞かなく

てさ・・・」

東郷「先輩の新しい精霊・・・」

鎌鼬が東郷の首回りを走る。

東郷「ああ、ちよ!くすぐりたい・・・」

すると精霊の青坊主、刑部狸、不知火、川蛭が出現し、鎌鼬を東郷から追い払った。



友奈「東郷さんのは何時見ても賑やかだなあ。」  
すると精霊達が友奈を睨んだ。

友奈「あ、あははは・・・こんにちは・・・」

マコト「友奈を敵視してるのか？」

東郷「全員、気を付け！」

号令で精霊達を整列させた。

友奈「流石〜！訓練されてる〜！」

今度は頭が鏡の精霊が。

友奈「あれ？」

アカリ「それ樹ちゃんのだね。」

樹『私の雲外鏡と木霊も出てしまいました。』

今度は牛鬼と火車も出現した。

友奈「わわわわわ！私のも飛び出て来たー！牛鬼、他の精霊食べちゃ駄目だからね？」

風「大赦が新たな精霊を使えるよう端末をアップデートしてくれたのは良いけど、

ちよつとした百鬼夜行ね・・・」

友奈「ほ、本当賑やか〜！もう一層文化祭これで良いんじゃないですか〜!？」

東郷「良くないわ！」

友奈「ですよね〜!」

夏凜「全く、あんたら精霊の管理ぐらい、東郷みたいになさいよ……つてきやあああああ!!!」

何時もの如く牛鬼に食われてる義輝。

義輝「諸行無常……」

カノン「精霊達可愛い〜!おいで〜!」  
すると精霊達がカノンの方へ集まった。

カノン「あはは、可愛い〜!」

タケル「精霊達がカノンちゃんの方へ……」

樹『精霊達を和ませてます……』

友奈「カノンちゃん凄いです……!」

その後。

風「ふう……ようやつと端末に戻ったわね。」

夏凜（それにしても私にだけ新たな精霊無しとか、どう言う事なのよ……ん?）  
樹『敵……いつくるのかなドキドキ。』

夏凜「そうね。私の勘では、来週辺りが危ないわね。」

風「実は敵の襲来は気のせい！だったら良いんだけどね。」

御成「そうなれば、平和になれますぞ。」

風「あの諸葛孔明だって、負け戦はあるのよ？攻防も筆の誤り。神樹様の予知のミスくらい……」

突然樹海化警報が鳴り響いた。

風「ええ!？」

タケル・マコト「っ!？」

周囲の時間が止まった。

友奈「噂をすればって奴かな……?」

夏凜「風が変な事言うから……神樹様の的確なツツコミね。」

マコト「お前も同じ事言ってただろ？」

夏凜「・・・」

外では樹海化が始まっていた。

風「来ちやったわね。」

タケル「マコト兄ちゃん。」

マコト「ああ。」

夏凜「上等!殲滅してあげるわ!!」

樹海。

東郷 「敵は1体。」

ジエミニ・バーテックスを確認。

東郷 「後数分で森を抜けます。」

友奈 「1体だけなら！」

風 「今回の敵で延長戦も終わり！ゲームセットにしましょう！」

夏凜 「そうね！絶対逃がさないわ！」

風 「行くわよ！」

友奈・東郷 「はい！」

タケル 「行こう！」

マコト 「ああ！」

両手を翳してゴーストドライバーを出して、オレゴースト眼魂とスペクターゴースト眼魂を押して、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

『アーイ！バッチリミロー！バッチリミロー！』

タケル・マコト 「変身!!」

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ!ゴースト!』

『カイガン!スペクター!レディゴー!覚悟!ド・キ・ド・キ!ゴースト!』

タケルが仮面ライダーゴースト・オレ魂と、マコトが仮面ライダースペクターに変身した。

そして友奈達5人は勇者に変身した。

風「よーし!じゃあまた、アレやろうか!」

東郷「了解です!」

夏凜「本当好きよね。こう言うの。」

7人が円陣を組む。

風「敵さんをきつちり昇天させてあげましょう!勇者部!ファイター!」

タケル・マコト・友奈・東郷・夏凜「オー!!」

アカリ「頑張つて!」

カノン「皆!負けないで!」

御成「ご武運を！」

戦闘開始。ジェミニ・パーテックスが走ってる。

マコト「彼奴、あの時の奴か？」

風「あの変質者ってさ、樹が倒せなかったっけ？」

東郷「元々2体居るのが特徴のパーテックスかも知れません。」

友奈「2体で1セット・・・双子って事？」

タケル「確かに、さっき確認したら双子座って表示されていたし。」

夏凜「何れにせよ、やる事は同じ！止めるわよ！」

樹「・・・」

東郷（精霊が増えた人と増えてない人・・・違いが満開にあるとしたら・・・）

風「そうよね・・・やらないと・・・」

夏凜「どうしたの!?!さつきあれ程テンションあげて言っただじやない！」

タケル「皆、どうしたんだ？」

夏凜（そうか、皆いざとなって恐くなったんだ・・・もしかしたらまた、体の何処かにダメージが来るんじゃないかって・・・）

タケル（あの満開が原因で、戦うのが恐くなったのか？）

マコト（もしそうだとしたら・・・）

タケル「行こう！マコト兄ちゃん！」

マコト「ああ！」

マシンゴーストライカーとマシンフーディーに跨る。

夏凜「問題無い！私も！」

友奈「よーーーーーーーし

!!!!!!  
」

東郷「友奈ちゃん？」

夏凜「どうしたのよ？急に。」

友奈「先輩！あの走ってるのを封印すれば、それで生き残りも片付くんですよね？」

風「う、うん！」



友奈「だったら、とつとと終わらせて、文化祭の劇の話をしましょう!!」  
そう言つて飛んで、ジエミニ・バーテックスを追跡する。

夏凜「私も!!」

続いて夏凜も追跡を開始した。

風「友奈!!夏凜!!」

マコト「俺達も行くぞ!」

タケル「うん!」

マシンゴーストライカーとマシンフューデーで追跡する。

夏凜「ここは私に任せなさいっての!」

友奈「でも!」

夏凜「つて言つても、聞かないだろうから一緒にやるわよ!!」

友奈「うん!!夏凜ちゃん!!」

タケル・マコト「フツ!」

ガンガンセイバー・ガンモードとガンガンハンド・銃モードで連射して、ジエミニ・

バーテックスを怯ませた。

友奈・夏凜「おりやああああああああ!!!」

2人のダブルパンチがジエミニ・バーテックスを転ばせた。

友奈「やった!!」

しかしジエミニ・バーテックスが再び起き上がって走り出したが。

『カイガン!フリーデーニ!マジイイジャン!すげえマジシャン!』

フリーデーニ魂を纏ったスペクターが鎖を飛ばして、ジエミニ・バーテックスを拘束した。

マコト「逃がさん!!」

するとジエミニ・バーテックスの両足に数本の短剣が刺さった。ジエミニ・バーテックスが転げ落ちた。

友奈「風先輩!」

風「皆ありがとう!」

マコト「遅いぞお前達!」

その頃東郷は、長距離からの援護役に。

東郷（他に敵影は無し・・・彼奴さえ倒せば、この延長戦も終わり。）

狙撃銃を発砲。

ジェミニ・バーテックスが起き上がった瞬間、東郷が発砲した狙撃銃の弾丸によって顔が破壊された。

風「よし、封印の儀!!」

夏凜「殲滅開始!!」

友奈「バーテックス!!」

風「大人しくしなさい!!」

樹「……………」

封印の儀を開始。

マコト「ハッ!」

すぐに鎖を手元に戻す。

タケル「っ!」

ジェミニ・バーテックスから御霊が出現。しかも大量。

友奈「やった!って、何これー!?」

風「私ができるわ!! (満開ゲージを溜めるのは危険な事かも知れない……だから、私

自身がトドメを刺さないと・・・他の皆にやらせる訳には・・・」

『ダイカイガン!フリーディーニ!オメガドライブ!』

マコト「ハアツ!!」

鎖を射出して御霊を全て縛って固めた。

風「マコトさん!!」

マコト「風!俺に任せろ!行くぞ!!」

夏凜「トドメは私に任せて貰うわよ!!」

風「か、夏凜!止めなさい!部長命令よ!」

夏凜「私は助っ人で来ているのよ!好きにやらせて貰うわ!!」

風「マコトさん!やっつて!!」

マコト「分かった!!」

鎖を引っ張って御霊を引き寄せる。

マコト「俺の生き様、見せてやる!!」

回転キツクを繰り出そうとした瞬間。

友奈「はあああああああああ  
!!!!!!」

夏凜「っ!?!」

風「っ!?!」

樹「・・・!!?」

タケル「え!?!」

マコト「何!?!」

友奈「勇者、キーーーーーック!!!!」

大ジャンプした友奈が、勇者キツクで御霊を全て破壊した。ジエミニ・バーテックスが消滅した。

友奈「・・・ふう、何事も無かった・・・うん!成せば何とかなったね!」

夏凜「友奈!」

マコト「友奈!」

タケル「友奈!」

友奈「うん!思ったより全然簡単だったね!皆!」

夏凜「あんた、何で勝手に・・・っ!?!」

満開ゲージが3つ溜まってるのを見て驚愕した。

マコト「友奈、お前……!」

友奈「ご、ごめんね。新たな精霊の力が使いたくて、つい先走っちゃった。反省します。」

タケル「だからって勝手な行動は止めて!」

マコト「お前がまた満開したら、また身体に影響を及ぼす事になるんだぞ!」

風「友奈……」

東郷「友奈ちゃん、身体は平気?」

友奈「うん!元氣そのものだよ!大丈夫大丈夫。皆に怪我無く終わって良かった。」

東郷「友奈ちゃん……」

そして樹海が晴れた。

現実世界。讃州中学校・屋上。

風「ふう……終わったのね。」

樹『お疲れさまです!』

夏凜「いいえ、まだそれを書くのは早いわ樹!」

アカリ「そうよ樹ちゃん!友奈ちゃん達が居ないのよ!」

夏凜「え?あれ?友奈?友奈?」

何と友奈と東郷、そしてタケルとマコトの姿が何処にも無かった。

風「つてか東郷も居ないじゃない・・・」

御成「タケル殿にマコト殿も居ませんぞ!」

カノン「お兄ちゃん!タケルさん!」

風「東郷!」

夏凜「どうなってるの・・・?」

同じ頃友奈と東郷、そしてタケルとマコトは何処かの神社に居た。

タケル「ここは・・・?」

マコト「神社なのか・・・?」

東郷「戻ったけど・・・」

友奈「ここ、屋上じゃないよね・・・?皆は・・・?」

東郷「っ!大橋!」

友奈「え!?!」

4人の目に映ったのは、壊された瀬戸大橋。

友奈「うわ、本当だ。だとしたら、結構離れた場所に来ちゃったのね・・・」

すぐにスマホのロック画面を解除しようとしたが。

友奈「あれ?電波入ってない?」

東郷「え?」

ロック画面を解除しようとしたが。

東郷「私の改造版でも駄目・・・」

タケル「あれ、ここってまさか・・・」

マコト「タケル、どうした?」

タケル「マコト兄ちゃん、ここ見覚え無い?」

マコト「見覚え?・・・っ!まさかここは・・・」

友奈「どうしたの?タケルさん、マコトさん。」



??? 「ずっと呼んでいたよ？わっしー。ター君、マー君。」

何処からか少女の声が聞こえた。

タケル「この声……」

??? 「会いたかった……」

マコト「彼処だ！」

声が出た方へ向かった。そこには……

身体中が包帯で巻かれた1人の少女が、ベッドの上で寝たきり状態になっていた。

少女「ようやく呼び出しに成功したよ。わっしー、ター君、マー君。」

友奈「え? わっしー・・・驚? それにター君とマー君って? って言うか、何でここにベッドがドーンと!」

タケル(この声、まさか・・・)

マコト(ここで再会するとは・・・)

少女「あなたが戦っていたのを感じて、ずっと、呼んでたんだよ?」

友奈「えっと、東郷さんの知り合い?」

東郷「・・・いいえ、初対面だわ・・・」

彼女から見て包帯の少女は初対面だと言う。

タケル・マコト「・・・」

少女「はあ・・・うふふ、わっしーって言うのはね、私の大切なお友達の名前なんだよ。何時もその子の事を考えていてね。つい口に出ちやうんだよ。ごめんね。」

友奈「あの、私達を呼んだんですか・・・?」

少女「うん。その祠。」

友奈「これ、うちの学校にもある・・・」

東郷「うん、同じだね・・・」

少女「パーテックスとの戦いが終わった後なら、その祠使って呼べると思ってたね。」

友奈「……パーテックスをご存知なんですか？」

少女「一応、あなたの先輩になるって事かな？私、乃木園子って言うんだよ？」

友奈「さ、讃州中学の結城友奈です！」

園子「友奈ちゃん……」

東郷「東郷美森です。」

園子「美森ちゃんかあ……」

友奈「先輩と言うのはつまり、乃木さんも……」

園子「うん、私も勇者として戦ってたんだ。2人のお友達、2人のお兄さん達と一緒に、エイエイオーってね。今はこんなになっちゃったけどね……」

友奈「2人のお兄さん？」

園子「2人と一緒に居るお兄さん達だよ？」

友奈・東郷「え？」

タケル「園子、久し振りだね。」

マコト「こんな形で再会してしまうとは。」

友奈「乃木さんを知っているの？」

タケル「うん。友奈達が勇者になる以前から一緒に戦っていたんだ。」

マコト「園子と2人の勇者と共に。」

東郷「……」

友奈「バ、バーテックスが、先輩をこんな酷い目に遭わせたんですか……?」

園子「ああ、うんとね、敵じゃないよ?私これでもそこそこ強かったんだから。えっ

と……あ、そうだそうだ。友奈ちゃんは満開したんだよね?」

友奈「え?」

園子「わーって咲いて、わーって強くなる奴。」

友奈「あ、はい。しました。わーって強くなりました。」

東郷「私もしました……」

園子「そっか……咲き誇った花は、その後どうなると思う?」

マコト「咲いた花は、時間が経てば花びらを舞い散らして枯れる。」

園子「そう。満開の後、散華と言う隠された機能があるんだよ。」

東郷「散、華……?花が散るの、散華……?」

園子「満開の後……」

「身体の何処かが、不自由になったはずだよ?」

東郷「・・・！」

友奈「え、それって・・・!?」

園子「それが散華。神の力を振るった満開の代償。花1つ咲けば、1つ散る・・・花2つ咲けば、2つ散る・・・その代わり、決して勇者は死ぬ事は無いんだよ？」

東郷「死なない・・・？」

友奈「で、でも、死なないなら、良い事じゃないのかな・・・?ね?」

園子「そして、戦い続けて今みたいになっちゃったんだ・・・元からブーツとするのが特技で良かったのかなって。全然動けないのはきついからね・・・」

マコト「お前、過去に満開を使って今の状態になったと言うのか？」

園子「まあ、そう言う事になるかな？」

タケル「園子・・・」

友奈「い、痛むんですか・・・?」

園子「痛みは無いよ?敵にやられたものじゃないから。満開して、戦い続けてこうなっちゃっただけ。敵はちゃんと撃退したよ?」

友奈「満開して、戦い続けた……?」

東郷「その身体は代償で……?」

園子「うん。」

友奈・東郷「っ!」

驚愕の真実を聞かされた2人が絶句した。

友奈「ど、どうして……どうして私達が……?」

園子「何時の時代だって、神様に見初められて供物となつたのは無垢な少女だから。穢れ無き身だからこそ、大いなる力を宿せる。」

マコト「その力を代償として、身体の一部を神樹に供物として捧げる。それがお前達  
が持つ勇者システムのだ。」

タケル「神樹様は、勇者をお供え物として見ているんだ。以前にある人から教えられ

たんだ。」

東郷「私達が・・・供物・・・？」

園子「大人達は神樹様の力を宿す事が出来ないから、私達がやるしか無いとは言え：：酷い話だよね・・・」

東郷「それじゃあ、私達はこれから・・・身体の機能を失い続けて・・・」  
言っている途中で友奈が東郷を止めた。

友奈「でも、12体のバーテックスは倒したんだから、大丈夫だよ！東郷さん。」

東郷「友奈ちゃん・・・」

園子「倒したのは凄いいよね。私達の時は追い返すのが精一杯だったから・・・でもター君とマー君のお陰で殆ど倒せる事が出来たし・・・」

友奈「そうなんですよ！もう、戦わなくて良いはずなんです！」

園子「そうだと良いね・・・」

友奈「そ、それで失った部分はずっとこのままなんですか!?! 皆は、治らないんですか!?!」

園子「治りたいよね・・・私も治りたいよ・・・歩いて、友達を抱き締めに行きたいよ・・・」

友奈「・・・」

東郷「友奈ちゃん!タケルさん!マコトさん!」

友奈「え!?!」

タケル・マコト「っ!?!」

仮面を被った謎の人物達が現れた。

友奈「大赦の人達・・・?」

タケル・マコト「・・・」

大赦の人間達が5人を囲んだ。

園子「彼女達と彼らを傷付けたら許さないよ。」

大赦が園子に顔を向けた。

園子「私が呼んだ大切なお客さんだから。あれだけ言ったのに、会わせてくれないんだもん。」



タケル「それを押し切ったのか？」

園子「だから自力で呼んじやったよ。」

大赦が園子に向かって頭を下げた。

マコト「お前、大赦から祀られてるのか？」

園子「そう。私は今や半分は神様みたいなものだからね。崇められちゃってるんだ。」

タケル「園子……」

園子「安心してね。あなた達も丁重に元の街に送って貰えるから。悲しませてごめんね？大赦の人達も、このシステムを隠すのは1つの思いやりでもあるんだよ。でも、私はそう言うの、ちゃんと欲しかった……」

彼女は涙を流した。

園子「分かってたら、友達ともっともっと……沢山遊んで……だから……伝えておきたくて……」

すると東郷が、園子の傍に寄って、園子の涙を拭いた。

園子「……くすつ、そのリボン、似合ってるね……」

東郷「このリボンは……とても大事な物なの……それだけは覚えている……けど……ごめんなさい……私、思い出せなくて……」

園子「仕方無いよ……」

友奈「方法は!?このシステムを変えられる方法は無いんですか!?!」

園子「神樹様の力を使えるのは勇者だけ……そして勇者になれるのは、極々一部……私達だけなんだよ……」

友奈「……」

タケル「変えられる!!」

友奈「?!?!」

東郷「?!?!」

園子「ター君……?」

タケル「例えシステムが変えられなくても、未来は変えられる!きつと、散華された勇者の身体はきつと戻るはずだよ!」

友奈「タケルさん……」

マコト「タケル……」

ヒミコゴースト「眼魂を出した。」

タケル「ヒミコさん、未来を予告出来ますか?」

ヒミコ『……駄目、ぬし達の未来が見えない……』

友奈「そんな……」

東郷「……」

ヒミコ『だが、自らの手で未来を変える事が出来る。それを忘れない事だ。』

タケル「・・・友奈、東郷、俺達の手で未来を変えよう。そうすれば、失った身体が元に戻るかも知れない。」

マコト「園子、お前の失った身体も絶対取り戻してやる。そうすれば、また歩けるようになるはずだ。」

園子「ター君・・・マー君・・・ありがとう・・・返してあげて。彼女達の街へ。」

大赦が拝んだ。

園子「何時でも待つてるよ。大丈夫、こうして会った以上、もう大赦側もあなたの存在をあやふやにしないだろうから。」

東郷「・・・」

園子「そうだ、ター君、マー君。」

タケル「何？」

園子「あの子は元気してる?」

タケル「・・・ああ、元気してるよ。」

マコト「今でも頑張ってる。」

園子「そう、ありがとう・・・」

夜、友奈と東郷を乗せた大赦の車が走る。その後ろからCRF250Lとマシンフー  
デーが付いて行く。

友奈「……………っ!」

何かを決心した友奈が、東郷を抱き締めた。

東郷「友奈ちゃん……………」

友奈「勇者部五箇条……………なるべく諦めない!」

東郷「友奈ちゃん……………」

友奈「東郷さん、大丈夫だよ!私、ずっと一緒に居るから!何とかして方法を見付け  
るから!タケルさんやマコトさんも未来を変えようって言ってた。だから、一緒に身体  
を戻す方法を見付けよう!」

東郷「友奈ちゃん……………」

新たな戦いが再び始まった。

「END」

## 第九話 「姉妹！心の痛みを判る人！」

風「その話、樹や夏凜には話した？」

友奈「いえ、まずは風先輩に相談しようと思って・・・」

風「そう・・・じゃあ、まだ2人は話さないで。確かな事が分かるまで、変に心配させたくないから。」

友奈「分かりました。」

マコト「勿論だ。」

タケル「それと、アカリや御成やカノンちゃんにも話しておく。他の2人は内緒と言う条件で。」

すると雨が降り始めた。

マコト「雨。」

タケル「早く戻ろう。」

放課後のかめや。タケルとマコトと風が来店してる。

キヤスター『消防などの調査によると、東西凡そ4000平方メートルに渡って、地面に陥没や罅割れが発生しました。幸い、通行人や民家などに被害はありませんでした。』

タケル「樹海が枯れたせいで、また被害が・・・」

マコト「絶えないものだな・・・」

店員「どうぞ。」

風「あ、はい。」

うどんが来た。

店員「最近皆と一緒に来ないのね。」

タケル「えっと・・・」

風「ちよつと今、友達の調子が悪くて・・・まあでもすぐに治りますよ。そいつにはこうやって・・・てやあ!って、私の女子力を注ぎ込んでおきますから!一緒にこの店のうどんパワーも注ぎます!うどんと女子力は万病に効きますからね!」

マコト「女子力も必要なのか?」

店員「くすつ、凄いのね!」

マコト「その友達が治ったらまたこの店に来るからな。」

夜の犬吠埼家。

アカリ「風ちゃん、最近元氣無いね。」

御成「何処か具合でも悪いんですかな？」

風は、大赦にメールを送信した。

後日の讃州中学校。風が職員室へ向かう途中。

風「ん？」

目の前に、樹が2人のクラスメイトの誘いを受けていた。樹はスケッチブックで会話すると、2人のクラスメイトが残念な顔をした。

クラスメイト「じゃあ、また今度ね。」

2人は樹と別れた。スケッチブックには『ごめん、日曜は用事があったて．．．』と書いてある。

風「クラスの友達?誘われたんだっいたら行って来たたら良いのに。」

樹「カラオケで歌うのが好きな人たちなんだ。私がいると気を使ってカラオケ行けないから……」

彼女は散華のせいで声を失っており、カラオケに行けない状態だった。

風「……でも!」

担任「犬吠埼さんのお姉さん?」

風「えっと、樹の担任の先生?」

担任「はい。」

アカリ「風ちゃん。」

風「アカリさん?」

アカリ「ちよつと担任の先生に呼び出されちゃつて。」

担任「あの……この後少しお時間を取れますか?」

風「大丈夫ですけど……」

その後、少人数教室で担任と話をする。

担任「樹さんの今の状態は、一部の授業に支障が出ております。」



風「え？あの子が誰かに迷惑を掛けたんですか？」

アカリ「まさか、虐めに遭ったんですか？」

担任「いえ、他の子と虐めでは無く、樹さんご自身の問題で……」

アカリ「樹ちゃんにですか？」

担任「はい。音楽の歌の練習なども、樹さんは出来ませんし、ある程度は授業内容を変えらる事に対応しておりますが……あまり露骨な変更は、逆に樹さんが気に病まれるでしょうし……」

アカリ「そうですか……（この前タケルが言っていた散華のせいね……）」

散華で声を失っており、音楽の授業で歌の練習が出来ないのだった。

風（大丈夫……きつと治るから……医者だつて治るつて言つてたんだから……）

夕方の犬吠埼家。風とアカリが夕食を作っている。

風「樹く、ご飯出来たわよ？」

しかし樹が来ない。

アカリ「ん？樹ちゃん？」

風「樹?樹く、ご飯だよ?」

御成「樹殿?」

風「寝てる?」

部屋の戸を開けると、樹が机の上で寝ていた。

アカリ「寝てるわね。」

風「樹。」

アカリ「樹ちゃん起きて?ご飯だよ?」

寝ている樹を起こした。

夕飯を食べる。4人は無言のまま食事を進める。

風「・・・えつとさ、ああ・・・ここん所ずつと天気悪いよね。鞆に折り畳み傘入れておいた方が良くいよ?」

御成「そうですね。雨が何時降るか分かりませんぞ。」

樹は頷く。

風「ああ・・・えつと・・・そ、そう言えば、文化祭の劇そろそろ練習を始めないとね!体育館のステージとか借りて、バーンつと稽古!」

樹「……」

アカリ「どうしたの？」

風「まさか！私の脚本に不備が!？」

樹がスケッチブックで会話を始めた。

『私、セリフのある役はできないね。』

声を失ってる為舞台には立てない。

風「そ、そっか……」

アカリ「樹ちゃん……」

樹『だから、裏舞台の仕事をがんばるね。』

風「だ、大丈夫だって！治るよ！きつと文化祭までには！」

御成「そうですぞ！文化祭までにはきつと治りますぞ！」

夜、風が鏡で自分を見る。眼帯を取ると、目のハイライトが消えている。

風「絶対治る・・・だって皆、何も悪い事なんか・・・してないじゃない・・・」

アカリ「風ちゃん。」

風「アカリさん？」

アカリ「どうしたの？」

風「・・・アカリさん。」

アカリ「ん？」

風「私達は、治るのかな・・・？」

アカリ「くすつ。」

するとアカリが風を優しく抱いた。

風「つ・・・？」

アカリ「大丈夫、きつと治るよ。だってタケルやマコトや私達も居る。皆で協力して、治す方法を見付けようね?そうすれば、」

風「アカリさん・・・つ・・・」

彼女は涙を流して泣いた。アカリが風を優しく撫でる。

休日の東郷家。タケルと友奈と風とアカリと御成が招かれた。

風「どうしたの？東郷。急に呼び出して。」

タケル「何かあったの？」

東郷「風先輩と友奈ちゃんとタケルさんとアカ리さんと御成さんに見て貰いたいものがあつて……」

アカリ「見て貰いたいもの？」

友奈「何？」

すると東郷は、小太刀を持った。

タケル「小太刀？」

友奈「と、東郷さん……？」

小太刀を鞘から抜いた。そして、自分の首を切ろうとした。  
タケル・友奈・風・アカリ・御成「っ!？」

しかし精霊の青坊主が小太刀を止めた。

風「な、何やってるのよ!!! あんた、今精霊が止めなかったら!!!」

東郷「止めますよ。精霊は確実に。」

マコト「東郷はこの数日間、凡ゆる実験を試したんだ。」

タケル「マコト兄ちゃん？」

カノン「東郷ちゃんは、10回以上自害をしようとしたの・・・」

アカリ「カノンちゃん？」

マコト「切腹、首吊り、飛び降り、一酸化炭素中毒、服毒、焼身を試したら。」

東郷「全て精霊が止めました・・・」

刑部狸が小太刀を持って行った。

タケル「マコト兄ちゃん達は知っていたの？」

マコト「知っていたと言うか、実験に付き合ってくれと東郷から依頼されたんだ。」

風「何が、言いたい・・・？」

東郷「今私は、勇者システムを起動させていませんでしたよね？」

友奈「っ！そう言えばそうだね！」

タケル「じゃあまさか・・・」

東郷「それにも関わらず、精霊は勝手に動き、私を守った。精霊が勝手に・・・」

風「だから、何が言いたいのかよ！東郷！」

御成「ご説明お願い出来ますか？」

東郷「精霊は、私達の意味とは全く関係無く動いている。と言う事です。私は今まで、精霊は勇者の戦うと言う意思に従っているんだと思っていました・・・でも違う・・・精霊に勇者の意思は関係無い・・・それに気付いたら、この精霊と言う存在が、違う意味を持っているように思えたのです・・・精霊は、勇者のお役目を助けるものじゃなく、勇者をお役目に縛り付けるものじゃないかって・・・死なせず、戦わせ続ける為の装置なんじゃないかって・・・」

風「っ・・・！」

友奈「で、でも！精霊が私達を守ってくれたって事なら、悪い事じゃないんじゃないかな・・・？」

東郷「そうね・・・それだけなら悪い事じゃないかも知れない・・・」

マコト「だが、その甘い考えは通用しない。」

東郷「そう、精霊が勇者の死を必ず阻止するなら、乃木さんが言っていた事はやはり当たっていた事になる・・・」

風「勇者は、決して死ねない……」

東郷「彼女の言っていた事が真実なら、私達の後遺症は治らないと言う事も……」

風「そんな……」

マコト「乃木園子と言う前例があったと言う事は、大赦は勇者システムの後遺症を知っていたと言う事になる。その事実を知らない勇者達は、ずっと騙されている。」

タケル「じゃあ大赦は、勇者システムの後遺症をずっと隠蔽していたと言う事なの？」

マコト「そうだ。」

タケル「そんな事が……」

風「……待つてよ……じゃあ……樹の声は……?」

アカリ「そうだよ、樹ちゃんの声はどうなるの……?戻らないの……?」

マコト「残念だが、戻らないかも知れない……」

真実を聞いた風が崩れて泣いた。

アカリ「風ちゃん!」

御成「風殿!」

風「知らなかった……知らなかったの……人を守る為……身体を捧げて戦う……?それが勇者……?……つ……私が……樹を勇者部に入れたせいで……」

アカリ「風ちゃん……」



タケル「風……」

マコト「くっ……」

数日後の夕方、夏凜が自転車で犬吠埼家に向かった。

『天空寺タケルと深海マコトを除き、犬吠埼風を含めた勇者四名が精神的に不安定な状態に陥ってます。三好夏凜、あなたが他の勇者を監督し、導きなさい。』

と、大赦からのメッセージが来た。

夏凜「……」

その頃風は、リビングで大赦にメールを送っていた。

アカリ「樹ちゃんの声が戻らないなんて……」

御成「一体どうすれば、この状況を覆せるのでしょうか……」  
すると電話が鳴った。

アカリ「電話？」

風「はい、犬吠埼です。」

藤原『突然のお電話失礼致します。伊予乃ミュージックの藤原と申します。』

風「伊予野ミュージック?」

藤原『はい。犬吠埼樹さんの保護者の方ですか?』

風「はい、そうです・・・」

藤原『ボーカリストオーディション一次審査通過しましたので、ご連絡差し上げました。』

風「え、な、何の事ですか?」

藤原『あ、ご存知無いですか?樹ちゃんが弊社のオーディションに・・・』

風「い、何時?」

藤原『3ヶ月程前です。』

風「っ!?!」

藤原『樹さんからオーディション用のデータが届いています。』

この話を聞いた風が、受話器を落とした。

藤原『あの、どうしたんですか?もしもし?もしもし?』

アカリ「あ、すみません。また後で電話しますね。それじゃあ。」

受話器を置いて電話を切る。

アカリ「樹ちゃんが、ボーカリストオーディションに応募したなんて……」  
御成「樹殿、何時の間に……」

風「樹！」

部屋には、樹の姿が無い。

樹「居ないの？」

アカリ「樹ちゃん？何処なの？」

机の上のノートには、樹が書いた体の調子を良くする健康法があった。そして次のページには、歌う!!の言葉が大きく書かれてあった。

御成「これは……」

更に、声や喉の調子を良くする為の本が数冊あった。

アカリ「樹ちゃん、ずっとこれをやっていたの……?」

御成「風殿、アカリ君、あれを。」

風「っ!？」

ノートパソコンがあつた。そこには、喉に効くハーブティーのページが。

アカリ「樹ちゃん……ん？風ちゃん、これ見て。」

風「え？」

オーディションのファイルを発見し、クリックする。

樹『えつと・・・これで・・・あれ!もう 録音されてる?ボ・・・ボーカリストオー  
ディションに応募しました犬吠埼樹です。讃州中学1年12歳です。宜しく願いま  
す。』

アカリ「樹ちゃんの声だわ・・・」

それは、樹がボーカリストオーディション用に録音した音声だった。

樹『私が今回オーディションに申し込んだ理由は・・・勿論歌うのが好きだって事が一番ですけど、もう一つ理由があります。私は歌手を目指す事で、自分なりの生き方みたいなものを見つ付けたいと思っています。私には大好きなお姉ちゃんが居ます。お姉ちゃんは強くてしっかり者で何時も皆の前に立って歩いていける人です。反対に私は、臆病で 弱くて、何時もお姉ちゃんの後ろを歩いてばかりでした。でも、本当はお姉ちゃんの隣を歩いていけるようになりたかった・・・だからお姉ちゃんの後ろを歩くんじやなくて自分の力で歩く為に私自身の夢を私自身の生き方を持ちたい。その為に今歌手を目指しています!』

風・アカリ・御成「っ！」

樹『実は私、最近まで歌を歌うのが得意じゃありませんでした。あがり症で人前で声が出なくて……でも、勇者部の皆のお陰で歌えるようになって今は、歌を歌うのが本当に楽しいです！そして、私が好きな歌を一人でも沢山の人に聴いてほしいと思つていきます！』

すると風のスマホに大赦からの返信が来た。

『勇者の身体異常については調査中。しかし肉体に医学的な問題は無く、じきに治るものと思われます。』

巫山戯た返信が来たのだった。

樹『あ、勇者部と言うのは私が入っている部活です。勇者部では保育園の子供達と遊んだり猫の飼い主を探したり。私、人見知りだから部に入った最初はちよつと不安でした。でも、部の皆は優しくして今は、部活の時間がすつごく楽しいです！あつ、ごめんなさい！余計な事まで話し過ぎちゃいました。では歌います。』

そして曲が流れて樹が歌い始めた。

アカリ「樹ちゃん……」

御成「樹殿……」

風「……!!!」

立ち上がった風が、リビングのテーブルの上で泣いた。  
アカリ「風ちゃん……!」

樹『あのねお姉ちゃん、私、やりたい事が出来たよ。』

風『何何? 将来の夢でも出来たの? だったらお姉ちゃんに教えてよ。』

アカリ『私も聞きたい。樹ちゃんの将来の夢。』

御成『樹殿の将来の夢、拙僧も聞きたいですぞ。』

樹『うくん……秘密。』

風『えく? 酷いく。誰にも言わないから。』

アカリ『私達だけの秘密と言う前提で話してみて?』

御成『お願いします。樹殿。』

樹『何時か教えるね。』

3人は、樹の将来が歌手だと知った。

風「ううう……うわあああああああああ!!!」

叫んだと同時に、勇者システムが起動した。

アカリ「風ちゃん!!!」

御成「風殿!!!」

!!!」

外では、夏凜が居た。すると勇者に変身した風が何処かへ飛んで行くのが見えた。

夏凜「っ!」

すぐに勇者に変身して風を追う。

アカリ「風ちゃん!!!」

御成「アカリ君、どうしましょう!!!」

アカリ「タケルとマコトに連絡よ!!!」

すぐにタケルとマコトに連絡する。

そして風は、何処かへ向かっている。

夏凜「待ちなさい!!!」

追跡してる夏凜が風を足止めするが、風が夏凜から逃げる。

夏凜「あんた!!何するつもり!?!」

風「大赦を、潰してやる!!!」

夏凜「なっ!?!」

風「大赦は私達を騙してた!!!」

夏凜「え!?!」

風「満開の、後遺症は治らない!!!」

夏凜「何を!?!」

自分を追い続ける夏凜と対峙する。

風「大赦は、初めから後遺症の事を知っていた!!!なのに・・・何も知らせないで・・・私達を生贄にしたんだ!!!」

夏凜「そんな適当な事を・・・」

風「適当じゃない!!!犠牲になった勇者が居たんだ!!!」





しかしゴーストとスペクターと友奈が風の大剣を防いだ。

夏凜「友奈!! タケル!! マコト!!」

タケル「風!!! 止めろ!!!」

マコト「夏凜を殺すつもりか!!!!」

風「退きなさい!!!」

友奈「嫌です!!!風先輩が人を傷付ける姿なんて、見たくありません!!!」

風「そんな事が許せるかあああああ!!!」  
すると友奈の満開ゲージが1つ増えた。!!

友奈「分かっています!!!」

風「だったら!!!」

タケル「だけど、後遺症の事を知らされても、結局皆は戦っていた!!!」

風「え・・・!?」

友奈「世界を守る為にはそれしか無かった!!だから誰も悪くない!!選択肢なんて誰にも無かったんです!!!」

風「それでも!!!知らされてたら・・・私は皆を巻き込んだりはしなかった!!!そしたら・・・少なくとも皆を・・・樹は無事だったんだあああああ!!!」

友奈「くっ!!!」  
!!!

タケル・マコト「っ!!!」

友奈「風先輩!!!そんなの違う!!!駄目です!!!」

夏凜「っ!?!」

風「何が・・・違うんだあああああ!!!」  
!!!

友奈「駄目!!!!!!」

彼女の強烈なパンチで風を飛ばした。

タケル「ヒミコさん!!!」

ヒミコゴースト眼魂を装填した。

『カイガン!・ヒミコ!・未来を予告!・邪馬台国!』

タケル「正気に戻ってくれ!!風!!!」

キドウフードが神秘のフィールドを作り、風の邪気を吸い取った。

風「があああああ!!!」

友奈「風先輩を止められるなら、これぐらい!!!」

怒りが吸われた風が崩れた。

友奈「だって私は、勇者だから!!」

風「友……奈……?」

彼女は、友奈の満開ゲージが満タンになってる事に気付いた。

友奈「っ?」

そこに樹が現れ、後ろから風を抱いた。

風「樹……?」

樹は悲しい顔で首を横に振った。

風「ううう……………」

タケル「風……………」

マコト「樹……………」

風「ごめん……………ごめん……………皆……………」

すると樹が、風にメッセージを見せた。

風「っ……………」

『私達の戦いは終わったの。もうこれ以上、失うことは無いから。』

風「でも……………でも！私が、勇者部なんて作らなければ……………」

樹が風にある物を見せた。それは、以前音楽の歌のテストの前に送られた勇者部からの寄せ書きだった。その寄せ書きに樹が手紙を書いた。

風「樹……………」

『勇者部のみんなと出会わなかったら、きっと歌いたいって夢も持てなかった。勇者部に入って本当によかったよ。樹』

友奈「風先輩、私も同じです！だから、勇者部を作らなければなんて言わないで下さい。」

タケル「君が勇者部を作ってくれたお陰で、樹ちゃんに元気が出たんだよ。」

マコト「風、もうこれ以上自分を責めないでくれ。勇者部五箇条。困ったら相談だぞ。」

風「う、うう………うわああああああ!!!」

全てが許された風が泣いた。樹が風を慰める。

「END」

## 第十話「部活!愛情の絆!」

これは、ある少女の過去の話。

小さい頃、東郷は色々な史跡に連れて行つて貰い、歴史や国に興味を持った。母によると、東郷の家にも大赦で働く一族の血が入っていると。もしかしたら、彼女にも神樹様にお使い出来る力があるかも知れない。もしそうならとても嬉しい。と母は微笑んだ。

そして時が流れ、彼女は暗い病室で目を覚ました。

東郷「ここは・・・?」

右手を見ると、リボンが結んであった。

医者によると、事故で2年程の記憶と足の機能が失われてしまったと。そして彼女の名前は、鷲尾須美から東郷美森に改名された。

それから記憶が戻る事は無かったが、その2年間もしつかり生きていたと、自慢の娘だと母は言ってくれた。



そして彼女に、5人の人物がお見舞いに来てくれた。それは、天空寺タケル、深海マコト、月村アカリ、御成、深海カノンの5人だった。彼らは2年間ずっと東郷のお見舞いに来てくれたと母は言っていた。

そして車椅子の生活が慣れてきたと同時に、両親の仕事の都合で引越しが決まった。タケル達5人もその引越しへ行った。

引越し先は、とあるお屋敷。

東郷「わあく、大きい。うちってここまでお金持ちだったっけ？」

タケル「そうだね。君のお家は凄いよ。」

アカリ「じゃあ入ろうか。」

車椅子をアカリが押して敷地内に入る。すると後ろから。

??? 「こんにちは〜！」

東郷「ん？」

1人の少女が声を掛けてくれた。

少女「もしかして、あなたがこの家に住むの?」

東郷「え、ええ・・・」

タケル「そうだよ。俺達もここに住むんだ。」

少女「じゃあ新しいお隣さんだ!あ、私は結城友奈。宜しくね!」  
握手した。

東郷「東郷美森・・・」

友奈「東郷さん!?!格好良い苗字だね!」

東郷「あ、ありがとう・・・」

友奈「それで、皆さんのお名前は?」

タケル「俺は天空寺タケル。」

マコト「深海マコトだ。」

アカリ「月村アカリよ。宜しくね。」

御成「拙僧は御成と申します。以後、お見知り置きを。」

カノン「私は深海カノンです。」

友奈「天空寺!?! 深海!?! 格好良い苗字ですね!」

タケル「そ、そうかな?」

友奈「そうだ! この辺よく分からないでしょ? 何だつたら案内するよ! 任せて!」

こうして7人は、桜の木の道を進んだ。東郷が桜の花びらを掴んだ。

タケル「桜の木がこんなに沢山。」

アカリ「綺麗だね。」

御成「これは、お花見に最適なスポットですぞ。」

友奈「ねえ? 凄いですよね?」

タケル「あ、俺達の事は敬語じゃなくても良いよ。堅苦しいのちよつと苦手だから。

後名前で呼んでくれても良いよ。」

友奈「そうなの? じゃあタケルさん、マコトさん、アカリさん、御成さん、カノンちゃ

ん、宜しくね!」

タケル「うん。宜しく。」

後日、友奈と東郷が讃州中学校の制服を身に纏った。タケル達は先に讃州中学校へ行って手続きを済ませに行った。

放課後の神社で、東郷が作ったぼた餅を食べる。

友奈「・・・っ!」

東郷「え?」

友奈「ん~~~~~~~~・~~~~~~~~!!美味しい~~~~~~~~!!!」

!!!!!!

東郷「良かった~~~~結城さんが気に入ってくれて。」

タケル「このぼた餅美味しい!」

アカリ「美味しい!」

カノン「美味しいね!お兄ちゃん!」

マコト「そうだな。このぼた餅美味しいな。」

御成「ん〜！これは美味ですぞ！」

東郷「車椅子でお菓子作るのによく慣れたの。」

友奈「東郷さん!!もし出来れば毎日食べたい!!東郷さんのお菓子!!」

東郷「え？う、うん。分かった・・・ゆ、友奈ちゃん・・・」

後日の讃州中学校。タケル達は先に行っていた。

東郷「友奈ちゃん、チアリーディング部から誘われたんでしょ？入らないの？」

友奈「押し花部からの誘いだったらなく。」

東郷「そんな部活存在しないでしょ？」

友奈「そうだね〜！」

今日は部活の歓迎会。すると。

???「あなた達にお薦めする部活は他にあるわ。」

友奈・東郷「ん？」

1人の女子生徒が2人を見付けた。

女子生徒「あなた達にお薦めする部活は他にあるわ!」

友奈「何故、2回も?」

東郷「どちらの勧誘なんですか?」

風「私は2年の犬吠埼風。勇者部の部長よ。」

東郷「勇者部?」

友奈「何ですかそれ?・・・とってもワクワクする響きです!!!」

東郷「ええ!?!」

実は友奈は、こう言った格好良い響きに興味を持つ性格である。

風「分かる?フィーリング合うね〜!」

勇者部のチラシを見せた。

風「勇者部の活動目的は、世の為人の為にやっていく事!各種部活の助っ人とか、ボランティア活動とか。」

友奈「世の為人の為になる事・・・」

風「うん。神樹様の素敵な教えよね。と言っても私らの教え子は、何かそう言う事したいけど、恥ずかしいって気持ちあるじゃない？そこを、恥ずかしがらずに勇んでやっついていくから勇者部！」

東郷「成る程。敢えて勇者と言う外連味のある言葉を使い、皆の興味を引く事で存在感を確立しているのね。」

風「いや、そこまで深く考えてないって・・・」

友奈「私憧れてたんですよね。勇者って言う言葉の響きに・・・格好良いなうって！」

友奈「おおお！勇者!!!」

東郷「凄い所に食い付くのね・・・でも、何だか友奈ちゃんらしい！」

風に付いて行って、部室へ行くと。

タケル「あれ、友奈ちゃんに東郷？」

友奈「あれ!? タケルさんに皆! どうしてここに?」

マコト「俺達、この勇者部の顧問兼協力者として入ったんだ。」

アカリ「まさか友奈ちゃんと東郷ちゃんが入るなんて思ってたわ!」

御成「ようこそ勇者部へ!」

カノン「宜しくね!」

友奈「うん!宜しくね!」

勇者部活動その1。河川敷のゴミ拾い。東郷はノートパソコンで勇者部の依頼を集める。風と友奈とタケルとマコトとアカリはゴミ拾いをする。

タケル「ゴミが多いな。」

マコト「タケル、アカリ、俺はこんなにゴミを取ったぞ。」

アカリ「多いわね。全く、ポイ捨ては禁止だって言うのに。」

風「2人が入ってくれたお陰で、勇者部の戦力は3倍に膨れ上がったと言っても過言では無いわ!」

友奈「聞き覚えの無い部活だと思ったら、1からのスタートだったとは。」

風「全部これからなんだよね。」

東郷「あ、この間立ち上げたホームページに早速依頼が来ています!」

風「ナイス宣伝!東郷!」



東郷「友奈ちゃんは陸上部から。私は将棋部から。」

友奈「よくし頑張るぞ〜！私は勇者になる!!」

御成「流石ですぞ友奈殿！」

カノン「友奈ちゃん格好良い〜！」

東郷「くすつ、早速空いてる日を予定で埋めておきますね。」

風「お願いね〜！」

勇者部活動その2。勇者部五箇条考案。

風「悩んだら相談っと。」

友奈「こう言う五つの誓いみたいなの良いですね！」

風「何か引き締まる感じするっしょ？」

タケル「残りの1つはどうするの？」

友奈「最後だからビシツとしたいよね〜。」

風「成せばなる、成さねばならぬ、何事も！とかどうか？」

タケル「それって、上杉鷹山さんの名言？」

風「そう!それそれ!」

友奈「よ、鷹山・・・?ちよつと難しい言葉のような・・・」

アカリ「難しく考えちゃ駄目だよ?友奈ちゃん。」

東郷「・・・成せば大抵何とかなる!とか?」

友奈「それならバツチり分かる!!」

風「よし、じゃあ決まりね!」

五箇条五つ目・なせば大抵なんとかなる。が出来上がった。

時が流れて新しい春。勇者部に新しい部員が入った。

風「緊張し過ぎよ樹く。」

樹「い、犬吠埼樹です!よ、よよよ・・・宜しくお願いします!」

親友部員は、風の妹の犬吠埼樹だった。

友奈「宜しく!樹ちゃん!」

樹「は、はい!!」

アカリ「ようこそ樹ちゃん。」

風「私の妹にしては女子力低いけど、それ以外は中々よ?」

アカリ「確か、タロットカード占いが出来るのよ。」

友奈「おお! 凄いやゝ!」

褒められた樹が顔を赤くした。

友奈「あ、占い好きならこれあげる。縁起物だよ?」

四つ葉のクローバーのキーホルダーを樹にあげた。

樹「わあく、か、可愛い!」

友奈「でしよ? はい。」

樹「・・・ん? え?」

そこにハットを被った東郷が。ハットを取って、白い布を被せた。そして布を取る  
と・・・

東郷「はい!!」

ハットから鳩が出て来た。

樹「ええええ!?!す、凄い!!どうやったんですか!?!」

東郷「知りたい?」

樹「はい!!」

マコト「東郷が練習していたのは手品だったとはな。」

タケル「でも結構上手。」

風（ありがとね。皆。）

後日。学校新聞に勇者部の記事が載った。

友奈「おお!載ってる!」

樹「恥ずかしいです・・・」

風「でも認められるのは嬉しいね。」

東郷「ユニークって褒められてますし。」

アカリ「このまま一気に活動を広げようね！」

友奈「よし！次は保育園でのレクリエーション！頑張ろう！」

全員「オーヨー!!」

レクリエーション内容は人形劇。友奈と東郷とアカリとカノンが人形作り、風が脚本作成、樹が音楽制作、タケルとマコトと御成が人形劇舞台の制作。

保育園の外。マコト、アカリ、御成、カノンは教室内に居る。

友奈「いよいよ本番だね。」

タケル「うん。」

風「やるからには最高の一時を提供してくれるわ！」

樹「お姉ちゃんももう役に入ってる・・・」

タケル「もう魔王に取り憑かれたの？」

風「東郷、掴みは頼んだ！」

東郷「頼まりました！」

風「我が懸念しているわ!うぬと樹よ!」

友奈「私達なら!」

樹「大丈夫!」

風「お主!冒頭を頼むぞ!」

タケル「分かってるよ。」

人形劇後の夕方。

風「友奈がセットを倒した時は、ギャーっと思ったけど、東郷の機転で助かったわ。」

友奈「逆に受けてましたものね。」

風「うんうん!」

タケル「だけど、今後は演技に熱を出してセットを倒さないようにね?」

友奈「はあくい。フオーありがとう、東郷さくん。」

東郷「本当、東郷には助けられっぱなしね。」

樹「何だか、頼れるお姉ちゃんが出来たみたいです。」

アカリ「あ、地雷踏んだ。」

風「なっ!?ここに素晴らしい姉が居るでしょー!」

樹「きゃあああああ!!!」

逃げる樹を捕まえてグリグリした。

全員「あははははははは!」

マコト「本当、仲の良い姉妹だな。」

カノン「私とお兄ちゃんみたい。」

友奈「でも楽しかったし、結果オーライだね!」

東郷「うん!」

御成「まあまあ風殿、落ち着いて下さい。」

アカリ「樹ちゃん大丈夫?」

そして彼女達は、本当の勇者になったのだった。

時が流れて数ヶ月。

勇者の役目は、12体全てのバーテックスを倒す事。天空寺タケルと深海マコトの仮面ライダーと彼女達勇者は力を合わせて使命を果たした。だが、その後彼女達に待つて

いたのは、身体の機能の欠損だった。大赦の意見を信じて、治ると願っていた。だが、乃木園子と出会って、東郷にとても大事な過去がある事が分かった。同時に悍ましい真実を予感してしまった。調べていくうちに、その予感は確信へと変わっていき、今に至る。

ある部屋で、小太刀を持った東郷が自決しようとした。

カノン「お兄ちゃん、止めないの?」

マコト「止めるなって東郷に言われた。」

精霊が勇者のお役目を助けるだけじゃなく、勇者と言う役目に縛り付けるものなら……

園子『その代わり、決して勇者は死ぬ事が無いんだよ?』

彼女は意を決して、切腹した。



しかし精霊の青坊主が切腹を防いだのだった。

東郷「やっぱり・・・」

マコト「どうだ？」

東郷「精霊が、守っています・・・」

マコト「何だと・・・？」

夜、首吊りや飛び降りや一酸化炭素中毒や溺死を試したが、どれも失敗に終わった。どの方法でも必ず介入する精霊達。スマホのバッテリーが切れても精霊は動く。

今度は服毒を試みたが、精霊が毒を取り除いた。これも失敗に終わった。

東郷「何が何でも私を生かそうとしている……これが、ただの緊急安全装置だったら素晴らしい事だけ……でも、私の出した結論は違う……彼女に会わなくちゃ……」

翌日、車に乗った東郷は田鶴中央病院へ向かった。

病室。

園子「やっぱり来てくれた。分かってたよ。この前は嬉し過ぎて話が飛び飛びだったけど、今日はちゃんと纏めてあるからね。わっしー。あ、東郷さんかあ。」

東郷「わっしーでも良いわ。記憶が飛んじやってるけど。その役2年間、私は鷲尾と言う苗字だったのだから。」

園子「わあっ!凄くいい!よく分かったね。」

東郷「適正検査で、勇者の資格を持っていると判断された私は、大赦の中でも力を持

つ鷲尾家の養子として入る事になり、そこでお役目に着いた。」

園子「鷲尾家は立派な家柄だからね。高い適正値を出したあなたを、娘に欲しかったんだよ。」

東郷「私の両親は、それを承知したのね・・・」

園子「神聖なるお役目の為だからね。」

東郷「私は、あなた達と一緒に戦い、散華して記憶の一部と足の記憶を失った・・・敵を殲滅出来る力の代償として、身体の一部を供物として神樹様に捧げる勇者システム・・・」

園子「うん。私はもっと派手にやっちゃって・・・今はこんな感じだけだね・・・」

東郷「私は・・・」

園子「大赦は、身内だけじゃやっていけなくて、勇者の素質を持つ人を全国で調べたんだよ。」

東郷「東郷の家に戻されて、両親も事実を知ってて、黙っていた・・・事故で記憶喪失と嘘まで吐いて、引越しの場所が友奈ちゃんの家隣の隣だったのも、仕組まれたもの・・・」

園子「彼女、勇者の適正値が一番高かったんだって。大赦側も、彼女が神樹様に選ばれたって分かってたんだろうね。」

東郷「満開してからは、家の食事の質が上がってたわ。」

園子「大赦が手当てとして、家に充分な援助をしているんだろうね。」

東郷「今思えば、合宿の時も豪華なものだった。あれは労っていたんじゃないやなくて、祀っていたのね・・・私達を・・・そして親達は事情を分かかって、今も黙っている・・・」

園子「神樹様を選ばれたんだから、喜ばしい事だって納得したんだろうね。」

東郷「つ・・・どうして私達がこんな・・・神樹様は人類の味方じゃなかったの・・・？」

園子「味方ではあるけど、神様だからね。そう言う面もあるよ。そもそも・・・落ちて着いて聞いてね？」

東郷「え？」

園子「壁の外の秘密、この世界の成り立ちを教えてあげる。」

東郷「え？」

園子「あのね・・・」

すると東郷のスマホに友奈からの電話が来た。そして園子から驚愕の言葉を聞いて驚きを隠せなかった。

友奈『もしもし? 東郷さん? 昨日の話、私ショックだったけど、樹ちゃんの事もある

し、風先輩が心配になって、大丈夫かな……？また連絡するね？」

電話が切れた。

園子「真実は、あなた自身の目で確かめると良いよ。」

東郷「……」

園子「どう言う結論を出しても、私は味方だからね。本当は、私は今の勇者達が何かの形で暴走したら抑える役目なんだ。」

東郷「抑えるって、その身体で……？」

園子「私の精霊の数は、21体。」

東郷「っ!？」

何と園子の精霊の数は21体、つまり20回も散華したのだった。

園子「えへへ、凄く強いんだよ？戦いになったら、大量の武器でズガンだよ。普段は怖がられて、手元のスマホが無いから変身出来ないんだよね。」

東郷「……辛い……でしょ……？20回も散華して……」

園子「うん……何も出来ないからね……神樹様の身体に近付けたからって、こんなに祀られた所で、私は……」

東郷「……っ!？」

園子「でも今はね、不思議と辛くないんだよ……もうちよつとだけ、ここに居てくれる……?」

東郷「……うん……」

そして東郷は、勇者に変身して壁の向こうを見る。

東郷「綺麗な景色だけ……」

壁を越えて結界を出ると……

東郷「え……?」

地獄のような光景が目映った。

無数のバーテックスが浮遊していた。

園子『壁を越えれば、神樹様が見せていた幻が消えて、真実が姿を表すよ。』

彼女の言葉は事実だった。

東郷「何て事なの……？あの子が言った通り……これが本当の世界……？世界は……宇宙規模の結界の中……？っ!？」

するとバーテックス達が東郷を発見して近付いた。東郷が避けながら拳銃で攻撃する。

園子『人類を滅亡寸前に追いやったのは、ウイルスなんかじゃないんだよ。天の神様

が粛清の為に使わせた生物の頂点・・・バーテックス。西暦の時代、世界は彼らに突如襲われた。人類に味方をしてくれた他の神様達は、力を合わせ、1本の大樹となり、四国に防御結界を張った。その時、神様の声を聞いたのが、今の大赦。神樹様を管理している人達。』

東郷「はあ・・・はあ・・・丸で地獄じゃない・・・っ!」  
バーテックス達が集まる方を見ると。

東郷「あれって・・・友奈ちゃんが倒したはずの・・・!?!」  
以前に友奈が倒したはずのヴァルゴ・バーテックスが。

東郷「バーテックスが生まれてる!?!」  
無数のバーテックスは、1つに集合し、ヴァルゴ・バーテックスとして融合し始めている。

東郷「此奴らがまた、次々と攻めて来るの・・・?私達が迎え撃つの・・・?何回も、身体の昨日を失いながら・・・何回も・・・!?!」

園子『身体が樹木のように動かなくなつて、最後は・・・こうして祀られる・・・』



地獄の光景を目にした東郷は、すぐに四国へ逃げた。

東郷「はあ・・・はあ・・・はあ・・・う・・・う・・・うわああ・・・この苦しみを1つ1つまた味わう・・・それも皆が・・・絶対・・・絶対駄目よそんなの・・・どうすれば良いの・・・？考えなきや・・・考えなきや・・・皆を助けなきや・・・っ！」

すると、考えが浮かんだ。

東郷「あつた・・・たつた1つだけ・・・」

そして今に至る。友奈達のスマホに謎のアラームが鳴り始めた。

友奈「何!?!」

タケル「このアラームは!?!」

マコト「樹海じゃない・・・これは?」

夏凜「何で敵が来るのよ!?!」

友奈 「可笑しいよ・・・アラームが鳴り止まないよ!」  
そして彼らは飲み込まれた。

樹海。

友奈 「そんな!パーテックスは全部倒したはずじゃ!」

アカリ 「皆ーーーー!!」

タケル 「アカリ!御成!」

マコト 「カノン!」

御成 「これは一体!?パーテックス達は倒されたはずじゃ!」

タケル 「分からない。俺達も何が起こったのか想像出来ない・・・」

夏凜 「落ち着きなさい!まずは現状確認!」

スマホでマップを確認する。

夏凜 「想定外の敵が来ようが、私が・・・っ!」

マコト 「どうした?」

夏凜 「何・・・これ・・・?」

無数のバーテックス達が進行し始めたのだった。

壊された壁からバーテックス達が押し寄せて来た。その壁を破壊したのは、東郷だった。

東郷「私一人が生贄ならまだ良かった・・・友奈ちゃん達を供物にするなんて・・・許さない・・・皆を・・・もう苦しめない・・・待つて友奈ちゃん！皆！神樹様を倒してしまえば、苦しみから解放される！！生き地獄を味わう事も無い！！」

狙撃銃で壁を破壊し始めた。

東郷「こんな世界・・・私が終わらせる！！」

本当の地獄が、始まった。

「END」

## 第十一話「情熱!無限罪化!」

壁の上の東郷を見て、2人が困惑する。

友奈「東郷さん……?はっ!」

バーテックス達が東郷を襲うが、東郷がオールレンジでバーテックス達を駆逐した。

友奈「東郷さん……何をしているの……?」

タケル「一体、君は何をしたの……?」

東郷「……」

友奈「東郷さん!!!」

タケル「答えてくれ!!君は何をしたの!」

東郷「壁を壊したのは、私よ。」

友奈「え……?」

タケル「何で……?何で壊したんだよ!」

東郷「友奈ちゃん……タケルさん……私、もうこれ以上……あなた達を傷付けさせないから!!」

タケル「傷付けさせないって……どう言う事……?」

友奈「っ！」

真横からバーテックス達が現れた。

夏凜「てえええええい!!!」

マコト「うおおおおお!!!」

駆け付けたディープスペクターと夏凜によって駆逐された。2人は東郷にディープスラッシュヤーと剣を向けた。

夏凜「どう言う事よ!? 東郷!!」

マコト「壁を壊したってお前!!」

夏凜「自分が何をやっているのか分かってるの!?!」

東郷「分かっている・・・分かっているからやらなければならぬもの!!」

そう言って再び壁を壊しに行った。

友奈「東郷さん!!」

マコト「追うぞ!!」

4人が東郷を追う。すると東郷が結界を抜け、4人も結界を抜けた。

友奈「え．．．？」

夏凜「え．．．？」

タケル「何これ．．．？」

マコト「これは．．．？」

結界の外を見た4人が驚愕した。

友奈「何．．．これ．．．？」

マコト「バーテックス達がこんな．．．？」

東郷「これが、世界の真実の姿．．．壁の中以外、全て滅んでいる．．．そして、バーテックスは12体で終わりじやなく、無数に襲来し続ける．．．この世界にも．．．私達にも．．．未来は無い．．．私達は満開を繰り返して、身体の昨日を失いながら戦い続けて．．．何時か、大切な友達や．．．楽しかった日々の記憶も失って．．．ポロポロになって．．．それでも戦い続けて．．．もうこれ以上．．．大切な友達を犠牲にさ

せない!!!」

タケル・マコト「……………」

東郷「勇者と言う生贄から逃れる為には……これしか方法は無いの!!」  
結界を壊そうとしたが。

夏凜「ま、待って……………」

東郷「夏凜ちゃん……何故止めるの!？」

夏凜「私は、大赦の勇者だから……」

東郷「大赦は真実を隠し、あなたを道具として使ったのに……」

夏凜「道具……?」

友奈「で、でも!!」

東郷「分かって友奈ちゃん……友奈ちゃんや勇者部の皆が傷付いていく姿を……これ以上……見たくない!! 友達が傷付いていくのも……私……もう耐えられない!! 耐え切れない……………」

友奈「東郷さん……? はっ!!」

東郷「っ!？」

後ろからバーテックスの弾丸が来た。

タケル「友奈!!!」

弾丸がゴーストに直撃した。

友奈・東郷「タケルさん!!」

マコト・夏凜「タケル!!!」

『カイガン!ゴエモン!歌舞伎ウキウキ!乱れ咲!』

間一髪ゴエモン魂を纏い、サン格拉斯ラッシャーで弾丸を防いだ。

タケル「ここは危険だ!皆逃げよう!」

夏凜「分かった!!」

4人は結界の中へ逃げた。

結界の中。



友奈「と、東郷さんを!!」

夏凜「駄目!!一旦引いて・・・っ!!」

マコト「来たぞ!!」

バーテックスが結界に入ってきた。

友奈・夏凜「きやああ!!」

バーテックスに直撃され、友奈と夏凜が落下し、変身が解かれた。

タケル「友奈!!!夏凜!!!」

マコト「タケル!!応戦するぞ!!」

タケル「分かった!!」

着地したゴーストとスペクター。

タケル「マコト兄ちゃん!使って!」

エジソンゴースト眼魂をディープスペクターに渡した。

マコト「よし!」

ゴーストはアイコンドライバーGを装着し、ディープスペクターがエジソンゴースト眼魂を装填した。

『ガッチリミナー!コッチニキナー!』

タケル「変身!!」

『ゼンカイガン!ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー!  
!ダ〜イヘンゲ〜!!』

ゴーストがグレイトフル魂に変身した。

『カイガン!エジソン!エレキ!ヒラメキ!発明王!』

ディープスペクター・エジソン魂を纏い、ガンガンセイバーを持つ。

タケル「ムサシさん!ニュートンさん!」

アイコンドライバーGからムサシゴーストとニュートンゴーストを召喚した。

ムサシ「タケル、行くぞ!」

ニュートン「一緒に行きましょう!」

タケル「はい!」

サンダラスラッシュャーを持ち、ディープスペクターとムサシゴーストとニュートンゴーストと共にバーテックス達に立ち向かう。

その頃、樹は怯えており、風は放心状態になってしまっている。

アカリ「タケル・・・友奈ちゃん・・・」

御成「夏凜殿……」

カノン「お兄ちゃん……」

樹は放心状態の風を起こそうとするが、風からの反応は無し。声を出そうとしても、声が出ない。

アカリ「風ちゃん！目を覚まして！」

御成「風殿!!」

カノン「風ちゃん!!」

3人も風を覚まそうとするが、風の反応は無い。

アカリ「っ!!バーテックス!!」

樹「……!!」

別のバーテックス達が現れた。

その頃ゴーストとディープレクターは、ムサシゴーストとニュートンゴーストと共にバーテックスと対峙していた。

タケル「ハアッ!!」

サングラスラツシヤーでバーテックスを斬り裂く。

マコト「フツ!!」

ガンガンハンドから電流を放って痺れさせる。

ニユートン「っ!!」

引力で数体のバーテックス達を吸い寄せる。

ムサシゴースト「ハアツ!!」

吸い寄せられたバーテックス達をムサシゴーストが剣で斬り裂いた。

タケル「キリが無い・・・!」

スペクター「まだだ!」

ノブナガゴースト目魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン!ノブナガ!我の生き様!桶狭間!』

ディープスペクターがノブナガ魂を纏い、ガンガンハンドを複製させて弾丸を放ち続ける。

タケル「ノブナガさん!!」

今度はノブナガゴーストを召喚した。

タケル「マコト兄ちゃんを頼みます!」

ノブナガ「良かろう!マコト、手を貸そう!」

マコト「頼む！」

ガンガンハンド・銃モードでパーテックス達を駆逐し続ける。

同じ頃、友奈と夏凜は。

友奈「っ……？」

落下して気を失っていたが、友奈が目を開けた。

友奈「っ！夏凜ちゃん！」

気を失っている夏凜を起こす。

友奈「夏凜ちゃん!!しっかりして!!夏凜ちゃん!!」

しかし、夏凜は起きない。

友奈「……」

彼女は、東郷の涙を思い出した。

友奈（東郷さん、泣いてた……あんなに悩んで……苦しんでた東郷さんを……私……  
ずっと見てきたのに……きつと私、何か出来る事があつたはずなのに……1番の友  
達なのに……どうして……こんな……っ!?)

ゴーストとディーブスペクターと英雄ゴースト達がバーテックスと戦ってる光景が見えた。

友奈（タケルさん・・・マコトさん・・・そうだ、今は。）

スマホを取り出して、アプリを開く。

東郷『友達が傷付いていくのも・・・大切な人を失うのも私・・・もう耐えられない!!耐え切れない!!』

変身しようとしたが。

“ピー” “ピー” “ピー”

友奈「え?・・・え!?!」

『勇者の精神状態が安定しない為、神樹との霊的経路を生成出来ません』

友奈「え・・・!?!」

精神状態が不安定だった為、変身出来ない状態になってしまっている。

友奈「そ、そんな・・・!」

同じ頃、風達がバーテックスに襲われていた。しかし、樹がバーテックスを倒した。アカリ「……樹ちゃん……？」

御成「樹、殿……？」

次々と押し寄せて来るバーテックスを、避けながら懸命に戦う。

カノン「樹ちゃん……」

すると、放心状態だった風が目を覚ました。彼女は、樹が戦っている光景を目にした。

風「樹……？」

バーテックスが樹に突進して落としたが、木霊が樹を落下寸前で助けた。

アカリ「樹ちゃん！頑張つて！」

御成「拙僧達が応援してますぞ!!」

カノン「負けないで!!」

風（どうして・・・どうして、そこまで・・・？）

樹『ありがとう。何となく・・・言いたくなつたの。家の事とか勇者部の事とか、お姉ちゃんにばかり大変な事させて・・・』

風（樹・・・）

樹『臆病で弱くて、何時もお姉ちゃんの後ろを歩いてばかりでした。でも本当は私、お姉ちゃんの隣を歩いていけるようになった。』



風「隣所か・・・何時の間にか・・・前に立ってるじゃない・・・」  
今の樹を見て、風が感動して涙を流した。

バーテックスが樹を突き飛ばした。

アカリ・カノン「樹ちゃん!!!」  
御成「樹殿!!!」

樹が頑張つて立ち上がりとしたが、無数のバーテックス達が接近し、樹が怯えた。  
もう駄目かと思われたその時。

風「はあああああ!!!」

立ち上がった風が樹を助けた。

アカリ・カノン「風ちゃん!!!」  
御成「風殿!!!」

風「姉として、妹に頼り切ってる訳にはいかないわ!」  
立ち上がった風を見て、樹が嬉し泣きした。

風「もう大丈夫よ樹。本当に・・・私の自慢の妹だ!」  
樹を優しく撫でる。

風「さあ、犬吠埼姉妹の女子力、見せてやるわ!!行くわよ、樹!!!」

その頃、ゴーストとディーブスペクター達は。

『レッツゴー！ムサシ！ニュートン！ノブナガ！オメガフォーメーション！』

『ダイカイガン！ガンガンミロー！ガンガンミロー！オメガスパーク！』

タケル・ムサシゴースト・ニュートンゴースト「はあああああ!!!」

マコト・ノブナガゴースト「ハアツ!!」

オメガフォーメーションとオメガスパークの同時必殺技で、無数のバーテックス達を撃破した。

マコト「これで半数は片付いたか？」

タケル「いや、まだいっぱい居る。」

すると数体のバーテックス達が何処かへ向かって行った。

タケル「っ！イグアナゴーストライカー!!」

マシンゴーストライカーとキャプテンゴーストが合体したイグアナゴーストライカーが現れ、ゴーストが搭乗する。

タケル「あのバーテックス達を追って！」

イグアナゴーストライカーがバーテックス達を追う。

タケル「マコト兄ちゃん!ここをお願い!」

マコト「任せろ!!」

その頃、友奈は何度も変身しようとしたが、精神状態が不安定のままだった。

友奈「何で・・・?何で・・・?何で・・・?何で変身出来ないの!?!」

パニックになってスマホを落とした。拾おうとしたが、友奈が泣いてしまった。

友奈「私・・・私・・・友達・・・失格だ・・・」

そしてゴーストは、イグアナゴーストライカーに乗ってパーテックス達を追っている。  
る。

タケル「ん?友奈!?!夏凜!?!」

パーテックス達が向かう先には、友奈と夏凜の姿があった。

タケル「止めろおおおお!!」

そして、バーテックス達が友奈と夏凜を喰い始めた。  
タケル「友奈!!!! 夏凜!!!!」

しかしその時、バーテックス達が斬り裂かれて消滅した。

タケル「っ!?!」

勇者に変身した夏凜が、バーテックス達を倒したのだった。  
タケル「夏凜!!!」

友奈「夏凜……ちゃん……?」

夏凜「友達に……友達に、失格も合格も無いっての……」

無事の夏凜を見て、友奈が泣いた。ゴーストがイグアナゴーストライカーから降りた。

タケル「友奈……」

夏凜「あんた、東郷の事で自分を責めてるんでしょ?」

友奈「え……?」

夏凜「はあ……全く、友奈らしいと言うか……ねえ友奈、あんたはどうしたい?」

友奈「え……?」

夏凜「東郷の事。」

タケル「友奈、答えてくれる?」

友奈「止めたい……東郷さんを止めたいよ……この世界が壊れたら……皆と一緒に居られなくなる……でも……今の私じゃ……」

夏凜「そう……友奈、タケル、私、もう大赦の勇者として戦うのは、止めるわ。」

友奈「え……?」

タケル「夏凜？」

夏凜「これからは、勇者部の一員として戦う！  
剣を握った。」

夏凜「私達の勇者部を、勇者壊させたりしない！……友奈の泣き顔……見たくないから……」

彼女はジャンプして立ち向かった。

友奈「夏凜ちゃん!!」

タケル「夏凜!!」

ゴーストが夏凜を追う。

樹木の上。

夏凜「っ！」

タケル「っ!?!」

遠くから、巨大バーテックス達が出現した。

夏凜「再生した奴らが、溢れて来たわね。」

タケル「こんなに多く……っ！」

巨大バーテックス達と戦うディーパスベクターとノブナガゴーストが見えた。  
タケル「マコト兄ちゃん!ノブナガさん!」

夏凜「まずは彼奴らを殲滅して・・・その後、東郷を探して・・・」  
左腕の満開ゲージを見た。

夏凜「流石に、犠牲無しって訳にはいかないでしょうね・・・」

タケル「まさか、満開する気なのか!?!」

スマホを取り出すと、自分の誕生会の写真が出た。

夏凜「くすつ・・・馬鹿ね。」

義輝「諸行無常。」

夏凜「さあさあ!!ここからが大見せ場!!等からは音に聴け!!近くに寄って、目にも見よ!!!」

タケル「夏凜!!満開は止めろ!!満開したら君は!!」

夏凜「止めないでタケル!!私は決心したわ!!」

タケル「でも!!」

夏凜「これが讃州中学2年!勇者部部員!三好夏凜の実力だあああああ!!!」  
大ジャンプして、バーテックス達に立ち向かう。

タケル「夏凜!!!」



バーテックス達を次々と斬り裂く。

夏凜「さあ!! 持つてけええええええ!!」

樹海から無数の光が出現し、夏凜に集中した。

遂に、夏凜が満開を発動したのだった。

友奈「夏凜ちゃん!!」

マコト「あれは、夏凜なのか!?!」

タケル「夏凜!!!!!!」

夏凜「勇者部五箇条!!!」

巨大な光の刃を放って、バーテックス達を撃破する。

夏凜「ひとーひとーつ!!!」

更に無数の剣を飛ばして、バーテックス達を撃破する。

夏凜「挨拶はーひとーひとー!!! きちんとおおとおお!!!」

そして、再生したヴアルゴ・バーテックスを御霊ごと破壊した。

夏凜「勇者部五箇条!!! ひとーひとーひとーひとーつ!!!」

今度はキャンサー・バーテックスに立ち向かうが、リフレクターで防がれたが。

夏凜「なるべくーひとーひとーひとーひとー!!! 諦めなああああああ!!!」

蹴りでリフレクターを破壊して、キャンサー・バーテックスを御霊ごと破壊した。

マコト「夏凜!! 後ろだ!!」

夏凜「っ!!」

真後ろからスコピオン・バーテックスの尻尾に突き刺され、満開の武装が消滅した。しかしすぐに立て直した。

夏凜「くっ!」

右腕が動かなくなってしまった。それでもスコピオン・バーテックスに立ち向かった。

夏凜「勇者部五箇条!!!ひとーーーーーっ!!!」  
再び満開を発動した。

タケル「夏凜!!!」

マコト「止めろ!!!」

夏凜「よく寝てーーーーー!!!よく食べーーーーーる!!!」  
スコピオン・バーテックスを御霊ごと破壊した。

夏凜「っ!」

後ろからサジタリウス・バーテックスの槍が迫るが。

『カイガン!ツタンカーメン!ピラミッドは三角!王家の資格!』

ツタンカーメン魂を纏ったデープスペクターが現れ、デープスラッシュャーとガンガンハンドで槍を全て破壊した。

夏凜「マコト!!」

マコト「夏凜!!これ以上満開したらどうなるか分かってるのか!？」

夏凜「止めないで!!私の決心は止まらないわ!!」

マコト「夏凜!!!ぐああああ!!!」

槍が直撃し、デープスペクターが落下した。

タケル「マコト兄ちゃん!!!」

夏凜「マコト!!!」

2 回目の満開が切れ、右足が失われた。

夏凜「勇者部五箇条!!!ひとーーーーーつ!!!!」

急降下して、サジタリウス・バーテックスに接近する。

夏凜「悩んだらーーーーー!!!相談!!!」

剣を口に咥えて、サジタリウス・バーテックスを御霊ごと破壊した。そして夏凜が、3 回目の満開を発動した。

タケル「3 回目・・・!?夏凜!!もう止めて!!!!」

夏凜「もう1体は!?!」

再生したカプリコーン・バーテックスが地面から現れた。

夏凜「っ!!」

触手で吹き飛ばされ、カプリコーン・バーテックスが夏凜を捕まえようとしたその時。

タケル「危ない!!!」

イグアナゴーストライカーに乗ったゴーストが夏凜を守った。

夏凜「タケル!!」

今度は首の昨日が失われた。

夏凜「っ!!」

そして遂に、4回目の満開を発動した。

タケル「夏凜!!!」

夏凜「勇者部五箇条!!!!!!ひとーーーーーっ!!!!!!」

イグアナゴーストライカーからカプリコーン・バーテックスを離し、上空へ押しした。

夏凜「なせば大抵!!!!!!何とかなる——————!!!!!!」  
 そして、カプリコーン・バーテックスが斬り裂かれ、御霊ごと破壊された。

夏凜「見たか!!!!!!勇者部の力——————!!!!!!」  
 そして満開が切れ、夏凜が落下した。

タケル「夏凜!!!」

ゴーストが飛び、夏凜を助けた。

友奈「夏凜ちゃん!!!!」

タケル「夏凜!!しっかりして!!夏凜!!」

夏凜「後は……東郷……を……」

樹海の底。

友奈「……っ!夏凜ちゃん!タケルさん!」

タケル「友奈!」

夏凜とタケルを発見した。

友奈「夏凜ちゃん!!しっかりして!!」

すると夏凜が目を開けたが、両目のハイライトが消えていた。

夏凜「誰……?友奈……?タケル……?ごめん……何か……目も

耳も持つて行かれたみたい……」

タケル「夏凜……」

満開を連続発動したせいで、身体の殆どの機能が失われてしまった。左手で友奈の顔を触る。

夏凜「友奈……だよね……?」

友奈「そだよ!!!友奈だよ!!!」

夏凜「見てた……?友奈……?この私の……大活躍を……」

友奈「見てた!!!見てたよ!!!凄かったよ……夏凜ちゃん……!!!こんな……」

こんなので……!!!うわああああ!!!」

夏凜「東郷を……探そうと思ったんだけど……ここまでか……ねえ……」

友奈「……タケル……言いたかった事があるの……」



「ありがとう……って……」

友奈「っ……!?!」

タケル「っ!?!」

夏凜「私……長い間……ずっと勇者の訓練を受けて来た……戦う事だけが……私の存在価値で……私はただの道具だった……でも……皆のお陰で……私……」

自分の誕生会を思い出した。

夏凜「友奈なら……東郷の心だつて……変えられる……きつと……」  
友奈「私は……!!」

夏凜「東郷を救えるのは……友奈だけよ……1番の……友達なんでしょ……?」

友奈「……うん!」

タケル「……友奈、夏凜の言葉で勇気が出た?」

友奈「うん!私、東郷さんを止める!この世界を終わらせたりはしない!!」

タケル「分かった。俺も協力する!今の俺は、勇者部の顧問だからね!」

友奈「うん!」

マコト「俺も行くぞ!」

そこに、マコトが来た。

タケル「マコト兄ちゃん!」

友奈「マコトさん!無事だったんだね!」

マコト「こんな所で、くたばる訳にはいかない。友の為に俺は戦う。行こう！」  
タケル「うん！」

友奈「うん！」

風「東郷!!!」

その頃風は、壁の破壊を続ける東郷を止めに入っていた。樹は周囲のバーテックス達の駆逐に入っている。

東郷「この光景を見たでしょ!! だったら分かるはずですよ!!!」

風「これ以上、壁を壊しちや駄目よ!!!」

東郷「この世界が、大赦のやり方が、勇者の存在が、如何に悲惨なものか!!! 私達が救われる方法が、これしか無いんです!!!」

風「それでも・・・それでも!!!」

大剣を振り上げて、東郷の散弾銃を破壊した。

東郷「っ!!!」

すぐに拳銃を出した。

風「私は部長として……先輩として……あんたを止める!!!」

東郷「分かって……下さい!!」

すると樹が、東郷を縛った。

風「東郷!!! 歯を食いしばれ!!!」

大剣で東郷を飛ばした。

東郷「きゃああああ!!!」

飛ばされた東郷が、火の海に落下した。

風「ごめん、東郷……少しだけ静かにして……」

すると樹が風に駆け寄った。

風「どうしたの? 樹。」

樹が指を差した。

風「え?」

さつきまで進行していたパーテックス達の動きが止まっていた。

風「敵の進行が・・・止まってる・・・？」

するとその時、眩い光が現れた。

風「っ!？」

火の海に落ちたはずの東郷が、満開を発動したのだった。

そして東郷の後ろには、再生中のレオ・スタークラスターがあった。

風「っ!？」

するとさつきまで止まっていたパーテックス達が、レオ・スタークラスターを復活させる為動き始めた。

東郷「2人共、退いて下さい!!!!」

風「退く訳無いでしょ!!!」

東郷「……ごめんなさい……」

彼女の見ている先には、神樹があつた。神樹に向かつて砲台を放つた。

風「っ!!」

しかし風と樹が砲台の弾丸を力いっぱい防ぐ。

風「うおおおおおおお!!!」

しかし。

風「うわあああああ!!!」

防ぎ切れず、樹と共に飛ばされた。

砲台の弾丸が神樹に直撃したが、破壊出来なかつた。

アカリ「な、何今の……?」

御成「今のは、東郷殿の満開……!?!」

カノン「東郷ちゃん、何をしたの……?」

東郷「そう・・・勇者の力では、神樹本体を傷付ける事は出来ないのね・・・でも、これを連れて行けば・・・きつと神樹を・・・殺せる・・・」

再生中のレオ・スタークラスターを見て呟いた。

そして、風と樹は変身が解かれて倒れていた。

風「・・・スタミナが・・・樹・・・?!?!」

結界の壁が大きく割れていた。そして再生したレオ・スタークラスターが樹海に侵入した。

東郷「私を・・・殺したいでしょ? さあ、おいで。」

レオ・スタークラスターが巨大の火球を生成した。

風「止めろおおおおお!!!」

!!!

アカリ・カノン「いやあああああああああ!!!」  
御成「東郷殿おおおおお!!!」

巨大の火球が、東郷に向かって放たれた。しかし東郷が避け、火球が神樹に向かって行く。

東郷「これで、皆を……」

しかしその時。



??? 「うおおおおおおおおお  
!!!!!!!」

勇者に変身した友奈が、火球の前に現れた。

友奈「勇者パーーーーーシューンチ!!!」

彼女の勇者パンチが、火球を破壊した!そして、風と樹の前に着地した。

友奈「ごめんなさい、風先輩。遅刻しちゃいました。」

風「友奈……」

そしてイグアナゴーストライカーが現れ、タケルとマコトが飛び降りて、友奈左右に着地した。

タケル「風、樹ちゃん、待たせてごめん。」

マコト「遅れてすまない。」

風「タケルさん……マコトさん……!」

東郷「友奈ちゃん……」

友奈「もう迷わない!私が勇者部を、東郷さんを守る!」

マコト「友奈の味覚を奪った罪、東郷の記憶と足と右耳を奪った罪、風の左目を奪った罪、樹の声を奪った罪、夏凜の身体を奪った罪、身体を供物として奪った神樹の罪!そして、結界を破壊した東郷の罪!」

タケル「勇者部と東郷とこの世界を守り、未来へ繋ぐ!」

マコト「東郷!お前の間違いは俺達が正す!!」

するとタケルの身体からムゲンゴースト眼魂、マコトの身体からシンスペクターゴースト眼魂が出現し、それぞれのゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『ムゲンシンカ!アーイ!バッチリミナー!バッチリミナー!』

『セブンシンカ!アーイ!バッチリミロー!バッチリミロー!』

タケル・マコト「変身!!」

『チョーカイガン! ムゲン! キープ・オン・ゴーイング! ゴ・ゴ・ゴ! ゴ・ゴ・ゴ! ゴ・ゴ・ゴ! ゴ・ゴ・ゴ! ゴッドゴースト!』

『シンカイガン! シンスペクター! プライド! グリッド! ラスト! ラース! エンヴィー! グラトニー! スロウス! ブレイク! デッドリーシン!』

タケルが無限の可能性を持つ仮面ライダーゴースト・ムゲン魂に変身、マコトが七つの罪を背負った仮面ライダーシンスペクターに変身した。

友奈「タケルさん! マコトさん! 行こう!」

タケル・マコト「ああ!」

遂に、最後の戦いが始まった。

「END」

## 第十二話「友奈!貴方に微笑む!」

遠い場所では。

風「早く・・・彼奴を・・・!」

立ち上がったが、力尽きて倒れてしまった。

『イノチダイカイガン!イカリスラツシユ!』

『シンダイカイガン!ラストバレット!』

ゴーストがガンガンセイバーとサンングラスラツシャーでバーテックス達を斬り裂き、シンスペクターがガンガンハンド・銃モードの幻影を大量に出現させ、エネルギー弾を一斉発射してバーテックス達を破壊する。

マコト「友奈!行け!」

友奈「ありがとう!」

ジャンプした友奈が、東郷を止めに行く。



高速でレオ・スタークラスターに接近し、強力な打撃でダメージを与えた。すると御霊が出現した。

友奈「御霊!!」

東郷「駄目!!」

砲台からエネルギー弾を発射した。しかしそこにゴーストとシンスペクターがガンガンセイバーとガンガンハンドでエネルギー弾を防いだ。

タケル「もう止めてくれ東郷!」

マコト「こんな事をして、何の得があるんだ!」

友奈「そうだよ東郷さん、何も知らずに暮らしてる人達も居るんだよ? 私達が諦めたら駄目だよ!だってそれが・・・」

東郷「勇者だつて言うの!?!他の人なんて関係無い!!」

タケル・マコト・友奈「っ!」

東郷「一番大切な友達を守れないのだったら・・・勇者になんかなる意味が無い!頑張れないよ・・・!!」

するとバーテックス達が、レオ・スタークラスターの御霊を炎で包んだ。

東郷「友奈ちゃん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・あのままジツとして居れば良かったのに・・・眠っていけば、それで何もかも済んだのに・・・もう手遅れだよ・・・」

砲台から強力のエネルギー弾を発射した。ゴーストとシンスペクターと友奈がエネルギー弾を防ぐ。

タケル「くっ・・・!!」

マコト「やらせるか・・・!!」

東郷「戦いは終わらない・・・私達の生き地獄は終わらないの・・・」

友奈「東郷さん!!!」

東郷「っ!？」

友奈「地獄じゃないよ!!だって・・・東郷さんと一緒だもん!!」

エネルギー弾を振り払った。

友奈「どんなに辛くても、東郷さんは私が守る!!」

タケル「そうだよ!俺達が君を守る!」

マコト「そして、お前の罪を晴らさせてやる!」

東郷「大切な気持ちや思いも忘れちゃうんだよ!?!大丈夫な訳無いよ!!」

再びエネルギー弾を発射した。

『イノチダイカイガン!カナシミブレイク!』

『シンダイカイガン!スロウスグレイブ!』

ゴーストがガンガンセイバー、シンスペクターがガンガンハンド・鎌モードで東郷の砲台のエネルギー弾を斬り裂いた。

タケル「もう止めてくれ!!」

マコト「これ以上お前に罪を着させたくないんだ!!」

東郷「友奈ちゃんや皆の事だつて忘れてしまう・・・それを仕方が無いなんて割り切れない!!一番大切なものを無くしてしまいうくらいなら・・・」

友奈「忘れないよ!!」

東郷「どうしてそう言えるの!?!」

友奈「私がそう思っているから!!めっちゃくちや強く思っているから!!」

東郷「っ!・・・私達も・・・きつと、そう思ってた・・・」

彼女は大粒の涙を流した。

東郷「今はただ、悲しかった事しか憶えてない・・・自分の涙を意味も分からな  
いの!!!」

砲台からエネルギー弾を一斉発射した、3人が避け続ける。



『イノチダイカイガン！タノシーストライク！』

ガンガンセイバー・アローモードで砲台にダメージを与える。

東郷「嫌だよ!!怖いよ!!きつと友奈ちゃんも、私の事を忘れてしまう!!!だから!!!」

しかし友奈が、東郷の砲台を掴んだ。

東郷「っ!？」

そして、そのまま両腕のアーマーを外して東郷に向かって走る。

友奈「東郷さん!!!」

東郷「っ!!」

オールレンジを飛ばした。しかし友奈がそれを避けて・・・

東郷の頬を強く殴った。

タケル「っ!」  
マコト「っ!」

殴った後、友奈が東郷を優しく抱擁した。

友奈「忘れない!」

東郷「嘘・・・」

友奈「嘘じゃない!!」

東郷「嘘・・・!」

友奈「嘘じゃない!!!」

東郷「・・・・・・・・・・本当・・・・・・・・・・?」

友奈「うん!私はずっと一緒に居る。そうすれば、忘れない!」

東郷「友奈ちゃん!!!忘れたくないよ!!!私を独りにしないで!!!」

彼女は泣きながら友奈に訴えた。  
友奈「うん！・・・うん！」

タケル「・・・」

マコト「・・・」

すると、巨大な炎の塊が熱風を起こした。

タケル「太陽・・・？」

マコト「あの御霊か・・・？」

太陽に包まれた御霊が、神樹に向かって動いた。

東郷「私、大変な事を・・・」

友奈「東郷さんのせいじゃない!」

タケル「そうだよ!悪いのはあのバーテックスだ!」

マコト「今なら、奴を止めれる!」

友奈「うん!彼奴を止める!!」

東郷「はい!」

タケル「行こう!」

4人が太陽を止めに全速力で向かった。

アカリ「ちよつと嘘でしょ・・・!?!」

御成「た、太陽ですと!?!」

カノン「どうしたら良いの・・・!?!」



マコト「タケル!!!」

落下した友奈の変身が解かれ、ゴーストが友奈をゆっくりと降ろした。

タケル「友奈!大丈夫!?!」

友奈「・・・こ・・・こんな所で・・・っ!?!」

タケル「どうした?」

友奈「足が・・・」

タケル「足?まさか、散華したのか!?!」

散華で友奈の足の機能が奪われてしまった。

そして太陽の勢いは止まる事を知らず、神樹に向かって行く。

マコト「くそ・・・!!諦めてたまるか・・・!!」

東郷「くっ・・・!もう・・・駄目・・・」

しかしその時。

風「うおおおおおおおおおおおおお  
!!!!」

満開した風と樹が加勢してくれた。

東郷「樹ちゃん……!?」

マコト「樹!!風!!」

風「ごめん!大事な時に!」

東郷「風先輩……!私……」

風「おかえり!東郷!」

東郷「うっ……うっ……」

風「行くよ!!!押し返す!!!」

3人の力を1つにし、太陽を押し返す。

『シンダイカイガン!プライドフィスト!』

シンスペクターの両腕にエネルギーが纏まり、猛烈な勢いで突進しながらラツシュする。

マコト「うおおおおおおお!!!」



風「うおおおおおおおおおおおお!!!!」

しかし太陽の勢いは止まらない。

風「この・・・!!!!4人でも・・・!!!!」

マコト「俺達は負けん!!!!友の為に!!!!」

夏凜「そこかああああああああ!!!!」

勇者に変身した夏凜も加勢した。

マコト・風「夏凜!!」

夏凜「勇者部を舐めるなああああああああ  
満開を発動して御霊を止める。  
!!!!」

風「よーし!!勇者部ーーーーー  
!!!!」

4人「ファイトーーーーー  
!!!!!!」

巨大な花が出現し、太陽を止める。

『シンダイカイガン!グリードスラッシュユ!』

マコト「うおおおおおおお  
!!!!!!」

デープスラッシュヤーにエネルギーを纏わせ、御霊を斬り続ける。すると太陽の速度が急速に止まった。

タケル「止まった!!!」

友奈「くっ……!!うおおおおお  
!!!!!!」

叫びと同時に満開が発動され、太陽に向かって飛翔した。ゴーストも続いて飛翔した。

友奈「私は!!!! 讃州中学勇者部!!!!!!」

風「友奈!!!」

樹「.....!!!」

夏凜「友奈!!!」

マコト「友奈!!!」

東郷「友奈ちゃん!!!!!!」

友奈「勇者!! 結城友奈!!!」

『イノチダイカイガン! シンネンインパクト!』

ガンガンセイバー・ライフルモードで、強力なエネルギー弾を放ち、凹みを作った。

マコト「タケル!!行くぞ!!」

タケル「うん!マコト兄ちゃん!」

『イノチダイカイガン!イサマシユート!』

『シンダイカイガン!ラーズフレイム!』

ガンガンセイバーとサンングラスラツシヤーの同時発射と、デーパーズラツシヤー業火のエネルギー弾連射、3つの武器のエネルギー弾が太陽に大穴を開けた。

タケル「友奈!!!行こう!!!」

マコト「俺達も加勢する!!!」

友奈「はい!!!」

タケル「魂は・・・永遠に不滅だ!!!」

『チヨードダイカイガン!ムゲン!ゴツドオメガドライブ!』

『シンダイカイガン!シンスペクタール!デッドリー!オメガドライブ!』

3人飛翔して太陽の中へ突っ込んだ。

タケル・マコト・友奈「うおおおおおおおおお!!!」

その途中で友奈の両腕のアーマーに罅が入った。

友奈「くっ……!!!」

すると、御霊が見えた。

タケル「うおおおおおおお!!!」

マコト「だあああああああ!!!」

しかし、友奈の満開と変身が解かれた。

タケル「命、燃やすぜ!!!」

マコト「俺の生き様、見せてやる!!!!」

友奈「届けえええええええええええ!!!!」

そして、御霊に触れた瞬間……

!!!!!!

巨大な大爆発が起こり、御霊が破壊された。

アカリ「……………これは……………」

カノン「御霊が……………消えた……………」

御成「み、皆さんは!?!」

3人が、皆を探しに行った。

そして皆は、御霊の爆破地点に仰向けになって倒れていた。

タケル「……………ん?」

マコト「……………っ?」

目を覚ましたタケルとマコトが起き上がった。

タケル「俺達……………どうなったの……………」

マコト「御霊は、消えたのか……………ん?友奈!?!」

タケル「っ!? 風! 樹ちゃん! 夏凜! 東郷!」

倒れてる5人を起こすが、返事が無い。しかし。

東郷「ん……?」

タケル「東郷!!」

東郷が目を覚ました。

タケル「目が覚めたんだね!」

東郷「タケル……さん……? マコト……さん……? ん?」

すると精霊達が消え、花びらとなった。

夏凜「……っ……?」

樹「……?」

タケル「夏凜! 樹ちゃん!」

風「終わった……の……?」

タケル「風!」

マコト「良かった……無事で……」

東郷「……友奈ちゃん……」

友奈の返事が無い。

東郷「友奈ちゃん……?」

しかし、友奈の起きる気配が無い。

東郷「・・・友奈ちゃん!」

タケル「友奈!?!友奈!!しっかりして!!」

マコト「友奈!!起きろ!!友奈!!」

幾ら叫んでも、友奈は起きない。すると樹海が晴れ始めた。

アカリ「樹海が!」

御成「晴れますぞ!!」

あの死闘から後日。

風『私達の戦いは、夢物語だった訳じゃない。それは・・・実際に被害が大きく出た事も分かる・・・』



讚州中学校・3年生の教室。

クラスメイト「起立！礼！・・・神樹様に、拝。」

風『私達を守り、取り戻した日常・・・』

それから後日。

朝の東郷家。

東郷「・・・っ。」

部屋で寝ていた東郷が起きた。

東郷「・・・っ！」

彼女の身に大きな変化が訪れた。東郷がベッドから起きて、両足を床に着けると・・・

何と立てるようになった。

東郷「……………」

そして犬吠埼家。風とアカリが朝食を作り、御成が食器を準備している。そこに樹が起きた。

アカリ「あ、樹ちゃんおはよう。」

御成「おはようございます。樹殿。」

風「もうすぐ出来るからね。座って待っててね。」

するとその時。

???「お……………」

風「え?……………?!」

アカリ「え……………」

御成「つ……………」

聞き覚えのある声が聞こえた。それは……

樹 「お  
・  
・  
お姉  
・  
・  
お姉  
・  
・  
ちゃん  
・  
・  
・  
」

何と、樹に声に戻ったのだった。

アカリ「樹……ちゃん……?」

風「……本当に……本当に……取り戻した……!」

声に戻った樹に、泣きながら抱き締めた。

風「治るんだ……私達……!」

樹「う……うん……」

アカリ「樹ちゃん……私の名前、分かる……?」

御成「拙僧のお名前も……?」

樹「ア……アカリ……さん……お……御成……さん……」

アカリ「……樹ちゃん!!!」

泣きながら樹と風を抱き締めた。

アカリ「良かった……声に戻って……!」

御成「樹殿に……!声がお戻りになりましたぞ……!!」

その場で崩れ、御成が泣いた。

夕方の浜辺。マコトと風と夏凜が居た。

マコト「樹の声、戻って良かったな。」

風「うん・・・東郷の足も治って良かったね。」

マコト「松葉杖が無いと歩けない状態だが、リハビリすれば自力で歩けるようになるだろう。」

夏凜「あれから、大赦からの連絡は一方通行のまま。返信も出来なくなってるし・・・」

風「私達は神樹様に解放して貰えたのよ。」

夏凜「もう必要無いつて事か・・・」

風「目的が無くなって不満？」

夏凜「全然？」

風「何それ？」

夏凜「笑うな！」

マコト「けど良かったな。これでもうお前達は供物じゃ無くなったって事だ。」

風「だね。」

夏凜「だけど、外の世界があんなのは変わらないわ。私らの戦闘データが役に立ってれば良いけど・・・」

風「私達の戦いは無駄じゃない。だから、神樹様は供物を求めないようになった訳だ

しね。」

夏凜「後は、後輩達を信じて任せるしか無いわね。」

風「うん。」

夏凜「でも、勇者部は不滅でしょ?」

風「言われちゃった。」

マコト「タケルも言ってたしな。魂は、永遠に不滅だって。」

夏凜「そうね。……ねえ。」

風「ん?」

夏凜「何で、あの子だけ目を覚まさないの?」

風「あの子は……一人で頑張り過ぎたから……」

マコト「……自分を犠牲にして良いなんて、そんな甘い考え、許せる訳が無い……」

風「私だって……でも……あの子が居なかつたら……」

同じ頃の羽波病院、東郷は松葉杖で病室へ向かっていた。病室に入ると。

タケル「東郷。」

アカリ「今日も来てくれたんだね。」

先に行っていたタケルとアカリが待っていた。

東郷「タケルさん、アカリさん、友奈ちゃんは？」

タケル「友奈は・・・」

ベッドの上には、廃人状態の友奈が。

東郷「友奈ちゃん・・・」

友奈を中庭へ連れて行った。

東郷「今日はね、風先輩がまた可笑しな事を言いだしてね、それで私は・・・」

???「おーい！」

東郷「ん？」

そこに、風と樹と夏凜とマコトと御成とカノンが来てくれた。

風「ごめんごめん！」

夏凜「遅くなった。」

御成「遅れてしまって申し訳ございません。」

東郷「大丈夫ですよ。」

樹「こんにちは、友奈さん。」

カノン「友奈ちゃん、こんにちは。」

樹「これ、押し花。」

押し花の葉を友奈の左手に置いた。

カノン「友奈・・・ちゃん・・・?」

夏凜「・・・ちくしょう・・・」

マコト「まだ目を覚まさないのか・・・?」

タケル「うん・・・」

東郷「私は、一番大切な友達を犠牲に・・・私が、あんな事を・・・」

風「言うな!!!」

東郷「っ!?!」

風「言うな・・・誰も悪くないって・・・皆で話し合っただでしょ・・・?」

マコト「東郷、もう自分を責めるのは止めろ・・・お前の罪は晴れたんだ・・・」

東郷「っ・・・!」



翌日の勇者部。

風「さて、もう文化祭まで間も無くね。今後の事なんだけど・・・」

東郷「あの。友奈ちゃんの役、そのままにしておきたいのです。」

風「・・・東郷・・・」

タケル「でも、今の友奈はまだ・・・」

東郷「分かっています。でも、私の足だって治ってきているんです。きっと友奈ちゃんだって！」

夏凜「東郷の言う通りだよ。何か、割り切っちゃうのは私嫌だ・・・」

風「私だって！割り切ってなんか・・・」

樹「お、お芝居の・・・練習を・・・続けよう？友奈さんなら・・・きつと・・・アカリ「そうね・・・」

羽波病院。タケルと東郷が友奈の病室へ向かう。

タケル「足、無理しないようにね。」

東郷「はい。」

その後友奈を中庭へ連れて、東郷が台本を音読する。

タケル「友奈、今日もしっかり覚えてね?」

東郷「勇者は傷付いても傷付いても、決して諦めませんでした。全ての人が諦めてしまったら、それこそこの世が闇に閉ざされてしまうからです。」

同じ頃犬吠埼家では、風が眼帯を外した。すると左目の視力が戻り、樹とアカリと御成の姿がはつきりと見え、風が嬉し涙を流した。

東郷「勇者は自分を挫けない事が皆を励ますのだと、信じていました。そんな勇者を馬鹿にする者も居ましたが、勇者は明るく笑っていました。」

そして夏凜は、浜辺で剣舞に励んでいる。マコトとカノンが見ている。

東郷「意味が無い事だと言う者も居ました。それでも勇者は、へこたれませんでした。皆が次々と魔王に屈し、気が付けば、勇者は独りぼっちでした。．．．勇者が独りぼっちである事を、誰も知りませんでした。．．．独りぼっちになっても．．．それでも勇者は．．．それでも勇者は．．．戦う事を諦めませんでした。．．．諦めない限り．．．うつ．．．希望が終わる事は無いから．．．です．．．！」

音読中に泣いてしまった。それでも我慢して音読し続ける。

東郷「何を失つても．．．．．それでも．．．．．それでも．．．．．私が一番．．．大切な友達を．．．．．失いたくない!!」

我慢が耐え切れず、泣いてしまった。

タケル「東郷．．．。」

東郷「やだ．．．嫌だよ．．．寂しくても．．．辛くても．．．ずっと．．．私と一緒に居てくれるって言ったじゃない．．．!!!」

風が吹き、落ち葉が風に乗って舞う。

東郷「うう．．．ううう．．．!!!」

「東  
・  
・  
・  
郷  
・  
・  
・  
さん  
・  
・  
・  
」

東郷 「っ!？」

タケル 「っ!!」

声が聞こえた。

横を見ると・・・

東郷 「っ!!!」

友奈「一緒に居るよ……ずっと……」

タケル「友……奈……?」

東郷「……友奈ちゃん……!!」

復活した友奈を見て、東郷が友奈の両手を握った。

友奈「東郷さん……聞こえてたよ……東郷さんの声……皆の声……」

東郷「友奈ちゃん……!!おかえり……友奈ちゃん……」

友奈「ただいま……」

タケル「……友奈、おかえり……」

友奈「ただいま……タケルさん……」

その後、タケルと東郷が車椅子に乗った友奈を連れて勇者部へ。

友奈「じゃーん！結城友奈、ご心配お掛けしましたー！」

風「友奈!？」

樹「友奈さん!？」

夏凜「早くない!？」

マコト「友奈!？」

アカリ・カノン「友奈ちゃん!？」

御成「友奈殿!？」

風「友奈ー！ー！ー!!!」

嬉しさのあまり、友奈を抱き締めた。

友奈「うわっ！とととと。」

風「ああ、ごめん!」

アカリ「友奈ちゃん、戻って来たんだね!」

タケル「うん!」

マコト「全く、友奈は甘いな。」

笑って友奈を歓迎した。

帰り道。

友奈「皆無事で良かったね。」

風「心配してたんだから。もう目覚めないんじゃないかなって。」

タケル「俺達ずっとヒヤヒヤしてたんだよ?」

御成「友奈殿が戻って来ましたぞおおお!!!」

アカリ「もう分かったから。」

夏凜「私は、心配してなかったんだけどね。」

マコト「いい加減素直になれよ。」

夏凜「むう・・・」



樹「くすつ。」

友奈「私も、もう無理だと思ってたんだけどね。そこは……えつと……」

東郷「えつと？」

友奈「根性で！」

東郷「根性？」

友奈「えへへ。」

樹「神樹様が助けてくれたんでしょっか？」

東郷「……」

友奈「どうしたの？」

東郷「それは、きつと違うよ。」

友奈・樹「え？」

カノン「どう言う事？」

東郷「友奈ちゃんはきつと、自分の力で戻ったんだよ。奇跡や神の力なんかじゃない。友奈ちゃんは、自分の強い意志で、根性で帰って来たんだよ！」

タケル「友奈の魂は、まだまだ不滅だね。」

マコト「これが、友奈の生き様だな。」

友奈「うん。そうだね！ありがとう、私を待っていてくれて。」

あれから数日後、友奈は松葉杖で歩けるようにまで回復した。

放課後、何時ものかめやでうどんを食べる。友奈が食べると、笑顔になってうどんを頬張る。味覚が戻ったのだ。風が友奈に演劇の台本を見せた。

東郷『勇者は自分が挫けない事が、皆を励ますのだと信じていました。そして皆が居るから、皆を信じているから、自分は負けないのだと。』

そして遂に、讃州中学校の文化祭が行われた。

体育館の舞台。

風「ガーツハツハツハ！結局、世界が嫌な事だらけだろ!?辛い事だらけだろ!?」

魔王役の風と、勇者役の友奈。

風「お前も、見て見ぬフリをして、墮落してしまうがいい!!」

舞台裏、夏凜が花びらを舞い散る演出を始めた。

友奈「嫌だ!」

風「足掻くな!現実の冷たさに凍えろ!!」

友奈「そんなの気持ちの持ちようだ!」

風「何!?!」

友奈「大切だと思えば友達になれる。互いを思えば何倍でも強くなれる!無限に根所が湧いてくる!!自分の生き様で生きて行ける!世界には嫌な事も、悲しい事も、自分だけではどうにもならない事が沢山ある!」

そして大橋の祠。乃木園子の包帯が全て解かれた。

更にとある病院では、ある少女が退院していた。

友奈「だけど、大好きな人が居れば、挫ける訳が無い! 諦める訳が無い! 大好きな人が居るのだから! 何度でも立ち上がる! だから、勇者は絶対、負けないんだ!!」

剣を大きく振り上げて魔王に立ち向かう。そして剣を振り下ろして、魔王を倒した。

すると友奈が立ち眩みし始めた。

東郷「友奈ちゃん!!」

風「友奈!？」

夏凜「友奈!!」

樹「友奈さん!!」

タケル「友奈!!」

マコト「友奈!!」

アカリ「友奈ちゃん!!」

御成「友奈殿!!」

カノン「友奈ちゃん!!」

咄嗟に立ち眩みした友奈を助けた。

友奈「・・・あれ? あ! ごめん! ちよつと立ち眩みで。大丈夫・・・」

“パチパチパチパチ”

観客達から拍手喝采の嵐が舞い上がった。

友奈『そう、何だつて乗り越えられるんだ! 大好きな皆と一緒になら!』

こうして、勇者部の演劇は無事成功を収めたのだった。勇者部の活動は、これからも続く。

「結城友奈の章・END」

## ##鷺尾須美の章##

### 第十三話「覚醒!鷺尾須美!」

とある草原の上、ここに1人の青年が眠っていた。

??? 「ん・・・ん・・・?」

青年の名前は「天空寺タケル」。一度死んで蘇り、仮面ライダーゴーストとして戦った青年である。

タケル「ここは・・・何処だ?ん?」

遠くにある公園を発見した。

タケル「彼処に公園がある。行ってみよう。」

公園に到着。

タケル「ん? 国営讃岐まんのう公園・・・香川県の公園!? でも何で香川に・・・? つ  
! そう言えば・・・」

彼は思い出した。最上魁星との戦いの後に復興中の眼魔世界に訪れた時、突如現れた

裂け目によつて吸い込まれてしまった事を。

タケル「あの裂け目に吸い込まれて、俺は香川県に飛ばされた・・・ちよつと調べてみよう。」

同じ頃とある屋敷。離れにある所に、1人の少女が水を被つて自らを清めていた。彼女の名前は「鷲尾須美」。

清めた後、使用人2人と一緒に朝食を持って両親へ運んだ。

侍女「今日のお味噌汁は、お嬢様がお作りになられたのですよ?」

須美「お口に合うと良いのですが・・・」

父親「美味しそうじゃないか。頂こう。」

朝食後、須美は神棚の神樹に向かって拝む。

その頃タケルは、瀬戸大橋を見ていた。

タケル「瀬戸大橋が見える。あれを渡れば岡山に行けるね。と言っても、何だろこの茅の輪? しかも通れないのか・・・帰る方法が見付かるまで少し観光しようかな?」

神樹館は須美が通っている小学校である。彼女は六年二組の教室に入った。

クラスメイトA「おはよう!」

クラスメイトB「おはよう。」

須美「おはようございます。」

クラスメイトC「おはよう鷺尾さん。」

須美「おはようございます。」

挨拶をして、自分の席に座る。

須美「ん?」

隣の席を見ると、1人のクラスメイトが寝ていた。

クラスメイト「すぴー・・・すぴー・・・」

”パーン”



クラスメイト「わっ！わーーーー！！お母さんごめんなさい！・・・え、あれ？夢じゃない？」

須美「乃木さん、ここは教室で、朝の学活前よ？」

このクラスメイトの名前は「乃木園子」。

園子「えへへ、鷺尾さんおはよう。」

須美「おはようございます。」

同じ頃タケルは、香川県内を観光していた。

タケル「平和だね。この世界は何の異変も無いね。ん？」

とある店のカレンダーを見ると。

タケル（神世紀二九八年・・・？西暦・・・じゃない？ここは俺の世界じゃないのか・・・？）

神樹館。

安芸先生「皆さん、おはようございます。」

担任の安芸先生が教室に入った。それに続いて。

クラスメイト「セーフ!はあ・・・はあ・・・間に合った・・・がはっ!」

出席簿で叩かれた。彼女の名前は「三ノ輪銀」。

安芸先生「三ノ輪銀さん、間に合ってません。早く席に着きなさい。」

園子「ミノさんは相変わらずだなあ。」

クラスメイトC「ねえ銀ちゃん、何で今日遅れたの?」

銀「6年生になると、色々あるのさ。」

ランドセルを開けると。

銀(っ!?!教科書忘れた・・・)

教科書1冊すら無かった。

安芸先生「それじゃあ、今日日直の人。」

須美「はい。起立。」

全員が起立する。

須美「礼。」

一礼して、後ろに向いて拝んだ。

全員「神樹様のお陰で、今日も私達が在ります。」

須美「神棚に礼。」

神棚に向かつて一礼をした。

須美「着席。」

着席しようとしたその時。

須美「ん？」

銀「ん?!？」

園子「ん？」

彼女達3人以外、時が止まっていた。

銀「これって・・・？」

すると須美が何かを感じた。

須美「っ!？」

同じ頃タケルは。

タケル「ど、どう言う事?」

自分以外の人間達が止まっていた。

タケル「あの、どうしました?・・・すみません、聞こえますか?」

幾ら質問しても、動く気配すら無い。

タケル「どうなっているんだ?何で俺以外の皆が止まっているんだ?」  
するとタケルが何かを感じた。

タケル「ん?風鈴?」

瀬戸大橋に付けられてる無数の風鈴の音を聞いた。

タケル「何が起こったんだ?」

神樹館。

須美「……来たんだ。私達がお役目をする時が。」

すると瀬戸大橋に歪みが発生し、謎の空間が広がり始めた。

タケル「何だあれ!？」

その空間は徐々に広まった。

タケル「うわっ!!」

須美「うわあああ!!」

園子「眩しー!!」

銀「来ちゃったー!!」

空間が街全体と、須美、園子、銀、そしてタケルを飲み込んだ。

謎の空間。3人が目を開けた。

銀「おおおおお!!」

園子「うわあああ!!初めて見たー!!これが!？」

須美「神樹様の、結界・・・?」

同じ頃タケルは、結界の中に居た。

タケル「どうなっているんだ?さっきまで街中に居たはず・・・さっきの歪みのせいなのか?」

園子「これが、神樹様を作った結界の世界!？」

須美「樹海・・・教わった通りね・・・」

園子「凄いねー！全部木だねー！おお！あれが大橋かな！」

目の前に瀬戸大橋が見えた。

銀「うん！多分あれだね！」

須美「此方と壁の外を繋ぐ橋。彼処から敵が渡って来るのね・・・」

銀「くううー！私達が勇者だなんて、興奮するー！！」

須美「三ノ輪さん、遊びじゃないのよ？」

銀「分かっているっさ。」

園子「あつ！彼処見て！」

須美・銀「ん？」

瀬戸大橋を見ると、謎の物体が瀬戸大橋を渡る姿が見えた。その物体の頭からは泡粒のような物を何個も出していた。

タケル「何だあれは？眼魔なのか？」

須美「来たわ。」

銀「あれが敵か!」

興奮してスマホで写真を撮った。

須美「彼奴が橋を渡り、神樹様に辿り着いた時、世界が無くなる・・・」

銀「ああ、分かっているって。」

園子「私達で、止めないとだね!」

須美「お役目を果たしましょう!」

園子・銀「うん!」

スマホからあるアプリを出した。

須美「アメツチニ キユウラカスハ サユラカス。」

園子「カミワガノ カミコソハ キネキコユ キユウラカス。」

銀「ミタマガリ タマガリマシシカミハ イマゾキマセル。」

須美・園子・銀「ミタマガリ タマガリマシシカミハ イマゾキマセル。」

詠唱を唱えてスマホをタッチすると、3人が光に包まれた。



タケル「ん？何だあの光？」

下から光が見えた。

一方、須美達3人は勇者と呼ばれる姿へと変身した。

銀「はああああ!!初めての实戦!!」

園子「合同訓練はまだだったけど。」

須美「敵が、御神託より早く出現してしまったから。」

園子「まあ、大丈夫だよね？」

須美「慎重に対処しましょう。」

銀「よし!ぶっ倒す!!」

ジャンプして物体へ向かう。

園子「あ!ミノさん私も!!」

須美「2人共、待ちなさい!!」

3人が飛んで行く姿を、タケルが見ていた。

タケル「何だあの子達?俺の他に動ける人が居たのかな?いや、考えるのは後だ!彼奴を倒さないと!」

彼は物体に向かって走る。

銀「広い!訓練とは全然違う!」

園子「ここが元々は街だなんて!不思議だね!鷺尾さん!」

須美「……………」

瀬戸大橋。

銀「おお!でつかーい!」

物体が瀬戸大橋を渡る途中。

園子「これが……」

須美「向こうから来た者、バーテックス。」

バーテックスが渡ると、樹海が少しずつ黒く染まり始めた。

銀「あ！」

園子「あ！あれ！」

須美「侵食！撃退するのに時間が掛かる程、元の世界に悪影響が出る！」  
弓矢を出して構えた。

銀「だったら!!」

先行してバーテックスに立ち向かう。

園子「待ってー！」

続いて園子も立ち向かう。

須美「ちよつと!!」

銀「速攻!!!」

するとバーテックスから無数の水が噴射された。

銀「うおっ!?!うわっ!?!何だこれ!?!うわああ!!」

身体に水が付着して落下した。

園子「ミノさん!!っ!?」

バーテックスの巨大な水塊から一直線のビームが放射された。

園子「うわあああ!!」

間一髪避けたが、バランスを崩して落下してしまった。

須美「2人共!!」

バーテックスの攻撃を避けながら矢で射抜く。矢がバーテックスの体に穴を開けた。

須美「やった!!」

しかしバーテックスの穴が一瞬にして消えた。

須美「っ!?!」

銀「うおおおおお!!!どりや!!!」

付着した水塊を全て潰した。

銀「ああああもおおお!!!」

園子「・・・くっ・・・!」

バーテックスが園子に狙いを定めた。

須美「乃木さん!!」

銀「ヤバイ!!」

狙いを定めて、ビームを放射し、園子に命中した。

須美「っ!!」

銀「っ!!」

しかし園子は無事だった。間一髪槍で防いだのだった。  
園子「くっ・・・!!これ、盾になるんだった!!」

須美「・・・ふう・・・」

安堵して、バーテックスに狙いを定めて弓を引く。すると花のゲージが出現し、チャージを始める。

須美「早く!!」

園子「台風のこと、凄いのみたい……!!」

銀「ここで、何とかしないと!!」

そして須美の弓矢のチャージが完了した。

須美「私が!!!」

バーテックスに向かってチャージした矢を放った。

だが、水塊が矢を受け止めた。

須美「っ!?!そんな・・・」

するとバーテックスが、水塊を須美に向かって噴射した。

須美「きゃああああ!!」

水塊を受けた須美が落下した。

園子「鷲尾さん!!!きゃああああ!!!」

耐え切れず、飛ばされてしまった。

樹海が徐々に侵食されていく。

須美「こんなの・・・どうしたら・・・」

彼女達の近くに、タケルが止まった。

バーテックスが神樹に向かって進行する。

須美「私の矢ではダメーじが足りない……三ノ輪さんは、強力だけど近付けない……  
乃木さんは、どう扱って良いか分からない……一体……どうしたら……」

するとバーテックスが水塊を須美に向かって噴射した。

須美「っ!!」

銀「危ない!!」

駆け付けた銀が須美を押し倒して救った。

銀「動いてないと危な……がっ!!」

須美「三ノ輪さん!!」

水塊が銀の顔を被った。銀が苦しみ出す。

園子「ん……ん? ミノさん!!」



水塊を銀から外そうとする須美だが。

須美「これ、弾力が・・・!!」

弾力があり過ぎて水塊を外す事が出来ない。

銀「っ!!」

すると銀が、意外な行動に出た。それは・・・

銀「ゴクツ・・・ゴクツ・・・ゴクツ・・・!」

自分の顔に被ってる水塊を飲み始めたのだった。

須美「ええ……?」

この銀の行動を見て、須美が少し引いた。

園子「ミノさん大丈夫!」

そして銀が水塊を飲み干した。

銀「ぷはー!」

須美「全部飲んだ……」

銀「神の力を得た勇者にとって、水を飲み干すなど造作もないのだ!!うう……気持ち悪い……!!」

園子「ミノさん凄くいい!お味は!」

銀「最初はサイダーで、途中でウーロン茶に変化した……」

園子「不味そう……」

須美「そ、そんな事より!パーテックス!え?」

園子「鷺尾さん?」

須美「誰か居る。」

銀「誰か?」

3人の目線の先には……

バーテックスに向かって走るタケルの姿があつた。

銀「誰だあの人？」

園子「勇者さんかな？」

須美「いや違うわ……」

タケル「かなりでかいけど、ここで何とかして倒さないと！」

両手を腰に翳すとゴーストドライバーが出現した。そしてオレゴースト眼魂を押しすとGの文字が浮かび、ゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『アーイー・パッチリミナー！パッチリミナー！』

ゴーストドライバーからパーカーゴーストが出現し、周囲を飛び回る。

園子「何あれ!？」

タケル「変身!!」

ゴーストドライバーのレバーを操作した。

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

パーカーゴーストを纏い、タケルが仮面ライダーダーゴースト・オレ魂に変身した。

銀「変身した!？」

園子「やっぱり勇者さんかな!？」

須美「あのような姿の勇者は見た事無いわ・・・」

タケル「命、燃やすぜ!!」

ガンガンセイバーを持って浮遊し、バーテックスに立ち向かう。  
タケル「はあっ!!」

ガンガンセイバーを振り下ろすと、バーテックスに傷が出来た。  
タケル「今だ!!」

ガンガンセイバーをガンモードに変形させ、エネルギー弾を傷に向かって放った。するとバーテックスの傷が広がった。

タケル「行ける!!」

するとバーテックスが水塊をゴーストに向かって噴射した。

タケル「っ！おっと！」

避けながらムサシゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填した。

『カイガン！ムサシ！決闘！ズバット！超剣豪！』

ムサシ魂を纏った。

銀「色が変わった!？」

須美「あれは一体……?」

タケル「はあっ!!えいつ!!」

ガンガンセイバーを二刀流モードにしてバーテックスを斬り続ける。再びバーテックスが水塊を噴射する。

タケル「させない!!」

ゴーストドライブのレバーを操作した。

『ダイカイガン!ムサシ!オメガドライブ!』

ガンガンセイバーの威力を高めて。

タケル「はあああああ!!!」

オメガドライブで水塊を全て斬り裂いた。

銀「彼奴、凄く強い・・・」

須美「バーテックスを圧倒している・・・それより、早くしないと大橋から出てしま

うわ!!」

銀「出たら撃退出来なくなるもんな・・・根性でもう一回!」

園子「あ！ピツカーンと閃いた!!」

一方ゴーストは、バーテックスと奮闘中。周囲に水泡のような物体が増え始めた。タケル「このままじゃマズイかも・・・相手は水・・・水・・・そうだ!」

エジソンゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填した。

『カイガン！エジソン！エレキ！ヒラメキ！発明王!』

エジソン魂を纏い、ガンガンセイバーをガンモードに変形した。

タケル「エジソンさんの力なら、奴を倒せる事が出来る!」

するとそこに、矢がバーテックスに直撃した。

タケル「ん?」

須美「効いた!」

園子「こつちも効いたよ!」

須美「急がないと!」

タケル「あの子達?」

するとバーテックスが、3人に向かって水塊を噴射した。

園子「展開!!」

槍の先端から、盾を展開して、水塊を防いだ。その間に須美が矢を連射する。

園子「この槍、盾になるんよ!」

銀「園子便利!!」

須美「このまま前進!!」

するとバーテックスがビームを放射した。3人が力を振り絞って防ぐ。

須美「乃木さん大丈夫!」

銀「勇者は根性!!押し返せ!!!」

根性で押し返す。

園子・銀「オーエス!オーエス!オーエス!」

銀「ほら!鷲尾さんも!!オーエス!」

須美・園子・銀「オーエス!オーエス!オーエス!」



しかしビームの威力が増し、押されていく。

銀「くっ!! 駄目なのか!!」

園子「まだまだ!!!」

『ダイカイガン！エジソン！オメガドライブ！』

ゴーストが稲妻を纏い、バーテックスの巨大な水の塊をキックで破壊した。バーテックスが痺れ始めた。

須美「っ!？」

銀「っ!!」

園子「っ!!」

タケル「今だ!!!」

銀「よし!!突撃ーー!!」

3人一齐に大ジャンプした。

園子「鷲尾さん!!」

須美「狙い辛い!!」

園子「ミノさん!振り回すよ!!」

銀「行っちゃえ!!!」

園子「うーんどっこいしょーー!!!」

力いっぱい銀を投げ、須美が矢でバーテックスを射抜く。

須美「三ノ輪さん!!!」

銀「うおおおおお!!!」

握ってる双斧が炎を纏い、バーテックスの巨大な塊を破壊した。

銀「生かせるかああああああ!!!」

双斧を乱舞のように振り回してバーテックスを斬り続ける。

銀「うおおおおお!!!」

バーテックスの本体を斬り壊した。壊した反動で後ろに飛ばされた。園子「ミノさん!!」

須美「はっ!!」

飛ばされた銀が落下した。

銀「どうだ!!!」

すると風鈴の音が響き始め、周囲の結界が白に染まった。

須美「これ・・・」

園子「鎮花の儀・・・?」

桜の花びらが舞い散り始めた。

タケル「桜の花びら……?」

園子「ミノさん、大丈夫?」

銀「うん。ガッツリ弱らせてやった。」

園子「お陰で始まったよ!」

須美「綺麗……ん?」

バーテックスの本体が、一瞬にして消えた。

須美「消えた……?」

結界が元の樹海に戻り、地面から無数の光の球体が舞い上がった。

須美「鎮まった……?」

銀「撃退……?」

園子「出来た?」

銀・園子「……やったー……!!!」

タケル「……ん?」

すると樹海に地震が起こり、4人を飲み込んだ。

瀬戸大橋近くにある祠。須美、園子、銀が立っていた。

園子「そっかあ。学校に戻る訳じゃないんだ。」

銀「ん？うわっ！ヤベエ！上履きだ!!」

園子「本当だ！」

銀「あ、ふふくん。樹海撮ったんだった。」

スマホから樹海の写真を出したが。

銀「あれ？樹海じゃ無くなってる!？」

園子「写らないんだね。ん？おおい鷲尾さくん？須美さくん？須美助？」

呼んでも、須美の返事は無い。

銀「ん?」

後ろを見ると、ゴーストが立っていた。

銀「あ!さっきの奴!」

園子「わあ!本当だ!」

タケル「え?あ、君達はさっきの?」

銀「なあ、お前って何者なんだ?勇者なのか?」

タケル「勇者?それって、君達がさっき変身した姿の事?」

園子「そうだよ?私達は勇者なんよ。」

銀「お前は一体誰なんだ?その姿、幽霊に見えるんだけど・・・」

タケル「ああ、俺?ちよつと待ってて?」

ゴーストドライブバーから、エジソンゴースト眼魂を出してカバーを閉じた。すると変

身が解除され、タケルの姿に戻った。

『オヤスミィ』

タケル「俺は天空寺タケル。仮面ライダーゴーストだよ。」

銀「仮面ライダー・・・?」

園子「ゴースト・・・?」

タケル「そう。俺が変身する姿だよ。君達の名前は?」

銀「私は三ノ輪銀！宜しく！」

園子「乃木園子だよ。」

タケル「あの子は？」

銀「ああ、鷺尾須美さんだ。」

須美「……………」

タケル「ん？」

その後タケルは宿を探す事にした。すると後ろから。

???「そのあなた。」

タケル「はい？」

後ろに振り向くと、安芸先生が立っていた。

安芸先生「天空寺タケルさんですよね？」

タケル「そうですけど、あなたは？」

安芸先生「あなたに少しお話があります。」

夕方、須美は家の離れで水を被って清めていた。

須美（辛勝だった・・・私1人じゃ、勝てなかった・・・）

部屋に戻って、パソコンを開く。友達がいらない友達の作り方を調べていた。

須美「んゝ・・・」

後日の神樹館。

安芸先端「昨日お話しした通り、3人には神樹様の大切なお役目があります。だから昨日のように、突然教室から居なくなる事がありますが、騒いだりせず、落ち着いて心の中で3人を応援して下さい。皆様には、日々の勉強に励むと言う務めがありますからね。」



放課後。

クラスメイトA「ねえねえ、お役目って大変なの？」

クラスメイトB「痛いの？」

銀「いやあ、話しちゃ駄目なんだよね。」

クラスメイトA「ええ？ケチ。」

一方須美は何か緊張していた。そして勇気を出して席から立った。

須美「ねえ、乃木さん、三ノ輪さん……よ、良ければその……ここ、これから……し、祝勝会でもどうかしら……？」

銀「おお！良いね！」

園子「うん！行こう行こう！」

大型ショッピングセンター・イネスのフードコート。

須美「え、えーつと、今日と言う日を、無事に迎えられた事を大変嬉しく思います……

本日は大変お日柄も良く……神世紀二九八年度、勇者初陣の祝勝会という事で、お集

りの皆様の今後益々の?栄と健康・・・そして・・・」

銀「かたつ苦しいぞ!かんばしい!」

ジュースを飲む。

園子「ありがとうね。須美助。私もね、須美助を誘うぞ誘うぞって思ってたんだけど、中々言い出せなかつたから凄く嬉しいんだよ。」

銀「うん!鷺尾さんから誘って来るなんて、初めてじゃない?」

園子「実はそうなんだよ!」

銀「合同練習も無かつたしなく。なのに私ら、初陣良くやつたんじゃない?」

園子「ねえ。私も興奮しちゃって、ガンガン語りたかつたんだよ!」

須美「私も実はその・・・話をしたくて、2人を誘つたの・・・私ね、2人の事をあまり信用してなかつたと思う:それは、2人の事が嫌いとかそう言うのじゃなくて:私が、人を頼る事が苦手で・・・」

園子「須美助・・・」

須美「でも、それじゃ駄目なんだよね。私1人じゃきつと何も出来なかつた・・・2人が居たから・・・あの・・・だから、その・・・これから私と、仲良くしてくれますか!?!」

銀「もう既に仲よしだろ?」

須美「え？」

園子「嬉しい！私も須美助と仲良くしたかったんだ〜！ほら、私も友達作るの苦手だったから。」

須美「乃木さん・・・」

園子「須美助も同じ思いだったんだ〜。嬉しいな〜！須美助〜！」

須美「あ、あの、乃木さん・・・」

園子「は〜い！」

須美「その、何時の間にか言ってる須美助って言うのは何・・・？」

園子「あ〜、何時の間にかあだ名で呼んでた〜。」

銀「自覚無かったのかよ・・・」

須美「う、嬉しいけど、その・・・それ、あまり好きじゃないかな・・・？」

園子「じゃあ、ワッシーナは？アイドルっぽくない？」

須美「もつと嫌よ！」

園子「え〜？」

須美「乃木さんも、園子りんとか嫌でしょ？」

園子「素敵〜！」

須美「ごめんなさい、忘れて・・・」



タケル「何が良いかな．．．」

須美「あの人、この前の人？」

園子「本当だね。」

銀「天空寺さくん！」

タケル「ん？あ、君達は確か、三ノ輪銀ちゃんに乃木園子ちゃんに鷺尾須美ちゃん？」

園子「覚えててくれてたんだ〜！」

銀「この前はありがとうね！」

タケル「いや、当然の事をしたまてだよ。君達はここで何を？」

銀「ふふくん、今日は私達皆で、絶品ジェラートを食べに来たんだ！」

タケル「そうなんだ。」

銀「ねえねえ、天空寺さんも一緒にジェラート食べようよ！」

タケル「俺も？でも良いの？」

園子「良いよ良いよ〜！私達を助けてくれたお礼もしたいし。」

タケル「えつと．．．じゃあ、そうしようかな。」

ジェラートを買って、皆で食べる。

園子「あくん。……ん〜!幸せ〜!ほうじ茶&カルピン味大正解〜。ミノさんの  
は?」

銀「しょうゆ豆ジェラート!」

園子「何それ?でも美味しそうだね!ター君のは?」

タケル「俺はマンゴーだよ。」

園子「わあ〜!それも美味しそう!」

タケル「えつと、ター君って何?」

園子「天空寺タケルさんだからター君!」

タケル「そうなの?」

ジェラートを初めて見る須美。食べてみると。

須美「美味だわ!このホロニガ抹茶が織りなす味の調和が絶妙だわ!ん?」

園子「あくん。」

須美「何?」

園子「そんなに美味しいんなら、あくん!」

須美「え?えつと……こう言うの初めてで……」

ホロニガ抹茶を園子に食べさせた。

園子「美味しい!初めての共同作業だね!」

須美「ええ!？」

顔が真っ赤になった。

銀「言葉の意味が可笑しいぞ?」

タケル「鷺尾さん困ってるよ?」

園子「あははは!友達とこんな事してみたかったんだ!わっしーは?」

須美「え!?えつと、私も・・・あ、いや・・・」

銀・園子「あはははは!」

恥ずかしがったが、笑みが溢れた須美だった。

銀「そうだ!ねえタケルさん、私の事は銀って呼んでよ!」

園子「私の事は園子でも園子りんでも良いよ!」

須美「わ、私も須美と呼んで下さい。」

タケル「いや、いきなりそう言われても・・・」

銀「何言ってるんだよ!タケルさんは私達を助けてくれたんだから!」

園子「そうそう!」

タケル「え、えつと・・・じゃあ・・・銀ちゃんに園子ちゃんに須美ちゃん?」

銀「私は呼び捨てで良いよ。そう呼ばれるのはあんまり好きじゃないな。」

タケル「じゃあ、銀。」

銀「宜しい!」

タケル「何か、小学生の君達に囲まれるとちよつと気不味いかも・・・」

園子「そうかな?」

この世界に飛ばされたタケルは、3人の勇者と出会った。彼と彼女達の新たな戦いが始まった。

神世紀二百九八年。

これは、一人の戦士と三人の勇者の物語。

神に選ばれた少女達のおとぎ話。

いつだって、

神に選ばれるのは無垢な少女達である。

そして多くの場合、

その結末は――

「END」



## 第十四話 「友達！連携を深める！」

須美、園子、銀が人類を守る勇者として役目を果たし、仮面ライダーゴースト・天空寺タケルと出会ってから半月後、2体目のバーテックスが出現した。

バーテックスが高速回転して、風を巻き起こした。4人は飛ばされないよう持ち堪える。

園子「くっ・・・!!!」

銀「身動き取れねえよ!!」

バーテックスは回転を止めず、風を起こし続ける。

園子「あのぐるぐる！上から攻撃すると弱そうだけど！」

タケル「だったら!!」

ビリー・ザ・キッドゴースト眼魂をゴーストドライブバーに装填した。

『カイガン！ビリー・ザ・キッド！百発百中！ズキューン！バキューン！』

ビリー・ザ・キッド魂を纏い、ガンガンセイバーをライフルモードに変形し、バツククロックを持った。

タケル「喰らえ!!」

バーテックスの顔に向けて連射した。すると回転が徐々に弱まった。

銀「回転が遅くなった!」

タケル「行ける!!」

大ジャンプして、ゴーストドライバーとアイコンタクトさせた。

『ダイカイガン!』

ガンガンセイバーのスコープでバーテックスに狙いを定めた。

タケル「行けえ!!」

『オメガインパクト!』

強力なエネルギー弾を放った。バーテックスがオメガインパクトを受け、回転が止んだ。

銀「やった!!」

タケル「よし!!」

しかし徐々に樹海の侵食が進んでいく。

須美（っ!マズイ・・・何とかしなきゃ!）

大ジャンプした。

銀「須美!!」

須美「南無八幡大菩薩!!」

チャージして矢を放つ。しかしバーテックスが矢を避けた。

須美「そんな!!」

タケル「躲した!?!」

バーテックスが須美に高速接近して突き飛ばした。

須美「きゃあああ!!」

再び回転して、園子に向かって吊るしてる錘をぶつけようとした。

園子「あ!危ない!!」

槍を展開させて、間一髪防いだ。しかしバーテックスが何度も錘をぶつけ続ける。

銀「っ!」

この隙を見た銀が、園子から離れてジャンプした。

園子「ミノさん!?!」

大ジャンプした銀が、ゴーストの横に。

銀「タケルさん!一気に行くぞ!」

タケル「分かった!」

ベンケイゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン!ベンケイ!アニキ!ムキムキ!仁王立ち!』

ガンガンセイバーをナギナタモードにすると、クモランタンが出現し、ガンガンセイバーと合体した。

『ダイカイガン!』

須美 「三ノ輪さん! タケルさん!」

『ベンケイ! オメガドライブ!』

タケル 「はあああああああ!!!」

銀 「うおおおおお!!!」

オメガドライブと双斧でバーテックスを倒した。

戦闘後の神樹館。

安芸先生「ゴリ押しにも程があるでしょ！」

戦いには勝ったものの、安芸先生に叱られた。

須美・園子・銀「はい・・・」

スマホで銀とゴーストがバーテックスを何度も壊す映像を拝見する。

安芸先生「これじゃあ、あなた達の命が幾つあつても足りないわ。共闘しているゴーストと言う者ならまだ大丈夫だけど、お役目は成功して、現実でも被害を軽微なもので済んだのはよくやってくれたけれど。」

須美「それは、三ノ輪さんと乃木さんと、タケルさんと言う方のお陰です。」

安芸先生「はあ。ゴーストは兎も角、あなた達の弱点は、連携の演習不足ね。まず、3人の中で指揮を執る隊長を決めましょう。」

須美（隊長・・・私だわ！）

自分が隊長になれるチャンスだと思った。だが。

安芸先生「乃木さん、隊長を頼めるかしら？」

園子「え？わ、私ですか？」

銀「私はそう言うの柄じゃないから、私じゃなければどっちでも。」

須美（そっか、乃木家は大赦の中で大きな力を占めている・・・そう言う時も、リー

ダーに選ばれるべき家柄なんだ。」

そう納得した須美は。

須美「私も、乃木さんが隊長で賛成よ。」

園子「わっしー・・・」

須美（でも、実際は私が纏めないと。うん、頑張ろう!）

安芸先生「決定ね。神託によると、次の襲来までの期間は割とあるみたいだから、連携を深める為に合宿を行おうと思います。」

須美・園子・銀「合宿!?!」

安芸先生「そしてその合宿に、ゲストを呼ぶ事にしたわ。」

須美・園子・銀「ゲスト!?!」

合宿当日。神樹館貸し切りのバスの中に、須美がイライラし、園子が相変わらず爆睡中。

園子「すぴー．．．すぴー．．．」

須美「遅い！三ノ輪さん遅い！」

イライラしてる理由は、銀が遅刻しているからである。すると噂をすれば。

銀「あ、悪い悪い！遅くなっちゃって！」

須美「遅い！あれだけ張り切ってたのに10分遅刻よ！どう言う事かしら？」

銀「色々あって．．．いや、悪いのは自分だけど、兎に角ごめんよ須美。」

須美「この際だから注意させて貰うけど、三ノ輪さんは普段の生活が少しだらしないと思うわ！勇者として選ばれた自覚を．．．」

“パーン！”

この破裂音は、園子の鼻ちようちんが割れた音だった。

園子「あれ．．．？お母さん、ここ何処．．．？」

須美（やつぱり私がしつかりしないと．．．この美しい国を守る為に！）  
バスが発車した。

讃州サンビーチ。安芸先生と勇者に変身した須美達3人。

安芸先生「お役目が本格的に始まった事により、大赦は全面的にあなた達勇者をバツクアツプします。家族の事や、学校の事は心配せず、頑張つて。」

須美・園子・銀「はい!」

安芸先生「それと、この前話した通り、合宿にゲストを呼んでるわ。」

タケル「やあ皆。」

須美・銀「タケルさん!」

園子「ター君!」

タケル「驚かせちゃってごめんね。実は俺、この前のバーテックスの戦いの後、安芸



先生に呼ばれちゃって。」

銀「じゃあ、そのゲストって言うのは。」

タケル「俺だよ。」

安芸先生「ではタケルさん、挨拶を。」

タケル「えつと・・・勇者に選ばれたからには、この先激しい戦いが待ち構えてるかも知れない。だから、特訓でも常に気を引き締めて頑張つて。」

須美・園子・銀「はい！」

最初の特訓。バレーボールのピッチングマシンを数機設置した。

安芸先生「準備は良い？この訓練のルールはシンプル。あのバスに三ノ輪さんを無事到着させる事！お互いの役割を忘れないで！」

園子「行くよー！」

銀「上手く守ってくれよ？」

須美「私はここから動いちゃ駄目なんですかー?」

波止場に立つてる須美が質問をした。

安芸先生「駄目よー!はい、スタート!」

訓練開始。

園子「行くよー!」

槍を展開させて走る。銀が園子の後ろに付いて行く。

タケル「じゃあ行くよ!」

持つてるボタンを押すと。ピッチングマシンが作動した。

ボールが射出され、園子が防ぎながら銀と一緒に走る。

銀「ここからジャンプしちゃ駄目なのか?」

園子「ズルは駄目だよ。」

波止場から須美が矢を連射し、ボールを射抜く。順調に進んでると思われたが、須美

の矢がボールを外した。

銀「うがつ！」

そのボールが、銀の額に直撃した。

安芸先生「アウトー！」

須美「ごめんなさい、三ノ輪さん！」

園子「どんまいだよ！わっしー！」

銀「呼び方も固いんだよ。銀で良いぞ。銀で。」

園子「私の事はそのつちで！はい、読んでみてー？」

須美「・・・」

安芸先生「はい！もう一回！ゴール出来るまでやるわよ！」

夕方の旅館。

安芸先生『この合宿中は、3人一緒に行動する事。1+1+1を3ではなく、10にするのよ。』

客室で3人が夕食を食べる。

園子「わっしーの荷物あれだけ? 少なくない?」

須美「そうかな?」

園子「ミノさん、お土産買うの早過ぎる。」

銀「そう言う園子の荷物は何だ?」

須美「何処から突っ込んで良いか分からないわ・・・」

園子「白でおうどん作るんよ。」

一方タケルは、別の客室で夕食を食べていた。

タケル「この蟹と天ぷらと冷奴美味しい。でも俺までこんなご飯が食べれるなんて、ちよつと贅沢だね。」

翌日の訓練。

銀「だあああああ!!あうっ!!」

ボールがまた銀に命中した。

安芸先生「アウトー!もう一回!」

客室で勉強。タケルも参加している。

安芸先生「こうして神樹様は、ウィルスから人類を守る為に壁を作ったのです。」

銀（うう・・・合宿なら勉強しないで済むと思ったのに・・・）

須美は勉強し、銀は頭を抱え、園子は寝て、タケルは教科書を見ている。

安芸先生「所が何が起こったのか、乃木さんは答えられる?」

寝ていた園子が起き。

園子「はい・・・バーデックスが生まれて、私たちの住む四国に攻めて来たんです

」。

安芸先生「正解ね。」

須美・銀（あれで聞いてたんだ・・・）

タケル（園子ちゃん凄い・・・睡眠学習かな？）

翌日の特訓。銀がジャンプした。

銀「よっしゃ!!これで・・・あうっ!!」

行けると思ったが、後ろからボールが直撃した。

安芸先生「アウトー!」

その後は座前。タケルが指導。

タケル「良いかい？座禅をすれば、安らぎが得られ、集中力を鍛えられ、ストレスが

解消出来、ストレスを生み出さなくなるんだ。」

須美は真剣に座禅し、園子は寝ながら座禅し、銀は苦しんで倒れた。

タケル「銀、まだまだだね。」

銀「これキツイよタケルさん・・・」

タケル「駄目駄目。座禅も訓練の1つ。そうしないと、この先の戦いで勝てないよ。」

翌日の訓練。須美が矢でボールを全て射抜き、園子が銀をバス付近まで近付けさせた。

銀「サンキュー!!」

大ジャンプして、双斧でボールを斬り続け、そして。

銀「おりやああああああ!!!」

斧を振り下ろし、バスを破壊出来た。

銀「ゴーーーーー!!!!」

訓練クリア。

須美・園子「やったーーーーー!!!!」





銀「ああ、あれ握つてるとそうなるよな。鷲尾さん家の須美さんも、身体を見せなさい。」

須美「え？何で？」

銀「クラス一の大きいお胸を拝んでおこうかなと、まるで果物屋だ！親父、その桃をくれー！」

須美「ちよ、ちよっと駄目ー！」

隣の男湯では。

タケル「ん？須美ちゃんと銀がはしゃぐ声が聞こえる・・・さてと、暖まったし上がろうかな。」

温泉から上がった。

女湯。

銀「事実を言つたまでだね！寧ろ大きい癖して照れてるとか、贅沢言うな！」

園子「サンチョも入れてあげたいな。」

すると誰かが来た。

園子「ん?」

須美・銀「ん?わああ!!」

安芸先生「三ノ輪さん、鷺尾さん、温泉で騒ぎ過ぎ。」

須美と銀は、安芸先生の身体を見て言葉を失った。

銀「いやあく、大人の身体って凄いな。服着てるとそう言うのあまり分かんないだ  
けど・・・」

須美「そうね・・・例えるなら、戦艦長門・・・」

銀「何それ?」

須美「9世紀の我が国が誇る戦艦よ!詳しく話してあげる!」

銀「う、うん・・・」

その頃タケルは、客室から星空を眺めていた。

タケル「星が綺麗だなく。こんな日々が続くと良いけど・・・」

彼は、安芸先生と初めて会った時を思い出した。

安芸先生『天空寺タケルさんですよね？』

タケル『そうですけど、あなたは？』

安芸先生『あなたに少しお話があります。』

タケル『お話ですか？それより、何で俺の名前を？』

安芸先生『大橋の祠で、鷲尾さん達と一緒に居た光景を目にしまして。』

タケル『そうなんですか。』

安芸先生『タケルさん、先程の姿の仮面ライダーゴーストとは何だったんですか？』

タケル『・・・これを話しても信じてくれなさそうですけど。』

安芸先生『信じましょう。』

タケル『・・・実は俺、この世界の人間ではないんです。』

安芸先生『この世界の人間ではない？』

タケル『はい。俺は元の世界で発生した裂け目に吸い込まれて、この世界に迷い込んでしまったんです。そしてあの3人と出会って、巨大な怪物と戦ったんです。そして俺は、元の世界に帰れる方法を考えているんです。』

安芸先生『そうですか。あなたに一言言います。』

タケル『何ですか?』

安芸先生『あの子達を助けてくれてありがとうございます。』

タケル『いや、当然の事をしただけですよ俺は。』

安芸先生『それで、あなたにあの子達の戦いに協力していただければと・・・』

タケル『・・・そう言うなら、分かりました。俺もあの怪物を見過ごす事は出来ません。』

安芸先生『ありがとうございます。』

客室。

タケル「何とかして元の世界に帰れる方法を探さないと・・・眠くなってきた・・・そろそろ寝ようか。」

電気を消して、布団に入って寝る。

同じ頃須美達は。

銀「ふふ〜ん、お前ら、合宿の最終日に簡単に寝られると思ってる〜?」

園子「自分の枕を持って来てるから、簡単に寝られるよ〜。」

銀「それ、名前タコスだって?」

園子「サンチョだよ〜。よしよし〜。」

銀「つで園子さん、その服は?」

園子「鳥さ〜ん! 私焼き鳥好きなんよ〜!」

銀「うん、美味いよね。」

須美「兎に角駄目よ! 夜更かしなんて。」

銀「マイペースだな、須美・・・」

須美「言う事聞かない子は、夜中迎えに来るわよ〜?」

怪談話をした。

園子「む、迎えに来る!?!」

怯える園子。

銀「そんなホラーは止めて、好きな人の言い合えっこしようよ!」

須美「す、好きな人って・・・三ノ輪さんはどうなの?」

銀「敢えて言うなら、弟とか!」

園子「家族はズるいよ。」

須美「私も居ないから、おあいこね。乃木さんは?」

園子「フッフッフ、私は居るよ?」

銀「おおお!恋バナ来たんじゃない!?!」

須美「だ、誰!?!クラスの人!?!」

園子「うん!わっしーとミノさん!」

銀「だと思ったよ・・・これで良いのかね・・・」

須美「良いのよ!私達には神聖なお役目があるんだから!明日も励もう!家に帰るまでが合宿よ!」

銀「へーい。」

須美「消灯!」

電気を消して布団に入る。すると天井に星空が現れた。

須美「え!?!」

銀「何だこれ!?!」

園子「プラネタリウム！」

須美「何故ここに？」

園子「綺麗だから持って来たの〜！」

須美「消しなさい！」

園子「しよぼ〜ん……」

翌日。合宿から帰る日だが、神樹館貸し切りのバスの中に、須美がイライラし、園子が相変わらず爆睡中。

園子「すびー……すびー……」

須美「遅い！」

イライラしてる理由は、銀が遅刻しているからである。すると噂をすれば。

銀「ごめんごめん。野暮用で。」

須美「野暮？（何か怪しい。）」

後日の朝。タケルは大赦が手配してくれたアパートで寝ている。

タケル「ん・・・?」

目を開けて起きた。

タケル「ふあゝ・・・よく寝たゝ。今日も彼処行ってみようかな。」

彼は起きて、近くのある家にお邪魔した。

同じ頃神樹館。

銀「ギリギリセーフ!」

安芸先生「セーフじゃありません。」

出席簿で軽く叩いた。

銀「すみません。」

須美（三ノ輪さんは遅刻が多過ぎるわ。でも理由を話そうとしないし、何か事情があるのかも知れない。）

ランドセルから猫が顔を出した。



銀「あゝ！こら駄目だつてー！」

須美（な、何故猫？怪し過ぎる・・・）

休日。須美と園子が何処かへ向かっていた。

須美「そろそろね。三ノ輪さんの家に到着するわ。乃木さん、つてあれ!?居ない!?」  
後ろに園子の姿が消えていた。

園子「アリスさんだゝ！ハイハイ元気〜？」

アリを見付けて挨拶していた。須美が園子を引っ張る。

須美「フラフラしないの！」

園子「しょぼくん・・・」

暫くして、銀の家に到着した。

須美「ここが三ノ輪さんの家ね。早速様子を・・・」

園子「ピンポンダッシュ!？」

須美「そんな恐ろしい事は駄目よ! こっちにしましよ。こんな事があるうかと持つて来たの。」

縦型のレンズを使用した。

園子「おおく。本格的。」

これで銀の家を覗く。

須美「っ!」

銀「おいおい泣くなく。お前はどの銀様の弟だろ?」

1人の赤ん坊を抱えてる銀を発見した。

銀「泣くなって。泣いて良いのは母ちゃんに預けたお年玉が、返って来ないと悟った時だけだぞ。」

赤ん坊「ううう・・・」

銀「ああ、ぐずり泣きが始まった・・・ミルクやおしめじやないだろうし・・・ほらほらほら。」

ガラガラで赤ん坊を泣き止ませた。赤ん坊は笑ってガラガラを見る。

銀「おお！泣き止んだ！偉いぞ！マイブラザー！全く、甘えん坊な弟だもんな。大きくなったら舎弟にしてこき使おう！」

??? 「自分の弟をこき使うなんて、考えがエグイね。」

須美・園子「っ！」

何とタケルも居た。

銀「タケルさん！今日も来てくれたの？」

タケル「うん。金太郎君、元気してる？よしよし。」

弟「姉ちゃん、タケル兄ちゃん、買い物は？」

タケル「鉄男君が呼んでるね。」

銀「はーい！ちよつと待ってねー！」

タケル「今いくよー！」

園子「わあ〜! ミノさんワンダフル〜! 子守とかお手伝いしてるよ〜!」

須美「あんな小さな弟達が居たのね。世話が大変と言う事なのかしら? でも何故タケルさんも?」

園子「きつと、ター君がミノさんに惚れたに違い無いよ〜!」

銀とタケルを尾行する事にした。

園子「あ! わっしー見て見て!」

1人の老人を、銀とタケルが助けた。

須美「道を尋ねられたのかしら?」

次は、1人の女性に道を聞かれた

須美「まただわ!」

園子「ミノさん、ター君優しい〜!」

今度は、倒れてる自転車を起こした。

園子「自転車を起こしてる。」

飼い主が手放した犬を止めた。

園子「次から次にだよ。ミノさんとター君つて、事件に巻き込まれやすい体質なんだね。」

須美「これも、勇者とゴーストだからかしら？」

イネスでも尾行。銀が迷子の女の子を連れて一緒に母親を探す。

園子「次は迷子だよ？」

一方タケルは、喧嘩してる2人の子供の仲裁に入っていた。

須美「喧嘩の仲裁?」

今度は女性が落とした果物を拾ってあげた。

須美「巻き込まれてるって言うか・・・放つとけないのね。もう見てられないわ。三ノ輪さん!タケルさん!」

銀「ん?須美!」

タケル「園子ちゃんも!」

須美「手伝うわ。」

銀「え?な、何だよお前ら?」

その後。フードコートで昼食を食べる。

銀「それじゃあ、2人共家の前から見てたって言うの!?!ええ・・・何か恥ずかしいなそれ・・・」

園子「恥ずかしくなんかないよ。偉いよ。」

須美「何時も遅れる理由はこれだったのね。」

園子「言ってくれれば良いのに。」

銀「それは何か、他の人のせいにしてるみたいで、何があるかと遅れたのは自分の責任な訳だしさ。」

須美「タケルさん、銀と一緒に居る理由は何ですか？」

タケル「数週間前だったかな？俺が街中を歩いてる最中に、銀の弟の鉄男君が迷子になつてのを見たんだよ。そして探していたら、銀とお父さんとお母さんが見付けたんだ。それ以来、鉄男君と金太郎君と遊ぶ機会が増えたんだよ。お父さんとお母さんも鉄男君を助けてくれた事に感謝してたんだ。」

須美「そうだったんですか。」

園子「昔からそう言う体質なの？」

銀「ツイてない事が多いんだ。」

タケル「まあ俺も同じかな？」

銀「トホホ・・・」

タケル「ん？」

銀「ん？」

須美・園子「ん？」

周りを見ると、時が止まっていた。

瀬戸大橋の風鈴が鳴り始めた。

タケル「風鈴の音。」

銀「ほらな、一応台無し。」

須美（今度こそ私が!）

そして亀裂が起こり、樹海が発生した。

『アーイー!バツチリミナー!バツチリミナー!』

タケル「変身!」



『カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』  
タケルがゴーストに変身し、須美達3人も勇者に変身した。

樹海。バーテックスが大橋を渡り始めた。

須美「来たわ。」

タケル「新たなバーテックス・・・」

銀「ビジュアル系なルックスしてるな。」

須美「まずは私が、これで様子を見る！」

弓矢を引いた瞬間、バーテックスが地面を叩いて振動を起こした。

須美「きやああ!？」

タケル「おっと!？」

園子「うわああ!？」

銀「何だ何だ!？」

園子「あの敵のせい!？」

タケル「地面を叩いて振動を起こしているのか!？」

須美「今度こそ・・・今度こそ・・・今度こそ!」

あの時のようにいくまいと、慎重に狙いを定めたが。

銀「落ち着けて須美。」

須美「三ノ輪さん・・・?」

園子「私達と一緒に倒そう?」

須美「乃木さん・・・?」

タケル「君達の合宿の成果を出す時だよ。」

須美「タケルさん・・・皆・・・」

するとバーテックスの振動起こしが止んだ。

タケル「止まった?」

今度は足が伸ばし、襲い始めた。

園子「はあっ!!」

前に出た園子が、槍を展開させて足を防いで守る。

園子「どっこいしょ!!」

力を出して弾いた。

園子「よろし!敵に近付くよ!」

銀「了解!」

須美「了解！」

タケル「了解！」

ロビンゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン！ロビン・フッド！ハロー！アロー！森で会おう！』

ロビン魂を纏い、ガンガンセイバーをコンドルデンワールと連結させアローモードにした。

するとバーテックスが大ジャンプした。

園子・銀「っ!？」

バーテックスは上空から足を伸ばして攻撃を開始した。園子と銀が後ろにジャンプして避けた。

タケル「行くぞ須美ちゃん！」

須美「はい！」

弓矢を引いて、バーテックスに向かって射抜くが、距離が届かない。

須美「制空権を取られた!?!」

タケル「だったら!」

アローモードを引いて、バーテックスに向かってエネルギーで射抜く。しかしバーテックスが足でエネルギーを弾いた。

タケル「弾いた!?!」

銀「降りて来い!!コラー!!」

するとバーテックスの足が真下に伸び始めた。

園子「何か仕掛けて来る・・・」

バーテックスの足が、重ね合わせドリルのように急降下を開始した。

銀「っ!?!」

バーテックスのドリル攻撃を銀が力を振り絞って防ぐ。

銀「おるあああああああ  
!!!!!!」

園子「ミノさん!!」

タケル「銀!!」

銀「1分は保つ!!上の敵をやれー!!」

須美（でも、そうしたら三ノ輪さんが危ない……!どうしよう……現実には被害が……）  
三ノ輪さんが……!どうしよう……!」

園子「私達で敵を叩くよー!!」

槍を大きく振って、バーテックスに通ずる階段を生成した。

園子「わっしー!ター君!上!」

須美「り、了解!!」

タケル「ありがとう!!」

2人は、園子を作った階段を駆け上り、バーテックスに向かって大ジャンプした。

『ダイカイガン!』

ゴーストがガンガンセイバー・アローモードをゴーストドライブバーにアイコンタクトさせ、レバーを操作した。

『ダイカイガン!ロビン・フッド!オメガドライブ!』

アローモードを引いて、狙いを定める。

須美「届けえええええ!!!」

タケル「命、燃やすぜ!!!」

『オメガストライク!』

アローモードのエネルギーの分身と、チャージした矢を同時に放ち、全弾がバーテックスに直撃した。

銀「えいつ!!」

ドリルを保ち続けた銀がドリルを振り払う。

そして全弾の矢の直撃を受けたバーテックスが落下し始めた。

園子「ここから、出て行け!!!」

槍の先端を巨大化させた。

『ダイカイガン!ロビン・フッド!オメガドライブ!』

落下中のゴーストがレバーを操作してオメガドライブを発動した。

タケル「はあああああああ!!!」  
そのまま急降下し、キツクでバーテックスを貫いた。

園子「突撃ーーー!!!」

大ジャンプして、バーテックスの身体を貫いた。

タケル「園子ちゃん!!」

落下する園子を受け止めた。

園子「ミノさん!!!」

タケル「銀!!!」

須美「砕けえええええええ!!!」

銀「三倍にして返してやる!!!」

双斧が炎を纏った。

銀「釣りは取つとけええええええ!!!」

大ジャンプして、炎を纏った双斧でバーテックスを乱舞した。

銀「おりやりやりやりやりやりやりやりやり!!!  
!!!おりやあああああ!!!」

最後の一撃で本体を破壊した。すると鎮花の儀が始まった。

銀「へへっ、始まった……」

園子「鎮花の儀……」

タケル「勝った……」

須美「終わった……」

戦いに勝ったが、須美は何処か悔しそうな表情をした。

樹海が晴れ、4人は瀬戸大橋記念公園で倒れている。

銀「ああ……いてて……」

タケル「やっと終わった……」

園子「ミノさん、大丈夫……?」

銀「疲れたよ……腰に来る戦いだっ……」

園子「ああして攻撃を受け止めてくれたから、私達が攻め込めたんだよー。ありがとう

うね、ミノさん。」

銀「そつちこそ凄かったじゃん。」



園子「だって、ミノさんが1分保つて言ったんだから、1分は保つじやない？それくらいあれば何とかなると思つて、長引かせると危険だからね。」

タケル「本当、君達は凄いや。」

銀「えへへ、ありがとうタケルさん。」

しかし須美は。

須美（ああ……先生は見抜いてらしたんだ。乃木さんの、いざと言う時の閃きを。私は迷つてるだけだった。それなのに家柄のせい、乃木さんがリーダーに選ばれたと思ひ込んで……大馬鹿だ……自分がしつかりしなくちゃつて思つてたけど、ただ足を引つ張つてただけなんだ……）

銀「あくあ、お腹空いた〜。」

タケル「そう言えばそうだった。」

園子「うどん、食べてる途中だったもんね〜。」

すると須美の泣く声を聞いた。

タケル「須美ちゃん!？」

銀「どうした須美!?!何処か痛いのか!?!」

須美「違うの……私……ごめんなさい……次からは、初めから息を合わせる……」

頑張る……!」

泣きじやくりながら謝罪した。

銀「ああ、頑張ろうな!」

タケル「そうだよ。君達はチームなんだ。」

園子「はい、わっしー。」

ハンカチを須美に渡した。

須美「ありがとう・・・そのうち・・・」

園子「っ!!もう一回言って!わっしー!」

須美「・・・そのうち・・・」

園子「ほおおおおお〜!」

銀「私は!?!私は!?!」

須美「銀・・・」

銀「え?」

須美「・・・銀!」

銀「っ!嬉しいなあ、何か漸く須美とダチになれた気がする!」

須美「銀・・・」

タケル「良かったね須美ちゃん。」

須美「はい・・・」

これは1人の戦士と3人の勇者の物語。神に選ばれた少女達のお伽話。何時だって神に見初められるのは、無垢なる少女である。そして多くの場合、その結末は・・・

「END」

## 第十五話 「日常!楽しい休み!」

とある館。今日も勇者の訓練は欠かせなかった。安芸先生とタケルが訓練を見る。

園子は槍を振り。

銀は双斧の回転斬り。

須美は的に向けて精密に射抜く。

砂時計が終わった。

安芸先生「そこまで!」

特訓終了。

安芸先生「勇者の力は、新樹様に選ばれた、無垢な少女でなければ使えない。あなた達に頑張って貰うしかないわ。そこで、次の任務は・・・」

銀「ゴクリツ。」

安芸先生「しばらくの間、しっかりと休む事。」

須美・園子・銀「え？」

安芸先生「安定した精神状態でなければ変身出来ない。張り詰めっぱなしでは、最後まで保たないからね。」

銀「やったー！休むのだったら任せて下さい！」

園子「私も私もー！」

銀・園子「イエーイー！」

園子「何する何する？」

銀「イネス？」

タケル「休むの任せるって……」

安芸先生「タケルさんも、しっかりとお休みして下さい。」

タケル「はい、ありがとうございます。」

勇者達の休暇。須美は屋敷の離れで水を被って清める。

須美（次なる戦に備えて、休息を取る事もお役目、か……そうは言っても私、気が

休まるかしら? ん?)

そこに侍女が来た。

侍女「お嬢様、乃木様と天空寺様がお見えです。」

須美「こんな朝早く?」

着替えて外に出ると。

園子「へーい、わっしー! レッツエンジョイ! 香川ライフ!」

タケル「おはよう須美ちゃん。」

リムジンに乗った園子と、CRF250Lに乗ったタケルが居た。

須美「え、えつと・・・は、ハイカラね。格好も車も・・・」

園子「わあ〜! ありがと〜! ねえ、これからナイスな休日のお出掛けしよう〜?」

須美「い、良いけど・・・」

園子「やったー!!!」

須美「不安になるぐらいの休日テンションね・・・タケルさんもそのつちに誘われた

んですか?」

タケル「うん。朝の散歩をしていたら、園子ちゃんから誘われてね。」

リムジンに乗ってお出掛け。タケルは後ろからリムジンに付いて行く。

園子「ハイハイヘーイ！エビバデイセイ！イエイ！カモンナウ！ヘーイ、ヘーイ！イエイツ！カガワ〜！」

メールを見る須美。銀の返信を見る。

須美「銀も元気ね。」

園子「わっしーも盛り上がっていこうよ〜！」

片方のイヤホンを須美に渡す。

須美「そんな音楽1つで乗れないわよ。」

イヤホンを付けた。

須美「やったかたつた〜、やったかたつた〜♪」

園子「エンジヨイ！」

須美「万歳！」

園子「さあ、楽しいお休みの始まりだよお〜〜！エンジヨイ！」

須美「万歳！」

タケル（須美ちゃん、ノリノリだね・・・）

4人で園子の家へ。銀が女の子らしい服を着て、鏡を見る。

銀「この服は・・・やっぱり私には似合わないんじゃないか・・・?」

タケル「いや、似合ってるよ銀。」

園子「そうだよ似合ってるよ〜!ねえわっし〜?」

須美「ぶわあああああ!!!」

銀の可愛さのあまり、鼻血が大量出血しながらスマホで連写する。

タケル「ちょ!?!須美ちゃん!?!鼻血凄い事になってるよ!?!」

園子「わあく、そんな出し方する人初めて見た〜。」

須美「はあ・・・はあ・・・と、とても似合ってるわ・・・銀・・・」

今度はインスタントカメラで銀を撮影。

須美「で、でも・・・この込み上げて来る気持ちは何かしら!」

タケル「須美ちゃん、性格変わったの?」

園子「何だか今のわっし〜って・・・プロみたいで素敵〜!」

タケル「そっちな?!」



須美「写真は愛よ！ア・イ！今日はどこん耳良い服に挑戦よ！」

銀「ええ!？」

タケル「えつと・・・出なきや。」

部屋からタケルが出た。

その後も銀の着せ替えは続く。

須美「凄いわ！銀！もうこれは、金よ！」

銀「訳分からないぞ!!」

今度はワンピースを着させた。

園子「得点高いよ！」

銀「・・・」

更には赤髪のカツラも被せた。もう誰なのか分からない。

園子「わあ〜!!」

須美「こ、これはこれで!!」

銀「いやナシだろ!!」

須美「アリアリアリアリアリアリ!!!」

着せ替えが終わったが、銀がいじけてしまった。

銀「むゝゝ!!」

タケル「えつと銀、大丈夫?」

銀「タケルさーん!!」

いじけてタケルに抱き付いた。

タケル「よしよし。」

須美「はあく、良かったわ。」

銀「何がだよ!!」

園子「じゃあ次は、わっしーの番ね。」

須美「・・・え!?!」

園子「この洋服とか、似合うと思うよ?」

白とピンクのドレスを須美に見せた。

須美「だ、駄目よ!そんな非国民の格好!」

銀「いやー、似合うと思うなー！」

須美「ええ!? そんな!!」

タケル「銀、切り替え早い・・・」

銀「そーれ! 着せちゃえ!!」

飛び出した銀を見て、タケルが襖を閉めた。

須美「きゃあああああああ  
!!!!!!」

着せ替え終了。

銀「お! 良いじゃん! 須美こそ白衣じゃん! アイドルだつてなれるぞ!!」

園子「私ファン1号になるよ!」

銀「どうタケルさん? 須美の格好!」

タケル「凄く似合ってる・・・」

銀「でしょでしょ!」

須美「そ、そんな・・・(駄目よ・・・こんな、非国民の洋服・・・)」

自分の格好を見て見惚れた。

須美「はっ!!」

すぐに我に返った。

夕方、すぐに自分を清めた。

須美「大和撫子である私とした事が!!」

く園子の夢く

須美「そのつち、私・・・アイドルになる覚悟を決めたわ!!」

タケル「え、ええ!」

銀・園子「おおお!!」

須美「そのつちと銀も一緒よ!!」

園子「私も!」

銀「んくくくロック!!」

須美「行きましょう!ライブが始まるわ!」

タケル「え、えつと・・・頑張つてね。」

銀「ハアツ!!」

大太鼓を叩いて演奏する銀と、笛で演奏する園子と、ボーカルの須美がライブを盛り上げる。

園子「勇者的な盛り上がりだあああああ!!!」

銀「ハアツ!!ローローック!!!」

園子「つて言う夢を見たんよ。」

須美「お客さん入ってた?」

銀「そこ気にするとかロックだな。」

園子「おおく!」

タケル「どんなアイドルだったんだろう・・・何か気になる・・・」  
イネスのフードコートでアイスを食べてる。

後日の神樹館。須美と園子と銀が黒板で絵を描いてる。

銀「ん? 須美のそれ、何だ?」

須美「翔鶴型航空母艦の2番艦・・・瑞鶴よ!」

瑞鶴の絵が細やかに描かれてる。

銀「凄えリアル!」

須美「でしょ? 旧世紀、昭和の時代に数々の戦いで主戦力として活躍した我が国の空母よ! 囿になって最後の最後まで頑張ったのよ!」

涙を流しながら敬礼する。

銀「す、須美ってそう言うの、やたら詳しいよな・・・」

須美「夢は歴史学者さんだから!」

銀「やっぱり真面目さんだ！」

園子「わっしーぼい夢だよね！」

須美「そのつちは、何か夢があるの？」

園子「私は・・・小説家とか良いなって思つて、時々サイトに投稿したりしてるんだよ。」

銀「おお、何か納得。」

須美「独特の感性だものね・・・」

描いていた絵は猫。

園子「2人も小説の中に登場人物として出演して欲しいなー。優しく頼れるみのさんに、真面目で時々面白いわっしー！」

須美「と、時々面白い・・・？」

銀「ん？つまらないより良いじゃん。」

須美「そうなのだけど・・・私も頼つて欲しいわ・・・」

銀「私、そうやって辛いだけじゃなく、私も頼んで欲しいわ・・・」

須美「ええ!?そんな風に褒められても・・・」

園子「おお！何か良いよ！今の2人の空気！とつても良いよ！良いですよ！」

須美「そ、そう言う銀の夢は!？」

銀「うん．．．幼稚園の頃は、皆や家族を守る、美少女戦士になりたかったなあ．．．」  
須美「分かる!お国を守る正義の味方!それは少女の憧れよ!」

園子「今は?」

銀「ふふっ．．．」

園子「ん?何で照れたのかな?」

銀「いやー、家族って良いもんだから、普通に家庭を持つのもアリかなって．．．でも、そうなると、将来の夢が．．．お、お嫁さん．．．」

園子「ミノさんならすぐ叶うよ!」

須美「白無垢が楽しみだわ!」

銀「何だよ．．．突っ突くなよ!」

園子「小説のネタにするね!」

銀「え!?!やーめーて!!恥ずかしいから!!」

園子の両頬を引っ張る。

須美（小説かあ．．．）

同じ頃タケルは、イネスのフードコートでうどんを食べていた。



タケル「やっぱりうどんは美味しい。ここに来てからもうすっかりハマっちゃった。」

その日の夜。須美はパソコンの小説投稿サイトで園子の作品を探す。

須美「あつ！これだわ、そのうちの小説・・・」

作品名はスペース・サンチヨ。感想一覧は好評価ばかりだった。

須美「す、凄い好評価！読者数も一番多い・・・流石ね、そのっちは・・・はっ

！そうだわ！私も歴史小説を通じて、皆を護国寺道に染めていくのよ!!」

自分も作品を投稿する。

後日。投稿した自分の作品の感想を拝見。

須美「ふふふ・・・さっ、評価はどうかしら・・・」

だが酷評価ばかりだった。

すぐに水で清める。

須美「我が国の素晴らしさを伝えきれない己の質力が憎い!!」

同じ頃タケルは、アパートでパソコンの小説投稿サイトを見る。

タケル「園子ちゃんから教えられた通り、俺も作品を投稿みたけど・・・」

投稿した小説の感想は結構評価が高かった。

タケル「凄い、俺の今までの戦いや日常をモチーフにして作ってみたなら評価が高い。

でもちよつと恥ずかしいかな？」

く園子の夢く

園子「ねえ、わっしーこっち向いてー♪」

猫達と踊りながら須美を呼ぶ。

須美「いいえ、私はわっしーではないわ。」

園子「え？」

須美「その正体は：：富国強兵、正義の味方！全員気を付け！！私が、国防仮面だー」

！！

銀「ロオオオオツク!!!」

園子「格好良い〜〜!!!」

タケル「……………」

園子「つて言う夢を見たんよ〜。」

タケル「園子ちゃんの見る夢って……………」

園子「わっしーがこんな感じで、正義の味方してた〜！」

ノートで国防仮面の絵を描いた。

須美「あら、お洒落な格好!」

銀「ロオオツク!」

後日の神樹館。

安芸先生「もうすぐ、1年生とのオリエンテーションです。6年生としての自覚を持って、しっかりと後輩の面倒を見る事。」

放課後。

園子「オリエンテーションって何するんだっけ?」

銀「1年生と一緒に、楽しく遊びましょうって事さ。」

須美「相手は真つ白な1年生・・・私達勇者のお役目は、この国を守る事!つまり!」  
園子「つまり?」

須美「将来を見越して、愛国心の強い子供達を育成する事も任務の一環と言えるわ!」  
銀「言えるか・・・?」

園子「何だか楽しそうだね〜！じゃあ計画を立てようよ。ん？あれあれ〜？」  
机の中から一通の手紙が入ってた。

園子「中にお手紙が入ってたよ〜？」

銀「果たし状か!？」

須美「気を付けて！不幸の手紙かも知れないわ！」

園子「えつと・・・最近近付けばあなたを見ています・・・」

銀「やつぱり決闘か!？場所は何処だ!？」

須美「呪いよ、清めの塩が必要かも・・・」

園子「私はあなたと仲良くなりたと思います・・・」

銀「え!？」

須美「ただ呪うよりも恐ろしい文章ね・・・」

園子「お役目で大変だとは思いますが、だからこそ支えになりたいと思います・・・だつて。」

銀「も、もしかやこれつて・・・あれじゃないか須美・・・初めにラが付く・・・」

須美「羅漢像!？」

銀「違う！ラブレターだ！」

須美「ああ、そう・・・ラ、ラブラブラブラブ・・・」

園子「わあ・・・私ラブレターもらったんだら、嬉しいな。」

須美「何でそんなに冷静なの!?!こ、恋文をもらったのよ!?!」

園子「字とか封筒をよく見ればすぐ分かるよ。出した人、女の子だよ。」

須美「え?」

銀「なあんだ、女の子かあ・・・」

夕方の鷺尾家。

須美「ただいま戻りました。」

侍女「おかえりなさいませ。須美様、此方を。」

1枚のハガキを手渡された。

須美「これって・・・」

外に出てハガキと一緒に送られた手紙を見る。

須美「わ、私にも・・・恋文が・・・」

勇気を出して手紙を見る。

『鷺尾さんは優等生ですが、注意するとき口うるさく感じます。気をつけて下さい。匿名希望より』

ただのクレームだった。

須美「あーまくさーまんだーばーさらなんせんだーまーたろしやーなーそわたわ!!」  
すぐにお焚き上げ供養をした。

須美「紙切れ一つに色めき立つとは・・・何たる不覚・・・!!」

後日、タケルを誘ってプールで遊ぶ。

銀「オラオラ!行くぞ園子!押しちやうぞく!目指せ竜宮城!」

園子「速い速い!」

タケル「良い天気プールだなんて、誘ってくれてありがとう。」

銀「良いって事だよ!タケルさんが居ないと物足りないからね!」

タケル「ん?」

一方の須美はまだ準備体操をしていた。

銀「おい須美、お前何時まで準備体操してるんだよ。」

タケル「もう3分経ってるよ?」

須美「水の事故って怖いんだから、ちゃんと準備運動しないと、心臓がびっくりするわよ?」

銀「貸し切りなんだから、遠慮なくガッツリ遊ぼうぜ!」

園子「ねえねえ、もし今敵が来たら、私達って水着で出撃するの?」

銀「それは嫌だよなあ、まあイレギュラーなんて、早々起こらないだろうけど…」

須美「1体目だつて早く来たのだから、気を緩め過ぎない事。」

タケル「まあ、須美ちゃんの言葉に一理あるね。」



銀「本当ボインだよなく須美って、実は高校生じゃね？」

園子「もつといってるねく、大学生位かも！」

須美「はいはい。」

タケル「そんな小学生って居るのかな・・・？」

やつと須美もプールに入った。

須美「ねえ銀、競争しない？」

銀「面白い！その挑戦受けた！」

園子「この後、オリエンテーションの作業があるから、飛ばし過ぎないでね・・・」

銀「ヨーヨーイ、ドン!!」

合図で2人が競争する。

園子「あはは、聞いてないかあ・・・」

タケル「オリエンテーションがあるの？」

園子「うん。」

タケル「へえく、楽しそうだね。」

その後神樹館でオリエンテーションの作業をする。

銀「あふう・・・だふう・・・」

園子「あんなにプールで飛ばすからう。」

銀「何の!もうひと頑張り!!」

園子「うふふ、当日が楽しみだね。」

須美「ありがとう。2人のお陰で、最高のオリエンテーションになるわ。」

オリエンテーション当日。6年生達が1年生と遊ぶ。

銀「さあ、海の方こうから悪い怪獣が我が国に攻めて来るぞ!大変だ大変だ!」  
太鼓を叩いて紙芝居を披露する。

銀「ずしーん!ずしーん!なんて綺麗な場所なんだ。この土地をよこせー!凶々しい  
怪獣はこんな事を言ってるぞ!君ならどうする?」

1年生A「え、えつと・・・逃げる!」

銀「それだと、ここを怪獣に取られちゃうぞ?」

1年生A「あ、どうしよう・・・」

1年生B「戦う!!」

銀「そう！私達には新樹様が付いてる！勇気を出して、戦いましょう！国防仮面と一緒にに！」

1年生A「あれ？何も描いてないよ？」

銀「ん？本当だ！じゃあ、皆で呼んでみよう！お姉さんに続いて？せーの！国防かめーん！」

1年生達「国防かめーん！」

すると誰かが入って来た。

須美「国を守れと人が呼ぶ！」

園子「愛を守れと叫んでる！」

須美・園子「全員気を付け！憂国の戦士、国防仮面！見参！」

「登場と同時に1年生達が歓声を上げた。そして黒板には富国強兵とでかく書かれてある。」

須美「さあ、今日は皆で楽しく体操しながら、国防の仕方を学んでいきましょう！」  
園子「さあ、立って立って〜！」

国防体操開始。内容はイメージでお任せします。

1年生達「富国強兵——!!」

オリエンテーション終了後。

安芸先生「やり過ぎ!」

須美・園子・銀「すみません・・・」

怒られた。

く園子の夢く

安芸先生「はっはっはっはっはっは!あなた達は、下級生を洗脳した責任として、1週間うどんを食べる事を禁止します!」

銀「そんな・・・ロツクが・・・！」

須美「冗談・・・ですよね・・・？」

園子「あ、ああ・・・あああああああ  
!!!!」

教室。

園子「わあー!!! うどんが食べられなくなっちゃったー!!!」

須美「大変、すぐに病院に行かないと！」

銀「お前ら落ち着け・・・」

日曜日。

須美「お茶が入りました。」

母親「ありがとう。でも須美、あんまりお手伝いさんの仕事取らないでね?」

須美「あ、何かしている方が落ち着いて・・・」

母親「日曜なんだから、乃木さん達と遊ばないの?」

須美「銀が用事があるので、自由行動なんです。」

母親「なら、須美も自由に動いても良いのよ?」

須美「もしかしたら、銀の予定が終わったら遊ぼうって連絡来るかなって思ってた・・・」

そのつちも、前みたいにいきなり家に来るかも・・・」

母親「良い友達を持てたものね。」

すると須美のスマホに着信音が。

銀『駅前で家族とタケルさんと買い物ちう』

園子『私はその辺をフラフラしてるよー』

メールを送る。

須美『そのつちは迷子になったら名前を連呼するのよ。銀とタケルさんはお疲れ様。』

園子『乃木園子です』

園子『乃木園子です』

園子『乃木園子です』

須美「既に迷子!？」

駅前に向かった。何時もの4人が集まった。

銀「結局、3人集まっちゃったな。」

園子「勇者同士と幽霊は自然と惹かれ合うんだね。」

タケル「いや、俺生きてるけど？」

須美「もう、銀が拾ってくれて良かったわ。」

園子「ミノさんのご家族に挨拶しなくて良いのかな？」

銀「良いって、父ちゃん母ちゃんは知ってるだろ？つてか、そう言うの苦手。」

園子「お休みの日に、家族皆でお買い物に行くなんて素敵〜！」

須美「うん！」

銀「いやあ、知り合いに会うと恥ずい。」

タケル（家族かあく。父さんがまだ生きてたら楽しかっただろうなく。）  
銀「用事も済んだし、こっから先はお前達と動くよ！」

金太郎「うう・・・うう・・・」

タケル「金太郎君が泣いてる。」

銀「ちよつと待ってて？」

金太郎の元へ走る。

銀「ほらマイブラザー、お姉ちゃんがモテるからっていじけるなよ？」

タケル「金太郎君って、銀をそう思ってるのかな？」

銀「よしよし。ほら笑え。えへへ。」

タケル「本当、仲の良い姉弟だね。」



夕方。

銀「あくあ、もうすぐ休養期間も終わりか。」

タケル「長かったような、短かったような・・・」

園子「警戒態勢復活だね。」

須美「気を引き締めないと。」

銀「オリエンテーションじゃあれだったけど、楽しかったな！」

須美「ええ！」

園子「あつと言う間だったよ！」

神社。

銀「おつと、私とタケルさんだけ道違うか。」

タケル「じゃあ、ここでお別れだね。」

銀「またね！」

すると須美が、帰る銀の手を掴んだ。

銀「……須美?」

園子「わっしー?」

タケル「須美ちゃん?」

須美「あ、ごめんなさい!」

銀「いや、気持ち分かるよ!」

園子「休みが終わわっちゃう、そう思ってたんだよね?」

銀「私、休むのには自信あるって思ってたけど、やっぱりお役目だけに、そこまでリラックス出来るかなって思ってた。」

園子「でも?」

銀「ううん、4人で居ればいらぬ心配だったよ。」

園子「私も!とつても楽しかったもん!」

タケル「俺も楽しかったよ。皆と遊べて。」

園子「わっしーもそうだよね?」

銀「ああ、これはそうだ!と言ってる顔だ。」

笑みを溢す須美。

銀「バーテックスが神樹様を壊したら、こう言う楽しい日常が吹っ飛ぶんだよな……  
そんな事は、絶対させない!な?」

園子「うん！」

須美「勿論同じ気持ちだよ！」

タケル「同感だよ！」

園子「頑張ろうね！」

銀「ああ！・・・なんて、これじゃあ帰れないな。解散解散！」

園子「閃いた！一層お泊まり会しようか！」

須美「良いわね！銀の家で！」

銀「うち!?弟2人居るんだぞ!？」

タケル「鉄男君と金太郎君、喜ぶと思うよ？」

遠く離れた場所に、  
一つの裂け目が出現した。  
その裂け目から、  
何かが現れて地上に  
落ちた。

「E N D」

## 第十六話 「激闘！燃える魂！」

放課後の神樹館。

園子「ありがとね、黒板係の仕事手伝って貰って。」

銀「良いつて！保健係は普段楽しんでるしうーん、須美の並ばせ係はビシバシだけど……」

須美『朝礼に向かいますが、私語をしたものにはお灸を据えます！』

銀「お灸つてワード滅多に聞かないよな……な？」

須美「お役目には常に全力投球よ！」

園子「お役目と言えば、4体目のパーテックス来ないね。」

銀「もうすぐ遠足なんだけどな。その時は来ないで欲しいね……」  
須美「その遠足なんだけど、街を離れてしまつて大丈夫なのかしら？」

園子「勇者になれば大橋まであつと言う間だから大丈夫だよ。来て欲しくはないけどね。」

銀「考え過ぎてちや、何も出来なくなるぞ?」

須美「一理あるわ・・・」

銀「まあ何かあつても、この勇者様が何とかするから!」

園子「わくお!ミノさん格好良い〜!」

須美「そうね!私達3人とタケルさんが居れば大丈夫よね!分かった、ありがとう!」  
だがこれが、後に悲劇が起こる事を誰も知らなかった。

後日の神樹館。

園子「はあく、手の肉刺がちくちく痛い・・・今日の鍛錬大変だなあ・・・」

銀「槍の握り方を変えてみたら?」

園子「先生が変えてもどうにもならないって・・・」

銀「よしよし。痛い痛い消えてけ〜！」

園子「えへへへ〜。」

撫でられて嬉しくなる園子の横に。

“ドシン！”

超分厚い旅のしおりが。

須美「2人にはこれを渡しておくわ。」

銀「す、須美さん・・・何すかこれは!？」

須美「見ての通り遠足のしおりよ？データ版は2人の端末に送っておいたわ。」

銀「え!?!これをわざわざ作ったんすか!？」

須美「張り切って夜更かししてしまって、予定より随分量が増えたわ・・・」

園子「わっしーは凝り性さんと言うか、のめり込むタイプだよな。」

銀「将来須美の旦那になる奴は幸せだけど、色々大変そうだ・・・」

須美「何でそう言う話になるのよ？」

銀「この三ノ輪銀のような男が居ればなく。」

園子「お似合いの2人だね〜！」

須美「兎も角、このしおりを活用して遠足の準備を済ませておきましょう！遅れるとお

灸よ〜！」

でかいお灸を見せた。

園子「そう言うの何処で売ってるの？」

須美「イネス。」

銀「ナイスイネス！イエーイ!!」

須美「い、イエーイ・・・」

夜の三ノ輪家。銀が明日の遠足の準備をしている。タケルが遊びに来てる。

銀「これで準備オツケー！」

鉄男「ブーン、ドカーン！」

銀「ガオー!!」

鉄男「わー!逃げろー!」

タケル「遠足かあ。楽しみだね。」

銀「良いでしょ? 須美にも報告しておこ。」

『遠足の準備が終わりましたわ』



園子『まあ奥様、私もですわ\*? (・ω・)』  
須美『ビニール袋も要りましてよ』

銀「ああ、何か汚れた物を入れたりかあ。ビニールとか……ん?  
後ろの部屋で寝ている金太郎を見る。

タケル「金太郎君、気持ち良さそうに寝てるね。」

銀「ふふ、何度見ても可愛い奴。」

鉄男「隙あり!!」

銀「ぐあっ!?!」

横から鉄男がロボットのおもちゃで銀の顔にキックした。

タケル「ぎ、銀大丈夫?」

銀「此奴!」

すぐに鉄男に反撃した。

銀「こんなんじや勇者は倒せんぞー!」

タケル「凄い反撃……」

鉄男「なあ姉ちゃん、お土産頼むよ。」

銀「そんな事ばかり覚えて此奴は。良いだろう!」

鉄男「やったー!」

銀「その代わり、ちゃんと金太郎の面倒見ろよ?」

鉄男「うん!そろそろハイハイするかな?」

銀「だな、楽しみだ。」

タケル「じゃあ俺、そろそろ帰るから。遠足楽しんでね。」

銀「うん!じゃあねー!」

鉄男「またねー!タケル兄ちゃん!」

三ノ輪家玄関。

タケル「お邪魔しましたー!」

外に出て帰宅途中。

タケル「遠足と言っても、バーテックスが現れるかも知れない……明日は徹底的に警戒しないと。」

そして翌日。遠足の日が来た。  
バス車内では、園子が寝ている。

6年生は公園に到着し、まずはタイヤのアスレチックコース。

銀「勇者としてはアスレチックコースで遊ばないと！」

須美「こう言うのも面白いわね！」

園子「2人共速いよ・・・ちよつと待つて・・・わわわ！揺れるくく!!」  
タイヤが揺れて前に進めない。

クラスメイトA「乃木さん、そんなに怖がらなくても大丈夫だよ？」

園子「落ちたら奈落の底で考えると、結構なスリルがあるんだよ・・・」  
クラスメイトA「い、良い想像力だね・・・」

須美「5本目のタイヤは決して踏んではいけません・・・触ったが最後・・・落ち武者の霊が夜な夜な枕元に立って、「田んぼを返せ」と・・・」

園子「ひゃああああああああ!!!」

銀「怖がらせてどうすんだ・・・」

須美「スリルを求めているなら提供しようよ・・・」

銀「ほらもうちよい!勇者は気合と根性!」

園子「勇者は!!気合と根性!!!」

その言葉を受けて、タイヤのアスレチックコースを制覇した。

銀「よしよし、よく頑張りました!」

園子「慣れたから次はもつとスムーズに行くよ!」

2人の間に、須美が割り込んだ。

銀「何してんだ須美・・・」

須美「仲良くしてるから私もと思って・・・」

銀「犬かお前は。」

園子「きつと、わっしーもミノさんに頭撫でられたいんだよ。上手いもんねミノさん。」

銀「なあんだ、甘えん坊さんか。よしよし。」

1台のバイクが公園の駐輪場に到着した。

タケル「確かここだったはず・・・何かが落ちた場所は。」

ヘルメットを取った人物はタケルだった。以前に空から落下したものを探しに来たのだった。

タケル「テレビのニュースで見たからこの公園の近くだったはず・・・ん？」

神樹館のバスを発見した。

タケル「神樹館様？確か須美ちゃん達が通う小学校。遠足がここだったんだ。それより探さないと。バーテックスの破片か何かかも知れない。」

そして須美達は公園で楽しく遊んでる。

クラスメイトB「銀ちゃん！私達も受け止めて！」

銀「よーし！バッチ来い！」

須美「人気ね銀は。」

園子「元から人気だよ。」

雲梯。

クラスメイトC「ねえ銀ちゃん。」

銀「どしたん？」

クラスメイトC「あのね、銀ちゃんのサインが欲しいって妹に頼まれてて……大きなお役目に就いてるって聞いて、憧れてるんだと思う。」

銀「はっ!そうか!私はもう、サインをする側の人間だったのか!」  
雲梯を渡って、最後は1回転して着地した。周りから拍手喝采。

その頃タケルは、公園近くの茂みに入っていた。

タケル「ここだ。」

落下地点を発見した。車と同じ大きさの穴があった。

タケル「この穴は何だ? やっぱバーテックスが来たのかな?」

ロープ登り。

園子「これを登れたらお昼だね〜！」

銀「よーし！」

片手でロープ登りに挑戦。

銀「よつと！いやー、ちよつと簡単過ぎるな〜！片手で登れるよこんなの！」

須美「こら銀！巫山戯ないの！」

銀「平気平気！」

しかし。

銀「あ、肉刺が・・・！」

肉刺の痛みが走り、手を離して落ちてしまった。

須美「あ、危ない!!」

危機一髪で須美と園子が銀を救った。

園子「大丈夫!?!ミノさん！」

銀「うん、びつくりした・・・」

須美「銀、楽しいのは分かるけど、浮ついてないかしら？お役目の重さ、よく考えて

？」

銀「……借りは返すよ。そして反省します……口数を減らします!」  
急にポジティブになった。

その頃タケルは、おにぎりを食べていた。

タケル「あの穴、一体何が落ちたんだろう……本当にバーテックスだったら危険が伴う……」

同じ頃6年生は、バーベキューを食べる。銀は焼きそばを焼いていた。

安芸先生「そうそう!上手ね三ノ輪さん!」

銀「時々手伝ってますから。にしても、はあく良い匂いだ!これ絶対美味しい奴だ!私  
が作ったんだもん!」

須美「銀、口数減らすと言ってなかった?」

園子「わんぱくものんね。」



右肩にカプトムシがくっ付いてる。

須美「そのつちも十分わんぱくだと思うけど・・・」

園子「わっしー、虫苦手なんだっけ？大丈夫だよ。すぐ仲良くなれるから。」

須美「そ、そう・・・？」

大量のカプトムシに懷かれてしまってる園子。

須美「ぎゃあああああ!!!ゴキブリしか見えないーーーーー!!!」

焼きそばが完成し、美味しく食べる。

銀「ん〜！美味しい！最高だな！カプト味は！」

須美「焼いてないから!!」

園子「美味しいよ〜!」

銀「園子のはもつと良い肉を食べてるんじゃないのか?」

園子「このお肉の方が美味しいよ?」

須美「皆で食べてるからじゃない?」

園子「おおおお!」

銀「園子、口口。」

口に付いてるソースをハンカチで取ってあげた。

園子「ありがと〜!はあ・・・」

銀「い、忙しいテンションだな・・・」

園子「わっしーもお料理出来て、ミノさんも出来て、私は出来ないから・・・ふと自分が恥ずかしくなったんだよ・・・」

銀「焼きそばくらい園子も作れるよ。」

園子「じゃあ、次の日曜わっしーと教えて!」

須美・銀「良いけど。」

銀「お!ハモった!」

須美・園子・銀「あははははは!」

銀「所で、先生ピーマン残してない?」

安芸先生「ギクっ!!ちゃんと食べるわよ!ちよつと苦手だけど・・・」

銀「前世で何かあったのかなあ・・・」

園子「そう言う時は、食べるとピーマンの精が夜中に会いに来てくれると思うと楽しいですよ?」

安芸先生「そ、それはユニークね・・・ありがとう。スムーズに食べられるわ・・・」

須美「先生に褒められた!」

銀「ご褒美にベルは園子が鳴らしなよ。」

園子「ベル?」

別の場所では、謎の人物達が街中を歩いていた。

そして公園では。

園子「アスレチック、全面クリアー!」  
ベルを鳴らしてクリア。

須美「成し遂げたわね!」

展望台。

タケル「眺めが良い・・・」

銀「あれ?タケルさん!」

タケル「ん?皆!」

須美「どうしてここに?」

タケル「いや、ちよつと気分転換にこの展望台に来たんだよ。そしたら君達の小学校のバスがあつたから。」

園子「もしかして、ター君も遠足に行きたかつたとか?」

タケル「いやいやそんな事無いよ。」

銀「あ！ねえ須美！私達の町、あっち？」

須美「ええ、合ってるわ！」

銀「大橋やイネスは、流石に見えないな・・・」

園子「ミノさんは本当にイネス好きだね。」

銀「イネスは良いよお！何たって・・・」

須美「中に公民館まであるんだから。」

銀「当たり前！」

園子「私も分かったよ？」

銀「もう、パターン読まれてきたかあ。」

園子「私も読まれてる？」

須美「そのっちは、読めない。」

園子「え？」

銀「きつと何時迄も読めない・・・」

園子「ええ!?!それはそれで寂しいよお・・・」

須美「大丈夫、今の反応ぐらいまでは分かるから。」

園子「やったー！やったぜ！フォー!!」

テンションが上がってはしゃぐ。

タケル「あの跳ね具合が予測不可能だね・・・」

須美「流石そのつちね・・・」

銀「因みに、須美については、取り扱い説明書が書けるくらいに詳しくなつたぞ？」

須美「あら、最初のページには何て書いてあるのかしら？」

銀「結構大変な品物ですので、くれぐれもご注意下さい。」

須美「め、面倒臭い人みたいな言われ方ね・・・」

タケル「直球だね・・・」

須美「でも納得してしまう・・・」

銀「良いじゃん奥行きがあつて！私のなんて、多分新聞のチラシ並みにぺらいぞう。」

須美「そんな事ないわよ。分かりやすくはあるけど、書く事はいーっぱいあるわ！」

銀「そ、そうか・・・？」

恥ずかしくなつて縮こまつた。

須美「これからも色々な一面を暴いていこうと思うの。」

銀「お、お手柔らかに頼むよ・・・」

園子「実は私、はじめミノさんが苦手だったんだ。」

銀「いきなり何だよ!?!」

須美「私も同じよ。」

銀「おい!？」

園子「ほら、スポーツ出来て明るくて、何だか種族が違う気がして……でも、話してみたらこんなに良い人なんかもん。わっしーはキャラだし。」

須美「私はキャラ!？」

園子「ター君はお兄ちゃんだし。」

タケル「お、お兄ちゃん?」

銀「あはは! 成る程ね。確かに話してみないと分からないよな、こう言うのは。気に入って貰えたのなら良かった。これからもダチ公として、宜しく!」

園子「此方こそく!」

須美「ええ!」

銀「タケルさんも!」

タケル「俺も? そうだね、宜しくね。」

4人は手を重ね合わせた。

夕方。6年生を乗せたバスが帰る。その後ろからCRF250Lに乗ったタケルが

付いて行く。

そして大橋では、風鈴の音が鳴り始めた。

タケル（ん？）

バスから降りた須美達3人は家路を歩く。タケルはCRF250Lを押し歩いて歩く。

園子「ふんふんく楽しかったな〜♪」

須美「転ぶわよ？そのつち。」

タケル「遠足楽しかった？」

園子「勿論楽しかったよ〜♪」

銀「毎日遠足なら良いのになあ〜！」



園子「それ賛成〜！」

タケル「それだと、筋肉痛になるんじゃないよ……」

すると、周りの時が止まった。

タケル「っ!？」

銀「あっ！」

須美「これ……」

大橋から樹海が発生した。

銀「敵だ!!」

園子「もう、折角楽しい遠足だったのに〜!」

タケル「行くよ!」

『アーイ!バッチリミナー!バッチリミナー!』

タケル「変身!!」

『カイガン!オレ!レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

園子「最後の最後でこれなんて、意地悪だよ〜!」

銀「遠足が終わった後に来た分、まだマシじゃん?」

須美「家に帰るまでが遠足なのよ?銀!」

銀「先生か・・・さっさと終わらせて、お土産持って帰らないとな!」

タケルが仮面ライダーゴースト・オレ魂に変身し、須美達3人が勇者に変身した。

樹海・大橋。

銀「段々この景色も、見慣れてきたなー！」

須美「気を付けて銀。そう言う時が・・・」

銀「一番危ない、でしょ？大丈夫！私の服は接近戦用で丈夫に作られてるから！」

タケル「だからって、油断は禁物だよ？」

須美「そうよ！アスレチックでも怪我しそうになつたんだから！」

銀「ううっ・・・」

タケル「え、アスレチックで怪我？」

園子「アスレチックで落ちそうになつたけど、怪我無くて済んだんだよ。」

タケル「それはちよつと危ないよ・・・」

園子「ミノさん、最近わっしーに注意されるような事をわざと言つてるみたいく！」

銀「あははは！何だか癖になつてさ！須美に怒られるのを！」

須美「勘弁して欲しいわ・・・」

園子「っ！来たよ！」

タケル「来た！」

2体のバーテックスが現れた。

園子「ええ!? 2体!?!」

タケル「一気に攻め込む気なのか!?!」

銀「そう来たか!」

須美「力を合わせれば、2体だろうと大丈夫よ!」

タケル「そうだよ!」

銀「それな!」

園子「私とミノさんとター君がそれぞれ1体相手するから、わっしーは遊撃で援護してね!」

須美「任せてそのうち!」

タケル「ベートーベンさん！」

ベートーベンゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填した。

『カイガン！ベートーベン！曲名！運命！ジャジャジャー！』

ベートーベン魂を纏い、園子と銀と一緒にバーテックスに立ち向かう。

園子「行くよー！ー！！！！」

すると一体のバーテックスが、尻尾で襲い始めた。

タケル「させない！」

指揮を取って、音楽の音色をエネルギーにして操り、バーテックスの尻尾を攻撃した。

銀「私は気持ち悪い方と戦う！」

タケル「油断しないで！」

園子「どっちも気持ち悪いと思うな・・・」

もう一体のバーテックスに銀が挑む。

銀「おりやああああ！！！！」

双斧でバーテックスを斬るが、物凄い硬さで弾かれた。

銀「分かりやすい！私向きだ！」

遠くからは、須美が遊撃援護をする。

須美「っ!」

チャージして、銀と戦うバーテックスの頭を射抜いた。

銀「ナイス!!」

ジャンプしてバーテックスを後ろに倒した。

そして園子はバーテックスの尻尾を槍で受け止め続け、ゴーストが音色でダメージを与え続ける。

園子「当たると痛そうだなあ・・・」

遠くから須美がチャージした矢でバーテックスを射抜いた。

園子「そこだああああ!!!」

ジャンプして、矢で射抜いた箇所突き刺した。

タケル「今だ!!」

『ダイカイガン！ベーターベン！オメガドライブ！』

無数の音符エネルギーを、射抜いた箇所に一斉に放った。射抜いた箇所が爆発し、バーテックスが後ろに倒れた。

須美（優勢だわ。このまま押し切る・・・!!っ!!）

すると何処からか無数の矢を一斉に放射した。

銀「ヤバイ!!」

須美「マズイ!!」

園子「皆!こっち!!」

タケル「させない!!」

『カイガン！ニュートン！リングが落下！引き寄せまっか!』

須美と銀が園子に引っ付いて、園子が槍を展開させて矢を防ぎ、ゴーストニューヨーク魂を纏い、左手のリパルシヨングローブで矢を全て引き寄せた。

銀「何だよこれ・・・?」

するともう1体のバーテックスが、尻尾を大きく振った。

須美・園子・銀「っ!!」

尻尾が須美と園子と銀を突き飛ばした。

須美・園子・銀「うわああああああ!!」

そして更に尻尾を振って、須美と園子を突き飛ばした。

須美・園子「きやああああああ!!」

タケル「須美ちゃん!園子ちゃん!銀!よくも!!」

引き寄せた全ての矢を、尻尾を持つバーテックスに向けて飛ばした。そのバーテックスが矢を受けて後ろに倒れた。

タケル「皆!!」

突き飛ばされた須美と園子は、血を流して倒れていた。

銀「須美!!園子!!大丈夫か!」



タケル「須美ちゃん!! 園子ちゃん!!」

須美「……彼奴が矢を……!」

2体のバーテックスの後ろには、また別のバーテックス1体が現れたのだった。

タケル「くそ、こんな時に!」

するとバーテックスが狙いを定めて光の矢を放った。

タケル「危ない!!」

アトラクショングローブで弾き返そうとしたが、爆発した。

3体のバーテックスが進行を開始した。

ゴーストと銀は、須美と園子を安全な場所へ避難させた。そして遠くから、謎の人物がバーテックスを見ていた。

ゴーストと銀が、須美と園子を安全な場所へ避難させた。

須美「銀……? タケルさん……?」

銀「動けるのは、私とタケルさんの2人。ここは、怖くても頑張り所だろ。」  
タケル「ここは俺達に任せて、2人は休んでて。」

銀「またね!」

ゴーストと銀が走り出す。

2人はバーテックスを追う。

銀「彼奴ら!!」

タケル「このまま行かせない!!」

闘魂ブーストゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『一発闘魂!アーイー!バツチリミナー!バツチリミナー!闘魂カイガン!ブースト!俺がブースト!奮い立つゴースト!ゴー!ファイ!ゴー!ファイ!ゴー!ファイ!』

闘魂ブースト魂を纏った。

タケル「銀、行くぞ!!」

銀「おう!!」

高速でバーテックス達の前に回り込む。

そして、バーテックス達の前に立った。2人はサングラスラッシュヤーと双斧を持っていた。

銀「随分前に進んでくれたけどな……こっから先は通さない!!!」

タケル「命、燃やすぜ!!!」

2人が一気にダツシユした。バーテックスが矢を連射する。

『ダイカイガン!ブースト!オメガドライブ!』

ゴースト「はああああああああ!!!」

サンングラスラツシャーに炎を纏わせ、矢を全て乱舞で斬り裂いた。

1体のバーテックスがプレートを飛ばしたが、2人がジャンプして避けた。

銀「その攻撃は覚えた!!」

タケル「喰らえ!!」

サンングラスラツシャーと双斧でバーテックスを後ろに倒した。

更に長い尻尾を持つバーテックスが2人を襲うが、これも躲した。

銀「それで襲って来るのも!!!」

タケル「もう見切ってる!!!」

サンングラスラツシャーと双斧を同時に振り下ろし、尻尾を持つバーテックスを斬り裂いた。

矢を放つバーテックスが口から矢を放射する。

タケル「リヨウマさん！」

リヨウマゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン！リヨウマ！目覚めよ日本！夜明けゼヨ！』

リヨウマ魂を纏い、サンングラスラッシュヤーをブラスタモードに変形し、闘魂ブーストゴースト眼球とリヨウマゴースト眼魂を装填した。

『メガマブシー！メガマブシー！ダイカイガン！メガオメガフラッシュュー！』

タケル「はあっ!!」

メガオメガフラッシュューで矢を全て消滅させ、矢を放つバーテックスの口に入れて爆発させた。

銀「何上から見てんだ!!!」

矢を放つバーテックスに、銀が大ジャンプして双斧で斬り裂こうとしたが。

銀「っ!?!」

バーテックスのプレートが現れたが、すぐに避けた。

尻尾を持つバーテックスが尻尾でゴーストを襲う。

タケル「くっ!!!」

サンングラスラッシャーで防ぐが、耐え切れず後ろに飛ばされた。

銀「タケルさん!! やったな!!」

タケル「銀!! 止めろ!!」

バーテックス達に向かって走る銀を止めるが。

銀「痛かったんだぞ!! 自分達も受けろ!!」

タケル「ゴエモンさん!!」

ゴエモンゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン!ゴエモン!歌舞伎ウキウキ!乱れ咲き!』

ゴエモン魂を纏い、銀の後を追う。

銀「お前達はここから・・・出て行けええええええええ!!!」

炎を纏った双斧で尻尾を持つバーテックスを斬り続ける。すると後ろから巨大な矢が迫る。

タケル「銀ーーーーー!!!!!!」

ゴーストが銀の後ろに現れ、サングラスラッシャーで防ぐ。

タケル「ぐっ!!!」

銀「タケルさん!!!うわああああ!!!」

隙を突かれてバーテックスの尻尾攻撃で飛ばされた。

タケル「銀!!!くそっ!!!」

『ダイカイガン！ゴエモン！オメガドライブ！』

タケル「うおおおおおおお!!!」

サングラスラッシャーで強力な斬撃を繰り返し出し、バーテックスの尻尾を粉碎した。

突き飛ばされた銀の横に着地した。

タケル「はあ・・・はあ・・・銀、大丈夫!？」

銀「タ、タケル・・・さん・・・!!」

しかしバーテックス達が、自己修復を開始した。

タケル「そんな、こんなの勝ち目無い!!」

銀（此奴らが・・・神樹様を壊せば・・・!）

タケル「銀、ここは休んで。俺が彼奴らを倒す!」

アイコンドドライバ―Gを取り出して、装着しようとしたが。

銀「させるもんか・・・絶対・・・!」

タケル「え?」

フラフラしながら銀が立ち上がった。

銀「タケルさん・・・ここは私がやる・・・」

タケル「無茶だよ!!君のその大怪我じゃ、君が死ぬだけだよ!!!」

銀「彼奴らを倒さないと・・・神樹様が破壊されてしまう・・・!!」

タケル「駄目だよ!!もう下がって!!」

銀「止めないで・・・!私に・・・任せろ!!!」

走り出してしまった。

タケル「銀!!!」

バーテックス達に向かってジャンプした。



銀「帰るんだ!!! 守るんだ!!!」

バーテックスの矢を、双斧で斬り続ける。

銀「化け物には分からないだろ!!! この力!!!」

タケル「銀!!! もう止めてくれ!!!」

ゴーストが銀を止めに行く。

銀「これこそ!!! 人間様の気合とーーー!!!」

流血しながらも、矢を放つバーテックスを斬り続ける。

銀「根性とーーー!!! 魂って奴よーーー!!!」

タケル「銀!!!」

銀の前にゴーストが現れて、サン格拉斯ラッシャーで矢を全て斬り続ける。

タケル「これ以上は止めろ!!! 死ぬだけだよ!!!」

銀「止めないでくれ!!!!これは私と・・・彼奴らの戦いだ!!!!」

タケル「それでも!!!!」

するとバーテックス達が一斉に急接近し始めた。

タケル「っ!?特攻!?!」

銀「タケルさん!!!!」

ゴーストの腕を掴んで、後ちに投げた。

タケル「止めろーーー!!!!」

銀（・・・さようなら・・・!!!!皆・・・）

だが銀は、一筋の光を見た。

銀（え．．．？）

そしてパーテックス達が謎の大爆発に巻き込まれ、消滅した。

あの後鎮花の儀が行われ、重傷を負った須美と園子が、銀とタケルを探しに行った。

須美「敵は．．．．？」

園子「あっ！」

何かを発見した。それは、倒れているタケルだった。

園子「ター君！」

須美「タケルさん！」

タケルを発見して、体を揺らす。

須美「タケルさん!」

園子「ター君!しっかりして!」

タケル「・・・う・・・ん?」

するとタケルが目を開けて体を起こした。

タケル「いててて・・・」

須美「タケルさん!」

タケル「須美ちゃん・・・園子ちゃん・・・」

園子「無事で良かった・・・」

タケル「そうか、さっきの爆発で飛ばされたんだ・・・っ!銀は!」

須美・園子「っ!」

3人は銀を探しに歩く。タケルが須美と園子の腕を両肩に乗せて歩く。

タケル「銀・・・何処に居るんだ?」

園子「っ!わっしー!ター君!彼処!」

須美「っ!」

遠くを見ると、誰かが倒れていた。

タケル「あれは、まさか・・・!!」  
倒れてる人物に近付くと・・・

園子「っ!!」

須美「っ!!」

タケル「っ!？」

血まみれになった銀が倒れていた。

タケル「銀!!」

須美「銀!!しっかりして!!」

園子「ミノさん!!」

しかし、幾ら叫んでも銀が目覚めない。

タケル「そんな・・・こんな事って・・・」

須美「う……う……う……」

園子「う……」

タケル「く……く……く……お……お……お……!!!」

須美・園子「うわあああああああああああ……!!!」

死んでしまった銀を見て、タケルが地面を叩き、

須美と園子が大泣きした。

銀「ゴホツ・・・ゴホツ！」

タケル「っ!？」

須美・園子「っ!!」

銀「な．．．何泣いてるんだよ．．．」

何と、銀は生きていた。

須美「銀!!!」

園子「ミノさん!!!」

タケル「銀!!!」

須美「良かった．．．!!!」

園子「ミノさん．．．!!!」

大泣きして銀を抱き締めた。

銀「痛い痛い．．．心配させてごめんよ．．．」

タケル「でも、どうやってあの爆発から．．．?」

するとそこに、謎の人影が現れた。

須美「っ!？」

園子「え!？」

タケル「ま、まさか．．．!!」

その人物の正体は．．．



『スペクター！レディゴー！覚悟！ド・キ・ド・キ！ゴースト！』  
マコト「待たせたな、タケル。」

タケル「マコト兄ちゃん!!!」

その正体は、仮面ライダースペクターだった。

須美「あの人は・・・?」

タケル「マコト兄ちゃん、俺と同じ仮面ライダーだよ。マコト兄ちゃん、銀を助けてくれたの?」

マコト「ああ、彼奴が死んで行くのを見過ごす事が出来なかったんだ。」

タケル「そうだったんだ・・・」

マコト「それに、俺の他に皆も来てる。」

タケル「え?」

アカリ「タケル!!」

御成「タケル殿!!」

カノン「タケルさん!!」

タケル「アカリ!! 御成!! カノンちゃん!!」

何と月村アカリと御成と深海カノンがここに居た。

タケル「皆、どうしてここに？」

マコト「後で話す。」

タケル「分かった。銀、現実世界に帰ったら病院へ行こう？」

銀「うん・・・」

すると樹海が晴れて、現実の世界に戻った。

「END」

## 第十七話 「娯楽!夏祭り!」

神樹館・6年2組。

安芸先生「三ノ輪銀さんは、新樹様のお役目の最中に事故に遭いましたが一命を取り留め、入院する事になりました。皆さんは下校中や休みの日に三ノ輪さんのお見舞いへ行つてあげて下さい。」

翌日の香川県立中央病院・銀の病室。

須美「銀。」

銀「おお、来たか2人共!」

園子「もう身体は平気?」

銀「この通り回復したけど、両足がどうも動かないんだ。これからは毎日リハビリして、自立出来るようにするから。」

そして、タケル達も来た。

タケル「銀、また来たよ。」

銀「タケルさん！マコトさん！アカリさん！御成さん！カノンさん！」

御成「お見舞いに来ましたぞ。銀殿。」

マコト「今日も元気そうだな、銀。」

銀「まあね。」

須美「あの、深海さん。」

マコト「マコトで良い。」

須美「マコトさん、銀を助けてくれてありがとうございます。」

マコト「いや、当然の事をしたまでだ。」

園子「マー君が居なかつたら、ミノさんはもう・・・」

マコト「マー君？」

タケル「気にしないで？園子ちゃんはある癖があるから。」

マコト「そうか。」

タケル「それで、マコト兄ちゃん達はどうしてこの世界に？」

マコト「ああ、それはだな・・・」

あの時タケルが裂け目に吸い込まれた後、以前に仮面ライダードライブの泊進ノ介と一緒に吸い込まれたワームホールと同じ方法で、アカリとアランとアリアが力を合わせて同じ裂け目を作り出し、マコトとアカリと御成とカノンが入って行ったのだった。

アカリ「入って行ったのは良いんだけど、急に空から落下しちゃうんだもん。」

タケル「え、じゃああの公園の近くにあった穴って?」

御成「拙僧達が落ちた跡でした。」

カノン「でも、お兄ちゃんが助けてくれたから無傷だったの。」

タケル「そう言う事だったのか・・・」

須美「それで、どうやって銀を救ったのですか?」

マコト「あの時銀がタケルを後ろに投げ、バーテックスの突進を受けようとした時、俺が間一髪でフリーデーニの鎖で銀を捕まえて後ろに下がらせて、バーテックスを爆破させたんだ。」

銀「でも、あの爆風はちよつと痛かったかな?」

園子「でもミノさんは、こうして生きてるんだよ?」

銀「それもそうだな。」

タケル「銀、ちよつと言わせてくれないか？」

銀「何？」

するとタケルが、銀に怒りをぶつけた。

タケル「君は本当に無茶ばかりしている!!あの時だって、バーテックスの突進を自分だけ受けようだなんて、自分の命を何だと思ってるんだよ!!」

銀「タケルさん……」

タケル「だからもう、これ以上無茶をするのはもう止めて!!そうしないと、本当に君が死ぬ!!」

銀「……ごめんなさい。」

タケル「……銀、君は戦いから遠避けた方が良いよ。」

銀「え？」

タケル「須美ちゃん、園子ちゃん、どう思う？」

須美「はい。銀、私達はあなたを失いたくはないの。」

園子「これからは私達に任せてね？」

銀「……分かったよ。じゃあお前達に任せるぜ。タケルさん、マコトさん、2人を宜しく頼むね。」

タケル「勿論。」

マコト「任せろ。」

銀「・・・雨、まだ続いてるね。」

カノン「まだ梅雨なのかな?」

御成「そうかも知れませぬぞ。」

すると雨が急にピタツと止まった。

タケル「っ!」

須美「っ!」

自分達以外の周囲の時間が止まっていた。

瀬戸大橋の風鈴が鳴り始めた。

アカリ「ま、またこの音?」

タケル「バーテックスが来た。須美ちゃん、園子ちゃん、銀を車椅子に乗せて。」

須美「はい!」

園子「ミノさん、しっかり掴まって。」



2人で銀を車椅子に乗せた。

タケル「それと、ここは俺に任せて。2人は休んでて。」

須美「え、でも……」

タケル「いいから。」

園子「う、うん。」

マコト「俺も加勢するぞ、タケル。」

タケル「ありがとう。」

そして瀬戸大橋から裂け目が出現し、タケル達が樹海に飲み込む。

タケル「マコト兄ちゃん、行こう！」

マコト「ああ！」

オレゴースト眼魂とスペクターゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

樹海。

『レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

『レディゴー!覚悟!ド・キ・ド・キ!ゴースト!』

仮面ライダーゴースト・オレ魂と仮面ライダーズペクターに変身した2人は走り出し、ガンガンセイバーとガンガンハンドで、バーテックスが生み出した弾丸を次々と壊す。

タケル「ロビンさん!」

マコト「ノブナガ!」

ロビンゴースト眼魂とノブナガゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『カイガン!ロビン・フッド!ハロー!アロー!森で会おう!』

『カイガン!ノブナガ!我の生き様!桶狭間!』

ロビン魂とノブナガ魂を纏った2人は、ガンガンセイバー・アローモードとガンガンハンド・銃モードでバーテックスに向かって連射し続ける。

遠くからは、須美達が見ていた。

銀「凄いなあ……」

園子「私達より強いのかも。」

アカリ「タケルとマコトは、私達の世界で多くの強敵と戦ってきたから。」

須美「やはり、格の違いなのでしょうか？」

ゴーストがガンガンセイバーをゴーストドライバーとアイコンタクトさせた。

『ダイカイガン！』

バーテックスの頭部に狙いを定める。

『オメガストライク！』

狙いを定めて、エネルギールの一撃でバーテックスの頭部を射抜いた。すると射抜いた箇所が大爆発し、大穴が空いた。

タケル「マコト兄ちゃん!!」

スペクターがガンガンハンドをゴーストドライバーとアイコンタクトさせた。

『ダイカイガン！』

するとガンガンハンドの分裂が無数に出現した。

マコト「喰らえ!!」

『オメガスパーク!』

ガンガンハンドでエネルギー弾を連射し、バーテックスの大穴に正確に命中し、バーテックスが大爆発を起こした。そして鎮花の儀が始まった。

タケル「やった!」

マコト「よし!」

バーテックスは、その場から消えた。

現実世界。病室。

園子「凄いよター君!マー君!あつと言う間にバーテックスを撃退出来たよ!」

タケル「いや、褒められると恥ずかしいなあ。」

銀「いや本当に凄いよ!これが格の違いって奴かな?」

するとそこに。

安芸先生「タケルさん。」

タケル「安芸先生。」

安芸先生「お話、宜しいでしょうか?」

タケル「はい。」

安芸先生「あなた方も、お話宜しいでしょうか？」

アカリ「私達もですか？」

香川県立中央病院・入り口。

安芸先生「三ノ輪さんを救ってくれて、ありがとうございます。」

タケル「ああ、いえ。銀が死に際を見過ごす事は出来なかつたんです。それに、銀を助けてくれたのは、深海マコト兄ちゃんです。」

安芸先生「そうでしたか。ありがとうございます。」

マコト「いや、当然の事をしたまでだ。」

安芸先生「それで、あなた方4人は、タケルさんと同じ世界から？」

アカリ「そうです。私達はタケルを探す為にこの世界に来ました。」

御成「もしたら、あのパーテックスと言う巨大な怪物を目撃しました。」

カノン「そのパーテックスって一体何ですか？」

安芸先生「パーテックスは、神樹様を壊す為、大橋から渡って来る存在です。」

マコト「神樹様？」

安芸先生「この国の守り神です。私達は神樹様のお陰で在ります。そして勇者に力を与える存在でもあります。」

アカリ「勇者つて、須美ちゃん達が変身した姿の事ですか？」

安芸先生「そうです。」

御成「ほほう。」

タケル「あの、安芸先生。俺から提案があるんですが。」

安芸先生「何でしょう？」

タケル「銀を、戦線から離脱させて頂けませんか？」

安芸先生「三ノ輪さん？」

タケル「はい。あの子はあの時無茶のし過ぎで、バーテックスに殺される寸前だったんです。でもマコト兄ちゃんに助けられたのですが、あの時を思うと、不安になってしまってます。今後は須美ちゃんと園子ちゃん、そして俺とマコト兄ちゃんだけでバーテックスを戦わせてくれませんか？」

安芸先生「・・・では、そうしましょう。」

タケル「ありがとうございます！」

安芸先生「この事を、大赦に報告しても宜しいでしょうか？」

タケル「はい。」

安芸先生「では今後も、あの子達を宜しくお願いしますね。」

ある空間、この空間に3つの火の玉が何処かへ向かっていた。

場所が変わって鷲尾家。須美が何時ものように水を被って清めている。

須美（不気味な夢・・・大きな敵が来る・・・あの夢は、きつとその知らせ。戦いはもつと激しくなる・・・）

その頃タケルは、銀の病室に行った。

タケル「銀、お見舞いに来たよ。ん？」

病室に入ると、銀の家族もお見舞いに来ていた。

銀「あ!タケルさん!」

鉄男「タケル兄ちゃん!」

タケル「鉄男君に金太郎君も来てたんだね。お父さん、お母さん、おはようございませす。」

両親はタケルに一礼した。

鉄男「姉ちゃん、足大丈夫?」

銀「大丈夫大丈夫!リハビリして、何時から自立出来るようにしてみせるからな!」

タケル「本当、銀は相変わらず元気だね。」

銀を車椅子に乗せて、中庭へ向かう。

中庭。

銀「ん〜!今日も良い天気だな〜!」

タケル「そうだね。ねえ銀、今日夏祭りがあるんだけど、一緒に行かない?須美ちゃんから誘われたんだ。」

銀「夏祭り?行きたい行きたい!」



鉄男「ねえタケル兄ちゃん、遊ぼうよ！」

タケル「よし、遊ぶか！」

2人は鬼ごっこで遊ぶ。

銀「本当、2人を見てると微笑ましいな。よしよし。」

金太郎を撫でながらタケルと鉄男を見る。

夕方。神社でタケル達と銀が須美と園子を待っていた。暫くして、浴衣姿の須美と園子が来た。

8人は夏祭りへ行く。タケルが銀の車椅子を押す。

園子「わっしーから遊びに行こうって言うなんて、珍しい事もあったもんだ。」

銀「本当だなあ。須美は少し成長したかな？」

須美「先生から許可を貰えて良かったわ。今日はお役目を忘れて、リラックスしましょ?」

タケル「リラックスするのもお役目の1つだからね。」

園子「わっしーも気合い十分だしねー!」

銀「もしかして、夏祭りだから張り切り過ぎたのかな?」

須美「こ、これは親に着せられたのよ・・・」

園子「うんうん!似合うよわっしー!お人形さんみたい!」

銀「須美、くるくる回ってみてよ!」

須美「は、恥ずかしいわ・・・」

銀「緊張すんなって。早くやってみて?」

須美「・・・こ、こうかしら?」

くるくる回す。

園子「おおお!!ノリノリだー!!」

銀「園子!シャッターチャンスだ!」

園子「ラジャー!」

スマホで須美を撮る。

須美「こらこら、撮影は禁止よ!」

園子「ええー？待ち受けにしようと思ったのに〜！」

銀「勿体無いな〜。」

須美「恥ずかしいから止めて！」

園子「今もわっしーが待ち受けだよ。」

須美「へ？」

園子「ほら！うどん食べてる時の奴〜！」

須美「ちよつと止めて！本当恥ずかしいから！」

園子「私の携帯だもの！私の自由だよ〜！」

須美「もう、じゃあ私はそのつちを待ち受けにするわよ!?」

園子「わあ〜！私で良いの〜？」

須美「そこ、恥ずかしいがらないの？」

銀「じゃあ私は須美と園子を待ち受けにしよつと！」

園子「わあ〜！ミノさんありがと〜！」

須美「もう銀つたら・・・」

タケル「本当、仲が良いね。あの3人。」

アカリ「微笑ましくて可愛いね。」

夏祭り。多くの屋台が並んでいる。

園子「リング飴とチョコバナナとか、もう定番過ぎて珍しくないよね!」

銀「焼きそばにたこ焼きも美味しい!」

須美「その割には満喫しているみたいだけど?」

園子「定番でも、お祭りで食べると美味しいんだよね。」

須美「そう言うものかしら?」

銀「そう言うものだよ。」

園子「ん!?イケてる香り!!」

タケル「どうしたの?」

焼き鳥屋を発見。

大将「へいらっしやい!」

アカリ「美味しそ〜!」

園子「大将!3本下さいな!」

銀「園子、奢ってくれるのか?」

園子「うん！」

須美「わ、私はそんなに食べられないわ。」

園子「え、そうなの？じゃあ私が2本食べるから！」

須美「凄い食欲ね……」

焼き鳥を食べる。

園子「ワオ！オイシク！ナンダコリヤー！！大将！店ごと買いたいんですけどもー！」

銀「こらこら園子！駄目だぞそれは！」

須美「そうよ！」

御成「園子殿、凄くはっちゃけていますな。」

マコト「店ごと買いたいわって……」

次は射的。園子が挑戦。

銀「園子、頑張れ！」

にわたりのぬいぐるみを狙って撃つ。しかし外れた。

銀「惜しい!」

園子「むむむむ……」

2 発目。だがこれも外れ。

タケル「また外れた……」

園子「この……猪口才なあ!」

三千円を出して、大量のコルクを買った。

銀「た、大量だね……」

ぬいぐるみを狙って撃つが、連射しても当たらない。

銀「全部外れ……」

園子「何てこつたい……」

タケル「園子ちゃんどんまい……」

須美「もうお小遣い無いね……あれが欲しいの?」

園子「うん、1等の鳥さん……」

すると須美が、園子にくっ付いた。

園子「わ、わっしー?どうするの?」

須美「落ち着いて?呼吸を正して?」

園子「う、うん。」

銀「須美、やれるの？」

須美「ええ。ライフルの癖は見てたわ。調整は任せて？吸気。」

園子「すー・・・」

須美「呼気。」

園子「はー・・・」

須美「照準集中。」

園子「集中・・・」

須美「力を入れず、指を絞るように。」

園子「・・・」

須美「今!!」

にわとりに命中。

須美「後は気合！」

園子「気合~~~~~!!!」

銀「気合~~~~~!!!」

そして、にわとりが見事落ちた。

タケル「凄い!」

カノン「落ちた!」

園子「イエーイー!! やったー!!」

銀「やったな園子!!」

園子「イエーイー!!」

店主「何てこった! こんなのコルク玉で倒せる訳ないのに!」

須美「それはどう言う意味?」

マコト「悪質か?」

店主「え!? ああ、いやあ・・・はいよ、持って行けよお嬢ちゃん。」

にわたりのぬいぐるみゲット。

園子「わっしーやったね!」

銀「須美凄いな!」

須美「得意分野だから。でも引き金を引いたのはあなたよ? それはあなたの物。」



園子「うっひょー!!」

すると園子が、ぬいぐるみを店主に渡した。

店主「え？」

園子「それ3つと交換して？」

左端にある狒犬のストラップと交換して貰った。

夜。

須美「ここからなら、一番よく花火が見えるわ。穴場よ。」

銀「へえ〜！」

園子「下調べはばっちりだね！」

須美「過去のブログから特定したの。」

銀「須美って本当、そう言うの得意よな。」

カノン「あ、皆さん見て！」

夜空に花火が咲いた。

タケル「綺麗だね。」

須美「ありがとう。」

園子「ん?」

須美「これ。」

狒犬のストラップを見せた。

銀「ありがとう、園子。」

園子「うん!私も、ありがとうね。わっしー、ミノさん。」

須美「ん?」

銀「どうしたんだよ?急に。」

園子「私、選ばれた勇者がわっしーとみのさんで良かった。私ってほら、変な子じゃない。だから、中々友達が出来なくて……」

須美「そのつちは変じゃないよ。素敵よ。」

銀「今の園子も、凄く素敵だよ。」

園子「……2人とじゃなかったら、こんなに頑張れなかったよ。」

須美「……銀はフオワード型だし、私は、融通が利かなかったから。そのつちがリ-

ダーじゃなかったら、纏まらなかったわ。」

銀「私達3人じゃなかったら、頑張れなかったからね！」

園子「うん！6年生になってから、訓練もお泊まり会も楽しかった。私、2人の友達になれて良かった。」

須美「私も。」

銀「勿論、私もだよ。」

すると須美は、2人の手を繋ぎ合った。

園子「ん？」

銀「須美？」

須美「友達だよ、私達3人は。これから何があっても、ずっと……」

園子・銀「うん。」

タケル達は、3人を見て微笑んでる。

別の場所では、黒いリズムジンの夜の道路を走っている。車内には。

安芸先生「はい、データ受け取りました。確認中です。彼女達ですか？ええ、私の判

断で休暇を与えています。1人は天空寺タケルさんの判断で離脱させます。・・・はい、それでは失礼します。」

大赦からの通話を切った。そして送られた資料を拝見。

安芸先生「これ以上に勇者の損失を出さない為の・・・新システム・・・!!  
これ・・・こんなものが実装されたら・・・武器や技の強化は、幾らでも出来るけど、心の強さには、限界があるわ・・・あの子達を・・・もうこれ以上・・・」

果たして、送られた新システムとは一体。

「END」

## 第十八話 「約束！燃え尽きる記憶！」

とある滝。ここに、須美と園子が滝行を行った。タケルとマコトが2人の様子を見守る。

数日前。

須美『新装備？』

安芸先生『ええ。それを得る為に一度スマホを収めて貰います。』

2人は、スマホを安芸先生に預けた。

タケル『安芸先生、銀のスマホもお願い出来ますか？』

安芸先生『はい。』

銀のスマホも預けた。

タケル『戻って来たら、俺に預からせて下さい。銀が回復するまで。』

安芸先生『分かりました。』

現在に戻った。

神樹は外壁と戦う為、勇者に力を与える。だがその力は、誰でも受け取れる訳では無い。それは限定的なもので、神樹と極めて高いレベルで共鳴出来る人間。極少数の選ばれた人間にしか使用する事は不可能。

滝行から戻ると、大赦の人々が待っていた。2人の濡れた白装束を脱がせ、身体を拭き、白い巫女服を着させた。そして、2人に新装備を導入したスマホを授けた。すると須美と園子のスマホから、光が出現した。その光から、小さな者が出現した。須美のは割れ目から目と手を覗かせた卵のような姿、園子のは黒い鳥。

園子「わあ〜!」

須美「これが新装備?」

安芸先生「そう。勇者の武装を何倍も強化する精霊よ。」

園子「わあ〜!宜しく〜!」

須美「これが精霊・・・頼もしいわね。」

園子「うん！」

安芸先生「ではタケルさん、これを。」

銀のスマホをタケルに。

タケル「はい。」

スマホを預けた。

安芸先生「三ノ輪さんが帰って来たら、渡してあげて下さい。」

タケル「はい。」

後日の鷲尾家の朝。

父親「これは朝から豪勢だな。須美が作ったのかい？」

須美「はい。今日は特別に野菜たっぷりにしておきましたから。」

母親「どうして？朝からお肉ガツガツで良いのよ？」

須美「ダーメ！お母様にはもつと健康に気を付けて貰わないと！」

皿に筑前煮どっさり盛った。

須美「さあ、いただきますしょ?」

朝食を食べる。

母親「須美。あなたはお勉強もお役目もあるのだから、無理しなくて良いのよ?」

須美「ううん、私に出来る事はこれくらいしかないから・・・」

母親「須美、あなたは十分に大切な私達の子よ。」

須美「分かつてる。ありがとう、お母様、お父様。それに私料理作るの好きだから、お

母様よりもね。それじゃ、行って来ます。」

父親「ああ、気を付けて行ってらっしゃい。」

須美は学校へ向かった。

父親「子供の出来なかった私達に勿体無い。本当に良い子だよ・・・」

実は須美は、鷺尾家の養子だった。

病室。

タケル「君のスマホに、新装備が導入されたんだ。」

銀「新装備?」



タケル「ちよつと見てみる？」

スマホを銀に渡すと、スマホから光が出現し、中から骸骨の精霊が現れた。

銀「おお〜！」

マコト「それは精霊だ。勇者の力を高める。」

アカリ「可愛いわね〜。」

御成「これが精霊ですか〜。」

カノン「可愛い〜。」

銀「ん〜・・・よし、お前の名前はガシヤドクロだ！」

タケル「それって、この精霊の名前？」

銀「そうだよ。格好良いし！」

タケル「そうか。銀、そのスマホを俺に預かせて。」

銀「うん。」

ガシヤドクロを収めて、スマホをタケルに預ける。

タケル「銀、これは君が回復するまでに預けておく。」

銀「分かったよ。」

アカリ「そうだわ、今日イネスでハロウィンイベントがあるの。一緒に行かない？」

銀「お！良いですね！」

アカリ「ちょっと今から外出許可貰いに行つて来るから。」

神樹館。

須美「おはよう!え?」

園子「おはーサンチョー・・・ん?」

教室に入ると、クラスメイト達が何かをしていた。そして2人を見ると。

横断幕に『わたしたちの勇者がんばれ』と大きく書いたのを見せた。

須美・園子「・・・」

クラスメイトA「先生達に内緒で作ってたの。」

須美「・・・こういう事は禁止されてるはずでしょ？」

クラスメイトB「でも、他に何も思い付かなくて・・・」

クラスメイトC「入院してる銀ちゃんや、2人の事も考えないで質問責めしちゃったから・・・鷺尾さんも乃木さんも、それに銀ちゃんも・・・私達なんかよりもずっと辛いはずなのに・・・」

クラスメイトD「皆で考えて、どうしても謝りたくて！」

須美「これは先生には絶対に内緒にしておかないと・・・でも、ありがとう。本当に。皆に感謝し、皆が喜んだ。」

クラスメイトA「ねえ！お役目って何時か終わるんでしょう？」

クラスメイトB「銀ちゃんの入院も何時か終わるんでしょう？」

クラスメイトC「そしたら、普通に一緒に遊べるんだよね？」

須美「え・・・ええ！」

クラスメイトA「やったー！私、鷺尾さんともっとお友達になりたかったの！」

クラスメイトB「サンチョ可愛いね！」

夕方のイネス。今日はハロウィンイベント。

園子「カボチャだカボチャ!外国のお祭りだ〜!」

須美「我が国の懐の広さよね。」

園子「色んなお祭りが楽しめるよね!」

須美「ええ!」

銀「おーい!須美ー!園子ー!」

園子「ミノさーん!」

そこに銀やタケル達も居た。

イネスに入る。

園子「とお!」

須美「うわっ!何!?!」

園子「この帽子被って〜？」

帽子を須美に被せる。

園子「ほらわっしー、似合ってるぜ〜！」

銀「須美、帽子似合ってる〜！」

須美「そ、そう？」

アカリ「ええ。可愛いよ！」

園子「その帽子で鳩を出す芸を覚えてみるの良いかもー！」

すると園子の精霊が勝手に飛び出した。

銀「うわっ！」

園子「こら、出て来ちや駄目だよセバスチャン！」

須美「セ、セバ？」

園子「カラス・セバスチャン・天狗。ミドルネーム付けてみたんだ！」

指を鳴らすとセバスチャンが消えた。

須美「そ、そうなのね・・・」

タケル「わざわざミドルネームまで・・・」

銀「あ、セバスチャンが来た。」

今度はカボチャに入ったセバスチャンが飛んで来た。

園子「あ!もう、また勝手に出て来ちゃ駄目だよ!」

須美「神樹様が遣わせた精霊・・・この子達がね・・・」

銀「あははは。」

園子「きつと見た目が違って、その力は真に恐ろしいんだよ!」

須美「だと良いんだけど・・・」

男の子「ママー!カボチャが空を飛んでるよー?」

ママ「あら本当!」

須美「あ、α波で浮かんでいます。」

タケル「いや、それ無理あるんじゃない・・・」

男の子「ええ!凄え!」

タケル「信じちゃった!」

園子「わっしー!凄えー!」

マコト「早く仕舞え、園子。」

同じ頃乃木家では、安芸先生が園子の両親と面談をしていた。

園子の父「それもお役目の一環なのだと言うのなら、仕方ありません。乃木家に生まれた園子の使命です。」

園子の母「あの子には何の責任もないのに・・・」

園子の父「園子の魂はずっと新樹様と一緒に居られるんだ・・・とても光栄な事なんだよ。」

園子の母「分かっているわ。でも、代われるものなら私が代わってあげたい・・・」

その後は鷺尾家で須美の両親と面談。

須美の母「その新しいシステムの事は、あの子達に伝えたら駄目なんですか？」

須美の父「こんな残酷な事教えられる訳ないだろ！」

安芸先生「心中お察し致します。」

同じ頃須美達は、フードコートでジェラートを食べていた。

銀「どうどう?しょうゆ豆味は?」

須美「・・・やっぱりピンと来ないわね。」

銀「ええく?それは無いよく!」

園子「あははは。」

須美「そのつちのバニラ味頂戴!」

園子「うわあああ!!わっしーに取られたく!」

須美「フッフッフ。」

園子「あわわわわ!その目はまだ狙ってる!」

銀「私にも頂戴!」

今度は銀が園子のバニラを取った。

園子「わわわわわ!!ミノさんまで・・・!!!」

タケル「須美ちゃん、銀、あんまり取ると園子ちゃん泣くよ?」

鷺尾家。

安芸先生「どうか、くれぐれも取り乱す事のないようお願い致します。神樹様と共に



ある彼女達の為にも。」

須美の母「そんな・・・それじゃあの子達はまるで生贄じゃないですか!」

安芸先生（勇者なんて、体よく取り繕っているけど、それはこれからもずっと選ばれ、そして失われていく生贄・・・）

その頃須美達は。

須美「お父様もお母様も学校の友達も、皆応援してくれている。お役目がある私達は幸せだ。」

園子「横断幕貰っちゃったね〜!」

銀「どんなの? 私にも見せて?」

園子「じゃあ病院に戻ったら見せてあげるね〜。」

須美「あ・・・!」

タケル「ん?」

マコト「っ!」

3人は気配を感じた。

園子「来るの?」

須美「うん、来る。」

園子「分かるようになってきちゃったね。」

すると須美は、あの夢を思い出した。

須美(今度のは、きっと大変な戦いになる。神樹様も、それを伝えようとしていた……)

“ピロピロピロリン”

するとスマホからアラートが。それは樹海化警報のアラートだった。

アカリ「何この音?」

須美「気を引き締めて。」

園子「うん!集中集中!」

タケル「マコト兄ちゃん。」

マコト「分かってる。」

銀「2人共、頑張れよ。」

園子「勿論!あ、そうだ!」

須美「ん?」

すると園子は、髪留めに使つてるリボンを須美に渡した。

園子「これ、わっしー持つてて？」

須美「え、ええ。」

園子「髪に付けてくれても良いんだよ？」

須美「戦いが終わったら付けてみるわ。似合つてたら褒めてね、そのうち！銀！」

園子・銀「うん！」

瀬戸大橋から亀裂が起こり、樹海化が進む。

マコト「来たぞ！」

御成「皆さん、御武運を！」

須美「そのつちは私が守るから！」

園子「わっしーも私が守るからね！約束！」

須美「うん!約束!必ず一緒に帰ろう!」  
そして樹海に飲み込まれた。

樹海。そこに3体のバーテックスが出現した。

園子「3体!?!」

須美「そう言う事か・・・」

以前銀とゴーストが3体のバーテックスと戦った時を思い出した。

銀「あの時と似ている?」

園子「よし!行くよ!」

須美「了解!」

園子「おお!イカす!」

タケル「マコト兄ちゃん!行こう!」

マコト「おう!」

須美と園子は新装備を導入された勇者に変身した。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

『アーイ！バッチリミロー！バッチリミロー！』

タケル・マコト「変身！」

『カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

『カイガン！スペクター！レディゴー！覚悟！ド・キ・ド・キ！ゴー！』

2人は仮面ライダーゴースト・オレ魂と仮面ライダースペクターに変身した。

須美「宜しくね！あなたの名前は白銀よ！」

自分の武器である狙撃銃に名前を付けた。

園子「あぁ〜！良いね〜！」

銀「須美らしいな。」

須美「バックアップは任せて。」

タケル「行こう！」

4人はバーテックスに立ち向かう。

銀「須美、園子、帰って来てくれよな。」

アカリ「タケル、マコト、頑張つて。」

御成「無事を祈りますぞタケル殿、マコト殿。」

カノン「タケルさん、お兄ちゃん。」

地面を泳ぐバーテックスに、1つの光が直撃された。それは須美の狙撃銃だった。狙撃銃を連射し、地面を泳ぐバーテックスに全弾命中。

園子「やああああああ!!!」

タケル「はああああああ!!!」

マコト「うおおおおお!!!」

槍とガンガンセイバーとガンガンハンドで、地面を泳ぐバーテックスを叩いた。

須美（これなら・・・っ!!）

別のバーテックスが園子を狙って電撃を放射。

園子「きゃあああああ!!!」

しかし精霊のセバスチャンが園子を守った。すると園子の花が光った。

タケル「園子ちゃん！」

マコト「うおおおおお!!!」

『ダイカイガン・スペクター！オメガドライブ！』

マコト「だあああああ!!!」

ガンガンハンド・ロッドモードで、電撃を放射するバーテックスを強く叩いた。

タケル「園子ちゃん！大丈夫!？」

園子「ビリビリ来たあ・・・ありがとうセバスチャン！」

セバスチャンはえっへんと頷く。

すると地面を泳ぐバーテックスが、黒い煙幕を放出した。

園子「何これ!?何も見えない!？」

タケル「煙?」

着地したスペクター。

マコト「煙幕か!？」

須美「ガス・・・まさか!!」

バーテックスが下に向けて電撃を放射。するとガスが粉塵爆発のように大爆発を起こした。

タケル・マコト「うわああああああああ!!！」

園子「きやああああああ!!！」

須美「くっ!!」

ゴーストとスペクターが爆発で吹き飛ばされたが、須美と園子は精霊のお陰で難を逃れた。すると須美と園子の花がまた一つ光った。

須美「これが、勇者の新しい力・・・!」

園子「キタキタキター!!行くよ!!!」

すると2人の花が強く輝き。



須美・園子「満開!!!」

2人は光に包まれ、強大な力を手に入れた。

銀「す、凄え!」

アカリ「綺麗〜!」

御成「花が咲いておりますぞ!!」

カノン「凄いよ!」

タケル「あ、あれが・・・!」

マコト「満開・・・!」

バーテックスが須美に向かって強力な電撃を放射したが、須美がバリアで防いだ。

須美「お前達の攻撃は、もう届かない!!」

全砲台のエネルギを集め、電撃を放射するバーテックスに向けて一斉発射した。電撃を放射するバーテックスが砂のように溶け、本体が光となって消滅した。

須美「何、あれ?」

そして園子は、地面を泳ぐバーテックスと交戦中。

園子「おお〜!潰しに来た〜!」

船のオールから巨大な刃が射出され、地面を泳ぐバーテックスを何度も串刺しした。

園子「ふふくん。」

指を鳴らして、オールを射出してバーテックスに狙いを定め。

園子「ふんっ!」

両手を合わせて、オールで地面を泳ぐバーテックスを串刺しした。すると砂のように溶け、本体が光となって消滅した。

タケル「凄い・・・」

マコト「あれが満開の力・・・」

須美「これで後1体・・・」

だがその時、須美が突然力尽きて落下した。

園子「わっしー!?!?・・・きゃああああ!!」

更に、園子も力尽きて落下した。

タケル「須美ちゃん!!」

マコト「園子!!」

2人は急いで2人を助けに行った。

落下した須美と園子だが、精霊のお陰で地面に激突せずに済んだ。

銀「須美!!園子!!」

落下した須美に、ある異変が。

須美「・・・足が・・・」

両足が動かなくなってしまうていた。すると須美の髪の毛が伸びた。

更に園子の右目に異変が。

園子「あれ・・・目が・・・」

右目が見えなくなってしまうた。

須美が、長い髪で立ち上がった。

タケル「須美ちゃん！大丈夫!!」

須美「タケルさん・・・っ！」

マコト「園子！」

園子「マー君・・・っ！」

残るバーテックスは後1体。

須美「もうここまで・・・え!？」

するとバーテックスが炎の扉を開き、そこから無数の炎を放出した。

アカリ「何あれ!？」

銀「須美!!園子!!逃げろ!!」

園子「うわああああ!!何かいっばい来たー!!??」

マコト「させるか!!」

デ IPP スペクターゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『ダイブ・トウ・デ IPP!アーイ!ギロットミロー!ギロットミロー!ゲンカイガン

!デ IPP スペクター!ゲットゴー!覚悟!ギ・ザ・ギ・ザ!ゴースト!』

デ IPP スペクターを纏い、デ IPP スラッシャーを取り出した。

マコト「フツ!!」

デ IPP スラッシャー・ブラスターモードで炎を撃ち落とす。

『闘魂カイガン!ブースト!俺がブースト!奮い立つゴースト!ゴー!ファイ!ゴー!  
ファイ!ゴー!ファイ!』

闘魂ブースト魂を纏ったゴーストが、サン格拉斯ラッシャー。ブラスターモードで炎を撃ち落とす。だが別の炎が須美に激突した。

須美「きやああああ!!」

タケル「須美ちゃん!!」

すると再び須美の花が光った。

園子「数が多過ぎるよ!!」

マコト「キリが無い!!」

園子「きゃあああああ!!!」

マコト「園子!!!」

炎が園子と激突し、園子の花が再び光った。

須美（今は・・・やるしか無い!!）

タケル「須美ちゃん!!ここは下がって!!」

須美「いえ、行きます!!そのうち!!」

園子「うん!!」

マコト「まさか・・・止めろ!!!」

須美・園子「満開!!!!」

たと。何と再び満開を発動したのだった。すると樹海が白くなり、大橋が光となって消滅した。

銀「樹海が!」

アカリ「ここは危ないわ!逃げましょう!」

御成「に、逃げますぞー!!」

カノン「早く早く!!」

4人はその場から逃げる。

満開した2人は、炎を打ち落とし続ける。



タケル「須美ちゃん！園子ちゃん！」

マコト「タケル、あの2人の異変に気付いたか？」

タケル「え？」

マコト「2人は満開した後に、異常個所があった。須美は両足、園子は右目。」

タケル「つて事は・・・満開した後に後遺症が!？」

マコト「早く戦いを終わらすぞ！」

タケル「分かった!!」

サンングラスラッシュヤーに闘魂ブーストゴースト眼魂とオレゴースト眼魂を装填し、  
デーパーラスラッシュヤーにデーパースペクターゴースト眼魂と、スペクターゴースト眼魂  
を装填した。

『メガマブシー！メガマブシー！闘魂ダイカイガン！メガオメガフラッシュユ！』

『メガハゲシー！メガハゲシー！極限ダイカイガン！ギガオメガダマ！』

強力な熱光線とプラズマエネルギーを同時発射し、炎を多く打ち落とす。

するとバーテックスが炎を集め、太陽のような大きい炎を作り上げて飛ばした。

須美「っ!!」

園子「しまった!!わっしー!!!」

オールでバリアを作り、須美を守る。

タケル「須美!!」

マコト「今行くぞ!!」

『ゲンカイダイカイガン!ゲキコウスペクター! デットゴー!激怒!ギ・リ・ギ・リ!  
ゴースト! 闘争!暴走!怒りのソウル!』

ディープスペクターがゲキコウモードに強化した。

『闘魂ダイカイガン!ブースト!オメガドライブ!』

『極限ダイカイガン!ディープスペクター!ギガオメガドライブ!』

タケル「はあああああああ!!!」

マコト「だあああああ!!!」

オメガドライブとギガオメガドライブで太陽を押し返そうとする。すると園子が吹き飛ばされた。

園子「きゃあああああああ!!!」

満開が切れ、落下した。

須美「そのつち!!!」

タケル「命、燃やすぜ!!!」

マコト「俺の生き様、見せてやる!!!」

高速回転して、太陽を消滅させた。

だが、大橋が破壊されてしまった。

須美「大橋が・・・」

ゴーストとデーパースペクターが須美の横に着地する。

タケル「瀬戸大橋が!？」

マコト「破壊された!？」

しかしバーテックスが再び炎を放出し続ける。

園子「……腕が痺れて……」

落下した園子の左腕が痺れてしまった。すると左腕が光った。これを見て、園子が察した。

放出し続ける炎を、須美が打ち落とし続ける。ゴーストとディープスペクターも炎を撃ち落とす続ける。すると真上から槍が伸び、炎を落とした。

須美「っ!!そのっち!!」

タケル「園子ちゃん!!」

マコト「園子!!」

須美「無事だったのね!」

園子「ねえわっしー、何か変だよ!?この戦い方で良いの!？」

須美「分からない：でも今は新樹様をお守りしないと、私達の世界が無くなる・・・」  
園子「そ、そうだね・・・」

するとバーテックスが再び巨大な炎を作り上げた。

園子「さっきの攻撃!?!」

マコト「くそ!!」

タケル「ムサシさん!!」

サン格拉斯ラッシャーに闘魂ブーストゴースト眼魂とムサシゴースト眼魂を装填した。

『闘魂ダイカイガン!メガオメガシャイン!』

ゴーストが大ジャンプし、サン格拉斯ラッシャーで炎の鉞を生成し、太陽を防ぐように斬る。

タケル「くっ!!!  
!!!!うわあああああ!!!」

飛ばされたゴーストが落下した。

マコト「タケル!!」

園子「ター君!!」

須美「やらせない!!もう、誰も!!!」

砲台でエネルギーを集め、巨大なエネルギーを生成して飛ばした。

2つの大玉が激突し、大爆発を起こした。

須美「・・・」

園子「わっしー!」

マコト「須美!!」

須美「そのうち・・・マコトさん・・・後はお願ひ・・・彼奴を止めて!」



2人が見たのは、三角形の物体だった。その物体は壁の奥へ消えた。

園子「ま、待て!!」

マコト「行かせるか!・・・ぐあっ!」

途中でディープスペクターが力尽きて倒れ、マコトに戻った。

園子「マー君!ぐっ!」

同じく園子も満開が切れ、壁の上に落ちた。

園子「ゴホッ!ゴホッ!はあ・・・はあ・・・一瞬心臓が止まったかと思った・・・逃

がさないんだから・・・」

起き上がって、物体を追う。

そして壁の向こうへ行くと、驚愕の光景が目映った。

園子「え・・・?」



辺り一面、炎の海と言う光景だった。

そして自分が立っている真上には、巨大な大木があつた。

園子「……?」

そして、炎で生成中の新たなバーテックスの姿も見えた。

園子「何……これ……?あれ!?心臓……動いてない……?」

そして、無数の小型のバーテックスが浮遊していた。

園子「ああ、私分かっちゃった……」

そして、須美は。

須美「はあ……はあ……はあ……」

変身が解除され、息を切らしていた。そこに、タケルが来た。

タケル「す、須美ちゃん……」

須美「はあ……はあ……街は……?」

園子「わっしー!!! 大変!!!」

そこに園子が、マコトと一緒に戻って来た。

タケル「園子ちゃん！マコト兄ちゃん！」

マコト「タケル・・・」

園子「大変なんだよ!! 壁の外がね!! え？」

須美「・・・誰、ですか？」

園子「え？」

タケル「須美、ちゃん？」

須美「何、ですか？」

タケル「須美ちゃん!?俺達が分からないの!?!」

須美「何、ですか?あなた達は?一体、あなた達は何ですか!?!」

園子「……わっしー!!!」

マコト「まさか、記憶が……!?!」

タケル「あの満開の後遺症が……!?!」

すると壁の向こうから、炎で生成された無数のバーテックス達が出現した。

タケル「バーテックス!」

マコト「あんなに・・・!?」

無数のバーテックスを見た園子は、須美に語った。

園子「大丈夫!後は私が何とかするから!私は乃木園子。あなたは鷺尾須美。そしてあの子は三ノ輪銀。3人は友達だよ?」

リボンを須美の右腕に結んだ。

園子「ズツ友だよ?私は死なないから。後でまた会えるから。」

須美「・・・」

園子「だから、ちよつと行って来るね。」

タケル「園子ちゃん!俺達も一緒に行く!」

マコト「お前だけ行かせる訳には!」

園子「ター君、マー君、わっしーの事お願いね。」

タケル「駄目だ!!君が満開したら・・・」

マコト「園子!!」

園子「大丈夫。私は死なないから。」

そう言い残して、彼女はバーテックス達に立ち向かった。

タケル・マコト「止めるおおおおおお!!!!!!」

園子「満開  
!!!!!!」

再び満開を発動し、バーテックス達と戦う。

園子（何度死んでも良い。だって絶対死ねないんだから。私達は、生かされている。）

須美は倒れて気を失った。タケルとマコトが須美を皆の元へ運ぶ。

現実世界の夜の病室。

須美「……………」

真つ暗な病室で、須美が目を開けた。

須美「ここは……………」

そして、自分の右腕に結んであるリボンを見る。

須美「私は……………」

そして同じ頃、園子は神として祀られるようになってしまった。

各地で多くの事故や事件が多発した。

神樹館では、6年生達が卒業した。

そして須美の名前は、鷲尾須美から東郷美森に改名された。彼女はこの2年間、両足の機能が奪われ、記憶を失っていたのだった。

そして彼女はタケル達と共に引越す事にした。引越し先は、とあるお屋敷。

東郷「わあ、大きい。うちってここまでお金持ちだったっけ?」

タケル「そうだね。君のお家は凄いわよ。」

アカリ「じゃあ入ろうか。」

車椅子をアカリが押して敷地内に入る。

東郷（新しい生活、ここで始まるのね。）

すると後ろから。



??? 「こんにちは〜！」

東郷 「ん？」

1人の少女が声を掛けてくれた。

少女 「もしかして、あなたがこの家に住むの？」

東郷 「え、ええ・・・」

タケル 「そうだよ。俺達もここに住むんだ。」

少女 「じゃあ新しいお隣さんだ！あ、私は結城友奈。宜しくね！」

握手した。

東郷「東郷美森・・・」

友奈「それで、皆さんのお名前は？」

タケル「俺は天空寺タケル。」

マコト「深海マコトだ。」

アカリ「月村アカリよ。宜しくね。」

御成「拙僧は御成と申します。以後、お見知り置きを。」

カノン「私は深海カノンです。」

体を神樹様に、

○○○しながら戦い続けること。

それは、すても素敵なことらしく・・・。。

私の両親は、泣いていたという。

わっしー……

今は、○○さんか。

私より軽度で良かった。

勇者御記二九八年十月十一日

大赦書史部 巫女様 検閲済

そして物語は、結城友奈の章へ続く。

「END」

## ##勇者の章##

### 第十九話「始動!華やか日々!」

後日の犬吠埼家。園子がお邪魔している。アカリと御成は夕飯の買い出し中。

園子「ゼロは無・・・そんな概念を思い付いたインドの人は凄いなと思うヨガヨガー。」

風「いやそう言うのより、もつとこう、高校受験用の対策を・・・」

樹「何で2年生の園子さん、がお姉ちゃんを教えるんですか?」

お菓子を持って来た。

園子「わあゝい!お団子ゝ!」

風「乃木はそこらの家庭教師よりも賢いのよー!そう見えないと思うけど・・・」

樹「じゃあ私の勉強も見て貰いたいなく!」

風「あゝ!それは良いわね!樹はちよつと心配だったからね。」

樹「うう・・・色々あり過ぎて夏の間勉強しなかったからね・・・」

園子「2年までの成績は良かったんですね?」

風「べらぼうに良かったわよ!でも今はべらぼうにマズいわよ・・・」

樹「お姉ちゃん・・・」

風「だ、だってしょうがないじゃない。3年になって色々あり過ぎたのよ……」  
園子「フーミン先輩が頑張ったから、今があるんだよね。」

時は遡る。

園子「勇者部入部希望の、乃木園子だぜーい!!」

銀「同じく入部希望の三ノ輪銀でーす!!」

タケル「園子! 銀!」

夏凜「えっ、乃木園子と三ノ輪銀!?! あの!?!」

園子「2年前、大橋の方で勇者やってたんだぜ〜?」

銀「やってたんだぜ〜?」

園子「改めて、宜しくお願ひしまーす!」

銀「宜しくお願ひします!」

夏凜「何で……? 伝説の勇者がこんな所……」

園子「んゝ、うちに居てもやる事無いから?」

夏凜「そんな理由で・・・?」

園子「私、小学生中退なんよ。」

夏凜「そ、そんな重い事をしれつと・・・?」

風「お役目から解放された乃木さんは、普通の生活に戻る事を大社に要請したの。アカリ「銀ちゃんは先週退院して、今日から学校生活を送る事になったから。」

園子「まさか本当に普通の生活に戻るなんてねえ。」

銀「いやあく全くだ!」

夏凜（へ、変な伝説の先輩・・・）

風「偉大な先代勇者を歓迎します!乃木さん!三ノ輪さん!」

園子「乃木とか、園子とかで良いですよ?フーミン先輩。」

風「フ?」

銀「私も銀で良いですよ?」

園子「宜しくね!にぼっしー!」

夏凜「なっ!?だ、誰よそれ教えたのは!!」

友奈と風と樹が外方向く。

園子「樹ちゃんはいつつん!」

樹「え、いつつん？」

園子「友奈ちゃんはゆーゆかなあ！」

友奈「わあ素敵！じゃあ私は園ちゃんとか！」

園子「おおく！それでお願い！」

友奈「うん！」

園子「これはサンチヨ。宜しくー！」

サンチヨ「宜しくー！」

風「宜しく！」

樹「不思議な人だね・・・」

友奈「銀ちゃん、宜しくね！」

銀「ああ！宜しくな！友奈！」

タケル「2人共、元気になって良かった。」

マコト「そうだな。」

タケル「あ、そうだ。銀。」

銀「ん？」

タケル「君にこれを。」

渡したのは、銀のスマホだった。

タケル「君は十分に回復した。これで、また勇者として頑張ろうね。」

銀「タケルさん・・・はい!」

タケル「その代わり、この前のように無茶は禁物だよ?」

銀「分かってるよ。」

園子「そつかり、皆こんな風に青春してたんだね。」

銀「楽しそうだね。」

友奈「そのちゃん!銀ちゃん!」

園子・銀「ん?」

友奈「勇者部へようこそ!」

園子「うん!これから私も青春するんだ!頑張ろう!おー!!」

銀「おー!!」



そして現在。

園子「ベッドでずっと見てたから・・・勇者部楽しそうだなー、楽しいだろうなーって。また学校に行けるようになるなんて思ってたなあ・・・嬉しいなあ。よし、じゃあ勉強しよう！」

鼻眼鏡装着！

園子「わたすの好きな複素数の行列からやるべき！」

風「分からない・・・分からない・・・」

同じ頃かめやでは。友奈と夏凜と銀とタケルとマコトがうどんを食べてる。

友奈「夏凜ちゃん！銀ちゃん！日曜日なのに来てくれてありがとね！」

銀「いやあく、お安い御用だよ〜！」

夏凜「別に、今日はたまたま暇だったし。たまたまよ。」

マコト「相変わらずだな。」

友奈「うん!でも、夏凜ちゃんと銀ちゃん格好良かったよ!」

それは、女子ソフトボール部の助っ人として参加し、夏凜と銀がホームランを決めたのだった。

夏凜「あんたも悪くなかったよ。」

銀「友奈のピッチャーの腕、中々だったよ。」

ピッチャーの友奈が、見事ストライクを決めた。

友奈「えへへ〜!ありがとう!」

タケル「本当、3人揃って見事に決めたもんだね。」

夏凜「勇者部って変な部よね。」

友奈「だから楽しいよね！毎日違う事が起きて！」

銀「うん！私も同じく！」

夏凜「まあね。」

夕方の帰り道。

友奈「日が暮れてまた明日だね！」

夏凜「あーあ、もう月曜日か。休みの日は早いよね・・・」

銀「夏凜、そう言うなって。私はまた学校に行けるなんて嬉しいよ。」

タケル「銀がそう言うのと、何か重く感じるな。」

友奈「でも帰ったら宿題やらなきやね。」

夏凜「私はもうやったわよ？」

友奈「え!?!朝から試合だったのに!?!」

夏凜「土曜の内にやったのよ。当然でしょ？」

銀「早いな〜！」

友奈「夏凜ちゃん凄いな〜!ん?」

銀「ん?」

タケル「ん?」

擦れ違う車椅子の女の子を見て、3人は何かを感じた。

夏凜「ん?どうした?」

友奈「ううん、何でも!」

タケル「こっちの話。」

翌日の勇者部。

樹「じゃじゃーん!」

園子「わあく!キーキ!どうやって密輸したの?」

銀「み、密輸?」

樹「今日家庭科の授業があつたんです!」

銀「ほう!その手があつたか!」

友奈「樹ちゃんが作つたの?」

樹「はい!」

開けると、猫の絵がぐちゃぐちゃになっていた。

タケル「これは・・・」

アカリ「デコレーションが・・・」

樹「作り過ぎたから持って来ちやった!」

風「偉いぞ!我が妹!」

樹を褒めて撫でる。

夏凜「独特のセンスね・・・」

風「表現力が豊かと言いなさい!」

アカリ「そして私は、昨日モンブラン買って来たよ!」

カノン「わあく!」

ケーキを切り分け、モンブランを皆に分けた。

風「さあ!食べよ食べよ!」

皆が樹の作ったケーキを食べる。

園子「んん!?!」

銀「おお!?!」

樹「どうです!?!」

夏凜「うん。見た目は兎も角……」

友奈「美味しー!」

園子「お姉さんプロだねえ!」

風「樹が遂に食べられる料理……!」

樹「お姉ちゃん、返って傷付くよ?」

園子「いつつん、いつつん! お店屋さんやろう! ゆくゆくはフランチャイズで!」

銀「フランチャイズ!? 凄え!」

樹「園子さんはスケールが大き過ぎて、ポケなのか何なのか分かんないですよ……でも、ありがとうございます!」

タケル「アカリ、このモンブラン美味しい! これ駅前の?」

アカリ「そうだよ! 限定販売のだったから。」

マコト「うん。これは美味しいな。」

カノン「美味しい〜!」

御成「美味ですぞ!」

友奈「幾らでも食べられるね!」

最後のケーキに皆が手を伸ばした。

友奈「……じゃあ、夏凜ちゃんどうぞ!」

夏凜「いやいや！樹が食べるべきよね！」

樹「わ、私は授業で食べたから、銀さんどうぞどうぞ。」

銀「いや、私はもうさっきので満足したから園子どうぞどうぞ！」

園子「部長こそ、どうぞどうぞ！」

風「2つも食べたら女子力的に心配よね・・・」

マコト「女子力（物理）だけだな。」

風「何を〜!?!」

夏凜「そもそも何で7つに切ったのよ、風！」

風「し、知らないわよ！何時もの癖よ！」

タケル・友奈・銀「癖？」

風「え？あ、いや・・・何となくかなあ・・・」

園子「6等分出来たよ〜！」

器用に6等分にした。

夏凜「おお〜！」

樹「どうやって切ったんですか？」

園子「数学数学！」

樹「凄〜い！」

風「流石〜!」

友奈「ぼた餅・・・」

風「ん?何?」

友奈「何か、前に部室でぼた餅食べなかつたかなあつて。」

樹「ああ!前に友奈さんも家庭科の授業で作つて来たんですよね!」

友奈「ああ、そつか・・・」

風「さつ、おやつの間はおしまい。日曜日の練習をするわよー!」

しかしタケルと友奈は、何かを思い出していた。

園子「ん?」

夕方、タケルと友奈がCRF250Lに乗って家路を急ぐ。

家の前に到着すると。

友奈「ん?」



タケル「友奈？」

CRF250Lから降りて、家の隣の豪邸を見る。

タケル「ここは……」

友奈「……」

翌日、園子と銀が幼稚園へ向かっていた。

銀「いよいよ演劇かあ。楽しみだな。」

園子「ミノさん張り切ってるね。」

銀「金太郎が居たら良いのにな。と言っても、私と園子は木の役だけどね。」

園子「木の役で大活躍しようね！」

銀「いや、木が活躍する事であるのかな。あ、そうだ園子。これ。」

焼きそばを園子にあげた。

園子「わあ！ミノさんの焼きそばだ！」

銀「また作ったから、美味しかったらまた褒めてくれよな？んでこれが私と、こつち

が皆の分！それと……」

最後の1つの焼きそばを見た。

園子「その焼きそばは?誰の分なの?」

銀「あれ?何で私こんなに作っちゃったんだろう?」

園子「・・・あつ!」

銀「・・・あつ!!」

2人は何かを思い出し、涙を流した。

その頃幼稚園では。

風「乃木と銀がまだ来てないって!?!もう時間なのに・・・」

夏凜「メッセージ既読にならないし、まだ寝てんのかしら・・・」

樹「園子さんに銀さん、あんなに張り切ってたのに・・・」

夏凜「木だけどね。」

風「仕方無い。今日は木無しで行くか。友奈。」

友奈「・・・」

風「友奈?」

友奈「え？あ、うん……」

風「ちよつと、友奈までどうしたの？本番だよ？」

樹「具合が悪いんですか？」

友奈「身体は大丈夫……あのね！」

風「ん？」

友奈「何か……ざわざわ変な感じがするの。皆はしない？」

樹「友奈さん……？」

風「今日は、中止にしようか……？」

先生「勇者部の皆さん！今日はありがとうございます！」

風「あ、実は……」

先生「子供達が今日の劇を楽しみにしていて。今か今かと！」

風「……」

友奈「大丈夫！やろう！皆待ってる！」

劇が始まった。タケル達は園児達の後ろから鑑賞。

風「我こそは超極悪の魔王!今日はこの幼稚園で先生達の言う事を聞かない子を迎えに来た!!一緒に好き勝手に暴れよう!我慢なんてしなくて良いんだぞく!!」

アカリ「今日も子供達が喜んでるね。ねえタケル?ん?」

タケル「・・・」

アカリ「タケル?」

タケル「え?い、いや。何でも無い。」

マコト「どうしたタケル?具合でも悪いのか?」

御成「で、でしたら病院へ・・・」

タケル「そうじゃない。何か、もやもやしてるんだ・・・」

カノン「もやもや?」

友奈「待て、魔王!子供達に悪い事を吹き込むのは止めろー!」

風「何を生意気な!」

友奈「えーい!!」

劍を振り下ろす。

風「はっはっはっは!!」

樹『勇者は傷ついても傷ついても、決して諦めませんでした。全ての人が諦めてしまったら、それこそこの世が闇に閉ざされてしまうからです。皆が次々と魔王に屈し、気が付けば勇者は独りぼっちでした。』

??? 「勇者が独りぼっちである事を、誰も知りませんでした。」

友奈「っ!？」

タケル「友奈？」

アカリ「え？」

友奈「独りぼっちになっても、それでも勇者は……」

風「ん？」

樹「ん？」

マコト「友奈？」

アカリ「どうしたんだろう？」

夏凜「友奈？」

友奈「それでも、勇者は……」

??? 『諦めない限り、希望が終わる事はないから……です……何を失っても……それでも……それでも……私には一番大切な友達を失いたくない……』

友奈は涙を流した。大切な友達の言葉を思い出して涙を流した。

御成「友奈殿? どうかしましたか?」

樹「友奈さん?」

するとそこに、園子と銀が来た。

園子「はあ……はあ……はあ……はあ……」

銀「はあ……はあ……はあ……はあ……」

風「乃木? 銀?」

友奈「. . . 私. . . 私は. . .」

園子と銀が友奈を抱き締めた。

友奈「私は. . . 私は. . . ずっと一緒に居るよって. . . 約束したのに. . . したのに. . .」

タケル「友奈. . .」

夕方の勇者部。

樹「友奈さん. . .」

夏凜「園子も銀もさ. . .」

風「3人共、一体どうしたのよ?」

銀「. . .」

園子「よく聞いてね? 今この記憶は、嘘って事。」



風「え？」

アカリ「嘘ってどう言う事？」

園子「何かとんでもなく悪い事が起きていて、それが何だか分からないけど・・・私達はそれをなかつた事にしてる・・・」

夏凜「・・・何を言ってるの？ねえ友奈？」

友奈「私・・・思い出した・・・」

夏凜「ちよつと？」

友奈「勇者部にはもう一人、とても大切な友達が居たんだよ・・・忘れられる訳がない・・・絶対、忘れたりなんかしちやいけないのに・・・私、どうして・・・」

風「友奈、落ち着いて？」

友奈「皆思い出して!!」

「東郷さん!!ここに、東郷美森って子が居たんだよ!!」

風「っ!!」

樹「っ!!」

アカリ「えっ!?!」

御成「なっ!?!」

カノン「っ!?!」

マコト「っ!?!」

タケル「・・・」

夏凜「あ、そう言えば・・・東郷って今何処?・・・っ!?!」

全員に、東郷の記憶が蘇った。

タケル「やはり友奈と園子と銀は、東郷を思い出したんだね。」

銀「うん・・・」

風「東郷・・・美森・・・」

これは本当の遡り。讃州中学校に1台のリムジンが到着した。

園子「じゃじゃじゃーん！乃木さん家の園子だよー！驚いた？」

友奈「えっ!?あ、えーと・・・あ、あの!？」

園子「今日から同じクラスだよー！宜しくねー！」

東郷「そのうち・・・」

園子「へいへいわっしー！園子だよー！」

東郷「そのうち・・・！」

園子「お、そうだ！出て来てく！」

リムジンから、もう1人の人物が。

銀「須美く！久し振りく！」

何と三ノ輪銀だった。

東郷「銀・・・?」

園子「驚いてる驚いてる〜!サプライズは大成功〜!」

銀「イエーイー!」

東郷「そのつちーー!!銀ーー!!!」

2人の元気な姿を見た東郷が涙を流し、2人に抱き付いた。

園子「わあああ!!ちよつとわっしー!?!」

銀「痛い痛い!須美、苦しいよ〜!」

そして勇者部。

園子「勇者部入部希望の、乃木園子だぜーい!!」

銀「同じく入部希望の三ノ輪銀でーす!!」

タケル「園子!銀!」

夏凜「えっ、乃木園子と三ノ輪銀!?あの!」

園子「2年前、大橋の方で勇者やってたんだぜ?」

銀「やってたんだぜ?」

園子「改めて、宜しく願います!」

銀「宜しく願います!」

東郷「またそのつちと銀と勉強出来るなんて・・・」

園子「授業中に居眠りしたら注意してね?」

東郷「しないように気を付けないと駄目よ?」

園子「えへへ。」

東郷「銀?遅刻しないように気を付けないと駄目よ?」

銀「えへへ。」

風「何か、東郷がお母さんみたい。」

園子「ター君!マー君!久し振り!」

銀「タケルさん!マコトさん!久し振り!」

タケル「おかえり園子、銀。」

マコト「元気になって良かったな。銀、足は大丈夫なのか?」

銀「うん!もうすっかり元通りになったぜ!」

タロットカードを引く樹。

樹「あ、運命の輪!」

園子「おお!何か格好良い!」

夏凜「どう言う意味なの?」

樹「運命的な出会い!」

園子「おお!私とミノさん、運命の子!」

銀「イエーイ!」

東郷「あはは・・・福德円満く・・・」

樹「避けられない大きな事態って意味もあるけど・・・」

夕方、樹がパソコンで奇妙なものを発見した。

樹「んんん・・・」

風「どうしたの樹? 凄い顔して。」

アカリ「何か見付けたの?」

樹「国防仮面・・・」

御成「国防仮面ですか?」

樹「今、巷を賑やかしている謎のヒーロー……」

風「そんなのが居るんだ。」

樹「うん。」

3人が国防仮面の動画を観る。

国防仮面『国を守れと人が呼ぶ。愛を守れと叫んでる！憂国の戦士、国防仮面、見参！』

風「ん、ん……!!?」

アカリ「こ、これって……」

御成「あの方ですぞ……!!?」

樹「えへへ……」

後日の夕方、外では事件が。

女性「きやああああああ!!!誰かああああああ!!!」

タケル「待て!!!」

マコト「逃がすか!!!」

ひったくり犯を追う2人。

タケル「おい!!!バッグを返せ!!!」

ひったくり「誰が返すか!バーカ!!!」

マコト「彼奴!!!」

???「待てーい!!!!!!」

ひったくり「っ!?!」

タケル・マコト「っ!?!」

国防仮面「国を守れと人が呼ぶ。愛を守れと叫んでる!憂国の戦士、国防仮面。見参  
!」



タケル「と、東郷・・・？」

マコト「何やっているんだ彼奴・・・？」

国防仮面「確保!!」

ひつたくり「何だと!？」

無事に確保。

国防仮面「私は国防仮面。人々が悪の脅威に晒された時、出来るだけ現れます！」

女性「出来るだけ？」

風「ちよつとく？見付けたわよ、東郷く。」

タケル「一体ここで何をしているの？」

マコト「話を聞かせてもらおうぞ。」

勿論国防仮面の正体は東郷本人である。

勇者部へ連行して事情を聞く。

風「うーん、何から聞けば良いものやら・・・」

友奈「国防仮面さんが来てるのー!？」

遅れて来た友奈が到着。

国防仮面「あ、友奈さん……?」

友奈「こないだは危ない所を助けて頂いてありがとうございます!」

風「何があつたの?」

樹「夜に財布を落とした時に、国防仮面さんが一緒に探してくれたんだって。」

風「ふ、ふくん……」

カノン「友奈ちゃん、正体気付いていないのかな……?」

友奈「何だか国防仮面さんって、凄く話しやすいんだ!何でだろう?」

夏凜「そりゃあ、そうでしょうね……」

マコト「正体が彼奴だからな……」

友奈「今日はどうして勇者部に?」

国防仮面「そ、それは……だって……」

東郷「国防仮面は私なのよ!友奈ちゃん!」

風・アカリ「分かつてるよ。」

友奈「そ、そんな……！国防仮面さんが東郷さんだったなんて……！」

夏凜「マジなのね……？」

タケル「友奈は素直だな……」

今度こそ事情を聞く事にした。

風「で、皆に申し訳無いつてどう言う事？」

東郷「うん……体が元気になったら、いても立ってもいられなくて……」

友奈「何が？」

東郷「私が、壁を壊してしまった事……一時の感情とはいえ、世界を危機に陥れてしまったのは事実で、それって許されない事だから！私、これからどうやって償えば良いのか……だから、何か罪滅ぼしが出来ないかかって考えて……」

風「それで国防仮面……」

園子「わっしー、極端になったね。」

銀「この2年間、何があっただ?」

風「気持ちは分かるけど、突っ走り過ぎよ。」

マコト「罪滅ぼしの為に、国防仮面になるのか?普通。」

東郷「すみません・・・」

友奈「格好良いな、国防仮面!私もなりたいな!」

夏凜「ええ!」

園子「実は実は、私もこう見えて国防仮面2号なんよー!」

友奈「じゃあじゃあ!私3号になるー!」

銀「じゃあ国防体操の練習しなきゃね!!」

夏凜「こ、これ以上増やさないの!!ってか国防体操って何よ!!」

風「全く・・・夏凜辺りが真似して、にぼし仮面とか現れたらどうすんの!」

夏凜「真似しないわよ!!」

タケル・マコト・アカリ・御成・カノン「ブツ!」

夏凜「ちよつとそこ!!笑うな!!」

友奈「東郷さん!皆の為に頑張りたい気持ちは私達も同じだよ!」

園子「そうだよわっしー。何かあつたら私達に頼って良いんだぜー!」

銀「迷つたら相談!」

東郷「友奈ちゃん・・・そのつち・・・銀・・・」

風「うん！3人の言う通り！」

タケル「1人で悩みを抱え込んでも何も起きないよ？」

樹「東郷さん。」

東郷「皆・・・ありがとう・・・」

そして現在。あの記憶が何かしらの理由で消されていた。

夏凜「えつ、どう言う事・・・？何これ・・・何で・・・何で私達の誰も東郷の記憶が無いの・・・？これ、最初から世界に居なかつたみたいになつてる!!」

マコト「そうとしか、思えない・・・」

樹「お姉ちゃん・・・」

風「私・・・部長なのに・・・また・・・」

友奈「でも、もう思い出した・・・何で・・・何が起こつてるの・・・？」

園子「わっしー……」

銀「須美……お前、何処で何しているんだ……?」

黒い雲が広がる世界。ここに、1人の女性が炎で焼かれているのが見えた。そして東郷は、何処に居るのか……

「END」

## 第二十話 「救出！大切な思い出！」

翌日の勇者部。昨日から皆が東郷を探し回ったのだが。

風「全員、手掛かり無しか・・・」

友奈「東郷さん、元から居ない事になってる・・・教室に机も無いし・・・」

タケル「それ所か、友奈の隣の家にも住んでいなかった・・・」

樹「皆から貰った応援メッセージ、この所、消えてますけど・・・東郷先輩が皆かぼちやつて書いてくれたんです・・・」

風「タチの悪いイジメみたいじゃない・・・」

夏凜「大赦なら、何か知ってるだろうけど・・・」

風「でも、私には何も知らないって・・・」

夏凜「こつちにも、同じ答えが返って来たわ・・・」

アカリ「東郷ちゃん・・・何処へ行ったの・・・」

風「また、大赦は惚けてるって事・・・!?!」

マコト「その可能性はある。大赦は絶対隠蔽しているに違い無い。」

そこに、園子と銀が来た。

園子「本当に何も知らないみたいだよ。大赦は。」

風「乃木? 銀? あんた達何処へ行ってたの?」

銀「大赦の神官です。」

園子「わっしーの事、私が話せる地位の神官さん達に聞いたけど、皆震えながら「知らない」って……」

夏凜「大赦すら知らないなんて……」

友奈「東郷さん……」

御成「ん? 園子殿、先程何と言っていました?」

園子「え? 皆震えながら「知らない」って。」

御成「んく……」

アカリ「どうしたの御成?」

御成「皆震えながら知らない……その震えながらの言葉に少し違和感を感じると思いますが……」

夏凜「じゃあ、やっぱり何か隠しているのかしら? 大赦は。」

御成「そうとしか思えません。」

カノン「でも、東郷ちゃんを何処へ?」

園子「これしか無いみたいだね……」



友奈「え？」

銀「これを。」

アタツシユケースを開けると、勇者システムのスマホがあった。

全員「……!!」

友奈「これって……」

風「勇者システム……」

園子「ぶんぶん怒って」「出して」「って言ったら、大赦の人が出してくれたよ。これで見付けに行こう。」

風「見付けるって……」

夏凜「今も変身出来るのよね？」

銀「そうだよ夏凜。それに見て、須美の端末だけが無いんだ。」

東郷のスマホだけが無かった。

園子「でも、私の端末のデータにわっしーの反応が無い。もしかして、わっしーは凄くびつくりする所に居るんじゃないかな？」

夏凜「って事はつまり……」

友奈「……っ！壁の外!？」

園子「その通り。」

風「東郷はぶっ飛んでるからありえるわね。」

園子「だから、勇者になって行ってみようと思うんだ。」

“パチン”

指を鳴らすと、烏天狗のセバスチャンが出現した。

風「精霊!!」

樹「勇者になったら、また力の代償があるんですか・・・?」

タケル「また満開して、散華されるんじゃない・・・」

園子「今回はバージョンが新しくなって、散華する事も無いんだって。」

銀「だから、満開しても大丈夫。」

夏凜「何か、出来過ぎてるって言うか・・・」

マコト「至れり尽くせりとしか言えない。」

風「そうよ!どれだけ新しいシステムになったって言われても、結局また・・・」

友奈「・・・」

園子「怖いのは当たり前だよ?分かるよ。」

友奈「んっ・・・よしっ!東郷さんを見付ける為なら、私は・・・」

スマホを取ろうとしたが、風に止められた。

友奈「え?」

風「待ちなさい。」

友奈「でも！」

風「私は部長として皆をおいそれと変身させたくない。勢いで、なんて言うのは止めて。」

友奈「はい……」

風「乃木、銀、あんた達もよ？」

銀「風先輩……」

園子「ありがとう……確かに、私達は酷い目に遭ったけど、勇者が体を供物にして戦わなければ世界が滅んでいた。仕方が無かったんだよ。大赦はやり方がまずかっただけで、誰も悪くない。大赦は勇者システムについて、もう一切隠し事はしないって言うてくれた。私はそれを直接聞いて信じようと思ったんだ。だから前とは違う。今度は納得してやるから。私は行くよ。」

マコト「無茶言うな。俺達はお前達をまた失いたくないんだ。だから東郷を探す役目は俺達にやらせてくれ。」

タケル「そうした方が、君達に害が及ぶ事は無いよ。」

銀「タケルさん……マコトさん……」

友奈「……私は信じる！」

全員「え!?!」

風「友奈……?」

友奈「大赦の人は良く分からないけど、園ちゃんがそう言っているんだから信じるよ。」

園子「ゆーゆ……」

友奈「風先輩、ちゃんと考えました。私行きます!」

風「……あーもう!部長を置いて行くんじゃないわよ!」

友奈「風先輩!!」

風「友奈や乃木なら、私も信じてるからさ。」

夏凜「つま、勇者部員が行方不明って言うんなら、同じ勇者部員が探さないかね。」

友奈「夏凜ちゃん!」

樹「私も行きます!」

風「樹……」

友奈「皆……」

タケル「でも……」

友奈「タケルさん、マコトさん、私達は決めたの!」

夏凜「それに、2人だけ行かせるなんて、私のプライドが許さないわ。」

タケル「友奈・・・夏凜・・・」

マコト「・・・分かった！俺達もお前達を信じる！」

夏凜「にしても壁の外かあ・・・何があるか分からないわ！樹！とりあえずサブリキメときなさい！」

風「ちょ!？」

樹「今回はキメていきます！」

風「樹!？」

樹「頂きます！」

園子「素敵な仲間達だね。」

銀「本当だな。」

友奈「園ちゃんも銀ちゃんもね！」

そして友奈達は勇者に変身開始した。

園子『新しい勇者システムは、満開ゲージが最初から全部溜まっている状態だよ。精霊がバリアで守ってくれるけど、バリアを使う毎に満開ゲージを消費していく。ゲージは回復しない。満開はゲージがいっぱいなら出来るけど、使えばゲージが0になる。

ゲージが0になると精霊がバリアを張れなくなる。この時攻撃を受ければ命に関わる事になる。これが散華のなくなった勇者システムだよ。」

全員が変身完了した。

夏凜「今みたいに全部説明してくれた方が、やっぱり良いわね!」

風「そうね!覚悟が出来るってもんよ!」

樹「掃除が大変そうですね・・・」

すると、風のスマホから精霊の犬神が飛び出した。

風「犬神!」

そして、他の精霊達も飛び出した。

友奈「牛鬼久し振り!また宜しくね!」

銀「ガシヤドクロ!私達の初陣、頑張ろうぜ!」

風「ちよつと前が見えないく!」

犬神に頬を舐められてる風。

樹「やっぱりお姉ちゃん懐かれてる。」

夏凜「・・・元氣?」

義輝 「外道め！」

夏凜 「相変わらずね……」

義輝 「諸行無常！」

讃州中学校・屋上。

タケル 「アカリ、御成、カノンちゃん、俺達は東郷を探しに行く。だからここで待ってて。」

アカリ 「分かったわ！」

御成 「御武運を！」

カノン 「お兄ちゃん、帰って来てね？」

マコト 「心配するな。俺達は友を連れて帰る。」

タケルが腰にアイコンドライバ―Gを装着し、マコトがゴーストドライバ―に、  
デイトプスペクターゴースト眼魂を装填した。

『グレイトフル！ガツチリミナー！コッチニキナー！』

『ダイブ・トウ・デイトプ！アーイ！ギロツトミロー！ギロツトミロー！』

タケル・マコト「変身!!」

『ゼンカイガン!ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー!  
!大変化!!』

『ゲンカイガン!デイープスペクター!ゲットゴー!覚悟!ギ・ザ・ギ・ザ!ゴースト!』  
タケルが仮面ライダーゴースト・グレイトフル魂に変身し、マコトが仮面ライダー  
デイープスペクターに変身した。

タケル「イグアナゴーストライカー!!」

屋上にイグアナゴーストライカーが出現し、ゴーストとデイープスペクターと友奈達  
が乗る。

タケル「じゃあ、行つて来る!行こう皆!」

友奈・風・樹・夏凜・園子・銀「うん!」

彼らは東郷を探しに壁へ向かった。アカリ、御成、カノンは皆の無事を祈る。

イグアナゴーストライカーに乗ったゴーストとデイープスペクターと友奈達は、壁の  
方角へ進む。



そして壁の上に到着し、イグアナゴーストライカーから降りる。

園子「この先は、ズゴゴゴって感じだから気を付けてね。」

夏凜「私が先頭を行くから、園子と銀は後ろでサポートをお願い。」

銀「任せろ。」

園子「にぼっしー、あまり前に出ないでね？」

夏凜「ん？・・・ええ。」

風「樹、今晩はスペシャルうどん作ってあげるからね？」

樹「うん！楽しみにしているよ？お姉ちゃん！」

タケル「この先は危険な場所。皆、注意してね？」

マコト「タケルも、また死ぬんじゃないぞ？」

タケル「うん。」

友奈「よし、行こう!!」

壁の外。

風「うわー・・・相変わらずの凄まじさね・・・」

夏凜「何度見ても、この世の光景じゃないわね・・・」

銀「これが壁の外・・・まるで地獄だあ・・・」

タケル「そうか、銀は見た事無かったんだ。」

園子「わあ!レーダーに反応あつたよ!!」

友奈「え!?!何処何処!?!」

園子「ここだよ!」

マツプを見ると、東郷の反応があつた。

友奈「あつ!東郷さんだ!東郷さん、やっぱり壁の外に居たんだ!」

風「何とかかなりそうね!友奈!」

友奈「はい!」

園子「でも意外と近いけど・・・」

銀「近いの?」

友奈「この方向で間違いな・・・ええっ!?!」

夏凜「ちよ!?!ちよ、何なのよあれ!?!」

タケル「あれってまさか・・・」

マコト「間違い無い・・・」  
全員の目線の先にあつたのは・・・

壁の外に存在するブラックホールだった。

風「わくお・・・」

タケル「ブラックホール・・・」

友奈「あの位置、だよな？」

園子「うん、わっしーはあの中に居るみたい。」

友奈「東郷さんだ・・・東郷さんがブラックホールになつてる・・・」

風「久しぶりに会つたらブラックホールになつてた奴は初めてだわ・・・」

樹「お姉ちゃん・・・」

夏凜「周囲にバーテックスも居るじゃない・・・」

マコト「簡単には行かせないって事か。」

友奈「行つてみようよ!!」

樹「でも・・・どうやって・・・」

すると、ブラックホールから無数のバーテックス達が襲つて来た。全員が避けた。

友奈「こんな時に!!」

風「でやあああ!!」

横から迫つて来る。しかし樹がワイヤーでバーテックスを粉々にした。

風「ありがとう!樹!」

樹「うん!」

タケル「はああああ!!」

マコト「でやあああ!!」

ゴーストがガンガンセイバーとサングラスラッシャー、デイトプスペクターがデイトプスラッシャーでバーテックス達を斬り倒す。

友奈「はああああああ!!はっ!!やっ!!」

大ジャンプして、バーテックス達を打撃で蹴散らし。

友奈「はああああああ!!」

強烈なキックで、1体のバーテックスを遥か彼方へ飛ばして誘爆させた。

夏凜「はあああああ!!」

銀「やあああああ!!」

夏凜と銀は、剣と双斧で次々と斬り裂き、剣と斧を投げて数体爆破させた。

銀「やるな!夏凜!」

夏凜「銀も中々ね!」

園子「はああああああ!!!せーせーせーい!!!とせーせーせー!!!」

槍を伸ばして横に振って、縦に振って、遠くのバーテックス達を破壊した。

夏凜「園子もやるわね!」

園子「えへへ、褒められたら。」

銀「腕は落ちてないようだな!園子!」

園子「ミノさんも腕は落ちてないね!」

夏凜「でも、このままじゃギリ貧だわ。東郷の所までどうやって・・・」

園子「彼処までなら舟で行けそうだよ!!」

夏凜「舟って・・・園子!」

銀「お、おい!」

飛び出した園子。そして・・・

園子「満開!!!」

満開を発動して、舟に乗った。

風「あ、あんた!いきなり満開使って!精霊の加護が無くなっちゃわよ!」

園子「昔はバリア無かったし、問題無いよー!」

風「問題無いって……」

園子「さあ、これがわつしー行きの舟だよ！乗って乗って！」

風「もう、しょうがないわね!!」

園子「ター君！ター君も乗って乗って！」

タケル「うん!!」

マコト「ああ!!」

ゴーストとディーブスペクターも舟に乗る。

友奈「じゃあ、お邪魔します！」

樹「格好良いお舟です〜！」

銀「これが園子の舟かあ！快適そうだな！」

夏凜「ここだと多分快適じゃないと思うけど。」

風「何か、東郷かあんた達ずっこくない？」

夏凜「私のが一番格好良いわよ！」

友奈「園ちゃん凄いいね！」

園子「えへへ〜。ありがとう、ゆーゆ。さあ、このまま行くよ!!」

全員を乗せた舟が、ブラックホールに向かって飛ぶ。

友奈（待っててね！東郷さん！）

東郷を助ける為ブラックホールへ突入しようとするが。  
全員「くっ・・・!!」

強烈の熱風で押されていく。それでも舟は前進む。

そして遂に、ブラックホールの目前まで到達出来た。

友奈「皆ー! 乗り物酔い大丈夫!」

タケル「心配する所そこなの!」

マコト「俺は問題無いぞ!」

タケル「マコト兄ちゃん!」

夏凜「酔いつて言うか、普通にやばいよこれ・・・!!」

園子「中で・・・何が起こってるんだろう!」



友奈「東郷さん!!」

するとアイコンドライバーGからヒミコの声が。

ヒミコ「皆! 奴らが奇襲しに来る!」

タケル「え!?!」

ヒミコの予告通り、パーテックスが現れた。

風「仕掛けて来たか!!」

夏凜「彼奴らもしかして、ここを守ってるの!?!」

銀「参ったな・・・私達囲まれちゃってる!」

友奈「私が東郷さんの所へ行くよ!」

風「友奈!!」

友奈「絶対一緒に戻って来るから!」

園子「ゆーゆ・・・」

タケル「だったら、俺も一緒に行く!」

友奈「タケルさん!」

マコト「タケル!?!」

タケル「1人じゃなく、2人と一緒なら東郷を助けられるからね!」

友奈「・・・ありがとう!」

夏凜「ちよつと、大丈夫なの!？」

風「もう・・・ちゃんと帰って来なさいよ友奈!部長命令!」

樹「邪魔して来る奴らは私達で叩いちゃいますから!」

マコト「タケル、帰って来いよ!」

夏凜「あんなものの中じゃ、何が起きても不思議じゃないわ!気合よ!」

タケル・友奈「うん!」

園子「ゆーゆ、ター君。わっしーの事、お願い!」

友奈「任せて、園ちゃん!」

タケル「その命令、受けたよ!」

園子「よし!それじゃあ、一気に行くよー!」

舟のオールから刃が出現し、このまま一気にブラックホールへ。だがバーテックス達が舟を追う。

園子「ゆーゆとター君の邪魔はさせないよ!!!」

舟から無数のビームが放射され、バーテックス達を牽制する。

園子「ゆーゆ!ター君!今!」

タケル・友奈「うん!!」

ゴーストと友奈が、ブラックホールへ飛び込む。

友奈「行つて来ます!!!」

ブラックホールに飛び込んだゴーストと友奈。牛鬼が友奈とゴーストを守りながらブラックホールの中枢へ。

友奈「くっ・・・!!」

すると友奈のゲージが減った。

タケル「っ!?!友奈後ろ!!」

友奈「え!?!」

後ろに、ヴァルゴ・バーテックスが追跡していた。

タケル「こんな時に!!」

サンングラスラッシュャーを出して、ブラスターモードに変形して狙いを定める。だがブラックホールの力で潰れて消滅した。

タケル「潰れた!」

友奈「はあ・・・はあ・・・」

息切れする友奈に、ゴーストが支える。

タケル「大丈夫。」

友奈「うん……」

ブラックホールの中枢が見えた。

友奈「彼処まで行く……!!」

するとゲージがまた減った。

友奈「東郷さん……!!」

タケル「東郷さん……!!」

友奈「東郷さん……!!」

どんどんゲージが減っていく。そして漸く、ブラックホールの中枢へ突入した。

ブラックホールの中枢。

友奈「え!? きやああああああああああああああああ!!!」

勢いよく飛ばされた友奈。そこに。

タケル「友奈ああああああああ!!!」

ゴーストが急接近し、友奈を掴んだ。

タケル「友奈!! しっかりして!! ん!?!」

すると2人の魂が肉体と離れた。

友奈「ゆ、幽体離脱!?!」

幽体離脱したのだった。そして幽体離脱したゴーストは、タケルの姿になっていた。

タケル「お、俺も!?!」

すると上から、無数の矢が迫って来た。

友奈「きゃあああああ!!!」

タケル「ぐあああああ!!!」

無数の矢はタケルと友奈に直撃し、2人の身体が徐々に侵食されていく。

友奈「これって・・・もし私達が砕けたら・・・身体の方はずつとこのまま!?!」

タケル「このままじゃ、また死んでしまう!!?!」友奈「あれ!?!」

友奈「え!?!」

水の塊が降り始めた。

友奈「東郷さん!?!」

中には東郷が映っていた。東郷が映ってる水の塊に触れると。

これは彼女の記憶。東郷が雨の日に外に出ると、大赦の人達が出迎えていた。

東郷『そのつちと銀が私達の中学に来てから、暫くして大赦にとつて予測してない事態が起こっていた。私が結界の一部を壊してしまった事で、外の火の手が活性化してしまっているのだ。このままでは外の炎が世界を飲み込む・・・大赦が進めていた反抗計画を凍結し、現状を打破する必要があつた・・・』

友奈「今見えたのは、東郷さんの記憶? タケルさんも見えた?」

タケル「うん。はつきりと見えた。」

友奈「東郷さん! やつぱり中に居るんだね!?! 他には!?!」

タケル「あれだ!」

もう1つの水の塊に触れる。

大赦の1人と面談する東郷の記憶。

東郷『火の勢いを弱めるには、奉火祭ほうかさいしかない。それは神の声が聞ける巫女を外の炎に捧げ、天の神の許しを請う。昔、西暦の終わりにも行われた生贄の儀式である。と・・・

今、大赦でお役目を果たしている巫女達数人が、生贄のお役目選ばれた……だけど、私でもその代わりが出来ると言う。私は勇者の資格を持ちながらも巫女の力も持つと言う、唯一無二の存在だとか……悩むまでも無い。結界に穴を開けたのは私だ。私は償わなくてははいけない。友奈ちゃんや皆が無事なら。私一人なら……私が居なくなれば、きっと友奈ちゃん達が私を探す……そうしないように、新樹様、お願いします……』

そして東郷は、自分が生贄になる事を選んだ。

東郷『友奈ちゃん……』

タケル「だから、自らを生贄にしたのか……」

友奈「東郷さんは何時も突っ走るなあ……自分を居ない事にしちゃうなんて……でも！私は約束したもん！東郷さんを独りにしないって！」

タケル「絶対に助け出す!!」

再び無数の矢が迫る。

友奈「うっ……!!」

タケル「がはっ……!!」

友奈「だから、何度でも助ける!!」

2人は光の中へ入った。

友奈「・・・あれ!?!」

タケル「何だこれ・・・!?!」

目を開けると、「灰色の空間が広がっていた。

友奈「ここ・・・前に・・・ん?」

そこには、友奈とゴーストの肉体があつた。

タケル「俺と友奈の肉体・・・」

友奈「ん?」

真上を見ると、友奈が何かを思い出した。

友奈「やっぱりあの時と同じだ・・・」

タケル「っ!!東郷!!」

友奈「え!?!」



円鏡に封じられた東郷が。

友奈「東郷さん！・・・っ!？」

更にその後ろには、燃え盛る東郷の魂が。

友奈「これ・・・何・・・!？」

タケル「これが、奉火祭ほうかさい・・・」

友奈「東郷さん!!」

タケル「東郷!!」

円鏡に封じられた東郷の抜け殻を見る。

友奈「酷い・・・」

タケル「焼き焦げてる・・・」

友奈「東郷さん!!・・・今、助けるね!!」

彼女は東郷を助ける為、円鏡から東郷を引き剥がす行動に出た。しかし、円鏡に触れた瞬間。

友奈「うわっ!!」

タケル「どうしたの!？」

友奈「熱い・・・でも!!」

彼女は諦めない。再び東郷を引き剥がす行動に。

友奈「う、うう・・・!!!」

力を振り絞って東郷を引き剥がす。タケルが友奈の腹部を持って引っ張る。

すると、東郷の魂の左胸の紋章が消滅した。

それと同時に、友奈の左胸に激しい痛みが走った。

友奈「ううっ!!・・・構わない!!東郷さんを離して!!タケルさん!!引っ張って!!」

タケル「分かってる!!!」

友奈「う・・・うわああああああああ!!!」

タケル「うおああああああああああ!!!」

友奈「帰ろう!!!東郷さん!!!」

2人が力を振り絞って、東郷を引っ張って救出した。タケルは引っ張った反動で後ろに飛ばされた。

タケル「やった!!」

友奈「やった・・・これで・・・」

すると左胸から更に激しい痛みが広がり、身体中が燃え始めた。

友奈「うわああああああああ!!!」

タケル「友奈!?!はっ!!」

円鏡に罅が入り、粉々に割れ、空間が白い光に包まれた。

タケル「うわっ!!」

そしてブラックホールが消え始めていた。

マコト「うわっ!?!」

夏凜「な、何!?!」

マコト「ブラックホールが!」

ブラックホールが消滅し、そこから1つの光が降りた。

東郷「ん．．．．ん？」

目を開けた東郷。映ったのは病室の天井。

友奈「やったー!! 目が覚めたよ! 東郷さん!」

園子「わっしー!!」

銀「須美!」

タケル「東郷!」

マコト「東郷!」

御成「東郷殿!」

東郷「皆……ここは……?」

風「あんた数日寝てたのよ?」

東郷「助けて……くれたの……?」

友奈「うん!」

タケル「当たり前だよ!」

東郷「でもこのままじゃ……このままじゃ……世界が火に……」

風「事情聞いたわよ。火の勢いはもう安定したから、生贄はもう必要無いってさ。」

東郷「まさか代わりの人が……」

夏凜「違うわ。東郷、普通なら死んでるぐらいの生命力をこっそり奪われてたんだって。それできつとお役目は果たしたのよ。でもタフだからまだ生きていた。で、私達の間合った。そんな感じみたい。」

園子「いっぱい身体を鍛えてて良かったね〜!」

樹「何処も異常無しだそうです!」

銀「良かったな!須美!」

東郷「本当に私助かったの……?」

風「そうよ、セーフ!」

夏凜「お勤めご苦労様!まあ、もう暫くは病院でしようけど。」

園子「これで改めて、勇者部全員集合だぜ〜!」

銀「戻って来るの、何時でも待ってるよ!」

東郷「皆・・・」

友奈「東郷さん、ごめんね・・・東郷さんの事絶対忘れないって約束してたのに、何か忘れちゃってて・・・」

東郷「私の方こそごめんね・・・そんなに心配させて・・・」

全ての写真に東郷も写っている。

友奈「仕方無いよ・・・多分私でも同じようにしてたよ?」

風「次からは、きちんと全部話しなさいね?」

アカリ「悩んだら相談。だよ?」

東郷「はい・・・」

夏凜「まあ、お互い様と言う事で良いんじゃない?」

カノン「そうだね。私達も東郷ちゃんを忘れてたし・・・」

東郷「それでも、皆思い出してくれた・・・夢じゃないのね・・・」  
友奈「そうだよ！東郷さん！」

東郷「うん・・・」

園子「よしよしよし。」

銀「よしよし。」

園子と銀が東郷を撫でる。

夏凜「一件落着ね。」

樹「はい！」

友奈「よしよし！これで全員揃ってクリスマス！そして大晦日にお正月だ〜！」

タケル「元気いっぱいだね。」

風「遊ぶ事ばっかじゃん！」

全員「あはははははは！」

こうして東郷は救われ、勇者部に平穩が訪れた。

その夜、友奈がシャワーを浴びている。鏡で自分の身体を見ると、左胸に焦げた紋章が刻まれていた。

「END」



## 第二十一話 「焼印！あなたを思うと胸が痛む！」

翌日の勇者部。

夏凜 「ねえ友奈、飾り付け曲がってない？」

友奈 「……いや、大丈夫大丈夫！」

クリスマス準備を進める勇者部一同。友奈と夏凜と樹と銀とアカリは飾り付け。東郷はホームページの強化。

風 「うむー……」

そして風は、ぐるぐるメガネをして悩んでいる。

夏凜 「何あのメガネ？」

樹 「視力が落ちたんだそうです……」

タケル 「へえ。」

夏凜 「大変ね、受験生。部屋にまで勉強？」

風 「先週は色々大変で勉強所じゃなかったからねー、取り返さないと。」  
タケル 「だけど、他のメガネは無かったの？」

東郷 「陳謝!!」

土下座して風に謝った。

風「ああもう!そう言うつもりで言った訳じゃないの!気にしないで!」

夏凜「受験よりブラックホールの方が急務だもんね。」

樹「ええ・・・」

銀「須美がブラックホールになったなんて、今でもびっくりだよ・・・」

友奈「あははは・・・」

東郷「陳謝!!」

切腹しようとした。

全員「うわあああああああ!!!!」

マコト「止めろ東郷!!」

御成「東郷殿オオオオ!!気を確かに!!」

一方の園子は、風の答案の答え合わせをしていた。

園子「マル・・・マル・・・マルつと・・・よし、最後の問題も花マル花マル!フー

ミン先輩全問正解だー!」

風「よし!流石私!」

アカリ「自画自賛?」

園子「アタックチャーンズ!」

風「何が？」

園子「正解すると、女子力が2倍になります！」

風「やります！」

夏凜「どんな試験勉強よ……」

園子「つとまあ、フーミン先輩の女子力は置いといて。」

風「私の女子力!!」

カノン「何処まで女子力を求めているのかな？」

園子「これだけ出来れば大丈夫ですよ。流石っすー。」

風「うん！乃木が見てくれたお陰よ！来週は来週で、樹のショーがあるからねー。」

夏凜「ははくん？それで詰め込んでたのかあ。」

樹「お姉ちゃん！私のショーじゃなくて町のクリスマスイベント！学生コーラス！」

友奈「凄いねえ〜！学校代表だよ、樹ちゃん！」

樹「友奈さんが練習を手伝ってくれたから。」

夏凜「実力よ実力。樹の歌の力よ。」

風「それでこそ我が妹！他の学校、代表者をぶっ倒して来なさい！」

樹「趣旨が違うよ……」

タケル「ベートーベンさんも、練習を手伝ってくれましたよね？」

ベートーベン『うむ。今回も犬吠埼樹の歌声は素晴らしい!今後も期待が高まる!』  
樹「そ、そんな褒められても・・・」

タケル「ベートーベンさん、ありがとうございました。」

東郷「じゃあ、風邪を引いたりしないように、ベストコンディションで行かないとね  
!」

銀「お、あれやるか?」

東郷・園子・銀「健康健康健康健康健康健康健康健康健康健康・・・」

3人が両手でα波を樹に送る。

樹「ううう・・・余計にプレッシャーだよ・・・」

夏凜「サプリ、キメとく?」

樹「じゃあ利く奴を・・・」

園子「いっつんいっつん!いっつんのグッズ展開して良いく!?!」

樹「止めて下さいー!」

タケル「樹ちゃん、期待されてるね。」

友奈「あははは・・・」

風「ん?らしくないわね。何か考え事?」

友奈「えっ?何も考えてないです。」



風「もう大体終わってるじゃない。」

何故かカノンも加わって、夏凜にα波を送る。

友奈「み、皆!あのね・・・」

全員「ん?」

友奈「え、えつと・・・」

左胸の焼印を言おうとしたが。

友奈「ここで問題です!キリギリスが・・・アリの借金をこつそり肩代わりしたとし

たら、その後どんな問題が起こるでしょうか?」

風「・・・ん?何それ?」

夏凜「は?」

マコト「急にどうした?」

園子「社会学の実証問題?」

友奈「え!?えつと・・・学校新聞のクイズを考えてて・・・」

風「ああ〜!そう言う事か!」

夏凜「それ、クイズになってないわよ?」

友奈「あはは・・・えつと、じゃあ・・・あのね!実は私、あの・・・え?」

彼女の目には・・・

全員の左胸が焼けていく光景が映っていた。

友奈「……………」

園子「肩代わりがテーマなクイズかあ。」

友奈「え？う、うん……………」

園子「青鬼井が赤鬼井の身代わりになった話を元ネタにして、考えたら良いんじゃないかな？」

友奈「……………」

タケル（友奈？）

その日の夜の結城家・友奈の部屋。

友奈（東郷さんを助けようとした時、お役目は私に引き継がれた……うつ……!）  
左胸の焼印に痛みが走った。

友奈（こんな事を知ったら、きっと東郷さんが悲しむ事になる……折角今、皆がやつと揃って楽しいのに……）

皆とメールをする。

東郷『モミのホ祭りというのはどうかしら?』

風『風情がない』

夏凜『バカなの?』

樹『ちよつとさすがに……』

銀『それは、ないと思う……』

園子『わっしーは変わらないなあ（▽▽）』

東郷『我が国の良さを建てきれないおのれの筆力が憎い!!』

友奈「……つ、そうだ。」



同じ頃、タケルは部屋に居た。

“コンコン”

タケル「ん？」

友奈『タケルさん、私。』

タケル「友奈？」

ドアを開けて友奈を入れた。

タケル「どうしたの？何か相談？」

友奈「……………」

タケル「友奈？」

友奈「……………タケルさん、これを見ても、驚かないで？」

タケル「え？」

すると友奈が、服を脱ぎ始めた。

タケル「え!?!ちよつと友奈!?!俺の目の前で何を!?!」

友奈「左胸、見て。」

タケル「左胸? ……っ!?!」

焼印を見て、タケルが驚いた。

タケル「それ……何処で？」

友奈「東郷さんを助けようとした時に、出来てしまったの……」

タケル「まさか、あの時の……？」

友奈「うん。この事は、他の皆に内緒にしてて？」

タケル「で、でも、悩んだら相談って五箇条に書いてたはずでしょ？」

友奈「でも……東郷さんや皆が悲しむから……」

タケル「友奈……」

翌日の讃州中学校。

友奈（私は……私は……生かされている……だからこつち側に居られるんだ……）

勇者部。

夏凜「もう……こんな寒い時に何でマンションのエアコン壊れるかなあ……」

東郷「私も昨日は急に電灯が切れてとても困ったの……」

マコト「まさか一時停電になったとはな。」

カノン「驚いて怖くなったの。」

銀「私なんか、停電になって弟達がびっくりして泣いちゃったんだよ？」

友奈「皆大変だったんだね・・・」

夏凜「そう。災難よ災難。」

風「そんな事ぐらい。うちなんて昨日、樹が鍵を落として寒空の下4人して大変だったんだから。」

樹「わわわわわ！言わないで〜！」

風「ちよつとコンビニ行っただけだったのに。大騒ぎだったわよ。」

樹「あうう・・・」

夏凜「つたく、ドジね。」

風「本当しつかりして来てと思っただけだけどね〜。」

樹「うう・・・」

アカリ「でも、無事に見付かって良かったじゃない。」

風「まあ、それはそうだけど。」

御成「風殿、今回は大目にみてあげて下さいな。」

アカリ「樹ちゃん。今度から、私が鍵を持つから安心してね？」

樹「ありがとうございます……アカリさん……」

友奈「……………」

そこに園子が来た。

園子「園子参上なんだぜ〜!」

樹「園子さんその手……!?!」

右手に包帯が巻かれていた。

園子「おお、大丈夫大丈夫。スポツと!こうしてサンチョを被せれば、あつてないよ

うなものシユレリンガー。」

夏凜「手え!食われてる食われてる!」

風「一体どうしたのよ?」

園子「今朝ポツトで火傷したんだー。」

銀「うわ、熱そう……」

東郷「大怪我じゃなくて良かった。」

園子「うん。小怪我。」

夏凜「はあ……揃いも揃って師走に入ってロクなものじゃないわね。勇者部全員厄

払いにでも行った方が良くないじゃない?」

風「ちよつと、縁起でもない事言わないでよー!いや、でも必要かも……」

この中で、タケルと友奈。この2人だけ被害を受けていない。

東郷「友奈ちゃんは何も無かった？」

友奈「あ……うん、平気。」

東郷「良かった。友奈ちゃんにまで何かあったら、いよいよ怪しいものね。」

アカリ「タケルも何も無かった？」

タケル「う、うん。」

アカリ「そう、良かったわ。」

園子「また大赦かーって！」

この言葉で全員静まった。

夏凜「いやいやいや！」

風「まさか流石に！」

園子「だよね。」

夏凜「私達、めちやくちや疑い深くなってるんじゃない？」

タケル「そうかもね……」

友奈「あははは……」

しかし園子は、タケルと友奈を見て密かに疑問を抱いた。

風「はいはい！それじゃあそれじゃあ！それぞれ持ち場に着け！」

全員「はい。」

友奈「……………っ!あの!風先輩!」

風「ん?」

友奈「ちよつと良いですか……………」

外に出て、風に相談する。

風「どうしたの?悩み事?」

友奈「えつと……………えつと……………」

風「恋愛の事だったりしてー。あ、そしたら東郷が怒るか……………」

友奈「怒ったりしませんよ……………」

風「どうかな?そんな事より、何?言ってみ?」

友奈「実は……………この間……………」

風「どの間?」

友奈「あ、えつと……………スマホを返して貰った日……………」

風「何かあった?」

友奈「実は、東郷さんを……………あつ!」

目に映つたのは、風の左胸に自分と同じ焼印が刻まれていた。

風「……ん？何？」

友奈「あ、いえ……あ。」

再び見ると、焼印が消えていた。何かに脅されているようにも思える。

友奈「ま……前に撮つた皆の写真とか大事な奴、スマホから消えちやつてて……」

風「ああ、それは仕方無いわね。大赦の検閲で消えちやつたのかも。」

友奈「でも、皆に悪くて……」

風「あつ！2人だけの恥ずかしい写真とかあつたんでしょー？」

友奈「ええ!?ちよつと!？」

風「そりやあ皆に相談出来ないわよね。んであんた達、そんな変な趣味あつたの？」

友奈「無いですよー!」

結局、焼印の事を言えないまま終わってしまった。

女子トイレで、友奈が左胸を見る。焼印が徐々に大きくなつていつてる。

友奈（同じものが、風先輩に見えた……）

夕方、タケルと友奈が人気の無い場所に居た。

タケル「友奈、試してみるね。」

友奈「お願い。」

ゴーストドライバーを出して、ヒミコゴースト眼魂をゴーストドライバーに装填した。

『アーイ!バッチリミナー!バッチリミナー!』

タケル「変身!」

『カイガン!ヒミコ!未来を予告!邪馬台国!』

仮面ライダーゴースト・ヒミコ魂に変身した。

タケル「行くよ!」

友奈「うん!」

キドウフードで神秘のフィールドを作り、友奈の焼印を吸い取る。

友奈「……………」

しかし、焼印は残っている。

タケル「駄目か……………」



友奈「そうみたい・・・」

『オヤスミー』

変身を解いて、友奈に歩み寄る。

タケル「ヒミコさんならいけると思ったけど、失敗だったね。」

友奈「ううん、ありがとうタケルさん。」

タケル「友奈・・・」

友奈「タケルさんには、焼印も何も無かったの？」

タケル「うん。友奈が見せた焼印を見て、俺の身体も見てみたけど、何も無かった。ヒ

ミコさんの力のお陰かな？」

友奈「そうか・・・」

タケル「ヒミコさん、東郷を助けたのに何で俺は何も無かったんですか？」

ヒミコ「ふむ、この世界に存在する勇者は元々無垢な少女達。奉火祭は少女を生贄に

する儀式。タケルは男だから無害だったが、友奈には東郷に刻まれたその焼印を引き継がれたのだろう。」

タケル「でも、何で焼印を消す事が出来なかったんですか？」

ヒミコ「あの焼印から、猛烈な力を感じる。私1人では吸収出来なかった。」

タケル「やっぱりあの時、俺が東郷を助けておけば良かったのかも。」

その日の夜の結城家。友奈が部屋で押し花を作っていると。

“ピロリロリン”

スマホから着信音が鳴った。

樹『今、病院です お姉ちゃんが車にはねられてしまつて』

友奈「え・・・!?!」

何と、風が車に撥ねらててしまったのだった。

樹『私どうしたらいいか』

夏凜『樹おちついて すぐいく』

東郷『すぐいきます』

銀『私もいく』

園子『もうでた』

立ち上がった友奈は、急いでタケルの部屋へ。

一方、タケルの部屋。

友奈「タケルさん！」

タケル「っ!?!?どうしたの友奈!?!」

友奈「風先輩が病院に運ばれたの！」

タケル「風が!?!」

友奈「病院へ行こう!?!」

タケル「分かった！」

2人は外に出て、CRF250Lに乗って羽波病院へ向かった。

羽波病院。タケルと友奈を除いた全員が来ていた。

友奈「はぁ・・・はぁ・・・」

タケル「皆!」

東郷「友奈ちゃん・・・」

マコト「タケル・・・」

友奈「風先輩は!?!」

風は今、緊急外来で応急処置中。

夏凜「まだ出て来ないの・・・?」

タケル「アカリ、風に一体何があつたんだ?」

アカリ「帰る途中、青信号で渡っていた時に車が風ちゃんに突進して来たの。」

御成「ああああああ・・・風殿・・・」

タケル「落ち着いて御成!」

1時間後。風はまだ出て来ない。

カノン「ん?」

マコト「どうした?カノン。」

カノン「来た。」

そこに、応急処置を終えた風が出て来た。身体中に包帯が巻かれている。

樹「お姉ちゃん！」

風「いやあく、参った参った、いてっ……！」

樹「お姉ちゃん！」

全員「風！（風先輩！）（風ちゃん！）（フーミン先輩！）」

風「大丈夫、大丈夫だから。いきなり飛び出して来るんだもんな。信号無視すんなっつーの。」

タケル「良かった、元気そうで。」

樹「お姉ちゃん……」

アカリ「風ちゃん……」

御成「風殿……」

風「樹……アカリさん……御成さん……皆ごめんねー、わざわざ来て貰っちゃって……」

夏凜「全く、本当人騒がせなのよね。」

風「ちよつとは劳わりなさいよ。」

東郷「あの、命には……」

風「ふふっ、それは大丈夫だから。大袈裟ねえ。」

銀「風先輩が何時ものテンションで良かった。」

風「銀、それ褒めてるの?」

東郷「でも受験生に何て酷な事を・・・」

風「それは言わないで!試験は受けるから!絶対受けるから!」

夏凜「入院するんでしょ?」

風「ほんの1、2週間だから!!」

看護師「病院ではお静かに。」

風「はい・・・」

看護師「妹さんですか?」

樹「は、はい。」

アカリ「あ、私、保護者です。」

看護師「では、入院の手続きがありますので、一緒に来て頂けますか?」

樹「はい。」

アカリ「はい。」

園子「一先ずは、だね。」

夏凜「あんた達も怪我には気を付けなさいよね?」

マコト「この先何が起こるか分からないからな。」

東郷・園子・銀「α波の出番ね！」

夏凜「それはもういい！」

東郷・園子・銀「しょぼーん……」

病院から出た。

東郷「道路交通法違反……許せない……」

銀「私が警察だったらすぐに捕まえてやるのに……」

夏凜「命に別状がなかったから良かったよなものの……」

カノン「そっだよ。風ちゃんが無事で良かったね。」

マコト「だが暫くは入院だけだな。」

東郷「精霊は何をしていたのかしら……」

園子「ん……」

東郷もし皆の身に何かあったら私、きつと正気じゃ居られない……」

夏凜「東郷……国防仮面もブラックホールももう無しだからね。」

東郷「くっ！」

夏凜「本当止めて。」

友奈「……………」

東郷「友奈ちゃんも。」

友奈「私!？」

東郷「怪我だけは気を付けてね？」

友奈「う、うん。」

タケル「友奈、帰るよ。」

友奈「うん。」

ヘルメットを被ってタケルの後ろに座る。タケルがアクセルを捻って帰って行く。

友奈「じゃあねー!」

東郷・夏凜「またねー!」

銀「じゃあなー!」

マコト「気を付けろよー!」

カノン「またねー!」

園子「ん?」

帰って行く友奈を見て、園子がまた何かを感じた。



帰った後、友奈がこれまで起こった事故を考えていた。

友奈（私が皆に話そうとしたら、皆に少しづつ嫌な事があった・・・改めてちゃんと話そうとした風先輩には事故が起きた・・・天の力は、現実の私達の世界に影響を及ぼす事が出来る程・・・何とかしようとしても代わりに何処かに影響が出る・・・私に起きている事は言っちゃ駄目な事なんだ・・・私がルールを破ると皆に不幸が起きる・・・もう私達の戦いは終わったんだ！皆はもう苦しまなくて良いんだ！私が黙っていけばいつも通り何も変わらない、勇者部の楽しい毎日が続くんだ誰も、絶対に巻き込んだり駄目なんだ・・・私が黙っていけば、それで良いんだ・・・）

数日後、タケルと友奈が風の病室へ向かつてる。

タケル「風、今日も元気かな？」

友奈「そうだと良いね。」

病室を開けようとしたが。

風「樹、今日大事なイベントでしょう?」

樹「良いの。」

風「良くないでしょ?」

樹「お姉ちゃんが怪我してるのに、私だけ楽しい事は出来ないよ。」

風「こつちが気を遣うわよ。お姉ちゃんの事なんて気にしなくて良いのに。」

樹「ううん、お姉ちゃんが楽しくないと私も楽しくないんだ。だから今日は良いの。  
ちゃんと代わってもらったから。」

風「あんたね・・・」

樹「怪我人は安静だよ。」

風「ちゃんとご飯食べてる? 出前取って良いからね?」

樹「アカリさんと作ってるよ。」

風「朝は?」

樹「ちゃんと起きてるよ。たまにアカリさんや御成さんに起こして貰ってるけど、遅刻なんてしないよ。家の事は心配しないで?」

風「何か・・・樹の方がお姉ちゃんみたい。」

樹「本当? やった!」

風「やったじゃないわよ。」

樹「えへへ。」

風「全く……」

樹「ん？」

風「でも……ありがとう。」

樹「うん。さつ！退院したら絶対楽しい事しようね！」

風「ええ！お正月楽しみだね！」

廊下から2人の会話を一部始終聞いていたタケルと友奈は。

タケル「風……樹ちゃん……ん？友奈？」

友奈「……」

風『今年凄い年だったな。』

樹『来年はもつと凄い事しようね？楽しい方へ！』

風『あれだけ、頑張ったものね。』

樹『皆幸せにならないと〜！』

友奈「っ!？」

風『樹も、東郷も、夏凜も園子も銀も友奈も！皆良い子だわ〜！勇者部の部長は幸せ

者だよく!タケルさんやマコトさんやカノンちゃんやアカリさんや御成さんも幸せに  
ならないとね〜!」

友奈「……っ!」

タケル「友奈!」

逃げ出した友奈をタケルが追う。

外では雪が降り始めていた。

樹「わあく。ホワイトクリスマスだね。」

風「だね!」

するとそこに、東郷達とマコト達が来た。

夏凜「お〜い!怪我人!」

東郷「遅くなってごめんね?樹ちゃん。」

マコト「待たせたな。」

風「そんなにしょっちゅう来なくて良いのに……って、それより何その格好?」

皆がサンタコスをしている。

夏凜「クリスマススイブに病院じゃ寂しいんじゃないかって思ってたね。」

カノン「だから、私達がサンタクロースになって風ちゃんを励まそうと思って。」  
風「さ、寂しくないわよ!!これっぽっちも!!全然!!」

樹「すみません。お姉ちゃん、本当は嬉しいんですよ?」

風「樹!?!」

御成「樹殿、正直で良い子ですぞ。」

東郷「あれ?友奈ちゃんとタケルさんは?先に来てると思ってたんですけど・・・」

風「え?」

マコト「あの2人、何処へ行ったんだ?」

その頃、友奈は息を切らしながら走り、タケルが友奈を追う。

友奈「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

タケル「友奈!!待って!!」

同じ頃、結城家の前にリムジンが停まっていた。車内から、大赦の1人が降りた。

そして病室では。

樹「これでお姉ちゃんも浪人生〜!」

風「こら!!まだ決まった訳じゃないでしょ!?!」

マコト「また怪我が悪化したら入院続行だな。」

風「そんな訳無いわよ!!」

東郷「友奈ちゃん、タケルさん、どうしたんだろう・・・」

銀「あの2人、今日は来てないって何があったんだろう・・・」

その頃園子は、手洗から病室へ戻って行つてゐる。その途中、1枚の押し花が落ちていた。その押し花を見て、園子が察した。

園子「私・・・分かつちやつたかも・・・」

外ではクリスマスイベントで盛り上がっていた。

だが友奈は違っていた。彼女はまだ走り続けている。タケルも友奈を追い続けている。

友奈「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・あ、うわっ!!」

途中で転んで倒れた。

タケル「友奈!!」

転んだ友奈を起こす。

タケル「友奈、大丈夫？」

すると友奈が、タケルに抱き締めた。

タケル「っ!友奈・・・?」

友奈「う・・・うう・・・うわあああああああ!!」

タケル「友奈・・・」

大泣きする友奈を、タケルが優しく慰める。この先、一体どうなってしまうのだろうか。

「END」

## 第二十二話 「日記!秘めた意志!」

後日の勇者部。東郷がカメラを風に向けた。

風「ん?フフン。」

カメラに向かってセクシーポーズ。

東郷「風先輩、自然体で大丈夫ですよ?」

風「いやあついね。最近熱心にカメラ回してるわねえ。」

東郷「もうすぐ先輩が卒業してしまうので、揃っての活動記録は貴重だと思います。」

風「つて言うけどさ、私卒業した後もここに入り浸ると思うわよ?」

樹「入り浸るんだ・・・」

夏凜「そうなる予想は付いてたけどね・・・」

風「とか言つて、嬉しそうね夏凜。」

夏凜「ええ!?!」

照れて外方向いた。

風「ちよつ、何その反応?」

銀「おお、何か良い関係に見える・・・見える・・・!!」



園子「2人を見てると創作意欲が沸いてくるよ！ね、サンチョ？」  
サンチョ「シイー、ムーチョ。」

東郷「え!?その子喋るの!？」

タケル「かなりダンディーな声だったけど!？」

園子「フーミン先輩とにぼっしーで想像捗っちゃったから、帰って2人の本を描こ〜

!」

風「ちよ!？」

園子「また明日〜！」

友奈「うん!また明日〜！」

銀「気を付けろよな〜！」

東郷「またね、そのうち。」

風・夏凜「待ちなさい！」

2人はお互いを見て、外方向く。

風「あつ・・・そう言えば、卒業旅行とか何処行こうかしら？」

東郷「年末は何処へも行けませんでしたからね。」

風「そうなのよ〜。大赦のお金でみんな温泉旅行とか行く?」

マコト「また大赦の金か？」

友奈「あ……温泉は前に行ったから違う所とかどうでしょう?」

タケル「友奈?」

友奈は、自分の焼印を見せない為温泉を避けた。

後日、皆で猫探し。

友奈「迷子の迷子の子猫くくん、どここかな?」

タケル「出て来ておいで?」

カノン「子猫ちやくん?何処?」

風「見付からないわねえ……」

アカリ「この辺のはずなんだけどね……」

風「ちよつと樹、猫語で呼び出してみて?」

樹「え……!?にゃ……にゃ……にゃ……にゃ……!」

猫語で喋った樹を、東郷と園子と銀がカメラで連写する。

東郷「もつと!!もつと獣になって……!!」

園子「良いよ!いつつん良いよ!」

銀「凄く可愛いぞ樹!!」

樹「これを撮らないで下さい!!!」

マコト「あの3人、昔から変わってないな。」

御成「流石仲良しですぞ。」

友奈「あ、居たー!」

茂みに隠れてる迷子の子猫を発見した。

友奈「おいで〜? お家に帰ろ〜?」

子猫「ニャー!!」

突然子猫が鳴いて、友奈から逃げてタケルに飛び付いた。

タケル「おっと。・・・怪我は無いですね。」

風「友奈ナイス発見よ!」

友奈「あはは、怖がられちゃいました・・・」

夏凜「子猫発見で依頼クリアね。」

東郷「それでは先輩、記念に1枚撮りましょう!」

風「お! 良いね!」

記念の1枚が撮れた。

後日、皆でカラオケ。

東郷・園子「その先へ♪また逢えるから♪」

風「ひゅー!やるわね2人共!」

銀「アンコール!アンコール!」

樹「息もピッタリでした!」

夏凜「じゃあ、こっちも行こうか友奈!」

友奈「あ、うん・・・宿題これからやるよー?」

夏凜「ん?」

タケル(友奈?)

園子「あはは、寝ぼけてるんだね!にぼっしー、私と熱唱しようよ!」

夏凜「あ・・・うん。」

後日の夕方、友奈は廊下から夕焼けの空を眺めていた。

夏凜「友奈。」

友奈「ん？夏凜ちゃん。」

夏凜「話、良いかしら？」

煮干しを友奈にあげた。

友奈「何？夏凜ちゃん？」

夏凜「少し歩ける？」

2人は波止場へ向かった。

友奈「久々にこつちにまで来たねー！前は東郷さんを助けに行つたぐらいだっけ？」

夏凜「友奈、あのね・・・」

友奈「その前に・・・良いかな？」

夏凜「ん？」

友奈「夏凜ちゃんは寒くないのー？」

夏凜「・・・ああ！悪い！全然気が回らなかつた！場所を変えようか？」

友奈「ううん、大丈夫！こうすれば・・・」

しゃがんで、夏凜に引つ付いた。

友奈「あゝ、暖かい。」

夏凜「……この前さ、風が卒業した後もちよくちよく部室に来るって言うてたでしょ？」

友奈「うん。」

夏凜「私……それ聞いて、ちよつと嬉しかったの……」

友奈「ちよつと〜?」

夏凜「ち、ちよつとよ!……ま、まあでも……結構……」

友奈「嬉しいよね〜。」

夏凜「うん。……でさ、私でもこうやってちやんと気持ちをお話せるようになったんだから……友奈も話さないよ。友奈、年末辺りから可笑しいわよ?絶対何かあったでしょ?」

しかし友奈は話そうとしなかった。

夏凜「私がお力になる。話を聞かせてくれない?友奈。」

友奈「何とも無いよー。」

夏凜「……大丈夫よ!どんな悩みだろうと、私は受け止めるから!友奈の事なんだから!!」

友奈「夏凜ちゃん……」

夏凜「私が力になるわ。私は友奈の為に何だってしてあげたい！そう思える友達を持たせた事が私は嬉しいの！その気持ちを持たせてくれたのは、友奈達なの・・・」

友奈「夏凜ちゃん・・・」

夏凜「何があつたの？友奈。」

友奈「・・・あ・・・あの・・・」

言おうとするが、以前に風が交通事故に遭つた事を思い出してしまい、言えなかった。

友奈「本当に・・・何でも無いんだ。」

夏凜「・・・そう・・・」

友奈「夏凜ちゃん？」

夏凜「悩んだら・・・悩んだら相談じゃなかったの・・・？私、友達の力になりたかった・・・」

涙を流して、夏凜が走り去って行く。

友奈「夏凜ちゃん!!待って!!夏凜ちゃん!!」

走り去る夏凜を追うが、すぐにバテてしまった。

友奈「はあ・・・はあ・・・ごめんね・・・ごめんね・・・」

彼女は夏凜に謝りながら倒れてしまった。

その頃タケルはCRF250Lに乗って友奈を探していた。

タケル「友奈、何処行つたんだ?学校にはもう居なかつたし……ん?」

波止場を見ると、倒れてる友奈を発見した。

タケル「友奈!!」

すぐに降りて、友奈に駆け寄る。

タケル「友奈!!しつかりして!!友奈!!」

友奈「……タケル、さん……」

タケル「どうしたの?」

友奈「ちよつとね……」

タケル「……早く帰ろう?歩ける?」

友奈「うん……」

その日の夜。東郷が部屋で何かをしていた。彼女はプロジェクターで友奈を調べていた。青坊主がプロジェクターを操作している。



東郷（やはり、どう考えても最近の友奈ちゃんの様子は可笑しい・・・）  
あなたも可笑しいよとツッコみたい。今度はパソコンで友奈の映像を見る。

友奈『あ、大吉だあ！あはは、やったあ！』

東郷「違う・・・！大吉を引いたなら、友奈ちゃんはもっと弾けるように喜ぶはず・・・！  
なのに、何故そんなに切ない顔をしているの!？」

ストーカレベルで友奈を調べている。

東郷「私達に言えない何かが起きているに違いない！だったら！」  
そこで彼女は、勇者に変身して友奈の真相を調べに行く事にした。

勇者に変身して外に出て、隣の友奈の家へ向かった。

東郷「私が真相を確かめる！」

友奈の部屋の窓の外。青坊主が部屋を確認して、ハンドシグナルで東郷と会話する。  
青坊主『対象は睡眠中。侵入可能であります。』

東郷『了解。その場で待機せよ。』

同じく東郷もハンドシグナルで青坊主と会話した。異常無しと確認して、屋根から降りる。

東郷『中に侵入し、鍵を開けなさい。』

青坊主『了解であります。』

部屋の中へ瞬間移動し、窓の鍵を開けた。東郷が窓を少し開けて入ろうとするが、胸が痞えて入れない。もう少し開けて侵入開始。

友奈の部屋。電気は点けっ放しになっており、友奈はベッドの上で寝ている。

東郷（友奈ちゃん、電気点けっ放しで……黙って入ってごめんね？手掛かりは……）  
部屋の中を見て、手掛かりを探す。

東郷（あ……あれは……!）

1つの本棚にある、明治維新と新政府の本に目を付けた。

東郷（友奈ちゃんが中学入学の時、4月3日にご両親に買って貰ったけれど、手に取る事はなかったと言う百科事典の位置がズレている……!）

そこまで詳しいのかあなたは……

気付かれないように明治維新と新政府の本を取る。カバーの中に入っていたのは。

東郷（勇者御記・・・？何故こんなものが・・・いや絶対、これに手掛かりがある！でも・・・）

友奈「うう・・・」

寝ていた友奈が魘され始めた。魘されている友奈の右手を東郷が優しく握った。すると友奈が落ち着きを取り戻してぐっすり寝る。

東郷（友奈ちゃんごめん・・・これ借りるね。）

勇者御記を借りた。

そして、友奈を除いた皆を呼び出して、犬吠埼家へ。

風「これを友奈が書いたって事か・・・」

東郷「最近友奈ちゃんの様子が可笑しかった、その原因が書かれていると思うんです。」

夏凜「っ!？」

タケル「・・・!？」

風「こんな物が出て来るなんて・・・」

園子「私からも良いかな?」

東郷「そのうち?」

銀「どうしたんだ? 園子。」

園子「私もゆーゆが心配になって調べてみたんよ。最近皆より早く帰ってたでしょ? 実は大赦に行ってたんだ。」

風「大赦・・・?」

マコト「そうだったのか。」

園子「結論を先に言うと、ゆーゆの様子が可笑しいのはね・・・ゆーゆが天の神の崇りに苦しめられているからなんだ・・・」

全員「え!?!」

タケル「・・・」

銀「本当なのか!?!」

園子「うん。」

東郷「そのうちそれは・・・」

園子「聞いて? わっしー。大赦の調べで、この祟りはゆーゆ自身が話したり書いたりすると伝染する・・・それが分かったの。だから、この日記は非常に危険な物なんだ・・・」

タケル「俺からも、良いかな?」

マコト「タケル？」

樹「何かあったんですか？」

タケル「うん．．．実は俺、友奈の祟りをずっと知っていたんだ．．．」

全員「え!？」

タケル「友奈が東郷を助けた後、俺にだけ真実を教えてくれたんだ。けど友奈は誰にも迷惑を掛けたくないって言つて、2人だけの秘密にしたんだ。今まで言えなくてごめん．．．」

園子「ター君．．．」

東郷「タケルさん．．．」

マコト「そうだったのか。よく言えたな、タケル。」

タケル「マコト兄ちゃん．．．」

アカリ「タケルも、この御記の事も知ってるの？」

タケル「うん。そこに友奈が今までの出来事をその通りに書いてた。これも俺にだけ教えてくれた。」

園子「それでも、皆見る？」

東郷「．．．見るわ！友奈ちゃんが心配なもの！」

全員が頷く。

園子「じゃあ読んでみよう、ゆーゆの御記を!」

勇者御記を開く。

友奈『始めに・・・年末に大赦の人達が私の変化に気付いてうちにやって来た。事情は信託や研究を交えて知ったので、神聖な記録として残したいからこの本に日記を付けて欲しいと・・・続くかな?どうしてこうなったのか・・・自分は大きな戦いで相当無理をしたようで、体中殆どを散華してしまった。更に、敵の御霊に触れた事で魂が御霊に吸い込まれてしまった。気が付くとそこは、東郷さんを助けに行つたあの場所だった。何処までも広がる世界・・・頑張つて抜け出そうともがいてみたけど・・・何処までも、何処までも、何処までも・・・そこは広がっていた・・・』

東郷を助けに行つたあの空間の中で、友奈の魂は怖がってしまった。

友奈「どうしよう．．．」

すると、何処からか声が聞こえた。

東郷『独りぼっちになっても、それでも勇者は．．．戦う事を諦め  
ませんでした。』

友奈「東郷さん．．．？」

それは、病院で友奈の横に座って演劇の台本を音読する東郷の声だった。

東郷『諦めない限り．．．希望が終わる事は無いから．．．です．．．』

友奈「東郷さん．．．」

東郷『何を失つても．．．それでも．．．それでも．．．私が一番．．．  
大切な友達を．．．失いたくない!!』

友奈「東郷さん!!東郷さん!!東郷さん!!．．．東郷さんが泣いている．．．私は．．．

私は．．．私は．．．勇者だ．．．勇者は、泣いている友達を放つてなんか居られない  
!!勇者は根性!絶対帰るんだ!!」

すると空間に1つの光が輝き、そこから1羽の青いカラスが飛んで来た。

友奈「カラス？」

青いカラスは友奈の手の上に着地して、友奈を見る。そして。

カラス「カー!カー!」

鳴いて、光の方へ飛ぶ。

友奈『カラスは私について来いって言ってる気がした。だから私は、光の方へ。ずっとずっと進み続けて……戻って来る事が出来たんだ!でも、体は違っていた。私や皆は散華から回復したけど、あれは捧げられた供物が戻って来た訳じゃないみたい。回復した体の機能は神樹様を作ったものらしい。それが自分の身体になるまで、時間が掛かった。強引な満開をして散華した私なんかは治すために全身神樹様を作ったパーツになった訳で……大赦では私を、“御姿”みすかたと呼んでるとか、御姿は、良く言えばとても神聖な存在なので、神様からは好かれるんだそう。だから私は、私の望んだ事が、友達の違いになることができて、それで世界のバランスが守られた。あれから大赦は異変に気付いて、私を調べてくれた。分かったのは炎の世界がある限り、この体が治る事はないと言う事。そして、私は今年の春を迎えられないだろうと言う事。とても、怖いし……私のせいで怪我させてしまった風先輩に申し訳無いし……何だか、トンネルの中に居るような気が……私はタケルさんにだけ秘密を教えてしまった。でもタケルさんには災難は無かった。タケルさんの持つヒミコさんの力のお陰だと思う……タケルさんは私の為に崇りを決してくれたが、崇りは消える事は無かった。』



『1月7日、風先輩が退院出来たのはおめでたい……皆と居ると元気が出て来るけど、移さないように気を付けなきゃ。やつぱり、口数は減つてしまう……食欲は無かったけど、甘酒が美味しくて喉が喜んでた。……でも、家で吐いちゃった……』

1月9日、吐き気は酷かったけど、部屋に居ると心がほわほわする。また明日つて言う言葉が好き。約束すれば、明日が来ると思えるから。出来れば、ずっとこの場所で居たいな……風先輩は温泉旅行を提案してくれたけど、今の私の裸を見たら皆がびつくりしちゃう……とても行けない。ごめんなさい……』

現在、焼印の痣は身体中まで侵食している。

友奈『1月11日、今日は調子が良い。すっかり休んでいるのが効いたのかも。身体を動かせて楽しかった！このまま根性で、良い状態が続くかも知れない。他にも身体のこと、色々試してみよう！』

『1月13日……胸がとても痛くて、何だか頭がくらくらする。多分皆と会話が成立しなかつたかも……身体、折角良くなったと思つたのに……』

『1月14日……いっぱい寝て、体力を回復させなくちゃ。でも、電気を消して寝るのが怖い、暗いのが怖い。そのまま暗いものに包まれてしまいそうで……』

『1月16日……今日は夏凜ちゃんを傷つけてしまった。でも絶対言う訳にはいかない。ごめんなさい……タケルさんがずっと私を慰めてくれた。でも、とても苦しい、体も

痛い、心も痛い、ぐちゃぐちゃになりそう……もう可笑しい……私はただ、皆と毎日過ごしたいだけなのに……」

痣は遂に身体を完全に侵食してしまい、友奈が苦しむ。

『……弱音を吐いたらダメだ、私は勇者だから!覚悟をしていたのだから!もう泣かない!頑張れ自分、結城友奈!勇者は挫けない!!兎に角、夏凜ちゃんと仲直りしたい!でも本当の事を話せない……どうすれば良いんだろう……もうここでいっぱい書く!夏凜ちゃん、私、夏凜ちゃんのこと大好きだよ。夏凜ちゃん、本当にごめんね!』

これが、友奈が書き残した勇者御記の全てだった。

東郷「そんな……」

風「治らないってどう言う事よ……?春は迎えられない……?え……!?!」  
痺れを切らせた東郷が何処かへ行こうとしたが。

園子「待つてわっしー!」

銀「須美!何処へ行くんだよ!?!」

東郷「止めないで!!全て私のせいじゃない!天の神の怒りは収まっていなかった!私

が受けるべき崇りなのよ!!」

園子「日記に書いてあったでしょ!! わっしーに移っても、本人は崇られたままなんだよ!!」

風「大赦はまた、私達に重要な事を黙って・・・!!」

マコト「くそっ!!」

園子「迂闊に説明すると、皆に崇りがいくかもしれないから話せなかつたんだよ。私もそうなんだ・・・崇りについて詳しい事が全部はつきり分かつたのは、ついさっきだから・・・」

アカリ「そんな・・・」

夏凜「う・・・うう・・・」

樹「夏凜さん・・・?」

夏凜「友奈が・・・こんなに苦しんでるのに・・・私・・・私・・・酷い事言っちゃった・・・酷い事言っちゃったよ・・・」

カノン「夏凜ちゃん・・・」

泣き崩れる夏凜を、樹が慰め、カノンが優しく抱き締めた。

タケル「くっ・・・!!」

東郷（真相を知っていても、私達は何も出来ずに居た・・・）

翌朝、東郷が友奈の家へ行つた。

東郷「おはようございます。(それがもどかしい・・・)」

家が上がつて、友奈の部屋のドアをノックする。

友奈「はい。」

東郷「おはよう友奈ちゃん。」

友奈「あ、おはよう東郷さん。」

東郷「今日は早いのね。」

友奈「うん、早く目が覚めちやて。でも寒いから出たくないなーって・・・ん?」

東郷「どうしたの?友奈ちゃん。」

友奈「東郷さん、調子悪そう。大丈夫?」

心配された東郷は、友奈を抱き締めた。

友奈「東郷さん!?!」

東郷（私が不安になった時、友奈ちゃんは、こうして抱き締めてくれた・・・友奈ちゃん、今度は私が絶対助ける！）

果たして、友奈を救う方法は見付かるのだろうか。

そして壁の外では、結界が枯れ始めていた。

「END」

## 第二十三話 「結婚!清廉な心!」

何故神樹と結婚する事になったのかと言うと、昨日の夕方に遡る。

突然結城家に大赦の神官が訪問した。

タケル「……………」

友奈「……………」

和室で、大赦神官が正座をして頭を下げている。

友奈「あ、あの……頭を上げて下さい。今日は何の御用でしょうか?」

タケル「また、勇者御記を書き残して欲しいと言いに来たのですか?」

大赦神官「友奈様に、急ぎお知らせしなければならない事があります。ご両親には、全て了解して頂いております。」

タケル「それで、友奈に何の御用があるんですか?」

大赦神官「私達を約300年の間守って来て下さった、神樹様の寿命が近付いております。」

友奈「え？」

タケル「神樹様の寿命が？」

大赦神官「神樹様が枯れてしまわれれば、外の炎から守る結界が無くなり、我々の暮らすこの世界は炎に飲まれ消えてしまいます。」

友奈「消え……る……?」

大赦神官「遺憾ながら。」

友奈「待つて待つて！いきなり過ぎます！」

タケル「そうですよ！突然言われたら混乱しますよ！」

友奈「いきなりそんな、消えるなんて……」

大赦神官「仰る通り、人間を全滅させる訳には参りません。全滅を免れ皆が生き伸びる解決法を、我々は見付けております。」

友奈「あの。これって勇者部全員で聞いた方が……」

タケル「他の皆にも知らせた方が……」

大赦神官「まずは、友奈様にだけお話しを。特別にタケル様にもお話しをします。」

タケル「またそうやって、他の人達に隠蔽するんですか？」

大赦神官「皆が助かる方法は1つ。選ばれた人間が神樹様と結婚するのです。」

友奈「えっ……結婚!?結婚って……あの結婚ですか？」

大赦神官「はい。」

タケル「だけど、何故結婚を?」

大赦神官「神との結婚を古来、神婚と言います。神と聖なる乙女の結合によつて、世界の安寧を確かなものとする儀式。それが神婚。」

友奈「あの・・・それだと皆助かるん・・・ですか?」

大赦神官「はい。」

友奈「助かる・・・」

タケル「・・・」

大赦神官「神婚する事で新たな力を得て、人は神の一族となり皆永久に神樹様と共に生きられるのです。ご理解頂けましたでしょうか。」

友奈「兎に角分かりません・・・」

タケル「大体、友奈と結婚させるなんて、神樹様はどうかしてますよ?」

友奈「でも、兎に角全滅は・・・」

大赦神官「私達も、友奈様とタケル様と同じ気持ちです。神婚が成立すれば、選ばれた少女の存在は神界に移行し、俗界との接触は不可能になります。」

タケル「神界に移行・・・それってまさか・・・」

大赦神官「はい。神婚した少女は、死ぬと言う事です。」



友奈「っ!？」

タケル「死ぬって・・・そんな・・・」

大赦神官「そして神婚の相手として、神樹様は友奈様を神託で示されました。」

友奈「な・・・何で私を・・・？」

タケル「神樹様が友奈様を選んだ理由・・・それってまさか？」

大赦神官「はい。友奈様は心も体も神に近い存在。”御姿”だからです。」

友奈「・・・」

大赦神官「天の神が友奈様を生贄にしているのと、理由は近いかと。」

友奈「私が、神婚するって・・・」

大赦神官「私達大赦は人類が生き延びる為に、様々な方法を模索し続けて来ました。そして、神婚と言う選択肢のみが残されたのです。」

友奈「あの・・・すみません・・・すぐ、答えられなくて・・・頭が、追いつかないって言うか・・・」

大赦神官「天の神の罪を背負わせている。さぞお辛いでしょう。祟りの為に、何この事も話せず。」

友奈「・・・話せないなら話せないで、もつと賢いやり方があったのかも知れませんが・・・私、友達を傷付けちゃって・・・」

大赦神官「皆を慈しむ心。友奈様は素晴らしい勇者であると私は思います。」

友奈「そんな事はありません・・・」

大赦神官「その友達を、人間を救う事が出来るのは友奈様だけです。」

タケル「待つて下さい!それだけの理由で友奈が結婚を望むと思うんですか!?!俺は絶対反対です!友奈が神樹様と結婚するなんてそんな事、絶対に許せませんよ!」

友奈「タケルさん・・・神婚したとして・・・その・・・人が神の一族になつてずっと生きるつて言うのは・・・」

タケル「友奈!?!」

大赦神官「言葉通りの意味です。我々を神樹様に管理して頂く優しい世界・・・人は死んでしまえば終わりですが、神の眷属となり神樹様と共に生きていけば希望が持てます。」

友奈「それつて皆、ちゃんと人間なんですか・・・?」

大赦神官「神の膝下で確かに存在出来ません。信仰心の高い者から神樹様の下へ。」

友奈「・・・皆が、神樹様の下に・・・」

大赦神官「どうか・・・この世の全ての人々をお救い下さい。」

その後、大赦神官が帰って行った。

大赦神官『慈悲深い選択を・・・』

タケル「友奈、本気なのか？本気で神樹様と結婚するのか？」

友奈「・・・」

タケル「友奈!!答えてくれよ!!」

夜、友奈は部屋で苦しみ始めた。

友奈「うっ!うう・・・はあ・・・はあ・・・うっ・・・崇りの次は結婚だっ・・・びつくりだね、牛鬼・・・お父さんとお母さんは泣いてたけど・・・私の意思に任せるって言うてくれたけど・・・私の身体は・・・命は・・・もう・・・」

明朝。友奈は外に出て何処かへ向かう。

友奈「神婚して死ぬとどうなるんだろう・・・崇りで死ぬより苦しくないのかな・・・自分の事ばかり考えて良く無いな・・・私は勇者なんだから・・・勇者らしい事をし

なくちゃ……!世界が、炎に包まれるなんて……そんなの嫌だ……!」  
彼女は神社へ向かった。

友奈(勇者部五カ条。)「成せば大抵何とかなる……そうだよ……迷ったり怖がってる場合じゃない……だって私は、勇者だから……!崇りで消えてしまう命なら……この命を皆の為に使おう……怖くない……怖くない……!怖く……ない!!」  
階段を上り切って、街全体を見る。

友奈「はあ……はあ……綺麗……はあ……はあ……はあ……はあ……私、決めたよ!」

そして現在。放課後の勇者部。友奈が結婚を皆に告げた。

風「いや怪しいでしょ!何引き受けようとしてんの!」

アカリ「結婚って、友奈ちゃん本気なの!?!」

園子「ゆーゆー!」

樹「違うと思います！」

御成「そんな事をしたら、友奈殿は……」

銀「自分を無くしてしまうんだぞ？」

カノン「世界を救う為なら、手段を選ばないの？」

友奈「皆……」

東郷「今の皆の反応で分かるでしょ？友奈ちゃんの考え方が間違ってる事が……」

友奈「東郷さん……」

風「くっ！それにしても大赦め：：!!友奈！私達も付いて行ってあげるから、ばしつと断りなさい!!」

タケル「断っても駄目と言われたら、俺達が全力で説得する！」

樹「そうですよ！神婚なんてする必要はありませんよ！」

夏凜「園子、今から大赦に連絡入れられる？」

園子「うん！」

東郷「もう我慢ならない！」

風「行くわよ！1度潰した方が良い組織になれるかもね。」

銀「はい！」

友奈「待って！だから……私は……神婚を引き受けるって……」

風「その必要は無いらだって!」

夏凜「だって、死ぬんでしょ?」

風「訳分からな!生贄と変わらないじゃない!」

園子「後、”神樹様と共に生きる”って何なのかな・・・」

樹「その、何かゾクツと来るような・・・」

東郷「とても幸せな事とは思えないわ。」

銀「もし私が神婚に選ばれたら、即断ってやるぞ!」

友奈「でも!私が神婚しないと、神樹様の寿命が来て世界が終わっちゃうんだよ!」

風「神樹様の寿命は分かるけど、でも、だからって友奈が行く必要は無いでしょ!」

タケル「もう一度考え直してくれ!友奈、君はどうしたい?」

友奈「・・・風先輩、勇者部は人の為になる事を勇んで行う部活、でしたよね・・・?」

風「友奈、これは違う!」

友奈「でも、これも勇者部だと思っんです・・・誰も悪くない。世界を守る為に他に

選択肢が無いなら・・・それしかないなら・・・私は勇者だから・・・」

風「友奈!!1回頭冷やしな!」

園子「ゆーゆ、それしかないって考えは止めよう?神樹様の寿命が無くなるまでの間

に、もつと考えれば良いんだよ・・・」

銀「園子の言う通りだ。友奈、自分を正直にしてくれ。」

夏凜「そ、そうよ！」

友奈「駄目なんだよ．．．考えるつて言つても．．．私にも、もう時間が無くて．．．はっ．．．！」

皆の左胸に焼印が刻まれてる幻覚を見た。

風「友奈．．．」

マコト「．．．」

東郷「私達知ってるわ。友奈ちゃんが天の神からの崇りで、体が弱っている事を。」

友奈「その話は止めて!!私は何も言つてない!!」

東郷「友奈ちゃん、大丈夫よ。」

園子「その件を含めて、解決してみせるから。」

樹「大体可笑しいです!何で友奈さん一人がこんな目に遭わなきゃいけないんですか!」

アカリ「そうよ!友奈ちゃん、その考えは間違つてるよ!」

友奈「でもね樹ちゃん。アカリさん。私は嫌なんだ．．．誰かが傷付く事、辛い思いをする事が．．．それが今回は、私一人が頑張れば．．．」

東郷「駄目よ!友奈ちゃんが死んだら、ここに居る皆がどれだけ傷付いて辛い思いを

すると思っっているの!!私・・・想像してみたけど・・・後を追って、腹を切っているかも知れない!!」

友奈「で、でも・・・東郷さんだって・・・皆を守る為に火の海に行つたでしょ・・・あれだって、自分一人で世界を救えるならって思つたからでしょ!」

東郷「そうよ!でも壁を壊した私の自業自得でもあるのよ!友奈ちゃんは悪くないじゃない!反対よ!腹を切るわよ!」

友奈「そんなの・・・ずるいよ・・・私は、東郷さんの代わりに・・・っ!」

東郷「代わりに・・・何?友奈ちゃん・・・」

樹「ゆ、友奈さん!友奈さんが言うように、勇者は皆を幸せにする為に頑張らないといけないと思うんです。」

友奈「そうだよ。だから私頑張ってるよ・・・」

樹「で、でも・・・」

風「皆って言うのは、自分自身もそこに含まれているのよ!友奈!」

友奈「し、幸せ、だよ?私は・・・それで、皆助かるなら・・・」

東郷「嘘よ!!」

タケル「いい加減にしてくれ!!」

友奈「ゆ、勇者部五カ条」なるべく諦めない!私は皆が助かる可能性に懸けているん



だよ！」

風「あんたが生きる事を諦めているじゃない！」

友奈「勇者部五力条」成せば大抵何とかなる”!!成さないと何にもならない!!」

風「友奈!五力条をそう言う風に使わない！」

友奈「私は、私の時間がある内に・・・私の出来る事をしたいです!だからこうして皆にきちんと相談しました！」

銀「友奈、それはただの報告だ!!」

園子「そうだよ、ゆーゆ・・・相談しなきゃ・・・」

友奈「相談してるよ!!」

夏凜「友奈・・・その・・・兎に角、無理すんな・・・」

友奈「無理してないよ!!」

夏凜「・・・ごめん・・・」

友奈「勇者らしく、私らしくしてるよ！」

風「友奈!!皆がここまで言ってもまだ分からないの!?!」

友奈「だから!!他の方法が無いからこうなっているんです!!」  
するとその時。

“バシーン!!”

友奈「・・・え・・・?」

黙って聞いてたマコトが、友奈の頬に平手打ちした。

タケル「マコト兄ちゃん・・・?」

友奈「マコト・・・さん・・・?」

マコト「いい加減にしろ友奈!!そんな事で、俺達が助かると思っているのか!!」

友奈「・・・もう・・・これしか方法は無いのに・・・」

マコト「そんな甘い考えで、自分を犠牲にして良いと思っているのか!!」

友奈「……………」

マコト「友奈、お前は勇者なんだろう？何の為に勇者になったんだ？俺達と共に戦って世界を救う事か？自分を犠牲にして世界を救う事か？それとも、神婚する為に勇者になったのか？」

友奈「……………」

マコト「考え直せ友奈。お前は独りじゃない。お前には俺達が付いてる!!相談相手になる俺達が付いてる!!友の為に俺達は戦ってる!!そうだろう!?答えろ友奈!!お前は どうしたいんだ!!」

友奈「……………」私には……………」本当に時間が無くて……………」

すると友奈が、再び焼印の幻覚を見てしまい、泣き出して部室から去ってしまった。

東郷「友奈ちゃん!!」

園子「ゆーゆ!!」

銀「友奈!!」

3人が友奈を追う。部室では、不穏な空気が漂ってしまった。

“ドン!!”

突然夏凜が、棚を強く叩いた。

夏凜「こう言う時……………」どうすれば正解なのよ……………」

タケル「……………」

マコト「タケル、友奈が時間が無いと言ってた。その間に彼奴が助かる方法を探すぞ。」

タケル「マコト兄ちゃん……………」

カノン「お兄ちゃん……………」

御成「…………探しましょう。友奈殿を救う方法を!」

アカリ「そうね。こんな所で何もしないなんて嫌だわ!」

その頃、東郷と園子と銀が合流した。

銀「何処にも居ないぞ!」

園子「隠れちゃったのかな?」

東郷「端末を見たら、友奈ちゃんの自宅に反応が!」

銀「自宅に!?!」

東郷「行こう!」

園子「うん!」

銀「ああ!」

3人は勇者に変身して、友奈の部屋へ向かった。

園子「ただ、こつちも一気にわーつと話すと、ゆーゆが落ち着けないようだから、冷静に行こうよ。」

東郷「そうね。」

青坊主が部屋の窓の鍵を開け、東郷が窓を開ける。

銀「・・・居ないぞ。」

園子「こつちも居ない。」

東郷「友奈ちゃん？」

机の上の勇者御記とスマホを発見した東郷。

園子「リーダーの反応はこれだったんだ・・・」

銀「じゃあ、友奈は何処へ行ったんだ？」

勇者御記を開くと。

『1月18日・・・皆、色々ごめんなさい。私は行きます。』

園子「今日の日付だ。」

東郷「端末を置いて何処に？・・・まさか！」

すると園子のスマホが振動した。それは、大赦からの電話だった。

大橋近くにある“英霊之碑”。ここは、歴代の勇者達と巫女達が眠っている墓地。そこに、大赦神官が居た。後ろを向くと、友奈を除いた全員が立っていた。

大赦神官「勇者様に最大限の敬意を。」

東郷「止めて下さい。」

マコト「あんたが俺達を呼び出したのか。」

御成「この墓地は一体?」

大赦神官「ここは歴代の勇者と巫女が祀られている場所。」

夏凜「友奈がここに居るって言うの?」

風「まさか!!」

大赦神官「友奈様はここには居ません。この場所は話をするのに静かだと思って。」

風「ほっ・・・」

東郷「私達は、友奈ちゃんに会いに来たんです!!」

樹「友奈さんは何処に居るんですか!？」

タケル「教えて下さい!」

大赦神官「今は大赦に居られます。」

風「じゃあ大赦に乗り込むわよ!!」

全員「うん!」

大赦神官「友奈様から話を聞かれたかと。世界を救う方法は、神婚。しか残されていない  
ません。」

風「ええ!!聞かされたわよ!!」

マコト「何故そんな考えを!!」

大赦神官「急ぐ必要があった。ご存知かと?友奈様の寿命は後僅か。」

樹「友奈さんの祟りを祓う方法は、本当に無いんですか?」

大赦神官「我々は探りました。友奈さんを救う方法を。」

同じ頃友奈は、滝行をしていた。

大赦神官「しかし、無かったんです。外の炎がある限り、友奈様は崇られたまま。」

夏凜「じゃあ、外の炎はどうかにならないの!？」

アカリ「他の方法は絶対あるはずよ!？」

大赦神官「幾つかのプランがありました。」

カノン「だったらそれを!!」

大赦神官「しかし、不可能だと分かったのです。」

夏凜「どうして勝手に決めるのよ!!」

タケル「それが大赦のやり方なのか!？」

大赦神官「もう時間がないのです。友奈様はこれより神婚の儀に入られます。」

風「巫山戯るな!!止めてやる!!」

大赦神官「歴代の勇者様の多くは、お役目の中で命を落とされました。勇者様は人類を守ろうと懸命に戦い、お役目を果たされ英霊になりました。友奈様もまた、戦い方は違えど、皆の為にその身を捧げようとされています。それこそが勇者であると理解して。」

するとマコトが、大赦神官の巫女服を掴んだ。

マコト「俺達がそれで納得すると思ってるのか!!」



風「歴代の勇者と巫女・・・皆、私達と同じ位の年齢って訳でしょ・・・？何時だって子供達を犠牲にして生き延びて来たって事じゃない・・・」

マコト「幼い命を粗末にしているのと同じだ!!そんな歪な世界があっても良いのか!!」

大赦神官「それしか方法が無いならば、全てを生かす為には止むを得ないのです。それが、この時代における人の在り方。」

東郷「止むを・・・得ない・・・？」

大赦神官「そうよ。」

タケル「そんな・・・」

園子「ピーマンが嫌い・・・だったよね。すつごく厳しいけど、ふとした時に見せるチャージングな所が私は好きだったよ・・・」

銀「私も、先生が好きでした・・・」

園子「でも今は、もう昔の安芸先生じゃないんだね・・・」

マコト「お前達大赦は、まだ犠牲を増やしたいのか？」

大赦神官「少々の犠牲・・・このやり方で大部分の人達が幸せに暮らしているのです。」

風「それなら・・・それなら、あなた達が人柱になれば良いのに!!」

大赦神官「出来るものなら、そうしています・・・だが、私達では神樹様が受け入れ

ない。こう言う事に生かされるあなた達だから、受け入れているのか。」

すると、特別警報発令が鳴り始めた。

全員「っ!?!」

マコト「っ!?!」

東郷「これって!?!」

するとスマホの画面がノイズで消え、すると次の瞬間。

“ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
!!!!”

全員「うわっ!!」

マコト「何だ!?!」

突然地震が発生し、周囲に不気味な音が響いた。

大赦神官「もう来るとは・・・」

夏凜「ちよ、ちよつと何よこれ!?!」

マコト「何が起こつたんだ!!説明しろ!!」

大赦神官「あなた達の出番です。天の神は、人間が神の力に近付いた事に怒り、裁きを下したと言われています。人間が神婚するなどもつてのほか・・・」

東郷「バーテックスが・・・来る・・・」

大赦「いいえ。」

すると上空が侵食され始めた。

風「これ、何が・・・?」

「街中では、人々が侵食されていく空を見ている。更に壁も侵食され、巨大物体が迫って来た。」

風「現実の世界に敵!？」

樹「で、敵、なの……?何なのあれ……?」

夏凜「あんな奴が……」

大赦神官「神婚が、友奈様が神樹様の下へ行き、人々の願いの礎となる事で契られ、成  
立します。神婚が成立すれば人はもう神の一族。人でなければ襲われない。これで皆  
は神樹様と共に平穩を得ます。これが最後のお役目。敵の攻撃を神婚成立まで防ぎき  
りなさい。」

マコト「……くっ!!」

服を離して、タケルの横に立つ。

タケル「マコト兄ちゃん。」

最終決戦が、始まった。

「END」

## 最終話 「勇者！君ありて幸福！」

天の神が怒り、樹海化が発生し、結界の外の火の海に巨大な火球が生成され始めた。

風「やばい!!」

巨大火球が此方に迫って来た。

タケル「避けて!!」

彼らはそれぞれジャンプして避けた。

友奈「つ!!天の神・・・」

神樹へ向かう途中の友奈が、爆発を見た。

友奈「私の命が、もう駄目ならば・・・私の命で、皆が助かるならば・・・怖くない・・・怖くない!!」

同じ頃、巨大物体が迫り始めていた。

風「彼奴無茶苦茶!!」

マコト「このままじゃ、世界が!」

夏凜「風ーーー!!!」

風「夏凜!!」

銀「須美ーー!!園子ーー!!」

東郷「銀!!」

園子「ミノさん!!」

夏凜「あんた達は早く友奈の所へ!彼奴の相手は私と銀がやつとくから!!」

風「あ、相手つてあんた!!」

夏凜「甘く見ないで!!私にはまだ満開がある!!」

銀「友奈を頼むぞ!!」

2人は飛翔した。

風「夏凜!!」

東郷「銀!!」

園子「ミノさん!!」

2人は天の神に戦いを挑む。

銀「あれが天の神……」

夏凜「(友奈に謝らなきや……一緒に帰るんだ!) 当代無双!!三好夏凜!!」

銀「三ノ輪銀!!」

夏凜「一世二代の大暴れを、とくと見よ!!!」

銀「満開!!」

2人は満開を発動し、天の神に向かって飛翔した。

夏凜・銀「はあああああああ!!!」

すると天の神が、無数のビームを放射した。

その内の1つが、スペクターと風と樹の目の前に直撃した。

風「くっ!……これじゃあ……」

マコト「彼奴を倒せないのか……」

樹「……お姉ちゃん、マコトさん、あのね私……」

風「樹、ここをお願い出来る?」

マコト「頼めるか?」

樹「・・・うん!お姉ちゃんとマコトさんは友奈さんの元へ!」

風「ええ!友奈を連れ戻して来るわ!絶対に無事で居るのよ?」

樹「うん!」

マコト「死ぬんじゃないぞ。」

樹「はい!!」

スペクターと風が友奈の元へ走り出す。すると横から、満開した東郷が現れた。

東郷「風先輩!!マコトさん!!乗って下さい!!」

マコト「東郷!!」

更に、イグアナゴーストライカーに乗ったゴーストも現れた。

タケル「乗って!!マコト兄ちゃん!!」

マコト「タケル!!」

風「じゃあ、友奈の所へ行くわよ!!」

東郷「最大全速で向かいます!!」

マコト「頼むぞタケル!!」

タケル「分かった!!」



スペクターがイグアナゴーストライカーに乗り、風が満開した東郷に乗る。2人が速度を上げて友奈の元へ向かう。

同じ頃、夏凜と銀は天の神に苦戦中。天の神がサジタリウス・バーテックスの巨大な槍で夏凜を突き刺そうとするが、夏凜がバリアで防ぐ。しかしバリアが砕かれ、右の頬に傷が出来た。

夏凜「バリアを!? 此奴のせいで・・・!! くっ!! 巫山戯るなー!!」  
今度はサジタリウス・バーテックスの無数の槍を放射した。するとそこに。

銀「おりゃあああああああ!!!」

真横から銀が現れ、巨大な双斧で滅多斬りにする。

夏凜「銀!!」

銀「夏凜!! 逃げろ!!」

だが、残りの槍が2人に傷を与えた。

夏凜「くっ!!」

銀「がはっ!!」

夏凜「この……………!!!」

銀「よくも……………!!!」

すると、キャンサー・バーテックスのプレートが出現し、無数の槍を跳ね返して2人に直撃させようとした。

夏凜「っ!!」

銀「何!？」

しかし、園子が槍を展開して2人を助けた。

夏凜・銀「園子!!」

園子「2人で前に出過ぎてちや駄目だよ、にぼっしー!ミノさん!」

更に、スコープオン・バーテックスの尻尾が6つ現れ、3人を突き刺そうとしたその時、無数のワイヤーで破壊されてしまった。満開した樹も駆け付けてくれたのだった。

夏凜「樹!!」

銀「助かった!!」

樹「皆で守りましょう。友奈さんが帰って来るこの場所を!!」

そして遠い場所では、アカリと御成とカノンが見守っていた。

アカリ「タケル・・・マコト・・・皆・・・」

御成「皆さん・・・」

カノン「頑張つて・・・」

同じ頃、ゴースト達は友奈の元へ全速力で向かっていた。

風「東郷!! タケルさん!! マコトさん!! あれ!!」

東郷「っ!?!」

タケル「これは!?!」

マコト「まさか!？」

地面が割れていた。

風「神樹様の方へ……この先に友奈が居るんだわ!!」

すると、真上に裂け目が出現した。レオ・バーテックスと同じ力。

風「何あれ……!？」

その裂け目から、無数の炎のバーテックス達が奇襲して来た。

タケル「来る!!」

4人がバーテックス達を払い退ける。

風「次から次へと!!」

東郷「風先輩!!」

風「っ!!」

戦艦を後ろに向けて、砲台のエネルギーを集める。

東郷「総員退艦!!」

そして東郷と風が降りて、戦艦を裂け目に向かって突進する。東郷が敬礼し、戦艦が裂け目に突入して、大爆発を起こした。

風と東郷が地割れに着地する。イグアナゴーストライカーも地割れに着地して、ゴーストとスペクターが降りる。

タケル「東郷、大丈夫？」

東郷「はあ・・・はあ・・・」

すると大木が生え、4人に攻撃を開始した。

マコト「避ける!!」

大木を避けながら、友奈の元へ向かう。

東郷「神樹様に、妨害されてる!？」

風「知るかーーーーー!!!例え神樹様でも、今回だけは譲れない!!!」

すると大木が、4人の行く手を塞いだ。

風「くそっ!!」

タケル「信長さん!!秀吉さん!!家康さん!!力を借ります!!」

テンカトウイツゴースト眼魂を、ゴーストドライバーに装填した。

『カイガン!信長!秀吉!家康!果たすのはいつ!天下統一!』

テンカトウイツ魂を纏い、ガンガンセイバーとガンガンキャッチャーを持つ。

タケル「マコト兄ちゃん!!使って!!」

マコト「分かった!!」

ガンガンキャッチャーをスペクターに渡した。ゴーストがガンガンセイバーをナギナタモードに変形させ、ゴーストドライバーとアイコンタクトさせた。

『ダイカイガン!』

スペクターはガンガンキャッチャーにツタンカーメンゴースト眼魂を装填した。

『ダイカイガン!』

『オメガストリーム!』

『オメガファイニッシュ!』

タケル・マコト「はあああああああ!!!」

同時にガンガンセイバーとガンガンキャッチャーを振り下ろし、大木を消滅させた。

タケル「行くこう!!」

4人が走り出す。

一方友奈は、白蛇に拘束されていた。

更に海岸沿いにある祠の前では、大赦の人間達が次々と砂のように溶け始めた。溶けた瞬間、金色に輝く麦が生えた。

樹海では、4人が友奈の元へ急ぐ。しかし。

風「っ!?!道が!!」

無数の大木がまた道を塞いでいた。

更に、天の神が樹海に光を放ち、広範囲に衝撃波を展開させ、樹海を金色に染め上げた。

東郷「あれは……」

タケル「樹海が金色になっていく……」

風「……」

満開のゲージを見て、風が決断した。

風「東郷、やれる?」

東郷「・・・必ず!」

風「タケルさん、マコトさん、2人もやれる?」

タケル「うん。」

マコト「任せろ。」

風「なら、道は私が切り拓く!」

満開して、超巨大な大剣を持つ。超巨大大剣を振り下ろし、道を切り拓いた。ゴーストとスペクターと東郷が走り出して、結界の外へ。

結界の外。

東郷「っ!ここは・・・?」

タケル「何も見えない・・・」

マコト「結界の、外なのか・・・?」

何も無い真っ黒の空間。すると、白い枝が見えた。



東郷「何て所・・・？精霊の力でも帰れるかしら？」

タケル「早く友奈を探さないと・・・っ!!東郷!マコト兄ちゃん!」

マコト「どうした!？」

タケル「下を見て!!」

東郷「っ!？」

真下に、白蛇に拘束されている友奈が。

東郷「っ!？」

タケル「っ!!友奈の魂が!!」

更に、友奈の魂も居た。魂は助けを求めて叫ぶが聞こえない。両足が徐々に消滅されている。

東郷「・・・友奈ちゃん!!」

友奈「・・・っ!!東郷さん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・どうして!?!」

東郷「帰ろう!!友奈ちゃん!!迎えに来たのよ!!」

タケル「君が居ないと駄目なんだ!!」

マコト「もういい加減にしろ!!友奈!!」

3人が友奈の方へ飛び降りる。しかし無数の白い手と白蛇が3人を拘束し始めた。

東郷「っ!?!」

友奈「はっ!!」

タケル「何だこれは!?!」

マコト「俺達をどうするつもりだ!!」

すると足が硬化し始めた。

東郷「そうまでして・・・渡したくないのね!!」

タケル「友奈!!今助ける!!」

マコト「お前を連れて帰る!!」

友奈「でも……私が……私がやらないと、世界が消えちゃう……これは、誰かがやらないと……なら、私が……」

東郷「友奈ちゃんが、誰もやる必要なんか無い!!」

タケル「そうだよ!!君がやる必要なんて何処にあるんだよ!!」

マコト「これ以上、お前の甘い考えを聞いてたまるか!!」

友奈「私が我慢をすれば、それで良いから……」

東郷「友奈!!!」

友奈「っ!?!」

東郷「本当の事を言っつてよ。怖いなら怖いって……私には言っつてよ!友達だっつて言うなら、助けてっつて言っつてよ!!」

友奈「……!!」

すると、友奈の両手が震えた。

友奈「嫌……だよ……怖いよ……でも、言っちゃ駄目で……でもそんなの……死ぬの……嫌だよ……皆と別れるのは嫌だよ!!!」

東郷「……友奈ちゃん……」

タケル「友奈……!!」

マコト「正直になったか……!!」

ゴーストとスペクターが、サン格拉斯ラッシュャー・ブラスターモードとガンガンキヤツチャャー・銃モードで白い手と白蛇を壊し続ける。それでも白い手と白蛇が増殖を続ける。

友奈「私達、ずっと一生懸命だったのに……それなのに何で……?嫌だよ……ずっと……ずっと……ずっと皆と一緒に居たいよ!!!」

東郷「友奈ちゃん!!手を伸ばして!!」

友奈「東郷さん!!助けて!!」

東郷「友奈ちゃん!!」

友奈「東郷さん!!」

2人の距離が縮まり、お互いの手がもうすぐ掴める。

だがしかし、神樹はそれを許さなかった。結界を張って2人を遮った。

タケル「えっ!?!」

マコト「何!?!」

結界を張って、友奈を完全に閉じ込めてしまった。

東郷「そんな・・・こうまでして・・・」

タケル「友奈を返せ!!!」

マコト「壊れろ!!!」

サンングラスラツシヤーとガンキヤツチャーで結界を破壊しようとしたが、罅すら入らなかった。それでも2人は結界を壊し続ける。

友奈「東郷さん・・・タケルさん・・・マコトさん・・・」

東郷「っ!!」

タケル・マコト「っ!!」

友奈「助・・・け・・・て・・・」

東郷「友奈ちゃん!!!」

タケル「友奈!!」

マコト「死ぬな!!友奈!!」

友奈「東郷・・・さん・・・タケル・・・さん・・・マコト・・・さん・・・」

東郷「駄目!!!」

タケル「死んじや駄目だ!!!」

マコト「友奈!!!」

魂が消滅された友奈が、力尽きて死んでしまった。

東郷「あ・・・ああ・・・ああ!!!」

タケル「そんな・・・!!」

マコト「馬鹿な……!!」

ゴーストとスペクターと東郷が絶望した。3人は白い手と白蛇から解放された。東郷は結界の上に倒れ、ゴーストとスペクターの変身が解かれ、タケルとマコトに戻ってしまった。

タケル「こんな事って……」

マコト「くそ……くそ……くそ!!!」

タケルが俯き、マコトが結界を強く殴って悔しがる。

東郷「……違う……」

祠では、大赦の人間達が次々と砂のように溶け、金色の麦が生え続ける。

東郷「私達は……こんな事……感謝もしています……でも……もういいの……人を……友達を捨ててまで手に入れる世界なんて……そんな世界なんて、知らない……それが……」

タケル「結局俺達は……友奈を救えなかった……」

マコト「こんな・・・こんな事って・・・認めてたまるか・・・」

すると、3人の元に光が舞い降りた。

タケル「え・・・?」

マコト「何・・・?」

東郷「・・・?」

それは、歴代の勇者達の英霊達だった。3人はこの光景を見て、驚きを隠せなかった。英霊達は次々と舞い降り、右手で結界に触れる。



樹海。

夏凜（神樹様・・・）

銀（どうか、聞いて下さい・・・）

樹（人は、色んな人が居ます・・・）

風（それでも、本当に人を救おうと言うなら・・・）

園子「人を・・・」

「信じてくれませんか？」

そして勇者達の英霊達に続いて、歴代の巫女達の英霊達も現れ、右手で結界に触れる。

タケル「これは……」

マコト「まさか、歴代の勇者達と……巫女達の魂、なのか?」

“カー!カー!”

すると今度は、青いカラスが現れた。カラスは勇者の姿に変え、東郷を見た。

東郷「……私達は、人としての道を進みます。」

勇者達と巫女達に続いて、東郷も結界に触れる。すると……

結界が消滅し、金色の花びらが舞い散った。

タケル「結界が!!」

マコト「消滅した!?!」

そして、消滅した友奈の魂が復活し、友奈の肉体に戻った。

友奈「う．．．ん．．．?」

東郷「友奈ちゃん!!」

友奈「東郷．．．さん．．．?」

復活した友奈を抱き締めた東郷。

タケル「友奈!!」

マコト「生き返ったのか!!」

友奈「タケル．．．さん．．．? マコト．．．さん．．．?」

東郷「友奈ちゃん．．．!!」

友奈「東郷さん．．．? うう．．．東郷さあああん!!!」

東郷「ごめんね．．．私．．．私．．．言い過ぎた．．．」

友奈「私……私こそごめん……!!皆に……東郷さんに酷い事言った……!!」  
東郷「良いの……もう良いの……」

友奈「どうしよう……!!世界が……世界が終わっちゃうよ!!!」

東郷「友奈ちゃんのせいじゃない……これで世界が終わるなら、仕方無い事なのよ……」

友奈「う……うう……」

タケル「……ん？」

マコト「……何？」

そこに、1つの光が現れた。

それは、精霊の牛鬼だった。

友奈「牛鬼……？」

すると牛鬼から、金色の光が放たれ、友奈と東郷を優しく包み込んだ。

タケル「この光は……？」

東郷「何を!？」

友奈「大丈夫だよ……暖かい……」

マコト「この光は……」

友奈と東郷を包む光が輝いた。それと同時に、枯れてしまった神樹が一瞬にして満開した。樹海の光が1箇所集中した。その箇所に、巨大な花が満開した。中から……

神々しい姿となった友奈が立っていた。

友奈「私は、私達は、人として戦う!! 生きたいんだ!!」

タケル「友奈……!!」

マコト「やつと、自分に素直になれたな……!!」

友奈「タケルさん、マコトさん、一緒に行こう! 命を燃やして、私達の生き様を天の神に見せよう!!」

タケル「っ! ……うん!!」

マコト「ああ!!・・・東郷の記憶を消した罪、東郷を生贄にした罪、友奈に焼印を刻んだ罪、友奈を神婚に迎え入れた罪、俺達に真実を隠した大赦の罪、天の神の罪、そして・・・世界を壊そうとするこの世界の罪!!」

タケル「友奈の命とこの世界を、未来へ繋ぐ!!」

マコト「この世界の間違いは俺達が正す!!」

するとタケルの身体からムゲンゴースト眼魂、マコトの身体からシンスペクターゴースト眼魂が出現し、それぞれのゴーストドライバーに装填してカバーを閉じた。

『ムゲンシンカ!アーイ!バッチリミナー!バッチリミナー!』

『セブンシンカ!アーイ!バッチリミロー!バッチリミロー!』

タケル・マコト「変身!!」

『チョーカイガン!ムゲン!キープ・オン・ゴーイング!ゴ・ゴ・ゴ!ゴ・ゴ・ゴ!ゴ・ゴ・ゴ!ゴッドゴースト!』

『シンカイガン!シンスペクター!プライド!グリッド!ラスト!ラース!エンヴィー!グラトニー!スロウス!ブレイク!デッドリーシン!』

タケルが無限の可能性を持つ仮面ライダーゴースト・ムゲン魂に変身、マコトが七つの罪を背負った仮面ライダーシンスペクターに変身した。

タケル「っ!?!」

マコト「っ!？」

周囲の光がゴーストとシンスペクターを包み、ゴーストが光の羽を象り、シンスペクターが蒼く輝く6枚の羽を象った。

友奈「行こう!!」

タケル・マコト「ああ!!」

ゴースト、シンスペクター、友奈が天の神に向かって飛翔した。

すると天の神がバーテックス達の力を全て放った。

友奈「来た!!」

タケル「そうはいかない!!」

マコト「させるか!!」

ゴーストとシンスペクターは、レバーを操作して技を発動した。

『ヨロコビストリーム!』

『エンヴェイスラップ!』

『イカリスラツシユ!』

『ラストバレット!』

『カナシミブレイク!』

『スロウスグレイブ!』

『タノシーストライク!』

『グラトニーバイト!』

『ラブボンバー!』

『プライドフィスト!』

『シンネンインパクト!』

『グリードスラツシユ!』

『イサマシユート!』

『ラースフレイム!』

全ての技が、バーテックスの力を全て破壊した。激怒した天の神が、ゴースト、シンスペクター、友奈に向けて巨大なビームを放った。

友奈「くっっ……うう……!!勇者は不屈!!何度でも立ち上がる!!!」



タケル「魂は・・・永遠に不滅だ!!」  
マコト「俺達は負けん!!友の為に!!」

夏凜「行け!!友奈!!タケル!!マコト!!」

銀「ぶっ壊せ!!」

樹「友奈さんの幸せの為!!」

園子「成せば大抵!!」

東郷「何とかなる!!」

風「勇者部ーーーー!!」

全員「フアイトーーーー!!」



勇者パンチ、ゴッドオメガドライブ、デッドリーオメガドライブ。3つの技が天の神を貫いた。

真つ黒の空間が消滅し、樹海の空が晴れた。そして神樹に桜の花が満開し、炎で侵食された樹海も元通りに戻った。

園子「炎が……」

樹「これ……」

風「何時もと違う……」

更に、結界の外の火の海も光となって消滅した。

そして友奈は、牛鬼が張った結界の中に。

友奈「牛鬼って……」

すると牛鬼が、花びらとなった。

友奈「あっ!」

花びらとなって、牛鬼が消滅した。

友奈「ありがとう・・・さようなら・・・」

タケル「友奈!!」

マコト「友奈!!」

そこに、ゴーストとシンスペクターが友奈を見付けた。

友奈「タケルさん・・・マコトさん・・・」

樹海が花びらとなって晴れた。

現実世界。

アカリ「樹海が、晴れた?」

カノン「天の神も、消えた・・・」

御成「と言う事は・・・」

アカリ「タケル達、やったのね!!」

カノン「うん!!」

御成「早く皆さんを探しに行きましょう!!」

アカリ「うん!!」

カノン「はい!!」

讚州中学校・屋上。タケル、マコト、友奈、東郷、風、樹、夏凜、園子、銀が仰向けになっていた。友奈達のスマホの画面が割れて壊れていた。

友奈「・・・」

風「帰って、来た?」

銀「世界は?」

園子「ちゃんと、あるね。」

世界は元通りになっていた。

樹「神樹様は・・・?」

夏凜「消えた?」

東郷「散華?」

友奈「何時もの、空・・・」

タケル「世界は、救われた・・・?」

マコト「俺達が、守ったのか・・・」

友奈「くっ・・・うう・・・!」

突然友奈が泣き始めた。

東郷「どうしたの!?友奈ちゃん!具合が悪いの!?」

タケル「まさか、焼印が残っているのか!?」

しかし、友奈の左胸の焼印が完全に消えていた。

東郷「消えてる・・・!!」

園子「焼印消えたの!」

銀「本当か!」

友奈「・・・皆・・・皆・・・ごめんね・・・!」

夏凜「私こそ・・・ごめんなさい・・・!」

友奈「夏凜ちゃああああん!!!」

風「おかえり、友奈!」

友奈「・・・ただいま！」

するとそこに、青いカラスが降り立った。

タケル「青い、カラス？」

その青いカラスは、タケルに小さい水晶玉を渡した。

タケル「水晶玉？これって？っ!？」

何かを感じたタケルが動きを止めた。

マコト「どうした？タケル。」

タケル「この水晶玉・・・元の世界に帰れる力がある。」

マコト「何？」

友奈「何で分かったの？」

タケル「あの青いカラスが、そう言ってる気がしたんだ。」

青いカラスはタケルを見て、空の彼方へ飛んで行った。こうして友奈が解放され、世界に平和が訪れた。

あれから数日後、火の海だった結界の外が元の本州の世界になっていた。本州は廃墟

の世界になつてゐる。

安芸先生『地の神は消えた。神を失つた人類は、限られた資源で生きていかなければならない。混乱が訪れる。しかし、これで良いのだ。私は、彼女らの選択を誇らしく思う。新しい時代は、子供達の為のものだ。大人たちは責任を背負つて行こう。そうではなければならぬ。』

更に後日。

友奈『勇者部は、勇者部に戻りました! 風先輩は高校に合格! 次の部長は、何と樹ちゃんに決まりました!』

そして、勇者部五箇条が六箇条に改変された。六つ目は、無理せず自分も幸せであること。

友奈『今日の頑張る事。勿論、無茶の無い範囲で。そうすると、未来が素敵になつて、振り返つて見ても、全部が素敵だつたつて事になるんじゃないかな? 皆が居るから、皆が居てくれたから! 皆が好きだから! 私……勇者部で良かった! そっか……これが……』  
勇者部は永久に不滅。



数週間後、遂にタケル達が元の世界に帰る日が来た。

タケル「じゃあ皆、今日でお別れだね。」

友奈「うん、何だか寂しいな・・・」

アカリ「友奈ちゃん？ 私達は友奈ちゃん達と一緒に居れて楽しかったよ。」

御成「これからは、友奈殿達で勇者部を励んで行くのですぞ。」

カノン「元の世界に帰っても、皆の活躍を応援しているよ。」

友奈「うん！ありがとう！」

マコト「なあ、友奈。」

友奈「ん？」

マコト「あの時、お前を叩いてすまなかった。許してくれ。」

友奈「ううん、マコトさんのお陰で私に勇気が湧いたの。だから謝る事なんて無いよ。」

マコト「友奈・・・ありがとう。」

タケル「フッ！」

青いカラスから貰った水晶玉を投げると、眼魔の世界で見た同じ裂け目が出現した。

タケル「じゃあ皆、元気でね!」

東郷「向こうの世界でも、頑張って下さいね!」

風「無理は禁物よ!」

樹「お元気で!」

夏凜「帰っても、挫けるんじゃないわよ!」

園子「バイバイ!」

銀「また会おうぜ!」

タケル達5人は、裂け目に入って元の世界に帰って行った。同時に裂け目が消え、水晶玉が砕けた。

友奈「・・・また、会えるかな?」

東郷「きつと、会えると思うよ?」

風「さて、勇者部の活動はまだまだ続くよ?」

そして、大天空寺。

タケル「帰って来た!」

アカリ「もう、懐かしく感じる！」

御成「懐かしの大天空寺！」

カノン「友奈ちゃん達、頑張つてね。」

マコト「彼奴らなら大丈夫だ。勇者部は永遠に不滅だからな。」

タケル「ねえ、この後皆と遊ぼう？」

アカリ「その前に、大天空寺のお掃除が先よ？」

こうしてヒーローと勇者は命を燃やし、神世紀の世界を救ったのだった。

どうか平穏な日々を。

「THE END」